24

國譯一切經

大東出版社藏版

LIBRARY
JUN 0 1 1995
UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

24

寶積部四

長井眞琴譯

目次

（本丁）　（通頁）

大寶積經（百二十卷中自卷第六十五至卷第八十一）……〔一一六五——一五一九〕……一

菩薩見實會（卷の第六十六——第七十六）……〔一一六五——一三九五〕……一

夜叉授記品第十……〔一一六五——一一六八〕……一

緊那羅授記品第十一……〔一一六八——一一七七〕……四

虛空行天授記品第十二……〔一一七八——一一八一〕……一四

四王天授記品第十三……〔一一八一——一一八四〕……一七

三十三天授記品第十四……〔一一八四——一一八七〕……二〇

夜摩天授記品第十五……〔一一八七——一一九二〕……二三

兜率陀天得授記品第十六……〔一一九三——一一九七〕……二九

化樂天授記品第十七……〔一一九七——一二〇〇〕……三三

他化自在天授記品第十八……〔一二〇一——一二〇五〕……三七

諸梵天等授記品第十九……〔一二〇五——一二一三〕……四一

光音天等得授記品第二十……〔一二一四——一二一八〕……四八
遍淨天授記品第二十一……〔一二一八——一二二六〕……五四
廣果天授記品第二十二……〔一二二七——一二四二〕……六三
淨居天子讃偈品第二十三の一……〔一二四三——一二七二〕……七九
淨居天子讃偈品第二十三の二……〔一二七三——一三〇九〕……一〇九
遮羅迦波利婆羅闍迦外道品第二十四……〔一三一〇——一三二五〕……一四六
六界差別品第二十五の一……〔一三二六——一三四一〕……一六三
六界差別品第二十五の二……〔一三四二——一三五八〕……一七八
六界差別品第二十五の三……〔一三五九——一三六七〕……一九五
四轉輪王品第二十六の一……〔一三六七——一三七四〕……二〇三
四轉輪王品第二十六の二……〔一三七五——一三九五〕……二一一
富樓那會（卷の第七十七——第七十九）……〔一三九六——一四七一〕……二三三
菩薩行品第一……〔一三九六——一四〇一〕……二三三
多聞第二……〔一四〇一——一四〇四〕……二三七
不退品第三……〔一四〇四——一四二五〕……二四〇

具善根品第四……（一四二六――一四四三）……二六三
神通力品第五……（一四四四――一四四七）……二八〇
大悲品第六……（一四四八――一四六三）……二八四
答難品第七……（一四六三――一四七〇）……二九九
富樓那品第八……（一四七〇――一四七一）……三〇六
護國菩薩會（ごこくぼさつゑ）（卷の第八十――第八十一）……（一四七二――一五一九）……三〇八

◇　◇

索引……卷末

卷の第六十五

高齊　那連提耶舍　漢譯

菩薩見實會　第十六の五

夜叉授記品　第十

爾の時に、復、八億の夜叉あり。諸の阿修羅・迦樓羅・龍女・龍王・鳩槃茶・乾闥婆等の、如來を供養し、記を授かるを聞き已つて、欣喜踊悅するを見て、皆心に稱ふを得て、希有の心を生じ、未曾有を得、佛世尊の、智慧の盡くる無く、最尊最勝にして罣礙する所無く、不可思議なるを知り、復更に、法門の次第を聞くを得て、佛世尊に於て導師の想を作し、復、佛の所に於て無盡慧の想を作せり。彼の諸の夜叉は、佛の智慧の盡くるある無きを知り已つて、佛の正法に於て愛樂の心を生じ、彼れ佛法に於て甚だ愛樂し已るや、供養を爲さん故に勤精進を發し、亦偈を以て讃じて曰はく。

我等今利世者を讃じたてまつる　佛の智力具足したまへる故を以て　無盡無量にして大海の如く　故に人師子の身に等しきもの無し　須彌は輕重を知るを得べく　虛空は廣狹を知るを得べくとも　如來の有ちたまへる所の智慧力は　一切測量するを得る能はず　諸の衆生の欲信の心を知りたまへば　是の故に應に度すべきをば皆已に度し　其の度せる者に於て趣く所を知りたまふ　故に佛には比無く亦等も無し　彼れの修むる所に隨へる善惡界の　一切の生處に受くるに其の身　【一】彼れの根信の應に受くべき所を知りたまふ　故に佛には比無く亦等無し　貪欲の惡行瞋恚の行　及以び癡の行を佛は悉く知りたまひ　憍慢嫉妬をも亦是くの如し　故に佛には比無く亦等も無し　衆生の此に於て失する所多きを　如來は善く彼れの業道を知り　世

◎「備考」
註解は、前卷までに一度出でたる者は、再掲せず。

【一】彼れの根信の應に受くべき所。異譯本には「彼等の造作する善惡の業」とあり。

尊の彼れを知りたまへること甚だ捷利なり　故に佛には比無く亦等も無し　善逝は善く諸の世間を見て　其の方面にて失する所の者　及以び語言の喪失する所に隨ひ　世尊は彼れを見たまふこと悉く餘無し　六道の中に於て幾時か住する　彼れの多少に受くる所の苦　及び其の受くる所の種種の身に隨ひ　世尊は一切を悉く知見したまふ　其の煩惱力に起されて　方便及與び業を造作し　業に隨つて受くる所の種種の苦に隨ひ　導師は一切を悉く了知したまふ　其の解脱の道を求むる所にて　佛法の中に於て已に出家し　精勤に聖道を修學し已つて　諸の煩惱を盡すに隨ひ佛は悉く知りたまふ　佛の法中に於ても凡夫あつて　出家を得と雖も義を知らずして　[二]明人の微妙の法を誹謗するを　世尊は亦復善く彼れを見たまふ　彼れ諸の正法を誹謗する人の　業行にて得る所の衆の苦惱　隨つて其の地獄の久近の住をも　如來は亦能く具足して知りたまふ　佛に於て深く敬信を得已り　出家して　[三]正法藏を受持し　諸法の皆悉く空なるを觀察し　一切の諸有の道を斷除し　一切の諸趣の身を願はず　此の身の猶幻の如くなるを觀察し　諸の音聲も亦響の如くなるを知つて　堅く道に住する者をも佛亦知りたまふ　無等の大導師を讃歎して　我れ今得る所の福德の聚　此の福德を以て願はくは佛を成じ[四]亦願はくば衆生の成ずることも自然ならんことを　と。

爾の時に、世尊は、夜叉衆の深心の信を知り已つて、微笑の相を現せり。爾の時、慧命、馬勝比丘は、偈を以て問うて曰はく。

人中の師子笑を現さる　唯願はくば其の笑の因縁を說きたまはんことを　一切の諸佛は因無くして　微笑を現したまふに非ず人中の月　今此の大衆は皆疑を懷く、導師の微笑を見たてまつる故を以てなり　唯願はくば世尊其の疑を除き　皆此の衆をして欣喜を得しめたまはんことを　今佛の所に於て信を得たる者　及び微妙の正法を知りたる者　其の心堅固にして動かざ

【二】明人。異譯本に「如來」とあり。

【三】正法藏。異譯本の此れに當たる語には單に「正法」とあり。

【四】亦願はくば等。異譯本に「有情に及ぼし、未來に同じく佛道を成ずるを得んことを」とあり。

る者を　願はくば佛宣説して彼れをして聞かしめたまはんことを　此の諸の大衆は皆疑を懷き　一切皆如來の面を瞻仰す　今日當に何等の事有るべきかと　唯願はくば世尊彼れの疑を斷じたまはんことを　今日誰れか大神力を現せる　今日誰れか大精進を發せる　今日佛は誰れと共に親友たるかを　此の大衆に於て願はくば顯現したまはんことを　善い哉牟尼世間を愍み　唯願はくば諸の疑惑を斷除したまはんことを　天人の大衆若し聞くを得ば　今日必ず當に大に欣喜すべし　と。

爾の時に、世尊は、偈を以て慧命馬勝に答へて曰はく。

善い哉馬勝汝の問ふ所は　今當に大に諸の世間を利すべし　汝能く笑の因緣を問へるに由る故に　汝の我が意を善く解せるを歎ず　我れ今盡く當に彼の義を答ふべし　汝當に一心に專ら諦に聽くべし　諸の夜叉の心意を知り已つて　我れ世間の爲めに微笑を現ぜり　夜叉の諸衆は心に敬信して　菩提の寂滅を知る故を以て　佛の眞實の功德を歎じ已り　發心して大菩提に趣向せり　【五】諸法の空寂を知る故に爲つて　一切の所有の相を除遣し　諸趣の中に於て【六】捨を願じ已り　發心して大菩提に趣向せり　禪定の力を以て　【七】諸陰の　但是れ世諦なるを知つて取著せず　諸有に著せざること蓮華の如くにして　發心して大菩提に趣向せり　諸有の中の障礙の事に於ては　彼れを空と見るが故に縛せられず　佛菩提の無上なるを知り已つて彼等は能く菩提の行を修せり　諸の生老死の皆悉く空なるは　此れ即無上菩提の道なりと法の自性の空寂なるを知り已らば　能く安隱なる大菩提を得ん　陰の自性の空寂なるを知り已り　寂靜なる菩提の性をも亦離れ　修する所の菩提の行をも亦空ずる　此の智は能く凡の了するに非るを知る　能く觀ずる智慧の性は　自ら空にして　觀ずる所の境界は皆寂滅し　知る者も亦空なりと是れを知り已らば　是の人は能く菩提の道を修せるたり　當に知るべし

【五】諸法の空寂を知るに爲つて。異譯本には「悉く諸法の緣より生ずるを了し、」とあり。

【六】捨。此の捨は「行捨」を謂ふ。第一卷「捨」の解、參照。

【七】諸陰。諸蘊に同じ。第一卷「蘊」の解、參照。

[八]空も亦性は自ら空にして　相も願も亦復體性無きことを　若し人あつて能く是くの如くに知らば　是の人は能く眞實の行を修せるなり　天人の大衆是れを聞き已り　心に欣喜を生じて利益を得よ　一切は佛に於て敬信し已り　心を菩提寂靜の句に住めよ　今此の殊勝に供養し已れる　夜叉の衆は心清淨なれば　此の諸の智者は鬼道を捨てて　善趣の中に於て久しく樂を受くるなり　彼れ未來の多億の佛に於て　神通力を以て一念の中に　多くの佛土に於て供養を修め　即佛所に於て忍を獲得せん　諸の世界に於て相を起さず　智者は能く神力を以て往き　此の世間を觀ること猶化の如くにして　智者は遊行して著する所無けん　此等勇猛に諸佛を供じて　當に無上の大菩提を得べく　亦無上の淨佛土を得て　其の中にて當に無量の衆を度すべし　彼等は當に世間解を成じて　一切同じく無邊智と號し　名十方に聞え壽千劫にして　寂滅なる智慧も壽命も等しかるべし　[九]彼等の有つ所の聲聞衆は　猶靜夜の諸の星宿の如くなるも　彼れも悉く易く大菩提を得て　一切苦難の事あること無けん　天人の大衆是れを聞き已らば　菩提の心の踊悅するに爲つて　其の心に堅固に精勤を發し　精進の力を以て諸の行を持せん　と。

緊那羅授記品　第十一

爾の時に、復八億の緊那羅の衆あつて、大樹緊那羅王は以て上首たりしが、諸の阿修羅・迦樓羅・龍女・龍王・鳩槃荼・乾闥婆・夜叉等の、如來を供養するを見、記を授るを聞き已り、甚だ希有・未曾有の心を生じて、是の思量を作さく。此れ實に希有・未曾有の事なり。其の衆生の不可得なる故、[一〇]命者無き故、生者無き故、[一一]人ある無き故、摩那婆無き故、養育無き故、壽者無き故、我ある無き故、亦我所無き故を以てなり。諸陰を以ての故に名けて衆生と爲すに、一切、諸陰も亦不可得なり。其の[一二]界を以ての故に、名けて衆生と爲すに、一切、諸界も亦不可得なり。[一三]入有るを以ての故に、

【八】空も亦、乃至、躰性無きことを。謂はゆる三三昧に就きて、皆空なるを謂ふ。第一卷「空無相無願」の解、參照。

【九】彼等の、乃至、星宿の如くなるも。異譯本に「無數の聲聞衆の、猶、星宿の虛空に現じたる如きを敎化し」とあり。

【一〇】命者。命に同じ。第一卷「命」の解、參照。

【一一】人。意生と同じ。第三卷「意生」の解、參照。

【一二】界。界は十八界を指す。

【一三】入。入は十二入(處)を指す。

名けて衆生と爲すに、一切、諸入も亦不可得なり。業有るを以ての故に、果報あるを得るに、而も彼の行業も亦不可得なり。無上菩提も亦不可得に、一切の菩薩も亦不可得に、一切の諸佛も亦不可得なりと。世尊、爾りと雖も、而ち復諸の菩薩に授記を與ふ。何の義の故を以て、如來は諸の菩薩の與に授記して、其の名號を示し、業報を顯現し、其の當來の菩薩大衆を說き、復諸佛の神通の力を顯し、又復、正法の力を說き、亦復、莊嚴せる佛土を顯現し、衆生の業あり報あるを宣說し、又復、清淨の佛刹を說き、亦菩薩の、諸佛の國に遊んで、一佛土より一佛土に至るを顯し、復菩薩の彼に往いて供養することを演べ、亦供養する殊勝の神變と又列ぬる供具の微妙希有たるを說き、又復、若干の劫を經て當に作佛を得べく、其の佛世に住すること若干劫を經、其の佛に當に若干の聲聞あるべく、彼の佛の滅後に正法世に住ること若干劫を經、何故に如來は諸の衆生を捨て般涅槃に入るか、を說くや。と。

爾の時に、大樹緊那羅王は、此の疑を生じ已り、八億の緊那羅の衆と座よりして起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝をば地に著け、合掌して佛に向ひ、偈を以て問うて曰はく。

我等佛の記したまふ所を聞き已つて　甚だ疑惑を生ず大智慧は　既に授記を說きながら復空と言ふ　我れ二つの說に於て解すること能はず　既に空寂にして、自性を離れたれば　法界は平等にして變動無しと說き　而も復如來は供養を受けたまふと　此の事云何衆中の月　佛は既に生有ること無しと說き　而も復菩提心を發すと說きたまふ　無量智に於ける二種の說　此の言の祕密を我れは解せず　[一四]云何ぞ滅は不可得なりと言うて　而も人師子を死有りと說きたまふか　唯願はくば實の如くに記說を爲し　我が疑を除斷して餘無からしめたまはんことを

[一五]云何ぞ佛、猶幻の如しと說きながら　又復天中に生ずと顯示したまふか　釋師子の是くの如き說に於ける　此の祕密の教を我れは解せず　佛は諸法は依る所無しと說き　而も復善知

【一四】云何ぞ、乃至、死有りと說きたまふか。異譯本に「云何ぞ、諸法は本盡くる無しとして、復、如來に滅度有りと說きたまふか。」とあり。

【一五】「云何ぞ」の一句。異譯本に「云何ぞ、諸法は皆幻の如しとして、」とあり。

識に依れと說きたまふ　此れ是の祕密の語を　我れ實に解せず人中の雄　[一六]云何ぞ堪ふる所無しと說きながら　復衆生に諸業を修せよと敎へたまふか　怨敵を降伏せる天中の尊の　祕密の說を我れ解せず　[一七]云何ぞ佛性は自ら空なりと說きながら　復空を觀ずれば解脫を得と言ひたまふか　我れ今此れに於て解する能はず　願はくば無邊智我が疑を斷ちたまはんことを　[一八]云何ぞ佛は、事は盡滅すと說きながら　復諸法の性は寂滅なりと說きたまふ　我れ今唯願ふ無等等の　此等の祕密の說を開顯したまはんことを　云何ぞ端正なる　[一九]修伽陀は　諸法は虛空の如しとし　而も愚癡の人法を毀謗せば　死して必ず大地獄に墮せんと顯示したまふか　大雄は恒に諸の天道を說き　又復諸の餘の趣を說き　既に此等は業を作すに由ると言ひながら　復業を作す者ある無しと道ひたまふか　不可勝者の宣說したまふ所の　種種の差別は知るべからず　我れ今此れに於て疑惑を生ず　唯願はくば世尊除斷を見したまはんことを　既に善業も集むべき無しと言ひ　復修行すれば菩提を得と說きたまふ　沙門法王の是くの如き說を　此れ亦我等解する能はず　[二〇]云何ぞ法は盡くべからずと說き　而も謗る者の罪は畢るべしと言ふか　無量の智慧願はくば　我が是の中に於て大に疑を有つを開示したまはんことを　如來は既に眞際の法を說きながら　復顚倒及び施等を言ひたまふ　無翳淨眼の滅罪の者　此の義を唯願はくば我が爲めに說きたまはんことを　餘に能く我等の爲めに　是くの如くに疑ふ所の事を宣釋するものある無く　唯如來のみあつて能く斷除したまふ　是の故に我れ一切智に歸したてまつる　と。

爾の時に、世尊は、大樹緊那羅王等の問へる諸の疑を聞き已り、偈を以て答へて曰はく。

汝は空と說きながら復授記する　此の二事に於て解する能はずと言ふも　[二一]諸法若し是れ空ならずば　佛は其の爲めに授記を說かじ　例の因緣を以て是くの如くに說くか　諸法に若し體性

【一六】云何ぞ、乃至、敎へたまふか。
異譯本には「云何ぞ、世間に作者無しとして、復能く諸惑を斷ずるあれと說きたまふか。既に無作と言はば、斷ずるに由無けん」とあり。

【一七】云何ぞ、乃至、言ひたまふか。
異譯本には「云何ぞ、諸法は自性空なりとして、復、空を觀じて解脫を得と說きたまふか。既に空と言ひ已らば、復何をか觀ぜん。」とあり。

【一八】云何ぞ、乃至、說きたまふ。
異譯本には「云何ぞ、諸法は剎那に滅すとして、復、諸法は常に不滅なりと說きたまふ。既に遷變を言ひながら、或は凝常を。」とあり。

【一九】修伽陀(Sugata)。善逝と譯す。第一卷の同解參照。

【二〇】云何ぞ、乃至、云ふか。
異譯本には「云何ぞ、諸法を說く所無しとして、復、毀謗せば惡道に墮すと說きたまふか。既に說無しと言はば、謗は何に生ぜん。」とあり。

【二一】諸法、乃至、說かじ。
異譯本には「彼れ、法性の本空に達するに由る故に、如來は授記を與ふるを得るなり。」とあり。

あらば　一切常住にして轉ずべからざれば　彼れ應に減ぜず亦增せざるべし　諸法の體性は本自ら空にして　猶平正にして淸淨たる鏡の如くなれば　能く一切の諸色の像を現ずと　是くの如くに當に一切の法を知るべし　法界には變異の相ある無し[二二]汝一切の供養の物に於ける　一一の諸分を當に觀察すべし　何等の分中に而ち相有るか　法界は常住にして變異無ければ　智者は應當に是くの如くに觀ずべきも　諸の凡夫人は悉く迷惑して　智慧無き故に解する能はざるなり[二三]汝佛は生ある無しと說きながら　復心を發すと說くは解し難しと爲すと言ふ　汝等今當に一心に　十力の說く所の祕密の義を聽くべし　凡夫は生死の河に沒溺しながら　亦復心を繫けて彼の處に著し　心に常に想の顚倒を懷き　故に生死の諸の苦惱を受け　本より已來未だ法を聞かざれば　我れ若し彼れに定めて說く者を爲さば　凡夫愚人は此の法に於ても轉復諸の疑惑を增長し　彼れ菩提の勝れたる利益を聞き　其の心を彼の果に專注し　其の心に又復味著を生じて[二四]自然の勝智に能く通ずること無ければなり[二五]汝は滅無く復死有りとの此の二つを我れ今知る能はずと言ふ　此れに於ては一心に應に諦に聽くべし　我れ當に汝が爲めに眞實に說くべし　彼の常と計する諸の衆生の爲めに　是の故に如來は滅を說くものにして　恒に諸有を見るに皆衰壞して　一つの法の是れ常なる者ある無ければなり　汝は諸法は猶幻の如しと言ひながら　復天に生ずと言ふに疑を懷く者は　學人凡夫善趣等の　是の法の定ならざる故は幻の如ければなり　汝の言ふ所の如く依ある無きに　復善知識に依止せよと言ふは[二六]依止を棄捨することを欲求する故に　善友をば依る所無しと說くを爲すなり[二七]汝の畢竟じて堪能無しと言ひながら　復作有りと言ふを我れ解せずとは　當に車の衆くの分に爲つて成るを觀じ　亦車に所作の事有るを觀ずべし[二八]若しは復人の我に著し　亦復我の所爲を取る有らんに　我れ是等の爲めに堪ふるもの無く　復是くの如しと雖も無作には非ずと說

【二二】汝一切の、乃至、相有るか。異譯本には「汝、供養たる福業の因を觀ぜよ。何の法中に於て、其の相あるか。」とあり。

【二三】汝佛は、乃至、爲すと言ふ。異譯本には「汝の問へる、諸法は本、生無きに、復、發心して佛道を求めよと說くとは」とあり。

【二四】自然の勝智。異譯本の此れに當たる語に「實智」とあり。

【二五】汝は滅無く復死有りとの。異譯本には「汝の問へる、諸法、本、滅無きに、何故に如來に滅度有るかとは」とあり。

【二六】依止を、乃至、說くを爲すなり。異譯本には「若し說法師に依止するに非ずんば、畢竟じて、世間をば出離すること無ければなり。」とあり。

【二七】汝の畢竟じて、乃至、解せずとは。異譯本には「汝の問へる、諸法に主宰無く、而も世間には作れる者有るを見る。とは」とあり。

【二八】若しは復、乃至、無作には非ずと說くなり。異譯本には「我に著する諸の衆生及び彼の我所に執著する

くなり　汝の言ふ一切の性は自ら空なるに　復空を觀ずれば解脱を得るを疑ふとは　顚倒せる愚癡無智の者は　體性の空なることを了知する能はずして　妄想に從つて分別をば生じ　虛妄に攀緣する故に縛せらる　是くの如き衆生を化せん爲めの故に　善逝は性は有に非ずと說くなり　[二九]汝に事は盡滅し　一切諸法の性も亦滅すと說く所の如きは　迷惑せる無智の諸の衆生は妄に分別する故に渴愛を生ずること　譬へば渴者の陽焰を見て　憶想する故を以て渴を增長するが如く　愚人も復虛妄に爲つて害せられ　所有無きに於て分別を起せばなり　渴者は妄に水を見る想を生ずれども　陽焰の處には水本より無きに　妄想に害せらるる諸の衆生は　諸の不淨に於て淨想を起せばなり　愚癡の凡夫は愛に縛せらるれども　彼の穢惡の中には性として淨無きこと　譬へば陽焰の水相に似たれども　彼の中の體性には實に水無きが如し　是くの如くに身中には淨色無く　身色も亦復性として淨に非るに　愚癡の凡夫は顚倒の見にて妄に淨想を作して縛せらるればなり　諸法は虛空の如しと說くと雖も　亦謗る者は地獄に墮すと說くは　愚人は之れを聞かば怖畏を生ずれども　智者は聞くと雖も心安隱なり　世間の體性は自ら空寂なるに　愚癡は無智にして我の想を起せば　彼等若し性空の教を聞かば　更なる受生を得ざることを怖畏すればなり　彼等の妙空の法を毀謗するは　皆我の見に計著するに由る故にして　人の虛空を繫縛せんとするが如くなれば　是に無智の人は地獄に墮するなり　[三〇]我れ本說く所の諸の善趣　及び世間の爲めに說く餘道に　作す業有つて失せずと說き亦其れに作す者有りと執するを奪ふは　一切の諸趣は猶夢の如くなれば　我れ汝が爲めに是くの如くに知らんことを說くなり　夢の中には去來の相ある無きに　顚倒して見る者は去來に著すと　我れ既に作す業有れど　十方に推求するに作す者無しと演說するは　譬へば猛風の諸樹に吹くに　其の樹相ひ觸れて則ち火出づるも　其の風及び樹は念　――言はく我等能く火を

者を化せん爲めに、我れ、彼れが爲めに、堪任無し是の故に但唯假名の相なりと說くなり。」とあり。

【二九】汝に事は、乃至、渴愛を生ずること等。異譯本には「汝の聞へる、諸行は刹那に滅すとし、復、諸法の性は滅せずと云ふは、欲に著せる諸の衆生の、非淨の處に於て淨の相を生ずるを破せんが爲めにして、等」とあり。

【三〇】我れ本、乃至、餘道に。異譯本に「或は善業にて天中に往き、或は人間に生じて快樂を受くと說くは、」とあり。

出すと謂ふ――を作さざるが如し[三一]復是くの如くにして火は生ずと雖も　當に知るべし夢有れども作す者無きことを　汝の福德には積集無しと言ひながら　復善にて菩提の果を得と云ふとは　我れ今眞實に汝が爲めに說かん　汝當に專ら諦に至心に聽くべし　譬へば世人の長壽を得て　其の命百餘歲に至るに　然も彼の歲の數の集積する無きが如く　一切の緣の集も亦是くの如きなり　汝の諸法は盡くるある無しと言ひながら　復我れ業は畢るべしと說くと言ふとは　空法を觀ずれば　窮ある無きも　世法に隨ふ故に業は盡くる有るなり　我れ實際の法有りと說くと雖も　顚倒も亦實際の外には非ず　顚倒せる愚癡の衆生の輩は　眞實の際を了知する能はざるのみ　緊那羅王當に諦に聽くべし[三二]智慧を具して勤進する者の爲めには　一切の諸相は皆一相にして　謂はゆる無相なることを應當に知るべし　若し能く一字に解入して　我れ智者の爲めに菩提を說かば　一切の諸法は皆無作なりと　此に阿字の總持門を說かん　一切菩薩の行ずる所は　無邊の相なりと我れ已に說けるが　此れ亦能く一切法の謂はゆる阿字の總持門に入れたるなり[三三]一切の諸法は皆寂滅なりとは　阿字門を示して入るを得しめたるにて　樹緊那羅應當に知るべし　此れ亦阿字の總持門なることを　一切の諸法には分別無しとは　此の法門に入り已つて宣說せるにて　緊那羅王應當に知るべし　此れ亦阿字の總持門なることを　一切の諸法に自性無しとは　阿字門を示して入るを得しめたるにて　樹緊那羅應當に知るべし　此れ亦阿字の總持門なることを　一切の諸法には邊ある無しとは　阿字門を以て諸法を說きたるにて　緊那羅王應當に知るべし　此れ亦阿字の總持門なることを　盡無盡の法を我れ已に說きたるが　應に一切法の無盡を說くべしと　一切の十力諸の如來は　已に無盡の總持門を說きたり　一切の諸法には門ある無く　物は有ること無き故に非有を現すとは　此れ亦即是れ總持門にして　是れに由つて能く阿字門に入るなり[三四]諸の不

[三一] 復是くの如くにして、乃至、作す者無きことを。異譯本には「兩つ相ひ因る故に火は發生するにて、本より作者無きこと、亦此くの如し。」とあり。

[三二] 「智慧を」の一句。異譯本には「此の勝義に於て善く安住せば、」とあり。

[三三] 一切の諸法は、乃至、總持門なることを。異譯本には「乃至、一切諸法は本、寂靜なりとは、此れ無相總持門を說けるにて、阿字門に由つて入解せるなり。」とあり。

[三四] 諸の、乃至、陀羅尼なることを。異譯本に「乃至、一切諸法は思議に非ずとは、此れ實相の總持門を說けるにて、阿字門に由つて入解せるなり。」とあり。

可思議の法に於て　諸佛は實に依つて能く顯示することは　樹緊那羅應當に知るべし　此れ亦阿字の陀羅尼なることを　[三五]一切の諸法は趣く所無しと　我れ智者の爲めに菩提を說くは　此れ亦卽是れ總持門にして　是れ阿字門に應當に入るべし　[三六]一切の諸法には來あること無く若し修せずんば則ち得ずとは　此れ亦是れ其の總持門にして　是れ阿字門に應當に入るべし[三七]諸法の假名は皆當に有るべきも　其の自性を推さば不可得なりとは　此れ亦是れ其の總持門にして　是れ阿字門に應當に入るべし　[三八]一切の諸法に自性無く　其の自性を推さば不可得なりとは　此れ亦是れ其の總持門にて　是の陀羅尼は佛の說く所なり　一切諸法の不可得なるは　法の自性の無き故を以て然りとは　此れ亦是れ其の總持門にして　是れ阿字門に應當に入るべし　樹緊那羅應當に聽くべし　一切の諸法は思念を離るとは　此れ亦是れ其の總持門にして　是の陀羅尼を善逝は說けることを　諸佛世尊の已に顯示する　法に實無き故に障礙無しとは　此れ亦是れ其の總持門にして　當に阿字の陀羅尼に入るべし　一切の諸法に障礙無ければ　能く諸法を障ふる者あること無しとは　此れ亦是れ其の總持門にして　阿字門に入るを我れ已に說けり　一切諸法に生ある無く　智者は當に知るべし唯一相あることを　彼の一切の法に生無ければ　當に知るべし是の法に名もある無きことを　一切諸法に生ある無く其の生は本來不可得なりとは　此れ亦是れ其の總持門にして　是れ阿字門に應當に入るべし

若し法に實無く生無くんば　觀見すべからず示すべからず　諸法の自性不可得なり　是の故に能く見る者ある無きなり　一切の諸法は比ある無く　是の故に一相にして相ある無きこと

譬へば虛空の等ある無きが如くにして　一切の諸法も亦復然り　一切の諸法は增減無く　一に非ず二に非ず焦惱に非ず　亦是の冷に非ず復熱に非ず　有に非る故を以て見るべからず曲相及び直相ある無く　亦復明闇の相ある無く　亦見聞の諸相等無く　是れ無所有の陀羅尼な

【三五】一切の諸法は趣く所無しと等。異譯本には「一切の諸法は趣く所無しとは、此れ解脫の總持門を說けるにて、等」とあり。

【三六】一切の諸法には來ある無く等。異譯本には「一切の諸法は本動く無しとは、此れ證淨の總持門を說けるにて、等」とあり。

【三七】諸法の假名は皆當に有るべきも、等。異譯本に「一切の諸法は假名の說なりとは、此れ眞實の總持門を說けるにて、等」とあり。

【三八】一切の諸法に自性無く、等。異譯本には「一切の諸法は不可得なりとは、此れ離相の總持門を說けるにて等」とあり。

り　是の諂曲に非ず正直に非ず　卷舒の諸相等ある無く　亦瞋恚及び欣喜無く　復起作と寂滅と無し　入相及び出相ある無く　進無く退無く來往無く　亦復眠無く寤無く　覺知の相を離れたることを應當に知るべし　是れ其の眼に非ず復盲に非ず　能見及び暗障ある無く　亦閉相及び閉相無く　是の調伏に非ず不調に非ず　是の掉動及び止息に非ず　亦世間に非ず涅槃に非ず　是の眞實に非ず虛妄に非ず　是くの如くなるを當に佛境界と知るべし[三九]　世間を調伏せんと欲する故に爲り　汝の疑を斷除したること我れに疑無し　第一義の中には人の能く一切、他の疑網を除斷することとは無けれど　と。

爾の時に、大樹緊那羅王は、佛說を聞きて、總持の門に於て心大に歡喜し、既に歡喜し已るや、勇猛の心を發して卽時に八億の重閣を化作せり。此の諸の重閣は、或は樹の上に在り、或は蓮華の上に、或は山の上に在つて、皆是れ七寶にて莊嚴せられたり。彼の諸の重閣には、皆種種なる衆寶の蓋、種種なる寶幢を以て莊嚴に用ひたり。復、種種なる寶華の流蘇・種種なる雜色の繒綵の流蘇を以つて莊飾と爲せり。爾の時に、大樹緊那羅王は、幷せて八億の緊那羅衆と、[四〇]香山の中の有らゆる水陸の一切の諸華を持ち、以つて佛の上に散じ、既に佛に散じ已るや、一一各、七寶の重閣に昇り、佛を遶ること三匝し、復、水陸の有らゆる諸華を以つて、重ねて如來に散じ、復遶ること三匝せり。爾の時に、大樹緊那羅王及與び八億の緊那羅衆は、重閣より下り、復遶ること三匝し、佛足を頂禮して一心に合掌し、世尊を瞻仰して目暫くも捨てず、却いて一面に住り、如來の過去・現在の無量の功德を思念せり。爾の時に、世尊は、大樹緊那羅王及ひ八億の衆の深心なる樂欲を知つて、微笑の相を現ぜり。

爾の時に、慧命、馬勝比丘は、偈を以て問うて曰はく。

善逝是に無緣にて笑みたまへるに非じ　天人の供ずる所を實の如くに說きたまへ　衆は佛の笑

【三九】世間を、乃至、除斷することと無けれど。異譯本には「世間を調伏せんと欲する爲めの故に、離言の法に於て强ゐて分別せるにて、此の勝義に於て善く知了せば、則ち能く一切の法に通達せん。」とあり。

【四〇】香山(Gandha mādana)。又、香醉山と云ひ、大雪山の北方に在つて、今日の崑崙山なりとせる。

を覩て悉く疑を懷きて　今最勝を見たてまつること初月の如し　妙色なる世尊誰れか今日無二の法に於て勝慧を起せる　我れ今日に於て疑惑を懷く　唯願はくば尊我が疑を除きたまはんことを　誰れか佛の法に於て淨心を得て　如來は彼れに由つて微笑を現したまへる　唯願はくば如來記說を爲して　言說中の勝　我が疑を斷ちたまはんことを　是の時一切の諸の大衆は　若し佛の說を聞かば皆欣喜せん　願はくば彼等の諸の疑惑を除かば　佛の教へらるる如くに皆能く行ずれば　是の故に最勝兩足尊　疑惑を除斷せんと記說を爲したまはんことを願はくば緊那羅王等の爲めに　及び一切の諸の衆生の爲めに　と。

爾の時に、世尊は、復偈頌を以て、馬勝に答へて曰はく。

善い哉馬勝時を知つて問へり　我れ今汝が爲めに分別して說かん　汝の問に由る故にて我れ顯示せんに　衆人當に佛の功德を得べし　汝當に淸淨專一なる心もて　希有の事を聽きて亂意勿かるべし　謂はゆる善逝最勝智は　障礙ある無くして大に知見すればなり　緊那羅王の設けたる疑問は　一切の諸の衆生を利するに爲り　我れ今彼れの當來の果を說けば　諦に聽け我れ當に汝の疑を斷ずべし　樹緊那羅の八億の等の　王及び臣民諸の眷屬　是等は我れに於て供養し已りたれば　此れより命終して天上に生れん　此れより已後九億劫　流轉して人天の中に在り　五神通を具足し修習して　智の自在と心の自在とを得ん　彼れ那由他の佛刹に於て　是に[四二]人師子として化生せ遣むれども　身は天宮に處つて動かずして　恒に禪悅の安隱樂を受けん　彼れ九十千萬劫に於て　人天に在つて流轉し已り　各各自ら佛刹中に於て　皆無上道を成ずるを得ん　其の劫を號して常照曜と曰ひ　彼の劫中に於て佛道を成ずるに　此れ皆一生補處の人なれば　彼れ智慧者は當に佛を得べし　彼の佛國土には一人として　是の修行の成熟する者非ざる無く　皆是れ一生補處の人にして　聲聞二乘を求むる者無し　一切皆

【四二】人師子（Nṛsiṁha）。佛陀に對する尊稱なり。其の人中の最勇なるを獅子に譬へたる者とす。

是れ大菩薩にして　世の明者として悉く彼に生じたれば　悉く是れ一生補處の人にして　復當に皆佛道を成ずるを得べし　彼の土の諸の大菩薩衆は　弘誓の大願中に安住して　我れ無量なる諸佛の刹に於て　皆悉く修治して清淨ならしめんとなり　彼の菩薩の願は甚だ廣大なれば　長夜の中に於て善く思量し　其の清淨なる信樂の心を以て　各自ら己が佛刹を修治するなり　彼の諸の佛土の妙莊嚴は　一切の諸煩惱を遠離し　其の地に遍く有る諸の宮林は　一切の諸惡道を解脫せしむ　有らゆる諸過及び八難は　彼の佛國土には悉く皆無く　既に清淨なる佛刹を修め已りたれば　衆生は便卽に調伏し易きなり　と。

是くの如くに天中の天は　緊那羅の爲めに授記を說くや　彼の時の一切の諸大衆は　聞き已つて心皆大に欣喜せり」

卷の第六十六

菩薩見實會　第十六の六

虛空行天授記品　第十二

爾の時に、復八萬の[一]虛空行の天あり。阿修羅・迦樓羅及び龍女・龍王・鳩槃荼・乾闥婆・夜叉・緊那羅等の、如來を供養するを見、幷に記を授かるを聞き、皆大に欣喜し、踊躍すること無量にして、佛法の中に於て深心に愛樂し、佛を供養せん故の爲めに勇猛の心を起せり。彼の虛空行の天は、[二]迦毘羅城外の周遍八方六十由旬に於て、曼陀羅華を雨して、遍く其の地に布きて人の膝に至らせ、曼陀羅華を雨して、遍く地に布き已り、持ちて佛を供養し、佛を遶ること三匝して、即、偈頌を以て佛を讃じて曰はく。

諸根寂靜に微笑の面もて　一切の諸の衆生を救護したまふ　善逝は大慈悲を具足したまへり
故に世尊人師子と爲す　如來は大衆を皆　佛法の中及び涅槃に安住せしめたまふ　導師
世尊の勝妙なる足を　我れ今頭面に頂禮したてまつる　十五の日月の盛滿せるに　世人は皆
星中の月を禮するが如く　是くの如くに一切の諸天衆は　佛の笑の面を覩て咸く敬禮す
無量の大福聚を積集し　亦復智慧の身を成就し　無量の大威德を具足したまふ　故に我れ世間
の親を頂禮したてまつる　十力功德の山を具足し　諦に於て無畏にして三垢を離れ　十八不
共の法を成就し　明見無疑なり說中の勝　三十二種の相を具足し　八十種の好にて自ら嚴
り　其の心の勝上なること帝幢の如し　故に我れ無等等を頂禮したてまつる　已に能く持戒
力を究竟し　禪力は決定して傾動せず　最上なる智慧の劍を執持して　最勝勇健に天魔を降し
たまふ　智慧力に於て彼岸に到り　聲聞を調御するに心に悋無く　其の心寂靜にて諸方に遊

【一】虛空行天。又遊虛空天と云ふ。異譯本には「寶瓔珞天」とあり。四王天以上の天の外に在つて、空中を遊行する鬼神を謂ふ。

【二】迦毘羅城。又、劫比羅と書す、第三卷同名の解、參照。

び一切の諸天人を度脱したまふ　世尊人中の勝師子は　最上なる寂滅の法を得たまへり　惟然り十力願はくば我等も　亦當に此の勝妙の法を得べからんことを　願はくば我れも亦當に天人の中にて　諸の世間の爲めに信樂せらるべきことを　願はくば世尊の如くに等しくして異る無く　衆生の心の樂欲を了知せんことを　願はくば我れ諸の世間を利することを得　憐愍の心大悲の心を以て　生死の海に墮ちたる苦の衆生を　願はくば我れ皆能く度脱するを得んことを　願はくば我れ諸の天人の中に於て　無上の大導師と作るを得て　我れ當に諸の有趣　百苦に爲つて逼らるる諸の衆生を解脱せしむべきことを　と。

爾の時に、世尊は、虚空行天の深心の信樂を知り已つて、卽便に微笑せり。時に、馬勝比丘は、卽、偈頌を以て佛に問うて曰はく、

佛牟尼王緣無くして　三界の照明は微笑を現したまふに非ず　唯願はくは十力我が爲めに　何の衆生に爲つて喜相を現したまへるかを說きたまはんことを　佛如來の最勝の面に　微笑の相を現して衆をして喜ばしめたまふを見て　一切の大衆は皆疑を懷き　佛の笑の因緣を說きたまふを聞かんことを願ふ　願はくば大導師速に　微笑の因緣利益の事を說くを爲したまはんことを　願はくば衆の疑網を除斷せん爲めに　沙門中の王宣說を爲したまはんことを　孰れか能く佛をして微笑を現さしめたる　誰れか佛の所に於て供養を上れる　誰れをして能く生死の底に達せしめたまへる　願はくば人師子我が疑を除きたまはんことを　誰れか今日に於て魔宮を動し　魔をして狂亂して心安からざらしめたる　誰れか今日に於て天衆をして　悉く皆欣喜して大踊躍せしめたる　唯願はくば我が爲めに速に宣說して　一切の世の疑網を除斷したまはんことを　大衆若し佛の說を聞くを得ば　一切皆悉く大に欣喜せん　と。

爾の時に、世尊は、卽、偈頌を以て馬勝に答へて曰はく。

馬勝汝の今我れに請問せるは　虚空行天の受記の事なり　汝今我れに問ひて大に　無量の世間の諸人天を利益す　十力師子は若し問無くば　佛子の記を說くを爲すを得ざれば　汝今日に於て如來に問ふことは　廣く一切の世間を利する　故なり　是の空行天は我が所に於て　欣喜の心を以て我れを供養したれば　阿僧祇の劫數を過ぎて　煩惱を滅除して成佛することを得るなり　此の間に於て終沒し已つてより　便卽に天の勝處に生れ　無量億の諸佛の所に於て　悉く香華を以て供養を修せん　彼の佛の所に於て道心を發し　亦復菩提の意を增進し　無量の勝妙の偈を說くことを以て　人師子の自然智を讚ぜん　此等は當に未來世の　無量無邊なる諸佛の所に於て　勝れたる香華を以て供養し　亦妙偈を以て佛を讚ぜん　那羅延身の菩薩等は　諸佛を供養し讚嘆し已つて　當來の　[三]欣喜劫に於て　最勝無上の智を成ずるを得ん　其の佛を號して華幢尊と曰ひ　名稱普く聞えて譏毀無く　彼等八萬の天神衆は　皆同じく一劫に佛と作るを得ん　彼の佛刹の中には地獄無く　亦餓鬼及び畜生無く　彼の土には亦修羅の趣無く　一切の八難等ある無し　此の空行天の成佛の時には　彼の土の諸の人民　彼の諸の衆生の壽は無量にして　果報は猶忉利天の如けん　其の國には惡道の名を聞かず　何に況んや惡を作す者あることをや　彼の時の衆生は皆法の如くに　一切を悉く是れ調伏せる衆なればなり　彼の佛の人を度すること無量億にして　其の數恒河沙に過ぎ　無依無著の法を說くを爲して　十力は彼の衆生を度脫するなり　彼の佛の般涅槃に入り已るや　廣く舍利を布きて佛塔を起すに　彼の佛の一一の諸の舍利は　中に於て皆佛身の相を現ぜん　[四]名稱毀るる無く諸の身分にて　彼の衆生に神變を示すに爲り　無量億數の諸の衆生は　皆無上の菩提心を發さん　と。

導師は是くの如くに智の方便にて　彼の空行天の爲めに記を授くるに　一切の大衆は記を聞き

【三】欣喜劫。異譯本には「歡喜劫」とあり。四劫の中の住劫を指す者なるべし。

【四】名稱、乃至、神變を示すに爲り。異譯本に「咸く各佛の功德を稱讚し、虛空の中に住して神變を現し、」とあり。

已るや　皆悉く欣喜して大踊躍せり

四王天授記品　第十三

爾の時に、九萬の四天王天は、阿修羅・迦樓羅・龍女・龍王・鳩槃荼・乾闥婆・夜叉・緊那羅等の、如來を供養せるを見、幷に空行天に記を授くるを聞き、皆大に欣喜踊躍すること無量にして、佛法の中に於て深心に信樂すること、譬へば人あつて瓦船に乘つて河中に入れるが如くにして、心に是の念を作せり。此くの如き瓦船は、久しからずして當に壞るべくとも、未だ沒せざる以來は、速に岸に度り以つて水難を免るべしと。是くの如き九萬の四天王天も、亦復是くの如くに佛の威神を觀て、佛法を得ん爲めの故に深き信樂を起し勇猛の心を發して如來を供養せり。

爾の時に、四天王天幷に四天王は、九萬の七寶の妙帳を變化するに、雜色種種にして端妙・希奇・廣大・嚴麗なり。其の中には、多く赤眞珠の帳・火珠寶の帳・瑠璃寶の帳・天金色の帳・金剛珠の帳あり。是くの如き九萬の七寶の帳を化作し已るや、虛空の中に於て佛を遶ること三匝せり。又復、九萬の天樂を化作し、虛空の中に於て亦復、旋轉して佛を遶ること三匝せり。又復、曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼珠沙華・摩訶曼珠沙華・迦迦羅婆華・摩訶迦迦羅婆華を化作し、此の化華を持ちて佛の上に散し、復遶ること三匝し、卽、偈頌を以て佛を讚じて曰はく。

諸天に九萬あつて　悉く導師の所に於て　皆一心に合掌して　佛の功德の　掉ふ無く亦沒む無く　貪る無く亦悔ゆる無く　擧る無く亦下る無きを願樂し　故に兩足尊を禮したてまつる

諸の有の種を斷除し　亦無明の闇を滅し　煩惱の刺を拔除し　能く我慢の山を摧きたまへり

佛は善く毒箭を拔き　能く諸の瘡疣を滅し　善く不逸の行を修め　身は圓滿にして滅じたまふこと無し　諸の煩惱を滅除し　一切の縛を解脫し　諸の結使を斷除し　諸の憒閙を出離したまへり　空及び無相の法は　是れ佛の行じたまふ所にして　一切の諸有の中に　其の心に願

樂したまふこと無し　渇愛の根を除斷し　無明の闇を棄捨し　諸の四顚倒に於て　悉く皆能く遠離したまへり　佛は能く實際を知りたまへども　世間の無知の者　凡夫は聞いて懼を生ずること　鹿の獵師を怖るるが如し　身見に墮せる衆生は　空に於て知る能はずして　無明に覆蔽せられて　世間の繋縛に著せり　[五]如實に眞如を見たるものは　世を觀ること猶空拳のごとくに　世に實智を顯すことを爲し　彼れ淨眼を得たるに由り　諸陰の空なること　名色も亦復然く　[六]界法の體も有に非ず　[七]諸入も亦是くの如きを顯示するなり　此の法及び餘の法を名字を以て說けども　此の名字の諸法を　佛は悉く皆空なりと說きたまふ　譬へば大幻師の種種の像を化作するに　[八]衆生の施設無く　命無く亦人無きが如く　是くの如き諸の陰界　諸根十二入は　皆幻化より生ずと　如來は是の說を作したまふ　譬へば善き畫師の　白象の身を畫き作るに　肢節皆相ひ似　高下も亦復然れど　實は高下の相無くして　但愚者の眼を惑すが如くに　是の法界は平等なるに　愚者は自ら迷惑することを　佛は皆顯示を爲したまふこと掌の菴羅果の如くなるを　智者は迷惑せずして　善く諸佛の敎を學ぶなり　如來の大智慧は世間の智炬と爲して　妙法の輪を轉じて　諸の群生を敎化したまふ　當に願はくば我が無上の寂菩提を開覺し　妙法の輪を轉ずること　佛の今轉じたまふ所の如くならんことを　我等世間の　道路を迷失せる者に於て　當に妙法を說くを爲すこと　今の佛の說きたまふ所の如くなるべからんことを　と。

爾の時に、世尊は、彼の四天王天の深心に念ずる所を知つて、卽便に微笑せるに、其の佛の口中より種種の五色の光明を出せり。爾の時に、馬勝は卽、偈頌を以て、如來に問うて言はく。

佛は因緣無くして　微笑の相を現したまふに非ず　大雄佛世尊　願はくば笑の緣を說くことを爲したまはんことを　佛の微笑を現したまへるを視て　一切の諸の會衆は　悉く大疑惑を懷

[五] 如實に眞如を見たるものは。異譯本に「佛は法性を了知し」とあり。

[六] 界法。十八界を謂ふ。

[七] 諸入。十二入(處)を謂ふ。

[八] 衆生の、乃至、人無きが如く。異譯本には「此れ實に主宰無くして、唯、假名の施設なるが如く、」とあり。

けることを　人尊は應當に知りたまふべし　誰れか今魔衆を壞り　誰れか今疑を除くを得たる　誰れか法に於て決定せる　唯願はくば人尊說きたまはんことを　誰れか今佛に供ずるを得　誰れか佛の教行を奉せる　此に衆は皆疑を懷けり　願はくは導師說くことを爲したまはんことを　兩足尊記を說きたまひて　衆生聞き已る若くんば　悉く皆疑網を除けば　唯願はくば導師の說きたまはんことを　復諸の衆生をして　種智の道に依つて　速に菩提を逮得せしむれば　是の故に應に記を說きたまふべからんことを　と。

爾の時に、世尊は、復偈を以て馬勝に答へて曰はく。

善い哉汝馬勝　衆の爲めの故に佛に　其の微笑の因緣を請ふことや　諦に聽け汝が爲めに說けば　諸の世間を愍む爲めに　當に一心に專ら聽くべし　諸天九萬に滿ちて　悉く皆我が前に住せるもの　淸淨の信心を以て　已に曾て佛を供養せしが　復偈を以て讃嘆し　諸の空法を了知し　法に於て決定を得て　我が法中に安住せり　此等諸の天衆は　曾て八億の佛に供ぜしが　復當來の世の　無量億の佛の所に於て　彼の諸佛を供養して　無上道を求むるに　無量億の佛に於て　若し供養せずば　彼れ菩提樹に於て　終まで坐して證を取らじと　彼等は當來の世に　佛道を成ずるを得て　號名を大持と曰ひ　世間に於て最上たらん　彼れ諸の世間燈に、各聲聞衆あつて　八十の衆會に集り　知見に障礙無けん　彼等の成佛し已るや　彼の土の諸の衆生は　一切皆壽命に　八億歲を具足せん　彼の佛の無量の智にて　無數億の比丘は皆塵に遠り垢に離れて　悉く最後身に住せん　彼の佛の滅度の後に　彼の功德を爲むる者は彼れの佛刹を莊嚴して　無量の塔を造作し　彼の無量千の衆　及び百那由他は　彼れの塔廟を供養して　世間の人を利益するに　或は菩提の心を發し　或は涅槃を證するあらん　彼の佛滅度し已つて　正法久しく世に住ること　八億歲を經るは　無量那由他の　彼の諸の法王子

【九】種智。一切種智の略稱なり。第三卷、同名の解、參照。

の　受持して法を護る故なり　　と。
四天王天の衆　彼れに佛は記を授け已つて　世間を利益し　衆生を成熟することを爲せる故に
大衆は聞き已るや　心皆大に欣喜し　踊躍すること量ある無く　如來の教を奉順せり

三十三天授記品　第十四

爾の時に、復八億の忉利の諸天あつて、其の天帝釋を最も上首と爲せり。阿修羅・迦樓羅・龍女・龍王・鳩槃茶・乾闥婆・夜叉・緊那羅・虚空行天、乃至、四天王天の、如來を供養するを見、及び記授かるを聞き、皆大に欣喜踊躍すること無量にして、佛法の中に於て深心に信樂せ　。深く信樂し已れる爾の時に、帝釋及び忉利天は、勇猛の心を起し、如來を供養せんとて、即便に八億の七寶の重閣を化作するに、種種の雜色は端嚴・殊特・精妙・希奇にして、皆悉く赤珠の瓔珞・瑠璃の瓔珞・雜珠の瓔珞・火珠寶の纓絡を垂れ布きたり。一一の重閣には、皆百級の莊嚴せる幢門あり。一一の級中に、皆悉く復四つの小重閣あつて、窓牖及び師子座・幢幡・幌蓋・寶鈴・羅網を莊飾せり。天童女あつて、端嚴第一なるが、重閣の所及び師子座に侍して、諸の天樂を擊てり。又復、八億の善く調ぜる馬車を化作し、天の莊嚴の具にて之れを嚴飾せり。謂はゆる寶の幢・幡・蓋及び諸の音樂なり。一切迦毘羅大城に於て、縱廣六十由旬に周遍して、曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華・迦迦羅婆華・摩訶迦迦羅婆華・波盧使迦華・摩訶波盧使迦華を散じて其の地に布き、人の膝に至らせたり。帝釋は、又復、八億の[一〇]伊羅龍象を化作するに、一一の龍象に八億の頭あり、一一の象の頭に各六つの牙あり、一一の牙の上に七つの華池あり、一一の池中に七つの蓮華あり、一一の蓮華に皆千の葉あり、一一の葉の中に七天女あり、一一の天女に七侍女あつて種種に莊嚴せり。重閣の間に於て、龍象・寶車を安置し、後に隨つて如來を供養せり。天の重閣の上より、天の栴檀末・天の沈水末・天の眞金末を雨し、天の曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華・波盧沙華・摩訶波盧沙華・迦迦羅

【一〇】伊羅龍象（Airāvana-hasti）。一種の大象にして「龍」は褒稱の冠辭なり。

婆華・摩訶迦迦羅婆華・金華・銀華・毘瑠璃華、種種の雜色の波吒梨華を雨し、是くの如くに一切の種種の勝妙なる寶華を化作して、佛の上に散じたり。彼の天童女の、或は音樂を作し、或は歌ひ、或は舞ひ、或は其の身を動すこと、阿修羅の中にて廣く說けるが如し。又復、八億の善く調ぜる馬王を化作し、種種に莊嚴して其の上に乘せ、復種種の天の諸の供具を以て、佛の上に散じたり。復八億の諸天の音樂あつて、虛空の中に在つて自然に作り、復八億の寶車の上に於て、一一に各一の化天女あつて、彼の八億の天女は、或は歌ひ、或は舞ひ、或は音樂を作し、或は其の身を動すこと、修羅の中にて廣く說けるが如し。彼の[一一]伊羅龍王の頭の中に化する所の天女も、悉く音樂を作すことも、阿修羅の供養の中にて廣く說けるが如く、爾の時に、八億の天女は悉く佛を供養せり。

爾の時に、彼の八億の天は、是くの如き念を作せり。是の化天女は如來を供養するも、一切の諸法も亦復是くの如しと。佛の所說の如くに、彼れは一切の法を幻化の如しと知り已つて、諸法の中に於て疑網ある無く、彼れ諸法の中に無疑を得已つて、佛を遶ること三匝して佛足を頂禮し、却いて一面に住れり。彼れは、諸法に於て如幻なるを知り已つて、亦自身も幻化に同じきを知り、彼の供養及以び如來も、亦幻に同じきを知り、佛の所說の法も亦復是くの如しと、諸の幻法に於て無疑を得已つて、卽、偈頌を以て佛を讃じて言はく。

此の諸の化人は供養を設くれど　一切の諸人のも亦復然り　帝釋天等及び諸法の　一切も悉く皆幻化の如し　如來導師も亦幻の如く　聲聞衆も法に從つて化生せることと　佛の所說に於て悉く疑無く　能く如來の說かる記を解したり　如來世尊の說かる法を　愚癡の凡夫は了する能はざれども　如來の說かる諸法の等は　一切悉く皆猶幻の如し　若しくは諸の學[一二]人及び無學　佛弟子衆の調伏せる者　此等も亦復幻化の如しと　我れ此の法に於て疑無きを得たり　世尊若しくば[一三]人の寂默を樂み　獨一にして惱無きこと麒麟の如き　此等も一切悉く

【一一】伊羅龍王。前出の伊羅龍象は、茲には單に「龍王」とあり。若し龍とせば、伊羅婆那龍の略にして、第三卷、伊羅同名の解を參照すべく、何づれにしても前後の意義不明なり。

【一二】學人。は、學地の人の略なり。第一卷、「學地」の解、參照。

【一三】人の、乃至、麒麟の如き。は獨覺卽ち緣覺を指して曰ふ。

幻に同じと　我れ此の法に於ても亦疑無し　若しくば佛の行菩薩の行を行じ　衆生を利益して放逸ならざらしむる　彼れ是の菩薩如來の子も　一切悉く皆幻化の如し　善逝導師の自然智　十力の大悲智の無量なる　智慧自在にして世間の最たる　彼の佛の是くの如きことも亦幻の如し　佛世尊の說かるる法の　清涼寂靜にして所依無き　涅槃を得る法及び涅槃の如き彼等も亦復猶幻の如し　善逝の、法には所有無く　一切猶幻化の性の如しとする如き　此の佛法及び智慧に於て　我等は中に於て悉く疑ふ無し　我等常に願ふ佛の如くに　一切の法を見ること亦幻の如くなるを得んことを　我等此の佛の境界を行ぜんに　願はくば成佛を得ることに疑ある無からんことを　と。

爾の時に、世尊は八億の三十三天の深心の信樂を知り已つて、即便に微笑せり。爾の時に、慧命、馬勝は即、偈頌を以て、佛に請問して言はく。

名稱無比にして諸德を具したまへる　如來の笑を現したまへるは因無きに非じ　如來今日何に爲つて笑みたまへる　惟願はくば說いて我が疑を除くことを爲したまはんことを　衆は如來の微笑を現したまへるを見たてまつり　見已つて皆猶豫を懷けり　唯願はくば彼の衆の疑惑を除き　衆をして諸の疑網を懷くこと勿からしめたまはんことを　彼の諸の天衆は皆欣喜して如來を讃歎し及び供養せるが　如來の笑を現したまへるは今誰れの爲めなるか　願はくば佛爲めに說いて衆をして喜ばしめたまはんことを　諸德の清淨なること猶月の如くなる　應供養者願はくば說くを爲したまはんことを　如來の所說を彼れ若し聞かば　此に等しく欣喜して成佛することを得ん　此くの如き諸天の大衆等は　一切の法の猶幻の如きを知つて　諸天の修學に障礙無きこと　唯願はくば十力此の事を說きたまはんことを　一切の大衆は若し疑を除せば　欣喜の心を以て菩提を修め　増上なる欲を以て下劣ならずに　衆聞かば即勇猛の心

を發さん　と。

爾の時に、世尊は、偈頌を以て馬勝に答へて言はく。

馬勝汝今如來に問へることは　善く時機に合して大に利益あり　佛は天衆の欣喜せるを知り已つて　我れ笑を現せる緣をば今當に說くべし　汝天衆の爲めに笑の因を問ひ　今大に諸の衆生を利益すれば　我れ今汝が爲めに笑の因を說かん　淸淨の心を以て善く諦に聽け　是くの如き諸天の大衆等は　一切の法の猶幻の如きを知り　無量無礙なる智見の慧にて　當來に闇を離れて佛と作ることを得ん　過去に生死の中に流轉して　曾て諸佛の恒沙の如くなるに供じ　彼の佛の所に於て數　一切の諸法の猶幻の如くなることを修習せしが　今復我れに於て勝れたる供を設け　亦諸法の幻化に同じきを知り　此に佛法に於て深く信樂したれば　當來の世には必ず佛を成ぜん　此の佛法に於て作す所の福に　失壞及び障礙ある無く　天衆は我れに於て供養し已つて　復諸法の猶幻の如き知りたれば　當來の世の近き住劫の中にて　[一四]最勝說中の勝を成ずるを得　彼の勝福の者皆號を同じうして　因陀羅幢王佛と名け　彼の佛如幻の法を宣說して　無量億の衆生を度脫せん　是の故に汝等放逸を捨てて　一切の法の應に如幻なるべきを修せよ　是く不放逸の者の化せらるるは　菩提分の法を滿す故と爲せば　精進することは猶頭の然ゆるを救ふが如くに　速に寂滅なる勝菩提を求めよ　と。

夜摩天授記品　第十五

爾の時に、復四億の夜摩天の衆あり。阿修羅・迦樓羅・龍女・龍王・鳩槃茶・乾闥婆・夜叉・緊那羅・虛空行天・四天王天・忉利天等の、如來を供養するを見、幷に記を授かるを聞き、皆大に欣喜踊躍すること量無し。爾の時に、夜摩天衆は、佛如來の、無礙の智を以て彼の記を授くるを知り已つて、即、佛法に於て信樂の心を起し、信樂を起し已つて、即是の念を作せり。是くの如くに、佛法は甚だ奇

【一四】最勝說中の勝、乃至、名け。異譯本に「最上菩提の道を成ずるを得、號して帝幢王如來と曰ひ」とあり。

にして微妙なり。若し佛法を證せば、知らざるある無く、見ざるある無く、[一五]簡擇せざる無く、證せざるある無く、已に生ぜる・未だ生ぜざる・現に生ずる、或は已に滅せる・當に滅すべき・現に滅する、若しは業及び報に於て、皆實の如くに知ること甚だ奇なり。如來は、能く世諦及び第一義を知り、善く此の二つを知りたまひて、更に餘ある無し。彼の佛世尊は、其の空の法に於て、善く知見し能ひ、善く簡擇を知り、善く相應を證したまへる故に薩婆若と名く。何なるを世諦と謂ふ。[一六]一切の世俗の生死の所の行、此の諸法に於て、悉く能く曉り知るなり。第一義とは、言說ある無く、知る者ある無く、心の所行に非ず。無知なる故を以て、能說の者無く、顯示する者無く、聞く者ある無し。無說なる故を以て、亦知る者無し。生ずる無く示す無ければ、見る者ある無く、施設するある無く、取著するある無く、覺知するある無し。能到ある無く亦所到も無ければ、親近し能ふ無く、測量し能ふ無く、建立するある無く、棄捨するある無し。所作ある無く亦能作もある無ければ、譽無く、毀無く、利無く、衰無く、稱無く、譏無く、苦無く、樂無し。色に非ず、非色に非ず。數に非ず、非數に非ず。明に非ず、非明に非ず。煩惱有るに非ず、煩惱を離れたるに非ず。世間に非ず、涅槃に非ず。覺に非ず、觀に非ず。進に非ず、退に非ず。動無く、作無く、戲論ある無く、諸の戲論の說く所を過ぎたり。色の相として得べからず、受・想・行・識としても亦得べからず。眼の相として得べからず、耳・鼻・舌・身・意の諸相としても亦復是くの如し。色の相として得べからず、聲・香・味・觸・法の相としても得べからず。眼識の相として得べからず、耳・鼻・舌・身・意識の相としても亦得べからず。眼の觸の相として得べからず、耳・鼻・舌・身・意の觸の相としても亦復是くの如し。眼の觸にて生ずる受としても亦得べからず、耳・鼻・舌・身・意の觸にて生ずる受としても亦復是くの如し。

[一七]色の思覺の相としても亦得べからず、乃至、法の思覺の相としても亦復是くの如し。空の相としても得べからず、地界・水界・火界・風界・識界としても亦得べからず。欲界の相としても得べからず、

【一五】簡擇。異譯本には「解了」とあり。眞智にて眞實を知るを謂ふ。

【一六】一切の世俗の生死の所の行。異譯本には「謂はく、世間の行の、若しは業若しは報の、已に生ぜる未だ生ぜざるもの」とあり。

【一七】色の思覺乃至是くの如し。異譯本に「色の想は得べからず。乃至法の想も亦得べからず。」とあり。

色界の相としても得べからず、無色界の相としても得べからず。有爲の相として得べからず、無爲の相としても得べからず。是等の如くに、彼彼の法の若き言說にては、說き能ふ者無きこと是くの如し。是くの如き法を、不可說の法と名くるなり。佛法の最勝なることは、無聞にして愚癡なる凡夫の衆生は知る能はざる故に、聞き已らば驚怖せん。彼れ佛法に於て心に怖畏を生ぜば、一切智智に於て便卽に退失せんことを、諸天世人は應當に憐愍すべし。此くの如き衆生は、常に生死に處つて、恒に苦を爲すこと切なればなり。と。

爾の時に、夜摩天は、諸の世間の煩惱の衆生を觀已つて、佛の法を得ん爲めの故に、如來を供養せん爲めの故に勇猛の心を起し、設くる所の供具の、忉利天に過ぎたるにて佛を供養せり。佛を供養し已るや、佛足を頂禮し、右に遶ること三匝し、却いて一面に住れり。爾の時に、夜摩天は、卽、偈頌を以てして佛を歎じて言はく。

佛は諸陰の皆空寂にして　其の界入に於ても亦復然るを見たまひ　諸根の聚積も皆相を離れたるを　如來は實の如くに悉く了知したまふ　世間の智者は實の法に於て　他に從つて聞かずして自然に解す　謂はゆる世諦及び眞諦にして　此れを離れて更に第三の法無きなり　如來は一切を悲愍し　世間を利せんが爲めに俗諦を說き　如來は世間を宣說するに　諸の衆生の爲めに六趣　地獄畜生及び餓鬼　人天の道及び修羅を顯せり　下劣の家及び勝れたる家　有らゆる貧しき家及び富める家　奴僕の屬及び婢使　男女等の類及び二根と　有らゆる世間の六道を　佛無比の身は悉く已に說きたまへり　世諦の諸法を觀じ已つて　佛は世を利せんが爲めの故に宣說したまふに　衆生は生死に樂著して　世の八法　謂はゆる利と衰と及び毀と譽と　有らゆる稱と譏と及び苦と樂とを離るる能はずして　利便を得れば便卽に欣喜を生じ　利を失へば卽瞋惱を生じ　餘は說く所の如く應當に知るべく　世間は皆此の八法に隨ふなり　俗諦の

中に於て眞を說く者は　彼れ顚倒の慧なること應當に知るべく　不淨樂の中にて淨樂を說き無我の中に於て說いて我と爲し　無常法の中にて說いて常と爲し　此の相中に住して取著し如來の說かるゝ敎を聞くや　恐怖し誹謗して信受せず　如來の實なる敎を誹謗し已つて　極めて苦しき地獄の中に墜墮するなり　凡愚は世の樂を貪求する故に　轉無邊なる百種の苦を受くれども　若し其の佛法の中に於て　如實に觀察して顚倒せざるあらば　諸有を棄捨して涅槃に入らんこと　猶蛇の其の故皮を脫するが如けん　一切諸法の體性は無く　空にして相ある無きは第一義なるを　若し此の法を聞きて愛樂を生ぜば　必ず無上なる勝菩提を得ん　如來は實の如くに此の法を說きて　天衆の諸の疑惑を除斷し　悉く無上菩提の心を發さしめたまふは　一切の衆生を度せんが爲めの故なり　此くの如くにして天衆は發心し已つて　皆悉く欣喜して心淸淨に　最勝なる佛法を聞くを得已らば　此の諸の天衆は皆佛を成ぜん　と。

爾の時に、世尊は、彼の四億の夜摩天衆の、深心の信樂を知つて、卽便に微笑せり。爾の時に、馬勝は卽、偈頌を以て如來に問うて曰はく。

佛は世間の爲めの故に笑を現したまへるを　一切の時衆は皆疑を生ぜり　唯願はくば世尊笑の因を說きて　此の衆會をして皆欣喜せしめたまへ　諸天の授記を聞き已らば　一切は皆悉く大に踊躍し　智慧ある者は勇猛を發して　佛の法中に於て說の如くに行ぜん　此の佛如來の諸の勝衆は　具足して佛の功德の器を有てり　善い哉美妙の言を宣說したまへ　是くの如き大衆を攝せん爲めの故に　佛の功德を聞きて心に喜樂することを　此の諸大衆は必ず當に得べく　如來の授記を聞き已らば　法の如くに當に勤修精進すべし　善い哉人尊說中の勝　疑惑の衆の心を二つにせる者に於て　唯願はくば世尊速に說くを爲したまはんことを　時衆は一心に聞かんことを樂欲せり　彼れ夜摩天の受けたる勝記を　願はくば人師子速に說くを爲した

まはば　此の諸の大衆は皆欣喜して　一切悉く菩提の心を發さん　と。

爾の時に、世尊は、即、偈頌を以て馬勝に答へて曰はく。

世間を利することを爲さん故に笑を現せるに　馬勝は時に合して善く諮問せり　無量なる諸の大衆を利益して　佛如來の功德を聞かせん故に　貪瞋に樂著せる諸の衆生は　佛の功德に於て惠を樂ふこと無く　其の心愚癡に惑亂せられて　當に生死の大海の中に沒すべし　佛の法に於て深く信樂する若きは　曾て先佛に於て已に請問して　大悲心と相應せる者なれば　是の人能く佛の功德を得るなり　人の彼の衰惱に逼らるる若きに　勝人は彼れに於て悲心を起さんに　彼の諸の衆生は佛德を聞きて　佛敎を頂受すること華鬘の如くなり　我が諸の衆會の大に清淨なるは　先佛の所に於て曾て福を修めたるにて　彼れ如來の功德の所に於て　頂受すること　猶[一八]婆師鬘の如くなり　夜摩天衆も先佛の所にて　曾て戒を修持し貪著を除き煩惱を厭離して心淸淨に　穢れたる衆生に於て悲心を起せり　無量の佛に於て曾て親近し其の數猶恒河沙の如くに　彼れ曾て無量の善を修習せるは　無上菩提を求めん爲めの故なり　衆生の煩惱に沒せるを知り已つて　苦の衆生に於て悲心を起し　人師子世を利する者に於て　諸の法門を問へること量ある無し　我れ今導師として彼れが爲めに說くに　聞く者悉く佛道を成ずるを得るは　彼の衆生の煩惱の鉤を知つて　最上なる勝妙の法を說くを爲せばなり　彼の勝丈夫大導師は　彼の衆生の爲めに空の法を說けるに　彼れ諸佛の所說を聞き已つて　悉く皆諸法の空なるを了知せり　謂はゆる空とは諸法の相無く　無自性無相の法を說けるなりと　是くの如くに諸佛の法を了知して　悉く皆佛の功德に安住せり　此等は勝妙に我れに供養し　法の如くに各自記莂を受けて　當に來世の[一九]星宿劫に於て　悉く皆無上道を成ずるを得べし　[二〇]是くの如き如來に增減無く　其の數四十億を滿足し　其の佛を同じく淨智

【一八】婆師鬘(Vassiki-mālā)。は婆師迦華の華鬘を謂ふ。

【一九】星宿劫。三世の大劫の中の未來の大劫の名なり。此の劫中に千佛世に出で、其の數、星の如くに多きに由り名づく。

【二〇】是くの如き、乃至、滿足し。異譯本には「此の諸の如來は世に出でて、四十四倶胝劫を滿たし」とあり。

尊と號して　無量なる諸の衆生を開悟せん　と。

大仙の諸の怨める者を降伏して　馬勝の諸問せる所に答へ　夜摩天の願求する所を滿すや　大衆の天人は皆欣喜せり」

卷の第六十七

菩薩見實會　第十六の七

兜率陀天得授記品　第十六

爾の時に、八億の兜率陀天は、諸の阿修羅・迦樓羅、乃至、夜摩天等の、如來を供養するを見、記を受くるを聞き已り、欣喜踊躍して是くの如き念を作さく。何等の法に於て、世尊は阿耨多羅三藐三菩提の記を與へ授けたまふか。色に記を授くと爲んか。受・想・行・識に阿耨多羅三藐三菩提の記を授くるを得るか。と。彼等諸天は、復是の念を作さく。色に記を與ふるに非ず。亦復、受・想・行・識に阿耨多羅三藐三菩提の記を與ふるに非ず。何を以ての故ぞ。色は既に不生にして菩提も亦不生なれば、云何ぞ無生の色は能く無生の菩提を悟らん。是くの如くに、乃至、識も亦不生なれば、云何ぞ無生の識は能く無生の菩提を悟らん。色は既に不滅にして菩提も亦不滅なれば、云何ぞ不滅の色は能く不滅の菩提を悟らん。是くの如くに、乃至、識も亦不滅なれば、云何ぞ不滅の識は能く不滅の菩提を悟らん。色に分別無く菩提も亦分別無ければ、云何ぞ分別無き色は能く分別無き菩提を悟らん。是くの如くに、乃至、識も亦分別無ければ、云何ぞ分別無き識は能く分別無き菩提を悟らん。色は既に二つ無く菩提も亦二つ無ければ、云何ぞ二つ無き色は能く二つ無き菩提を悟らん。是くの如くに、乃至、識も亦二つ無ければ、云何ぞ二つ無き識は能く二つ無き菩提を悟らん。色には既に作無く菩提にも亦作無ければ、云何ぞ作無き色は能く作無き菩提を覺らん。是くの如くに、乃至、識にも亦作無ければ、云何ぞ作無き識は能く作無き菩提を覺らん。色は既に不可得にして菩提も亦不可得なれば、云何ぞ不可得なる色は能く不可得なる菩提を覺らん。是くの如くに、乃至、識陰も不可得にして菩提も亦不可得なれば、云何ぞ不可得なる識は能く不可得なる菩提を覺らん。

是くの如くに、彼の不可得なる諸法の中に於て、何者か是れ佛、何者か是れ菩提、何者か是れ菩薩にして、何者か是れ授記なる。色陰は空にして、受・想・行・識も亦復、皆空なり。何を以ての故ぞ。性自ら空なる故なり。是くの如くに、[一]佛も空に、菩提も空に、菩薩も空にして、授記も空なり。何を以ての故ぞ。自體空なる故なり。是くの如くにして、性の空なる一切法の中にて、[二]言ふ所の佛とは、但の名、但の用にして、但是れ世諦なれば、但是れ言説なり、但是れ施設なり。言ふ所の色陰と受・想・行・識とも亦但の名用にして、世俗の言説及以び施設なれば、智者は此れに於て應に取著すべからず。譬へば、人あつて、其の夢中に於て五欲の樂を受け、彼の人寤め已つて彼の樂を見ず、憶念すれども五欲の樂を得ざる故に、便ち苦惱を生ずるが如く、是くの如くに、菩薩乘に住する者も、若し取著するあらば菩提に會はず。菩提を證せざる故に其の味を得ず。味を得ざる故を以て、心に苦惱を生ずるなり。何を以ての故ぞ。是くの如くに、諸法は夢の如くにして實ならざるに、[三]彼の法の義別に、愚癡の凡夫は解を取ること各異なればなり。一切の諸法をば、當に是くの如くに知るべし。何の法か是れ佛なる。何の法か是れ菩薩なる。何の法か是れ菩薩なる。彼の[四]諸(佛)法は皆不可得なり。凡夫も不可得なり、凡夫の法も亦不可得なり。聲聞も不可得なり、聲聞の法も亦不可得なり。辟支佛も不可得なり、辟支佛の法も亦不可得なり。菩薩も不可得なり、菩薩の法も亦不可得なり。佛も不可得なり、佛の法も亦不可得なり。菩提も不可得なり、涅槃も亦不可得なり。』と我等、此の諸法の中に於て、解了して疑ふこと無し。』と。

爾の時に、兜率陀天は、斯の法の中に於て既に疑ひ慮る無くして、世尊の所に於て樂んで供養を修せるが、作す所の供養は夜摩天に勝り、佛足を頂禮し、右に遶ること三匝し、却いて一面に住り、即、偈頌を以つて世尊を讃じて曰はく。

有らゆる、佛の功德に住せる者には　如來は其れに行法を説くに爲り　彼れ[五]三種の解脫門を

【一】佛も空に、等。異譯本に「佛の佛たる自性は空に、」等とあり。

【二】言ふ所の、乃至、施設なり。異譯本に「名くる所の佛とは、但、世俗に依り、假名にて呼召して、希望し分別するなり。」とあり。

【三】彼の法の、乃至、異なればなり。異譯本に「愚癡の凡夫は、解を取ること各異にして、諸の妄法に於て執著を生ず。」とあり。

【四】諸佛法。の「佛」は衍字なるべし。異譯本にも只「諸法」とあり。

【五】三種の解脫門。三脫又は三解脫とも云ふ。前卷の解、參照。

得て　無等の境界の中にて修行するなり　　色無く亦受想行も無く　[六]其の受くる者無く亦心も無しとは　斯れ則ち無礙智の境界にして　樂うて欲陰を離れたる人師子なり　　彼れ諸の智慧の妙丈夫は　菩提を發す想を取らされども　陰を離れ已り勝善根を獲て　佛の功德に於て疑慮無く　無上の大菩提を志願すれども　然も菩提に於て取著を離れ　是の故に內心に憂喜無ければ　名けて佛子聖行を修すと爲すなり　　佛に同じく法を見ること悉く平等なる　是の故に法に於て畏るる所無ければ　智者は此の世間の處に於て　佛の功德を求めて修行を起すなり

色相を簡擇して著する所無く　一切の有相の心を棄捨し　彼の三有に於て願を起さず　諸有の悉く皆空なるを觀察し　能く五陰ば各不生にして　如來と授記及び菩提と　菩提の心等も亦無生なるを知ると　是の說を作す者は愚惑には非ず　　如來の功德及び　[七]生死　此の諸の佛の法は悉く無生なりと　是くの如くに知る者は人中の勝にして　是れを眞實なる如來子と爲す

若し能く是の陰は不滅にして　界入及以び如來の法　佛と菩提と及び授記と　斯等の諸法は皆不滅に　菩提の修行を爲す者の衆きも　當に知るべし彼れ亦是れ不滅なりと知らば　[八]諸の世間の不滅なるを知る故にて　彼れは菩提を求めんこと難しと爲さざるなり　　五陰界入と菩提と　佛及び菩薩は皆無作なりと　是くの如くに了知するを佛子と爲し　彼の人は能く佛の正法を持てるなり　　陰界諸入は皆無覺にして　菩提と佛幷に菩薩　及以び授記も悉く無覺なりと　是くの如くに知る者を佛子と爲す　　五陰界入は性空寂にして　佛と菩提及び授記と　如來の眞子たる修行者は　斯等をも亦皆自性空なりとす　　陰界諸入は悉く虛妄にして　兩足世尊及び菩提　行者の授記も亦虛妄なりと　是くの如くに了知するを佛子と爲す　　[九]是れ依止するに非ず依らざるに非ず　亦法有るに非ず法無きに非ず　是れ有爲に非ず無爲に非ずと　是くの如くに了知するを佛子と爲す　　世尊は是くの如くに世間を見たまひ　我等も是くの如くに

【六】其の受くる者、乃至、人師子なり　異譯本に「心と境とに、彼の五蘊の但、假名なるを了する、是れを慧を具せる人師子と名く。」とあり。

【七】生死。　異譯本に「凡夫の法」とあり。

【八】諸の世間の、乃至、爲さざるなり。　異譯本に「法性の無滅なるを了する故に由り、佛菩提に於て得難からず。」とあり。

【九】是れ依止するに非ず。乃至、法無きに非ず。　異譯本に「是の法は、離に非ず不離に非ず。亦、有と爲すに非ず、亦、無に非ず。」とあり。

佛心を知つて　卽勝妙に佛　及以び一切の賢聖の衆を供養するを爲せり　我等の佛を讃じて得る所の福は　唯佛世尊のみ能く了知したまふ　斯の功德を以て群生に施し　願はくば皆佛を成じて衆相を具せんことを〃　と。

爾の時に、世尊は、彼れ兜率の諸天の己れを讃するを聞き、及び深信なるを知り、卽、天衆の爲めにとて微笑を現せり。爾の時に、慧命、馬勝は偈を以て問うて曰はく。

大勢力を得たまへる無上士　其の因力を以て笑光を現したまへり　願はくば佛是の微笑の因を說き　衆をして聞くを得て皆欣喜せしめたまはんことを　如來の微笑を見たてまつる故を以て　此の諸の大衆は悉く疑を懷き　衆會慇懃に普く瞻仰して　咸く皆一心に聽聞せんことを欲す　猶世間の病有る人の　唯醫師及び良藥を思ふが如くに　是くの如き大衆は佛の所に於て　願樂して授記を說きたまふことを聞かんと欲す　斯等には皆深智慧あつて　菩提を志求するに著する所無く　一切恭敬して悉く瞻仰し　唯如來の記莂を爲したまはんことを希へり

世尊此れに於て大悲を起し　佛の智力を以て疑網を斷ちたまはば　是の故もて大衆は欣喜を得て　咸く皆佛の功德を願求せん　世尊今は正に記を授けたまふ時なり　唯願はくば諸の疑惑を除滅したまはんことを　如來は久しく已に怨敵を離れたまへり　願はくば衆の邪外道の論を斷ちたまはんことを　と。

爾の時に、世尊は、卽、偈を以て慧命、馬勝に答へて曰はく。

汝今如來に義を啓請して　其の微笑を問へるは正に是れ時なり　世間を利せんが爲めの故に致せる問は　必ず當に諸の衆生を饒益すべし　諸の天衆の心の樂欲を知れる　故に我れ其の微笑の光を現せるにて　佛法の勝妙を知るを以ての故に　我れに於て便ち上供養を作したり　彼れ皆實の如くに世間を見　聖教に隨順して法を證するを得　已に三種の解脫門に到れること

は諸の世間の知り能ふ所に非ず　過去に已に無量の佛を供養し　亦曾て是の深き義趣を問ひ　彼の佛の所に於て久しく空を修したれば　今も故に斯に於て空の義を顯すなり　是の故に今は此の處に於て　便ち佛世尊に値遇することを得　空を以て無上士を讃歎し　一切の諸世間を利益せんとて　斯の世間の如きは悉く生無く　諸の佛と菩提及び授記　有らゆる菩提を修行する者　彼等も一切亦生無きを　衆生悉く同じく此の法を有ち　是くの如くに知り已らば菩提を得んと　過去に曾て菩提心を學べる　彼れは此の義に於て能く解了せり　是くの如き世間は亦滅せずと　斯に諸の天衆は善く通達し　明智もて照了して悉く疑ふ無く　是の故に彼の天は皆佛を作すなり　決定して必ず無依處を得んと　法に於て取らず分別を離れ　一切の世間は皆無作なりと　彼れ斯の義に於て能く了知したり　一切の法の體は自性を離れたりと天衆は心淨くして　菩提及與び菩提心も　一切皆空にして無自性なるに疑惑無し　兜率の諸天は堅固の慧にて　皆悉く無所依に安住したる　故に菩提を得ること難しと爲さず　必ず當に速に無上智を成ずべし　其の未來の星宿劫に於て　當に無邊の衆を度脱することを得べく

彼の天は一切皆成佛して　同じき號名にて擇法王と曰はん　と。如來は此の諸の天衆に於て　其の心樂を知つて記說を爲せるに　一切の天人は說を聞き已るや　咸く皆踊躍して心意に稱ひたり。

化樂天授記品　第十七

爾の時に、化樂天王を首と爲して、其の眷屬七億の化樂の諸天衆等は、諸の阿修羅・迦樓羅、乃至、諸の兜率天等の如來を供養せるを見、記を授かるを聞き已り、欣喜踊躍して咸く皆心に稱ひ、實際に住するを得て、眞如の中に於て疑惑ある無く、座よりして起ち、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、頭面にて禮を作し、佛に向つて合掌し、異口同音にて、佛に白して言はく。世尊、我れ佛の

說かる義を解する如くんば、一切の諸法は是れ眞實の際にして、無邊際なり、無礙際なり、無住際なり、無盡際なり、不二際なり、非際なり、實際なり。世尊、言ふ所の實際とは、顚倒せざる故なり。無邊際とは、限量無き故なり。無礙際とは、對治を離れたる故なり。無住際とは、自性を離れたる故なり。無盡際とは、生ある無き故なり。不二際とは、謂はく、一味なる故なり。非際とは、是れ有に非る故なり。世尊、彼の實際は、一切の處に遍くして、一法として實際に非ることある無ければなり。世尊、菩提と謂ふ者も、亦是れ實際なり。世尊、何者か是れ菩提なる。一切の法は是れ菩提なり。自性を離れたる故に。乃至、五無間の業も亦是れ菩提なり。何を以ての故ぞ。菩提には自性無く、五無間の業にも亦自性無し。是の故に、無間の業も亦是れ菩提なり。世尊、菩提と言ふ者は、無餘涅槃の性の如くにして、亦無間の業も性の如し。何を以ての故ぞ。一切の法は即是れ無餘涅槃の性にして、亦是れ無間業の性なればなり。是の故に、無餘涅槃界は即是れ菩提なり。世尊、〔一〇〕衆生の、生死に住する者あつて涅槃を求むべき若きも、實際の中に於ては、生死に住して涅槃を求むる者無し。何を以ての故ぞ。實際には二無き故に。世尊、我等は此の解了に於て疑無し。若く此の法に於て疑慮無きは、當に知るべし、是の人は、已に曾て過去に、諸佛の所に於て、阿耨多羅三藐三菩提の記を授かるを得たればなり。」と。

爾の時に、世尊は、化樂天王及び諸七億の化樂天等の、授記を說き已れるを聞き、大衆の心をして喜悅せしめんと欲する故に、微笑を現せり。爾の時に、慧命、馬勝は偈を以て問うて曰はく。

世を憐愍する者微笑を現したまひ　而も其の笑の因緣を說きたまはず　天人の導師は因無きに
此の奇特なる微笑の相を現したまふに非ず　既に世尊の笑光を見已り　今諸の大衆は悉く
疑を懷きたり　唯願はくば其の微笑の因を說きて　一切の諸疑網を斷除したまはんことを
斯等若し如來の說くを蒙り　聞き已つて咸く希有の心を生ぜば　彼れ衆會の淨眞の路にて

〔一〇〕衆生の、乃至、二無き故に。異譯本に「輪迴に住する者は涅槃を求むべきも、彼の實際の中には二相ある無く、生死の離るべき無く、涅槃の證すべき無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に。」とあり。

菩提に趣向する爲めに因緣と作らん　若し衆生の疑慮する者あらば　是の人は妙菩提を得難ければ　唯願はくば大智疑惑を斷じて　速に無上道を證することに精勤せしめたまはんことを

世尊此の諸の大衆は等しく　菩提を志求して諸惡を離れんとすれば　諸天の授記を聞くを得已らば　決定して當に大法王を成ずべし　是の故に世尊願はくば憐愍して　一切の疑惑心を除斷せんとて　此の諸天に菩提の記を授け　諸の大衆をして皆欣喜せしめたまはんことをと。

爾の時に、世尊は、偈を以て慧命、馬勝に答へて曰はく。

世間を哀愍する故に笑を現せるを　馬勝汝今我れに義を問へり　我れ悉く彼の天の與めに記を授くれば　汝等　咸く各　淨心にて聽け　此の諸の化樂天衆等は　自ら能く記を授けて菩提を得んと　衆中にて旣に師子吼を作し　能く外道の諸の邪見を壞れり　譬へば空中より衆石を雨すに　必ず大地に墮つること疑ある無きが如くに　是の佛子の如きは疑惑を離れて　自ら定つて當に佛道を成ずべきことを知れり　猶日沒して夜時に至れば　當に月の出づること必ず久しからざることを知るべきが如くに　是の佛子の如きは衆行を備へたれば　定つて必ず當に十力を具すべきことを知れり　又日の正中の時に在つては　諸の色像を觀るに皆明了なるが如くに　是の佛子の如きは衆行を具へたれば　自ら必ず薩婆若を得ることを知れり　喩へば　[一]日光の沒するに至れる時は　衆人は咸く日の現れざることを知るが若くに　是の佛子の如きは皆自ら　決定して當に最勝智を得べきことを知れり　譬へば衆流の其の下に趣くに　智者は當に大海に歸することを知るべきが如くに　是の佛子の如きは明慧を具したれば　定つて必ず上菩提を得ることを知れり　人の石を以て虛空に擲つに　決定して地に墮つること疑慮無きが如くに　是の佛子の如きは悉く自ら　久しからずして當に世間解を得べきことを知

【一】日光の沒するに至れる時。異譯本に「世間の夜分の時」とあり。

れり　智者は法爾として此の見を有ち　法を知る故を以て疑を致さず　自ら佛の功德を分ち有ち　必ず定つて自然智に近づくことを知れり　假に諸魔の那由の衆をして　佛と現れて汝は佛と作らじと言はしむとも　其の心意を沮壞すること能はざるは　已に自ら善く眞法を解せるが故なり　決定して彼の佛の功德に於て　咸く各自ら授記を得たりと說ける　斯の諸天の授記の事に於ては　如來は悉く隨喜の心を生ずるなり　此の天の修むる所の菩薩の行の悉く自ら了知して他に由らざるにて　彼等自ら善逝を成ずと說けるを　世尊は此れに於ても皆隨喜するなり　是の故に馬勝若し人あつて　無上の菩提を得んと欲せば　彼れ此の法に於て應に勤求すべくば　必ず最勝なる安隱の處を獲ん　自ら正覺を成ぜんと斯の理を悟るに　義に隨つて實の如くに能く了知し　善知識に親近し供養せば　彼れ菩提を證すること難しと爲さざるなり　若し千劫に苦行を修め　皮膏血肉に戀惜無きありとも　若し能く斯の義趣を解了せば　此の福の廣大なることの彼れに勝れるは　過去の有らゆる一切佛　未來に衆生を憐愍せん者　及以び現在の諸の世尊は　悉く此の法に依つて佛道を成じたればなり　化天の我れを供養し已り　咸く皆善く第一義を知れるは　曾て過去の諸の如來に供じて　斯の義理を悟れるにて當に佛を成ずべきなり　諸佛の有てる勝三昧　及以び現在住する所の定にて　彼の天の深く佛の境界を得たるは　本先世に久しく修習せるに由る　馬勝化樂の天子等は　彼の三昧に於て疑ある無く　淸淨なる佛法を旣に善く學び　今佛道に於て現に修行せり　是の故に理に於て信解を生じ　當に正に勤求して苦邊を離るべく　常に應に多聞の者に親近して　必ず無上の大菩提を得べきなりと。

〔三〕佛の說かれし妙法を聞き已るや　化樂の諸天と衆會等は　皆悉く欣喜して疑網を除き　大涅槃に趣向せんと流注せり。

【三】佛の說かれし、乃至、流注せり。此の一節は、異譯本には全く無し。以て亦、偈頌に屬すべからざる本文の記述たることを知る。

他化自在天授記品　第十八

爾の時に、他化自在天王を首と爲して、其の眷屬八十那由他の諸天衆等は、諸の阿修羅・迦樓羅・龍女・龍王・鳩槃茶・乾闥婆・夜叉・緊那羅・[一三]訶羅伽闍天・四天王・忉利天・夜摩天・兜率陀天・化樂天等の、如來を供養するを見、記を授かるを聞き已り、欣喜踊悦して皆心に稱ふを得、異口同聲にて、佛に白して言はく。世尊、化樂の諸天の說く所の實際には、我等は尙實を見ず。況んや復、際を見ることをや。何を以ての故ぞ。世尊、若し實を見ば、際をも見ると言ふべし。何を以ての故ぞ。是の人は二つの處を行ずればなり。是くの如き乘に住する者にして、若し善男子、善女人に、應に彼れが爲めに此の二種の法を說くべくとも、此の二法は眞の境界には非ず。世尊、若し善男子、善女人にして、不二の法に於て信ぜず入らずんば、復是くの如くに此の人は發心して菩提を得んことを望むと雖も、當に知るべし、是の人は非經に行くことを。何を以ての故ぞ。此れは、菩提に於ては道行に非ざる故なり。世尊、若し衆生あつて菩提を求めば、是の人は一法も覺すべきを見ざれ。何を以ての故ぞ。[一四]少しの法も、阿耨多羅三藐三菩提と覺悟し得べきものある無き故なり。世尊、[一五]彼の法は、過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず、有爲に非ず、無爲に非ず、有に非ず、無に非ず、[一六]識るべきに非ず、知るべきに非ず、捨すべきに非ず、修すべきに非ず、證すべきに非ざるなり。菩提と謂ふ者も、彼の法は餘の法と對治を作すに非ず、餘の法も亦彼の法と對治を作すに非ず。何を以ての故ぞ。彼の法は、煩惱を雜へたるに非ず、煩惱を離れたるに非ず。法體不可得にして、性自ら離れたる故なり。此の法は彼の法と對治を作さず、彼の法も亦此の法と對治を作さず。何を以ての故ぞ。一切の諸法は、諸相を離れたる故なり。是の故に、彼の法は、知るべきに非ず、識るべきに非ず、捨すべきに非ず、修すべきに非ず、證すべきに非ざるなり。世尊、色の生といふ者も、生の相を離れたる故に、彼れも亦知るべきに非ず、乃至、證すべきに非ず。受・想・行・識に

【一三】訶羅伽闍天。本經第十一卷に出でたる迦留迹天（異譯本には常憍天とあり。）と同一の者なるべく、而して、本品の順を以て判せば、前の虛空行天を指す者なるべし。

【一四】少しの法も、乃至、無き故なり。異譯本には「菩提を求むれば、少法も、當に情の可見として、能く覺悟して彼の菩提を得べきもの有る無し。」とあり。

【一五】彼の法。異譯本に「此の實際の法は」とあり。

【一六】識るべきに非ず知るべきに非ず。異譯本には「識にて識るに非ず智にて知るに非ず。」と識と智とに區別しあり。

も亦復是くの如し。世尊、色の滅といふ者も、[一七]色の相を離れたる故に　彼れも亦知るべきに非ず、乃至、證すべきに非ず。受・想・行・識にも亦復是くの如し。世尊、過去といふ者も、過去の相を離れたる故に、彼れも亦知るべきに非ず、乃至、證すべきに非ず。未來といふ者も、未來の相を離れたる故に、彼れも亦知るべきに非ず、乃至、證すべきに非ず。現在といふ者も、現在の相を離れたる故に、彼れも亦知るべきに非ず、乃至、證すべきに非ず。世尊、有爲といふ者も、有爲の相を離れたる故に、彼れも亦知るべきに非ず、乃至、證すべきに非ず。無爲といふ者も、無爲の相を離れたる故に、彼れも亦知るべきに非ず、識るべきに非ず、捨すべきに非ず、修すべきに非ず、證すべきに非ざるなり。世尊、是等の如くに、乃至、陰に爲つて攝められ、或は過去に攝められ、現在に攝められ、未來に攝められ、或は有爲に攝められ、無爲に攝めらるる此等の諸法は、皆不可得なり。不得の故を以て、是の故に彼の法は、知るべきに非ず、識るべきに非ず、捨すべきに非ず、修すべきに非ず、證すべきに非ざるなり。世尊、若し是くの如くに菩提を求むるを爲して、發心修行する善男子、善女人あらば、彼れを皆名けて菩薩乘に住すと爲さん。と。

爾の時に、他化自在の諸天は、咸く各己が知る所の法を說き已り、偈を以つて讃じて曰はく。

世尊は善く有の邊を盡さば　永く曾くも六趣の身を受けざることを說きたまふに　世間の無智は生死を畏れて　發心して生死の岸に度らんと欲す　彼の諸陰の體は不可得にして　陰の性相は本より自ら空なるを以て　一切の法は空にして皆相無ければ　是の故に諸法は對治を離れたり　自體は卽空にして物ある無くして　知り及び修し捨すべきある無く　亦復是れ證すべき法に非ざれば　如來は有は卽非有なりと說きたまふ　[一八]相もて菩提を求むとも得べからず　助道の諸法も亦是くの如く　取心にて佛を求むとも得べからず　菩薩の相をば求むとも亦得られず　諸相に堅著する愚癡の輩　彼等は菩提を悟ることを得んと望めども　顚倒せる

[一七] 色の相。「滅」の相なるべし。異譯本にも「滅の相」とあり。

[一八] 相もて、乃至、亦得られず。異譯本に「菩提は無相にして得可からず。菩提分の法も亦復然り。佛菩薩僧は但假名にして、心取の相を離れて、皆無相なり。」とあり。

境界に相を取つて行ずる　無智なれば菩提の道を行ずるに非ず　佛の境界に入つて衆相を離るるを　名けて智者の如法の行と爲す　諸相及び無相を遠離し　亦空及び不空を離れたればなり　彼の能く無上の道を悟解することは　諸の外道に於ては境界に非ず　亦聲聞の知り能ふ所にも非ず　又緣覺の趣く所に非ず　心に解脫を得て淨無垢なる　羅漢の法に於て相應せる者　及び諸一切の辟支佛も　彼の智慧の境界に非ず　彼の句は相の心にて知らるるに非ず　及び少空を修すとも亦解せず　若し空を解し空を說く者あつて　亦諸法の無自性なるを說かば　彼れは佛の敎の毀訾無きを受けたるにて　是れを善く空寂靜を修し　能く悟り難き菩提の道を悟れりと名け　世尊は彼れに於ては眞の導師たり　佛二足の最尊を讃じ已つて獲る所の無量の諸功德を　一切の諸群生に迴施し　佛を成じて未覺の者を覺悟せん　と。

爾の時に、世尊は、彼れ八十那由他の他化自在天及以び天王等の、深信を得已れるを知り、大衆をして善根を增長せしめんと欲する故に、微笑を現せり。爾の時に、慧命馬勝は、偈を以て問うて曰はく。

二足世尊の微笑を現したまへるは　他化の深信を知りたまへるを以ての故なれど　未だ曾て笑の因緣を演說したまはず　唯願はくば如來解釋を爲したまはんことを　大聖今は因無くして是の希有なる微笑の相を現したまへるに非ざれば　願はくば佛因緣の義を開顯して　大衆の諸の疑惑を滅除したまはんことを　世尊の微笑を見たてまつる故に由り　今此の衆會は悉く疑を懷けば　一切の世間を憐愍する者　唯願はくば敷演し分別して說きたまはんことを　此の衆は咸く皆生死に背かんとて　合掌し恭敬して涅槃を求めつつ　斯に等しく猶豫を懷かざる靡ければ　無礙の說者願はくば斷除したまはんことを　悉く皆善逝の法を正信して　心に開解を得て取著を離れんと　咸く淨信尊重の心を有てば　善い哉牟尼願はくば解說したまは

んことを　勇猛なる精進にて佛法に於て　疑網を遠離して聖路　一切諸佛の遊びたまへる此の道に登らんとすれば　是の故に願はくば大衆の疑を除きたまはんことを　と。

爾の時に、世尊は、偈を以て慧命馬勝に答へて曰はく。

汝大衆を憐愍する故に爲り　偈を以て我れに問へるは正に是れ時なり　辯才を具足し　〔一九〕巧便を有ち　乃ち能く此の微笑の義を問へり　如來の笑を現せる故を問ふを以て　必ず當に無量の衆を利益すべく　是の故に一切の衆會等は　皆勝菩提に住することを得ん　彼れ他化の深信を知り已れる　故に我れ是の微笑の光を現ぜるにて　一切は如來の教に隨順して菩提を求めん爲めに妙行を修したり　世法の、諸相を離れたることを觀察するに　陽焔の眞實に非ざるが如くなるに　愚者は焔を見て是れ水なりと謂へど　菩提を求めんと欲せば彼れに同ずること勿れ　相を取り樂を貪る凡夫の境は　無智にして常に無相を怖れ　愚癡にして相を執つて正路を捨つれど　相を離れば能く妙菩提を獲ん　妄想にて思量せる虚僞の法に　分別する所に隨ひ即縛せらるれど　智者は相の悉く皆空なるを觀ずれば　〔二〇〕上寂滅の陀羅尼を得るなり　相を執する凡愚の惡心に住するは　彼れ皆智無きにして六趣に歸して　輪廻逼迫して衆苦を受くるは　都べて愚癡にて相に住する故に由る　相に著せる衆生は諸陰と　佛と菩提及び菩薩とを見れども　智者は相を離れて空を見已れば　能く無上の大菩提を得るなり　相に住する類は煩惱を增せど　能く無相を觀ぜば結を除くを得ん　謂はゆる結とは即是れ相なれば　結に相無きを觀ぜば即斷除せん　若し分別して道を求むる者あらば　分別は道に於て障礙と爲る　〔二一〕智者も復欲を行ずと雖も　彼の欲は即無相の行と爲す　諸法は體無くして不可得なれば　分別せる諸法をば說いて空と言ふ　若し分別を離れて無相を得ば　彼れ即菩提にして更に餘無し。

〔一九〕巧便。善巧なる方便の略なり。

〔二〇〕「上寂滅」の一句。異譯本に「勝れたる總持の寂靜の樂を得。」とあり。

〔二一〕智者も、乃至、無相の行と爲す。異譯本には「智者は欲に在つて禪を行ずるに、彼れ則ち善く無相の行を修す。」とあり。

〔三三〕善逝の是の語を說けるを聞き　大衆は疑を除いて無畏を得　牟尼の說かれし法を頂受すること
（智）薝蔔華を頂戴せるが如くなりき。
斯の諸の大衆は無畏を獲て　我れに於て供養を設くること最も無上に　亦諸法と佛の境界とを
知りたれば　當に世間の大導師と作るべし　と。

諸梵天等授記品　第十九

爾の時に、六千萬の諸梵衆天は、諸の阿修羅・迦樓羅、乃至、他化自在天等の、如來を供養せるを見、記を授かるを聞き已り、欣喜踊躍して皆心に稱ふを得たり。彼れは、世諦の禪に於て喜悅を以て食と爲し、亦佛法の中に於て智慧の明を得たるは、宿に善根を殖ゑたる故にして、已に曾て諸佛に親承供養せる故に、及び深信清淨なる故に、甚深の法に於て法忍を獲得したり。彼れ諸天等は、諸法の、作無く無作に非ず、生に非ず不生に非ず、有に非ず不有に非ず、起に非ず不起に非ず、滅に非ず不滅に非ず、依に非ず不依に非ず、淸に非ず濁に非ず、憎に非ず愛に非ず、賢に非ず愚に非ず、知に非ず不知に非ず、見に非ず不見に非ず、受に非ず不受に非ず、側に非ず不側に非ず、無に非ず非無に非ず、物に非ず非物に非ず、可得に非ず不可得に非ず、去に非ず來に非ず、趣に非ず不趣に非ず、空に非ず不空に非ず、相に非ず不相に非ず、願に非ず不願に非ざるを知れり。彼れ諸の梵天は、一切の法に於て、心著する所無く、亦住する所無く、非用の中に於て非用の想を作さず、非不用の中に於ても亦非不用の想を作さず、語言の中に於て語言の想無く、非語言の中に於ても亦非語言の想無く、有作の中に於て有作の想無く、無作の中に於ても亦無作の想無く、凡夫に於て凡夫の想を作さず、非凡夫に於ても亦非凡夫の想を作さず、凡夫の法に於て凡夫の法の想を作さず、非凡夫の法に於ても亦非凡夫の法の想を作さず、聲聞に於て聲聞の想を作さず、非聲聞に於ても亦非聲聞の想を作さず、聲聞の法に於て聲聞の法の想を作さず、非聲聞の法に於て非聲聞の法の想を作

【三三】「善逝等」の一段。此れ亦、散文の記述に屬すべき性質の者にして、且又、過つて偈文中に混入せる者と認むべく、由つて別段と爲したり。

さず、緣覺に於て緣覺の想を作さず、非緣覺に於ても亦非緣覺の想を作さず、緣覺の法に於て緣覺の法の想を作さず、非緣覺の法に於ても亦非緣覺の法の想を作さず、菩薩に於て菩薩の想を作さず、非菩薩に於ても亦非菩薩の想を作さず、菩薩の法に於て菩薩の法の想を作さず、非菩薩の法の想に於ても亦非菩薩の法の想を作さず、佛に於て佛の想を作さず、非佛に於ても亦非佛の想を作さず、佛の法に於て佛の法の想を作さず、非佛の法に於ても亦非佛の法の想を作さず、涅槃に於て涅槃の想を作さず、非涅槃に於ても亦非涅槃の想を作さず、生死に於て生死の想を作さず、非生死に於ても亦非生死の想を作さざるなり。是くの如くに、彼の天は、一切皆悉く諸の分別を離れて、定の心清淨なり。彼等は既に清淨心を得たる故に、寂滅の法を以て、偈を說いて佛を讃ずらく。

大聖は甚深なる寂滅の智にて　寂滅を修行して彼岸に到り　寂滅を演說して衆生を度し　亦自ら常に寂滅の法を行じたまへり　菩提の寂滅にして善清淨なる　斯の法は牟尼の境界にして　速に寂滅なる勝甘露を得　是れを以て今諸有を盡すを得たまへり　恒に寂滅微妙の道を說くは　是れ彼の智者の所行の處にして　八正の路にて惱濁を滅して　一切の諸群生を拔濟したまへり　善く寂滅を修して菩提を證することは　乃ち是れ先佛の行ずる所にして　彼れを修すれば能く安隱の城に到ることは　過去の諸佛の證知したまふ所なれば　是の諸の如來の修學の法にて　導師は是くの如くに世間を化したまへり　若し人能く有學の法を行ぜば　無學の勝菩提を獲得し　一心に寂滅の道に趣向して　諸根寂靜に久しく修習せば　當に佛世間解と爲り　那羅延の力もて群生を度するを得べし　若し寂滅の甘露を知らば　能く一切の諸有の相を盡し　是れを眞實なる如來子と爲す　寂滅にて能く世間の畏を除けばなり　彼等の設けて佛を供養する所のものは　勝上希有にして最も殊特に　說く所の寂滅にて煩惱を盡すことは諸の無相に於て最も第一なり　世間は寂滅にして諸相を離れ　謂はゆる寂滅は卽涅槃なる

に　衆生の輪轉して諸苦を受くるは　寂滅を遠離して相を取る故なり　牟尼の諸法の不思議なる　即是れ菩提の一切智にして　已に淤泥を度つて彼岸に到りたれば　故に佛は此れに於て疑慮無し　[二三]若し陰を離るゝ有らば解脱を得んと　佛の大乘に於て願樂せずに　菩提を欲求するに滅度を思はば　其の五陰に於て怖畏を生ぜん　[二四]欲を離れて淨心にて涅槃を求めば　彼れは如是の簡擇の智に等しきに　法に於て相を取るは凡夫の境なりとは　是れを如來の所說と謂ふ　若し寂滅を[二五]取せば即是れ縛にして　是れを以て一切智を得ざれども　若し其の五陰の相に於て　存執取著の心を生ぜずば　彼れ能く釋迦の法に利益せられて　是れを無相を喜樂する行と名く　能く無名なる安隱の處を獲　菩提たる佛境界を逮得せば　魔の諍論を降し煩惱を滅して　速に一切智を成就することを得ん　我等無上士を讚歎して　獲る所の[二六]寂滅なる諸の功德　唯佛の大智のみ能く了智したまふものを　衆生に迴施して　[二七]願はくば佛を成ぜんことを　と。

爾の時に、娑婆世界の主、大梵天王は、諸の梵天の、佛を讚歎し已つて佛に對して正しく立てるを知り、實功德を以てして讚頌して言はく。

法王は已に一切の法の　不實虛誑にして空拳の如く　亦秋雲及び電光の如くなるを知りたまひ　是の故に大聖は取の心を離れたまへり　猶夢中に飢餓せる人の　百味の甘美の膳を餐食するに　夢人の飢と食との皆實ならざるが如くに　如來の法を見たまふことも亦是くの如し　又夢中に焦渴せる人の　清淨なる涼冷の水を飲むを得るに　夢の渴と飲水との皆虛妄なるが如くに　佛の諸法を見たまふことも亦是くの如し　作も無く受も無く衆生も無く　其の作る業及び得る報も無く　亦果報を受くるを得る者も無きを　世尊は此れに於て疑慮無きなり　譬へば美言の人の愛を得るが如きも　然も彼の語言をも取るべき無く　亦言說し及び聽く者も無

【二三】若し陰を、乃至、怖畏を生ぜん。異譯本には「若し人、寂に於て解脱を求めんと、寂靜の法に於て愛樂するに非ずして、唯、寂の不堅牢なるを怖るるのは、佛の菩提に於て驚怖を生ぜん。」とあり。

【二四】欲を離れて、乃至、所說と謂ふ。異譯本には「欲を離れて淨心にて解脱を求むるは、能く明慧を以て善く揀擇するなれば、欲に著し相を取る諸の愚夫には、故に佛は彼れに於て開示せず。」とあり。

【二五】取。對する所の境界即ち客觀界に執著するを謂ひ、愛の別名とし、又、煩惱の總名にも用ふ。

【二六】寂滅なる諸の功德。異譯本には「清淨なる佛功德」とあり。

【二七】願はくば佛を成ぜん。異譯本には「同じく無上菩提の果を證せん。」とあり。

ければ　大聖は皆不實なりと了知したまふ　箜篌の美妙なる音を聞くが如きも　其の聲にも亦眞實なる性無しと　世尊は是くの如くに諸陰を見たまひて　陰には體無くして不可得なるを知りたまふ　猶摩尼の性は　自ら淨ければ　之れを衣の上に繫くるに色に隨つて變ずるが如くに　諸法の自體は本より淸淨なれど　虛妄の分別にて倒染を增すなり　譬へば無垢なる鮮白の衣の　染色を受くるに隨つて種種に變ずるが如くに　諸法も是くの如くに性自ら淨けれど　分別する所に隨つて染汙するなり　猶人あつて貝の聲を聞き　其の貝の聲の何より來れるかを尋ぬるに　其の聲は　自に非ず他性に非ざるが如くに　大仙は法も亦是くの如しと見たまふ　人の美なる餚饍の食を思ふに　其の食は衆緣の合成せる所にして　食を觀るに各各自性無きが如くに　如來は法は皆是くの如しと見たまふ　譬へば衆緣を號して城と爲せば　其の城の體を推すに自性無く　是くの如き衆緣も皆悉く空なるが如くに　法王の法を見たまふことも亦斯くの如し　喩へば人あつて鼓を擊つに聲は　能く人の心をして欣喜せしむと雖も　聲及び衆緣は皆悉く空なるが如くに　大聖は法も亦是くの如しと見たまふ　譬へば人あつて鼓を打つ時に　其の聲は十方より來らずして　聲は滅すれども亦諸方に向はざるが如くに　世尊は法は皆是くの如しと見たまふ　是に彼の人鼓を擊ち已るに　[三八]其の鼓は憎愛の心を生ぜず亦衆緣の性をも分別せざるが如くに　佛は諸法は皆斯くの如しと見たまふ　又彼の人の妙鼓を打つに　聲は心を作さずして他の　喜を生じ　及以び衆緣も皆亦然るが如くに　導師は法は皆是くの如しと見たまふ　人の彼の妙鼓を擊つ時に　鼓も亦苦樂の想を生ぜず　亦衆緣の性をも觀察せざるが如くに　如來は法は皆是くの如しと見たまふ　猶人あつて妙鼓を擊つに聲は緣に卽せず亦離れず　及び彼の伎の緣も亦復然るが如くに　牟尼は法は皆是くの如しと見たまふ　と。

【三八】其の鼓は、乃至、分別せざるが如くに。異譯本に「又、鼓の韻の、憎愛無く、濕潤の緣を離れば、則ち鳴り響くが如くに」とあり。

爾の時に、世尊は、諸の梵天・大梵王等の、深信にて敬信し、及以び寂滅を以て佛を讃頌するを知り已り、又大衆の、善根を生ぜんことを欲するを見て、卽便に微笑せり。爾の時に、馬勝は偈を以て問うて曰はく。

旣に如來の口中より出でたる　離垢清淨なる微笑の光を見たてまつりて　世間の天人の大衆等は　一切咸く希有の心を生じたり　世尊の微笑を見たてまつれる故を以て　諸來の大衆は普く疑を懷き　皆悉く如來の面を瞻仰し　慇懃に願樂して聽聞せんことを欲せり　願はくば佛笑の因緣を開示して　大衆の疑惑の心を蕩除したまはんことを　最勝なる牟尼は因無くして

希有なる微笑の相を現したまへるに非ざればなり　諸佛の現さるる微笑の光は　必ず諸の世間を利益せん爲めなれば　今は誰が爲めに此の笑を現したまへるか　唯願はくば敷演し分別して說きたまはんことを　大衆聞くを得ば必ず欣喜せん　微笑の因緣を知るに由る故なり　斯に諸の大衆は皆合掌して　一心に瞻仰して聞かんことを樂欲す　是の故に願はくば佛解釋を爲して　必ず當に諸の疑惑を斷滅すべからんことを　導師彼の諸來の衆の爲めに　願はくば微笑の因を演說することを垂れたまはんことを　衆會若し聞かば必ず喜悅せん　疑網を洗除するを得る故を以てなり　衆の心は堅固にして皆清淨に　專念に如來の德を希仰し　大衆は世尊の顏を瞻仰すること　猶初生の月を覩見するが如く　[二九]八妙を具したまへる聲の、梵天の如きを　一心に渴仰して速に聞かんことを願ぜり　天人の衆等は佛說を聞かば　必ず疑を除いて正法に住するを得ん　梵音の演說は義と相應すれば　甚深なる出世の法を聞くを得ん　佛智は善巧にして能く悅豫せしむれば　故に大衆をして踊躍を增さしめん　此に衆は心淨く疑結を離れて　能く如來の一切智を樂はん　精進勇猛なる有力の人は　乃ち能く無上道を志求せん　是の故に導師世間を愍みて　唯願はくば解說して衆をして喜ばしめたまはんことを　善い哉世尊

【二九】八妙。佛の八音の德を謂ふ。第三卷、八音の解、參照。

平等の心にて　一切の諸衆生を憐愍し　諸の大衆をして善根を増し　安心不動にて佛智を求めしめたまはんことを　と。

爾の時に、世尊は、卽、偈を以て慧命馬勝に答へて曰はく。

一切の諸世間を憐愍する　故に我れ是の微笑の光を現せり　汝當に諦に彼の因を說くを聽くべし　其の義は甚深なる微妙の句なれば　此の諸の衆會は若し聞きて　精進を發勤して善業を修むるを得ば　當に諸の衆生を利益して　佛の妙法に於て勝行を起すを得べければなり

斯の諸の梵衆は皆欣喜して　如來の法中に悉く疑無く　那由他劫に久しく修行せること　猶恒河沙劫の數の如くなりき　諸の境界に於て悉く著せず　心は虛空の如くにして障礙無く

三〇 常に菩薩の行を修することを樂むと雖も　而も菩提の證を速には取らざるなり　此等は復未來世の　無量億劫の恒沙の數に於て　天衆として清淨にして垢穢無く　大勢力を得て世間に住し　然る後に當に一切智を成じ　大法王として威力を有ち　功德を具足して諸有を盡し　諸の世間の悉く空寂なるを觀すべし　彼の佛は本久しく修行せる如くに　壽命の限量も亦是くの如く　斯の諸の善逝は世に住する時に　能く苦惱に於て衆生を度せん　彼の佛の國土には倫匹無く　世界は嚴淨にして甚だ滋茂せること　無量那由劫數の中にて　如來は演說すとも盡すべからず　彼の佛の刹土の嚴淨なる事は　無量の佛にて說くとも亦盡されじ　彼の佛を同じく大智力と號し　國土を皆悉く最勝と名け　三一 衆の爲めに不動の法の　不可思議にして所依無きを演說せん　彼の佛世界の衆生等は　咸く皆諸の善根を修治して　一の衆生として後有を受けて　生死の中に重ねて生ずる者無し　彼等には當時一つの苦のみ　其の世間に於て便ち顯現することあるは　唯諸行皆無常なるを畏れて　諸の衆生をして厭離を起さしむることなり　爾の時に彼の國の衆生の輩は　老病死の諸の苦相を離れんとて　一切一つの敎法に依

【三〇】常に、乃至、取らざるなり。異譯本に「常に諸の有情を利樂せんことを樂うて、菩提の果を證することを取らざるなり。」とあり。

【三一】衆の爲めに、乃至、演說せん。異譯本には「彼の佛の說法は思議し難し。自性空寂にして、依る所無ければなり。」とあり。

り　同じく無常を厭ひて勝行を修せん　彼の諸の衆生は爾の時に當つて　耳に更に餘の音聲を聞かずして　唯不淨無常苦　無我と寂滅空無相　甘露の涅槃及び菩提の　安隱淸涼無上の樂とを聞くのみ　斯等は是くの如き勝妙の音を　恒常に數數に聞くを得るに　爾の時には更に餘の聲響無く　樹の若き壁及び露地の若き　或は復空中及び寺廟に　但是くの如き微妙の句を聞くなり　聞き已るや一切は皆道を得て　便ち生死に於て解脫を得るは　皆是れ如來の神力の故にて　八功德を具せる妙音聲なればなり　爾の時には雜毒の心ある無く　謂はゆる欲及び瞋恚を離れ　亦愚癡と惡聲　麁言を出し逼惱し來つて耳に經ると無く　一切生死に厭背して　涅槃の大正路に趣向せん　彼の土は一切悉く當に空にして　佛及び衆生も皆滅度すべく　斯れは是れ彼の佛の大神力にて　發弘せる志願の不思議なればなり　曾て過去の那由劫に於て　菩提を求めて道行を修せるに爲り　彼の國の有らゆる諸衆生も　一切悉く皆當に佛と作るべし　此に諸の梵天は廣願を發し　皆寂滅の句を觀察せるに由り　悉く甚深の義を證知し　如來の吉祥の路を解了し　其の修學する所に皆通達するを得て　諸の世間に於て導師と爲らん　彼れ能く衆生の空なるを觀察して　疲倦懈怠の心を生ぜざれば　是の故に乃ち諸の法性に入つて　菩薩の[三三]勝妙の行を修集せん　と。』

【三三】勝妙の行。異譯本に「寂靜無相の行」とあり。

卷の第六十八

菩薩見實會　第十六の八

光音天等得受記品　第二十

爾の時に、五十八千萬の光音の諸天は、諸の阿修羅・迦樓羅、乃至、梵天等の、如來を供養するを見、記を授かるを聞き已り、欣喜踊躍して、皆心に稱ふを得、偏に右肩を袒ぎ右膝を地に著け、佛に向つて合掌し、恭敬して禮を作し、佛に白して言はく。世尊、三昧の照耀一切法と名くるあり。若し菩薩摩訶薩にして、是の三昧を學はば、一切の法中に悉く光明を得て、菩薩の法門に入ることを得ん。菩薩摩訶薩にして解了し知り了らば、無邊の辯、無礙の辯、相續の辯、種種の辯、美妙の辯、眞善の辯、相應の辯、解脫の辯、微細の辯、不共の辯、甚深の辯を得、乃至、如來の辯を得ん。世尊、何者を名けて照耀一切法三昧と爲す。菩薩の此の諸法門に入る故は、諸の[一]覺觀を念じて一切の法は覺無く覺を離れ、是の無覺の法は一切の處に遍ずれども、一法も覺察し能ふ者ある無しと知ればなり。何を以ての故ぞ。性自ら離れたる故なり。若し法にして無性ならば、云何ぞ能く一切法を覺知せられん。其の覺を無くし已るや、阿字の[二]門に入つて上辯才を得るなり。彼の菩薩の阿字門に入り已るや、無邊の辯を得ることは、[三]阿字には遍無く、阿字は普遍に非ず、阿字は作無く、阿字は有爲に非ず、阿字は成就に非ず、阿字は事に非ず、阿字は依る所無く、阿字には動轉無く、阿字は略に非ず、阿字は廣に非ず、阿字は分別に非ず、阿字は衆事にて成るに非ず、阿字は穿つべからず、阿字は色に非ず、阿字は示すべからず、阿字は觀るべからず、阿字には見能ふ者ある無く、阿字は思ふべきに非ず、阿字は定住せず、阿字は可知に非ず、阿字は能知に非ず、阿字は測るべきに非ず、阿字は自ら示現し能はず、阿字は亦他をも示す能はず、阿字は思議に非ず、阿

【一】覺觀。異譯本には「尋伺」とあり。第一卷、尋伺の解・參照。

【二】門。異譯本には「義門」とあり。

【三】・阿字には邊無く、以下。阿字の說明は、中に重複と見るべき者多くあれど、異譯本の說示とは大に相違し居り、考證する能はず。

字は去らず、阿字は來らず、阿字は近きに非ず、阿字は遠きに非ず、阿字は言說に非ず、阿字は亦說く可き法に非ず、阿字は名に非ず、阿字は用に非ず、阿字は現前するに非ず、覆障するに非ず、阿字は移轉するに非ず、阿字は改む可きに非ず、阿字は差別に非ず、阿字は二つ無く、阿字は生に非ず、阿字は虛妄に非ず、阿字は眞實に非ず、阿字は說く可からず、阿字は生滅に非ず、阿字は淸淨に非ず、阿字は亦讀む可き法にも非ず、阿字は執持に非ず、阿字は他を攝むるに非ず、阿字は棄捨するに非ず、阿字は他の法に爲つて作らず、阿字は亦他の法をも作さず、阿字は生ぜず、阿字は滅せず、阿字は他の法を生ずる能はず、亦復、諸法を滅する能はず、阿字は生に非ず、不生に非ず、阿字は生法の與めに生因と作らず、亦復、不生の緣とも作らず、依に非ず、不依に非ず、阿字は假に非ず、不假に非ず、阿字は劫に非ず、不劫に非ず、阿字は許に非ず、不許に非ず、阿字は可得に非ず、亦不可得に非ず、阿字は空に非ず、不空に非ず、阿字は分別に非ず、不分別に非ず、阿字は相に非ず、不相に非ず、阿字は願に非ず、不願に非ざればなり。世尊、一切の諸法は、皆是くの如き相にして、謂はゆる無相なり。一切の諸法は、皆同一の實にして、謂はゆる無實なり。皆同一の趣にして、謂はゆる無趣なり。皆同一の入[四]にして、謂はゆる無入なり。皆同一の假にして、謂はゆる無假なり。皆同一の用にして、謂はゆる無用なり。一切の諸法は、皆同一の說にして、謂はゆる無說なり。世尊、諸法は無起にして不可得なる故に、諸法は有に非ず。有無きを以ての故に、諸法には生無し。不生なるを以ての故に、諸法には滅無し。不滅なるを以ての故に、無爲の法には作ある無きなり。故に、世尊、一切の諸法は皆同一の如なりと、當に是くの如くに知るべきなり。世尊、是くて諸の不生の法には、彼の法の事用をば云何ぞ知ることを得ん。世尊、譬へば、人あつて、夢中に作す所の如し。當に知るべし、諸法も亦復是くの如きことを。何を以ての故ぞ。夢にて作す所の事は、不生不起にして、亦有に非ざる故なり。夢は實ならずと雖も、假の名無きに非ざれ

【四】入。入に多義あり。眞理を證悟するに謂ひ、事理を解知するに謂ひ、根と境との涉入即ち事物を感知するに謂ひ、一轉して根境該の物に謂ふに用ふ。今は後者の意なるべし。

ば、夢の作ありと說き、一切の諸法も皆亦是くの如きなり。世尊、譬へば、響、聲の唯假の名を有つが如くに、諸法の但假なることも亦復是くの如し。世尊、喩へば、幻人の但是れ假の名なるが若くに、當に知るべし　諸法も亦復是くの如くなることを。世尊、譬へば陽炎の但假の名字なるが如くに、諸法の假の名なることも亦復是くの如し。世尊、鏡中の像の但名の用あるが如くに、當に知るべし、諸法も亦復是くの如くなることを。世尊、凡愚を悅豫せん爲めに、夢の事有りと說けども、夢中に作す所は皆眞實に非ず。響と幻と炎と影とも亦復是くの如くに、但假の名あるのみにて皆實の作無きなり。世尊、我等は是くの如くに如來の說きたまふ所の法義を解知せり。と。

爾の時に、光音の諸天は、偈を以て佛を讚ずらく。

世尊は善く　此の法義[五]　及び餘の種種の無邊の法を知りたまひ　如來に有たる諸の佛子は
父の資財を得て常に遊戲す　世間の少智の入り能ふ莫きは　常に我の心に計著する故に由る
十方に我を求むるに不可得にして　我の體は本來性　自ら空なるに　空なる陽炎は實の水
に非ざるに　愚癡は彼れを見て水の想を作すが如く　都べて無智なるに由つて迷惑を生じ　虛
妄をば顚倒して我人と計するなり　彼れ癡愚にして如來の敎に惑ひ　是の故に深き義趣を解
せず　凡夫の心識は炎水の如くに　諸の陰の義を了知し能はざるなり　[六]心生死を樂み苦箭に
著し　諸根の駛流に漂溺せらるるは　斯等の畢竟じて自性無きに　癡に覆蔽せられて妄に苦を
受くるなり　彼れ皆智を失して心迷亂し　諸の苦の中に於て樂の想を生じ　心常に顚倒して
三毒に順ずる　是の諸の煩惱は甚だ怖るべし　貪欲瞋恚及び愚癡の　斯の結使に常に隨逐し
深く受を樂む故に渴愛を生じ　愚癡は識らざる故にて苦を受くるなり　無智の、諸の煩惱
に隨順することは　人の癡にて怨家を負うて行くが如く　佛の說かるる空敎の門を聞くや　空
に於て反つて畏れて解說を失ふこと　譬へば怯人の刀を執持して　應に安隱を得べきに反つて

【五】此の法義。異譯本には「第一義」とあり。

【六】心生死を、乃至、苦を受くるなり。異譯本に「五欲に於て愛樂を生ずるに由つて、備さに生死の諸の楚毒を受くるは、諸蘊は自性本來空なるに、愚夫は枉げて諸趣に墜するなり。」とあり。

畏を生ずるが如し　大智なる世尊の說きたまふ所の法は　是れを微妙なる阿字門と謂ひ　能く眞實なる勝智慧を生ずること　猶平地に大樹を生ずるが如くに　諸の魔怨の那由の衆を降して　能く安隱なる妙菩提を悟らせ　彼の八正の大船筏を以て　諸有の海に於て群生を度すなり

世尊に有たるる諸の佛子は　如來の勝れたる敎法を了知せば　速に煩惱の諸の怨敵を滅し疾く無上の大菩提を證せん　既に自ら解脫して毒心を離るるや　餘の毒者を見て智藥を施し　究竟せる彼岸の果に到り　大安樂たる無爲の處を獲しめん　一切の諸法は皆悉く空なるに　諸の餘の外論は妄に分別すれども　明人は惡を棄てて正路に就くは　皆本來久しく修學したるに由る　心著する所無くんば卽解脫すること　諸法の體性　自ら是くの如しと　彼れ能く是くの如くに了知せば　佛の大力那羅延を成ぜん　繫縛及び縛する者ある無く　諸法の性は空にして皆亦無く　眞如寂滅及び非如も　是れ垢穢に非ず亦淨に非ず　煩惱も無相にして亦斷つこと無く　其の本來の性　自ら空なるを以てと　是くの如くに能く眞實の法を知らば　彼の人は當に一切智を得べきなり　自ら解脫を證し復他を度する　此等も不生亦不滅なるに世間の天人は皆迷惑すること　春の禽獸の炎水を見るが如く　虛妄に分別して渴の心を起し男女を想見して苦惱を受け　業の種種なるを以て諸趣に生れ　心に由つて作れる故に差別あり

造れる業にて報及以び受あれども　彼の業をば能く作る者ある無しと　我等の是くの如くに解せる佛法は　是れ諸の如來の妙境界なり　是の故に如來は心調伏して　諸根寂靜にて忍辱を能くし　世尊は法の如くに供養を得たまへば　清淨無垢にして諸穢を盡し　衆德を具足し門哄を離れて　唯佛のみ能く三界の眼を施したまふ　我れ今佛を讃じて獲る所の福は　唯出世の大導師　二足世尊の功德聚のみあつて　能く我等の得る所の報を知りたまはん　此の微妙なる勝善根を以て　一切の諸群生に廻施す　願はくば彼れも當に未來世に於て　悉く一切智

【七】心著する所無くんば、乃至、成ぜん。異譯本に「法の體性の本來空なるを了して、心に著する所無くんば、卽、解脫す。若し法の性に達せば、卽、佛に同じくして、是れを大智那羅延と名く。」とあり。

を成就するを得べからんことを　と。

爾の時に、世尊は、光音天の深信の心を知り已り、及び辯才の具足を修行せるを知り、大衆の功德善根をして、當に復漸漸に勝進增長すべからしめんと欲する故に、是の時に如來は卽、微笑を現せり。

爾の時に、慧命馬勝は、卽、偈頌を以て世尊に問うて曰はく。

大悲なる善逝因無くして　希有なる微笑の相を現したまへるに非ず　能く世間を利したまふ無上士　正覺の智慧の群生に超えたまへる　兩足世尊功德の聚　衆生を憐愍して願はくば演說したまはんことを　誰に爲つて此の微笑の　殊勝なる光の世間に顯なるを現したまへるかを

一切の衆生は若し聞くことを得ば　心意は決定して大に喜悅し　善業を修行して佛果を證し生死を離れて涅槃に到るを得ん　斯の諸世間の天人の衆は　生死の苦惱に逼らるれば　願はくば群生を有海より度さんと　八正の大船路を演說したまはんことを　是くの如くにして大仙の　八功德を具せる最勝の道を說きたまふを聞くことを得ば　世間は是れに於て欣喜を生じ　諸善を樂修して成佛を願じ　勇猛なる精進にて大力を有ち　內心清淨に諸の疑を離れて當に如來の說きたまふ所の法を傳ふる　是れ佛の眞弟子として聖教に順ずべし　此に諸の衆會は餘念無く　一心に大瞿曇を瞻仰したてまつる　唯願はくば授記の事を敷演し　其れをして疑惑の心を決斷せしめたまはんことを　合掌して恭敬し正意に住し　咸く皆願樂して聽聞せんことを欲す　善い哉願はくば甘露の味を說きたまひて　諸法に渴するあるに當に飮むことを得べからしめたまはんことを　是等一切の諸の會衆は　心淨く勝功德を愛樂して　如來の最勝なる顏を瞻仰したてまつること　猶嬰兒の母の面を觀るが如し　大悲願はくば此の天に記を授け　微笑を現したまへる因緣の事を聞きたまはんことを　如來の授記を聞くことを得

已らば　世間は當に大利益を得べし　誰れか牟尼に於て善根を增し　及以び發せる願に滿足を得て　微妙なる功德の藏を剋獲したる　我れ今彼れの受けたる記を聞かんことを樂ふ　大衆は必ず欣喜の心を生じて　佛の說きたまふ所の授記を聞く故にて　決定して當に念慧力を具し及び三昧定を修行することを得べければなり　と。

爾の時に、世尊は卽、偈を以て、慧命馬勝に答へて言はく。

善い哉馬勝問ふ所の事は　辯才機に應じて正に是れ時なり　斯れ卽ち如來の神通力にて　是れを以て汝は今智慧を生じ　世間を利せんが爲めの故に辯を增し　是の故に汝今能く問を致せり　我れ今彼れが爲めに授記を說けば　諸根を寂靜にして一心に聽け　此の諸の勝慧の光音天は　過去に已に無量の佛を供養し　是の世間の孤にして救無きを見て　發心して佛と作らんと欲することに安住し　眞實なる微妙の行を修治したれば　必ず定つて當に一切智を成じて佛道を求むる諸の衆生の爲めに　迷うて徑に失せるに正路を教ふるが如くなるべし　是くの如くに世尊の教の　其の聲の最勝にして無等等なるを聞くを得て　佛の功德と智慧とを樂める人なれば　必ず究竟して彼岸に到ることを得ん　彼れは智力を有ち善根を知り　決定して當に佛の菩提を獲べしと　欣喜して已に菩提の願を發せること　婦の男を生んで其の心に稱へるが如し　此の天は菩提を求むる者の爲めに　其の出世の眞正の路を　不可說の那由劫に於て示し　菩薩の勝妙なる行を修習して　化する所の衆生の衆星にも過ぎたるを　佛の菩提に安置し已り　當來に世間解を具足して　自然に一切智を成就せん　彼等の妙土は不可說にして　世界は寬廣にして百億あり　是の諸の妙刹は甚だ清淨にして　無量なる種種にて勝莊嚴せん　彼の佛國土の諸の衆生には　三惡趣及び八難無く　一切皆菩提心を發して　咸く各不退轉に住するを得ん　彼の諸の如來の國土の中には　亦復小乘の法ある無く　衆生は悉く皆佛

道を求めて　便ち不退の地に進趣することを得ん　是の諸の刹土の衆生の類は　一切壽命悉く齊等に　十億の恒沙の劫を經ゐは　皆諸佛に値遇する故に出る　若し那由の刹の衆生をして　悉く[八]小涅槃に入ることを得しむると　若しくは復人あつて一人の　或は男或は女を化して大乘に入るとにて　初の福を此の功德聚に比ぶるに　算數譬喩も及ぶ能はざれば　是の故に若し大乘に住せば　應當に餘の人をも轉化すべし　馬勝是の因緣の故を以て　如來の出世の甚だ難しと爲すこと　猶優曇に極めて値ひ難きが如しと　無邊の大智は是くの如くに說けば　巧深の智を以て善知識の　善く方便を解して正路を示すに　定隱なる無上の勝菩提を　若し人にして求めば應に親近すべし　と。

佛の口より是くの如き語　微妙なる甚深の義を具足せるを聞くや　一切の大衆は皆欣喜し　踊躍充滿して心意に稱ひ　那由の諸天の空中に住せるもの　共天衣を散じて旋轉して下り　欣喜せる讚聲を虛空に滿し　無比の大神力に敬禮せり

清淨なる妙智にて世間を度し　能く衆生の煩惱の熱を滅する　佛は甘露を說いて三毒を滅すること　[九]阿伽陀の衆毒を消すが如くなれば　聞くを得たる智慧にて諸結を斷ぜん　世間は迷惑して苦惱多き　其の有趣に於て當に脫するを得べきことは　佛に從つて勝法を聞くを得たる故なり

汎淨天授記品　第二十一

爾の時に、十二那由他の遍淨の諸天等は、諸の阿修羅、迦樓羅、乃至、光音天等の、如來を供養するを見、記を授かるを聞き已り、欣喜踊躍して皆心に稱ふを得、自ら威力を現して、佛に白して言はく。世尊の三昧の超過一切法と名くるあり。菩薩摩訶薩は、是の三昧を得已るや、諸の攀緣及び一切の事に於て、皆樂受を生じて苦受を生ぜざるなり。假に其の地獄道の中に於て、諸の苦惱を

【八】小涅槃。小乘の涅槃、即ち灰身滅智の果を謂ふ。

【九】阿伽陀。阿竭陀とも書す。第三卷同名の解、參照。

受けしむとも、皆樂想　生ずるなり。或は復、其の畜生道の中に於て、畜生の報を受けしむとも、亦樂想を生ずるなり。或は復餓鬼道の中にて、飢餓の苦を受けしむとも、亦樂想を生ずるなり。或は復、彼の阿修羅道の中に於ても、亦樂想を生ずるなり。或は復、人中にて受くる所の諸の苦にも、亦樂の想を起して苦の想を生ぜざること、假使ひ手を截ち及以び足を截たれ、耳を割られ、鼻を劓かれ、或は復、鞭にて打たれ、杖を身に刺し入れられ、或は復、牢獄に繋ぎ閉され、或は復、倒に懸けられ、或は復、裁ち割くこと猶衣帛の如くにせられ、或は復、裹み繋り及以び束ね縛られ、或は復、膾に切られ、或は復、鎚にて搗くこと猶甘蔗の如くにせられ、或は復、蹉き蹋んで破ること蘆葦の如くにせられ、或は復、火にて燒くこと酥油の炷ゆるが如くにせられ、或は復、身を然すこと、喩へば明炬の若くにせられ、或は獅子・虎・狼い與めに食はれ、或は復、醎、醋及以び辛き汁を口鼻に澆ぎ灌がれ、或は復、蒸して煮及以び火にて炙られ、或は狂象の與めに其の身を踐み蹋られ、或は復、目を挑られ、或は鉾・矟を以て穿ち刺して高く擧げられ、假使ひ瞋怒し來つて其の首を截るとも、是くの如き一切に、悉く樂の想を生ずるなり。何を以ての故ぞ。彼の菩薩は、其の長夜に於て菩薩の行を修せる時に、是くの如き願を發せばなり。若し衆生あつて、我れに食を施さん者には、願はくば彼の一切に涅槃の樂を得させんことを、若しくば我が與めに身體を洗浴し禮拜奉迎し、尊重供養することあらん、若しくば、衆生あつて、我れを罵辱し、或は復、人あつて我れを讃歎し、若しくば、衆生あつて、鞭にて打ち、斫り刺して我が身命を奪はんに、願はくば彼の一切に涅槃の果を得させ、乃至、無上菩提を覺悟せさせんことをと。彼の菩薩は、是くの如き心を成就し、是くの如き業を具足し、亦復、是くの如き願——一切の衆生に於て、皆樂の想を起さん。——を具足し、常に能く修集すること無間に斷たずして、是の業報の故を以て、一切の法に樂を善く取る三昧を得たるなり。彼の菩薩は、此の三昧を得たる時には、衆魔に爲つて動壞せられず、亦魔事

に爲つて繋縛せられずして、當に知るべし、是の菩薩は五種の自在を得ることを。何等を五と爲す。一には、壽命の自在なり。二には、[一〇]生の自在なり。三には、業の自在なり。四には、覺觀の自在なり。五には、衆具の果報の自在なり。彼の菩薩摩訶薩は[一一]若し一生を過して阿耨多羅三藐三菩提を證せんと欲せば、彼の三昧力を以ての故に、卽便に能く得ん。若し無上菩提を速に證することを樂はずば、能く無量阿僧祇劫に住して、衆生を度脫せん。何を以ての故ぞ。[一二]當に知るべし、彼の菩薩は、大乘に住して、諸の菩薩の與めに常に導師と爲り、一切の諸餘の菩薩を攝受すればなり。是の大菩薩の、諸趣を厭離したれども、衆生の爲めの故に、亦復一切の趣中に生ずるは、一切の菩薩の學べる所を究竟し、般若波羅蜜に爲つて攝受せられ、一切の巧方便力を具足し、諸の魔業を知り、法の究竟を得たればなり。彼の諸の菩薩は、佛の威神を承けて、一切の法に於て皆知ることを盡すを得たればなり。と。

爾の時に、遍淨の諸天は、卽、偈頌を以て世尊を讃じて曰はく。

我等一切の遍淨天は　諸の佛法に於て皆知ることを盡し　頭面に歸敬したてまつる天人師の
諸根寂靜にして寂滅を知りたまへるを　諸義を解了したまへる智の供ずる所にて　已に生
死を度りたまへる牟尼尊　我れ今讃歎したてまつる大導師の　能く他を善く導きて他の導くに
非ざるを　[一三]諸法の性相は究竟には非ず　亦復依住する處もある無ければ　如來は妄想なる事
を善く知りたまふことは　猶幻師の幻術なるを知れるが如し　智人は語言の音を解了するこ
と　喩へば深谷の諸の響聲の若しとし　世尊も是くの如くに善く　一切世間の天人等を知見し
たまふ　衆生及以命あること無く　亦復人も無く壽者も無しと　大智は一切の想を觀察した
まひて　衆想の悉く空に歸するに了達したまへり　二足世尊の慈は無等にして　恒常に慈を
行じて暫くも捨てたまはざれども　一切世間の諸の天人は　如來の智を測知する能はず　[一四]導

【一〇】生の自在、乃至、果報の自在。異譯本には、所生・業報・尋伺・受用の各自在と爲せり。
【一一】若し一生を過して等。此の一節は、一生補處の菩薩たり得ることを謂ふ。
【一二】當に知るべし等。此の一節は、前の補處の菩薩たり得る所以の德相を示せり。
【一三】諸法の性相は、乃至、無ければ。異譯本には「諸法の自性は有る所無く、亦復畢竟じて住する所も無ければ」とあり。
【一四】導師の、乃至、了知したまへり。異譯本に「佛は衆生界の平等なるを觀じて、常に淸なる無緣の慈を起したまふ。故に能く諸の世間を憐愍したまへども、畢竟じて衆生の相を見たまはず。」とあり。

師の演說して衆生を緣じたまふは　謂はゆる慈心にして是れ[14]根なれども　一切の諸衆生には衆生及び命者ある無きを了知したまへり　我等此れに於ては濁無く　其の心清淨にして疑惑を離れたれば　是の故に佛の勝智慧に於て　應に供を受くべき者に令く供養せん　其の十方世界の中に於て　[15]苦を求むるは畢竟じて不可得なれども　如來無上天中の天は　衆生に於て慈心を起すと說きたまふ　斯れは卽是れ其の世尊の教にして　我れ今解するを得たることも亦佛の如くなり　是の故に我れ世間解に於て　今應供者に供養することを得　旣に衆生無く亦苦無き　是の故に救度すべきこともある無ければ　已に心の憂悶を遣除することを得便ち欣喜大踊悅を獲たり　是くの如き佛教の不思議を　我等已に實の如くに知るを得たれば

是の故に我れ今佛を供養したてまつり　如來の無上智を得んと願ず　佛は諸趣に於て苦を見ず　涅槃も亦復不可得なれば　[16]增上して生死を棄捨すること　此れを以て諸の世間を饒益したまふ　苦無く趣無く衆生無く　亦涅槃として依るべきも無しと　是くの如くに佛の法を知るを得已り　是の故に我等今供養したてまつる　佛は[17]慈悲及び喜捨を具して　轉世間の爲めに常に演說したまへども　而も復衆生有るを見ず　四無量心に住するを得たまへども　其れの放逸の者有るを見ず　亦復不放逸のも見たまはずと　是くの如くに佛の教法を知り已つて我れ今大導師に供養したてまつる　身に於て身を離れたまへる無上士　身を畢竟じて不可得なりと觀じたまふ　然りと雖も亦念を說きたまはざるに非ずして　念を有てると念を失へる者とを說きたまふ　善逝は常に念を修學せよと說きたまへるは　[18]謂はゆる身を觀ずる正念の處なり　我等是くの如くに佛の法を知つて　今救度者を供養することを得　世尊の觀じたまふ受は不可得なり　受には體性ある無き故を以てなり　亦復受くる者を觀察するに　畢竟じて其の眞實の性無く　又復彼の念を修する者を觀ずるに　畢竟じて亦復不可得なりと　我等是くの

【一五】苦。異譯本には「苦の性」とあり。

【一六】「增上して」の一句。異譯本に「皆生死の縛を棄廢せしむ。」とあり。

【一七】慈悲及び喜捨。謂はゆる四無量心なり。第一卷、同名の解、參照。

【一八】身を觀ずる正念の處。謂はゆる四念處なり。第一卷「四意止」の解、參照。

如くに佛の法を知つて　今天人師を供養することを得　心及以び心數の法を觀ずるに　畢竟じて體無くして不可得に　亦復念を修すること　及以び念處に正しく住する者をも見ざれども佛は　[一九]念と心との和合にて　解脫を求めんと樂はば應に修學すべしと說きたまふ　我等是くの如くに佛の敎を知つて　今正遍知を供養することを得　如來は諸の法有ることを見ず　亦復法を修する者をも見たまはず　大聖の說きたまふ所の念を修習する　彼の念も亦復性は自ら空なれど　復念と法との和合にて　解脫を求めんと欲せば應に當に修すべしと說きたまふ

我等是くの如くに佛の法を知つて　今一切智を供養することを得　念處の一すら尙不可得なり　何に況んや而く復三四有ることをや　謂はゆる彼の念の住する處に於て　彼の諸に處を念ずることは皆悉く無く　是の故に眞に求めば不可得にして　畢竟じて苦樂を受くる者無しと　我等是くの如くに聖敎を知つて　今佛世尊を供養することを得　牟尼の說きたまふ所の[二〇]四正勤を　若し比丘あつて專ら修習せば　斯れ卽ち能く解脫の路と爲つて　當に生死の海を出づることを得べく　而して解脫も無く縛る者も無く　佛も無く敎及び菩提も無し　然れども復假の名用を壞らず　是の故に我れ今大聖に供じたてまつる　佛の說きたまふ[二一]四種の如意足は　勝妙安隱なる解脫の道にして　諸根を寂靜にせる衆生の輩は　此の道を修行して涅槃を得れども　[二二]如意及び足の修行者を　眞實に觀察するに不可得なり　而も作有ることを示すを斷絕するに非ずして　智慧の境界は見るべからずと　是くの如くに世尊の敎法の中にて　我等は此れに於ては皆悉く知り　其の心淸淨にして垢穢無く　皆諸の疑惑を遠離するを得たる

[二三]斯れを以て卽上供養と爲し　勝供を受くるに堪ふる者に供養したてまつらんと　是の故に妙智倫匹無きに　我れ今悉く供養を修したてまつることを得　世間解の者の　[二四]五根にて　世を出でて能く解脫の道に趣けば　愼んで放逸する莫く常に勤修せば　是れを涅槃の路に趣向すと

【一九】念と心との和合。異譯本には「念と法と和合して」とあり。

【二〇】四正勤。又、四意斷とも云ふ。第一卷、同名の解、參照。

【二一】四種の如意足。異譯本には「如意四神足」とあり。第一卷「四神足」第二卷「四如意足」の解、參照。

【二二】如意及び足。異譯本には「如意及び神足」とあり。然れど二種あるにあらず。

【二三】斯れを、乃至、供養したてまつらんと。異譯本に「此れを最上の法供養と爲し、唯、佛のみ此の供を受くるに堪任したまへる」とあり。

【二四】五根。此の五根は信・進・念・定・慧を指す。

爲すと說きつつ　根及以び根を修する者無く　亦解脫及び脫する者無しとは　我等此れに於て悉く疑ふ無く　是の故に今佛を供養することを得　導師の說きたまふ所の[二五]五種の力は　邪に非ひて涅槃の城に趣かせ　此に能く盡く煩惱の縛を滅して　諸の縛者をして解脫を得しむれども　彼の諸力の體性は　自ら空にして　煩惱及び佛も皆亦無しとは　我等此れに於て疑慮無く　是の故に今如來に供ずることを得　大仙の說きたまふ所の七種の善たる[二六]菩提分法の最勝なる道は　能く一切衆生の縛を解き　涅槃の大正路に趣向せしむれども　繫縛及び解脫ある無く　亦縛を受け脫を得る者も無しとは　我等斯れに於て疑惑無く　是の故に今佛に供養することを得　世尊は此の[二七]八正路を　一切の諸群生に顯示して　是れ諸煩惱は苦の本なれど聖道を修學せば能く斷除すと說きつつ　斯等の二法は對治を離れたり　謂はゆる聖路及び煩惱なりとは　諸天は此れに於ても疑無く　故に今應供者に供養したてまつる　奢摩他及び[二八]舍那を修せば[二九]斯の道は能く諸苦の邊を盡し　令く諸苦を受くる習氣の垢をば　世尊は曠劫に已に蕩除したまへども　奢摩他及び舍那の果　是等一切は皆悉く空なりとは　天衆は此れに於て疑網を離れ　是の故に我等は今供養したてまつる　佛は不淨は貪欲を治し　慈心は瞋恚を對治し　毘婆舍那は癡の對治なりと說きて　如來は顯に衆生に示しつつ[三〇]斯れは皆作ること無く暫くも停ること無く　是の故に垢無く亦淨も無しとは　我等是れに於て悉く疑無く　常に樂んで大導師を供養したてまつる　如來の說きたまふ十の不善は　斯等之れを名けて業道と爲し　殺生偸盜及び邪淫　妄語兩舌と惡口と　綺語貪欲及び瞋恚　最後の第十を邪見と名く佛は此等を不善と爲し　是れ諸の衆生の惡業の道なりと說きつつ　既に衆生無く亦害無く　自餘の九業も亦是くの如く　對治の諸の善惡ある無きは　彼の自性の空寂なるを以ての故と[三一]然く復十力の教無きに非ざるは　其の法の體性を壞らざるを以てなれば　我れは佛慧に於て亦疑

【二五】五種の力。謂はゆる五力なり。

【二六】菩提分。謂はゆる七菩提分にして、第一卷の菩提分・覺・覺分の解、參照。

【二七】八正路。謂はゆる八聖道にして、第一卷「八支」の解、參照。

【二八】舍那。毘鉢舍那の略なり。第一卷、同名の解、參照。

【二九】斯の道は、乃至、垢をば。異譯本に「能く諸惑及び習氣を斷じ、」とあり。

【三〇】「斯れは皆」の一句。異譯本には「彼れ皆作無く罪相無ければ、」とあり。

【三一】然く復、乃至、以てなれば。異譯本に「此の義は佛の正教無きに非ず。然れども其の法の體性を壞らざれば、」とあり。

はず　是の故に今無上智に供じたてまつる　若し此の如來の法を修するあらば　是の人を卽眞の佛子と爲し　彼の人は處處にて皆樂を受け　恒常に諸の苦惱を遠離すと　是くの如くに善逝の勝智慧にて　安隱に諸の群生を引導したまへるを　我等此れに於て疑心を離れ　今悉く應供者に供養したてまつる」と。

爾の時に、遍淨の諸天は、偈にて佛を讃じ已り、咸く默然として、却いて一面に住れり。爾の時に、世尊は、彼の天衆の默然として住れるを見、及び彼の天の深信の心を知り已つて微笑を現せり。

爾の時に、慧命馬勝は偈を以て問うて曰はく。

「今佛世尊最勝智は　世間を利せんが爲めに微笑を現したまふ　十力の世雄一切に超えて　能く諸の大衆を化伏したまふ　善く諸法を解したまへる大導師　現したまふ所の微笑に因無きに非ず　心に乏しき所無き世間解　唯願はくば微笑の義を解脱したまはんことを　此の諸の大衆は皆一心に　其の亂想無くして正念に住し　喜心にて功德の山を瞻仰し　唯聽聞せんことを樂うて恭敬して住せり　佛、自在なる大論師に於て　若し說を聞くことを得ば必ず欣喜して　善く諸法を解し決定の智にて　當に佛と作るを得て群生を導くべし　若し人佛に於て淨信を生ぜば　必ず大智世間の最を成じ　微妙なる甘露の句を測知して　是の人能く十方を觀ぜん　誰れか未來世の劫中に於て　當に佛と作つて世間を愍むを得べきか　微妙なる言辭もて大導師　唯願はくば彼れを說いて衆をして喜ばしめたまはんことを　若し聖雄沙門の所に於て　其の敬信尊重の心を生じ　亦正法に住して信慧を生ぜば　一切の惡魔は動ず能はじ　若く能く信を生じて決定を得ば　卽是に佛子は心より生ずれば　唯願はくば世尊法を演說したまひて　是れを以て大衆は疑を除くを得んことを　若し其の衆生の所に於て　慈心もて善く世間

を覆遍し　智慧堅固なるあらば當に成佛して、便ち一切智に安住し得べければ　百福莊嚴なる無上士　唯願はくば開演して疑網を除きたまはんことを　誰れか世尊の法を受持せんと欲し如來は其れが爲めに微笑を現したまへる　願はくば佛の善巧の說の　八功德を具したまへる微妙の音を聞くことを得ば　先づ自ら善道に趣くを得て　後に能く諸の群生を引導せん　是くの如くにして善逝の微妙の法に　佛子は彼の中に住するを得ば　世尊佛種は斷絕せずして必ず久しく世間に住するを得ん　と。

爾の時に、世尊は、卽、偈を以て慧命馬勝に答へて言はく。

馬勝汝今笑光を我れに問ひ　諸の世間を利益する爲めに　汝の獲る福德は其の心に稱ひ　斯の福は無量にして盡すべからず　妙士乃ち能く時に應じて問ひ　是れを以て大に諸の衆生を利すれば　汝及び一切の大衆等は　欣喜して一心に我が說くを聽け　斯等遍淨の諸天衆は　我が法中に於て悉く疑無く　一切欣喜し淨信心にて　偈を以て我が功德を讃頌せり　此の天は曾　過去世に於て　千億那由の佛を供養し　亦彼の佛に於て斯の義を問ひ　一切の法中に疑無きを得たるなり　彼の往昔の因緣に由る故に　今偈頌を以て我れを讃歎せるが　亦復淨心もて當に　賢劫の一切の諸如來を讃歎し　當に〔三〕優波羅劫の中に於て　成佛し大力那羅延もて不思の那由の衆を敎化し　引導して涅槃の城に入らすべし　彼の諸大仙の成佛の時に　得る所の名稱は甚だ微妙にして　我れ今汝が爲めに彼の佛を說けば　一心に寂靜にて善く諦に聽け　同じき其の劫中にて悉く作佛し　號して法幢等正覺と曰ひ　咸く皆不思議　那由他の衆を救度して涅槃に入らん　彼の諸の如來は滅度し已つて　身を焚きて廣く諸の舍利を布くや　此の舍利を以て皆塔を起して　佛刹に遍滿すること華を散ぜるが如くならん　爾の時に一切の佛舍利は　各各皆悉く廣く流布して　彼の佛の一一の涅槃の後に　咸く皆世間を饒

【三】優波羅(Utpala)劫。異譯本に「優曇鉢羅劫」とあり。同名なり。瑞應など譯す。

益するに　不思の那由の衆生の輩は　彼の佛舍利を供養し已つて　當に甘露の妙涅槃　三世の諸佛の讃ずる所を得べし　若し彼の諸佛の名を稱するあらば　獲る所の微妙なる勝善根にて當に有學の道を成就し　佛に値ひ轉じて殊勝の果を得べきこと　猶無量難思の衆の　皆我が所に於て善根を種ゑ　欣喜信樂の清淨心もて　當に彌勒佛に値遇し得べきが如し　是くの如くに彼の佛の聲聞衆の　佛より復諸佛の所に至り　常に佛に値ひ衆會に入ることを得るは　皆彼の舍利を供養せるに由つてなり　と。

斯くの如き佛語を聞くを得已るや　一切の大衆は　勝妙の功德にて威神を有てる　遍淨の諸天清信士に希有を生じ　及び諸の大衆は普く欣喜して　悉く皆流注して菩提に向ひ　如來の大勢力を知るを得て　咸く各世尊の足を頂禮せり

卷の第六十九

菩薩見實會　第十六の九

廣果天授記品　第二十二

爾の時に、八億の廣果の諸天は、諸の阿修羅・迦樓羅・及び龍女・鳩槃荼・乾闥婆・夜叉・緊那羅・摩睺羅伽・訶羅伽闍天・四天王天・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天・梵摩天・光音天・遍淨天等の、如來を供養するを見、記を授かるを聞き已つて欣喜踊躍し、皆心に稱ふを得て一一の法門に入り、一一の法門從りして無量の法門を見、一切の法門に於て無量の辯・不斷の辯・相應の辯・解脫の辯・無著の辯・無礙の辯・微細の辯・甚深の辯・種種の辯・美妙の辯・相續の辯を得、諸の辯才に於て皆悉く知り已つて、如來の所に於て敬信尊重して是の言を作せり。

世尊、陀羅尼の無量門と名くるあり。若し菩薩にして是の陀羅尼を修集する者あらば、當に知るべし、彼の不斷の辯等を得て、一切の境界の中に於て心迷惑せざることを。是れ諸の境界は、一法として陀羅尼に非ざるある無ければなり。是の菩薩摩訶薩は、是の陀羅尼を得る時に、諸法の中に於て悉く陀羅尼の解を得て辯才に礙無し。若し菩薩にして、是の無量の法門の陀羅尼に住する時には、五陰に於て[一]入り、十二入に入り、十八界に入り、諸根に入り、四諦に入り、十二因緣に入り、衆生に入り、及び非衆生に入り、有に入り、非有に入り、取想に入り、非取想に入り、依に入り、非依に入り、空に入り、我に入り、相に入り、非相に入り、願に入り、非願に入り、有爲に入り、無爲に入り、是くの如き一切の處に入つて不壞の辯才を得るなり。

是の菩薩の、陰の、[二]入の中に於て陀羅尼を得ることは、謂はゆる色陰は卽、成就に非ず。何を以ての故ぞ。少しの色法として、成就を得たる者あること無ければなり。何を以ての故ぞ。地界の性

【一】入。入には證入・解入・交入の諸義あれど此の入は解入にして異譯本にも「解知」の義に取りて「入解」と譯したり。

【二】入。是れ亦「解知」の義なり。

は成就に非ず、是くの如くに水・火・風界の性も亦成就に非ざればなり。何を以ての故ぞ。地性は離れたるが故にして、法に體性無き若きは、是れを非成就と名くればなり。是くの如くに、水・火・風の性も自ら離れたるが故に、法に體性無きを以て、是の故に成就には非ず。是くの如くにして、色は成就に非ざるなり。成就に非ざる故を以て、過去・現在及以び未來と名くることをも說くべからず。何を以ての故ぞ。色は有の法に非ざる故にて、是の故に不可得なり。若し色にして生ぜずんば、卽是れ滅せず。生滅せざる故を以て、卽說くべからざればなり。復是くの如くに說くことあり。有らゆる過去の色・現在・未來の色の、此等の和合を名けて色陰と爲せど、其の色の體性にして亦得べからずんば、何ぞ過去・現在・未來あらん。是の故に、色陰は是れ說く可きに非ず。受・想・行・識も亦復是くの如きなり。是の故に、陰の入は卽是れ陀羅尼の入なり。陀羅尼の入なる故を以て、陰は不可得ならば陰の不可得なる故を以て陀羅尼も亦不可得なり。陀羅尼の入の不可得なるを以て、唯是れ但の名・但の用・但の假・但の是れ世俗・但の是れ言說・但の是れ施設にして、陰に非ず、色に非ず、亦色の入も非ず、亦陀羅尼の體性の得可きも非ざるなり。何を以ての故ぞ。謂はゆる陰等は、是れ作の法に非ず。〔三〕作の法に非ざる故を以て、積聚あること無ければなり。積集の故を以て、名けて陰と爲すを得ることとは、譬へば世間にて多くの物の積集を、假に城屋・舍宅・殿堂・重閣・樓闕・窓牖・欄楯・城壁・女牆・却敵・寮孔と名け、周迴具足せるもの、之れを名けて城と爲すが如し。彼の色の性は、卽、不可得にして積集ある無く、積集無き故を以て、卽便に色無く、亦色の陰も無し。受・想・行・識も亦復是くの如くに、性は不可得にして積集ある無く、積集無き故を以て、卽便に識無く、亦識の陰も無きなり。彼の諸の陰の入をば、應に是くの如くに知るべし。

〔四〕彼の眼入とは、是れ誰の入なる。謂はく〔五〕苦入なり。何者か是れ眼なる。謂はく。清淨の四大にて造られたる色をば、名けて眼と爲すなり。何等か是れ四大なる。清淨の地界と水・火・風界とを謂

【三】作の法に非ざる故等。異譯本に「若し諸法は作る(發作の義)に非ずんば、則ち積集無し。」とあり。

【四】彼の眼入、乃至、苦入なり。異譯本にも、其の說明方は異れども「又、眼處の若きは、自性有に非ずして、本來清淨なれば、苦ある無し。」とあり。※彼の眼入。以下は「十二入」卽ち「十二處」に就いて謂ふ者にして、「入」は交入卽ち涉入の義なれば、根と境とを指す。

【五】苦入。苦處、卽ち生死の果報を謂ふ。

へど、[六]彼の淨の地界の性は、自ら離れたる故にて法の體は不可得なるを以て、彼れは卽成就に非ず。是くの如くに、清淨の水・火・風界の體性も自ら離れて法體の不可得なるを以て、彼れ卽、成就に非ず。是くの如くにして、[七]眼入は成就するに非ず。是の故に、說いて過去・現在・未來をも言ふべからず。何を以ての故ぞ。眼入は物に非ず。物に非ざる故を以て、生ぜず滅せず。若し生滅せずば、卽是れ說くべからず。是くの如くにして、眼は不生滅なり、入も亦不生滅なり。不生滅なる故を以て、卽是れ說くべからずして、應當に是くの如くに知るべし。唯是れ但の名・但の用・但の假にして、但是れ世俗・但是れ言說なりと。彼の名の名たる體も、亦自性を離れたり。何を以ての故ぞ。一法として、名けて眼と爲し、名けて入と爲し、名けて苦と爲し得るものある無ければなり。是の故に、眼入も亦不可得にして、眼の不可得なるを以て卽是れ陀羅尼の入とし、是の陀羅尼の入も亦不可得なり。何を以ての故ぞ。性は自ら離れたる故に、但の名・但の用・但の假・施設・世俗・言說なればなり。是くの如くにして、[八]眼の入を以て陀羅尼を入得し、陀羅尼を得已つて便ち辯才を得るなり。當に知るべし耳・鼻・舌・身・意と色・聲・香・味・觸・法とにも亦皆是くの如きことを。

彼の界の入に於て陀羅尼を得ることも、眼の眼たる體は不可得にして、界の體も不可得なり。何を以ての故ぞ、眼は眼の性を離れたる故に、界は界の性を離れたる故なり。法の體は不可得なるを以て、彼れは卽、物には非ず。物に非ざる故を以て、卽、成就に非ず。成就に非ざる者は、生ぜず滅せず。生滅ならざる故に、彼れには卽、過去も非ず現在も非ず未來も非ずして、但の名・但の用・但の假・但の世俗・但の言說・但の施設なり。彼の名も名の自性を離れ、乃至、施設も亦施設の自性を離れたり。若し法にして、自性無く不可得ならば、卽是れ物に非ず。物に非ざる故を以て、卽、成就に非ず。成就に非ざる者は、卽、生滅に非ず。生滅ならざる故に、彼れには卽、過去も非ず、現在も非ず、未來も非ず。若し三世に於て攝められざる者ならば、彼れは名のみにして、卽、相に非

【六】彼の淨の地界の性は、自ら離れたる故にて。異譯本に「當に知るべし、地界の地界たる性は、畢竟じて清淨なり。何を以ての故ぞ。自性離れたる故に。」とあり。

【七】眼入。異譯本には眼處とあり。

【八】眼の入。此の「入」は「解知」の義なり。

ず、亦想に非ず、用に非ず、假に非ず、有爲に非ず、說く可きに非ず、來るに非ず、去るに非ず、他に爲つて說く可きに非ず、顯示す可きに非ず、知る可きに非ず、識る可きに非ず、黑に非ず、白に非ず。窟宅に非ず、窟宅を離れたる故なり。至るに非ず、至る可きに非ざる故なり。得るに非ず、得可べきに非ざる故なり。證するに非ず、證す可きに非ざる故なり。凡夫に非ず、亦凡夫地にも非ず。聲聞に非ず、亦聲聞地にも非ず。緣覺に非ず、亦緣覺地にも非ず。菩薩に非ず、亦菩薩地にも非ず。佛に非ず、亦佛地にも非ず。[九]地に非ず、亦非地にも非ずして、此れは卽是れ眞如にして、如に異らず、非如に非ず、寂滅無相にして、但の用・但の假なり。如來と謂ふは、但世俗の故にて說いて如來と名くれども、第一義に如來有るには非ざるなり。何を以ての故ぞ。彼の法も不可得なればなり。故に如來無きなり。彼の界の入に於て、應當に是くの如くに入るべし。眼・耳・鼻・舌・身・意の界、法の界、意識の界、是くの如き一切の餘の界にも、亦應に知るべし、應當に是くの如くに、廣く法界に入るべきことを。

世尊、彼の法界は、說いて陰と言ふ時に、而も彼の法界の本性を壞らず。說いて入と言ふ時に、說いて界と言ふ時に、說いて四諦と言ふ時に、說いて十二因緣と言ふ時にも、亦本の法界の體性を壞らず。彼の法界は、說かるる處の一切の諸法に隨ひ、名字を建立すれども、皆彼の法界の體性を壞らざるなり。世尊、譬へば、地界の其の在る所に隨ひ異なる名字を作し、而も彼の本の地界の性を壞らざるが如し。世尊、是くの如くに、法界は其の在る所に隨ひ異なる名字を作せども、亦復、法界の本性を壞らざるなり。是くの如くに、水・火・風界も亦復是くの如し。世尊、譬へば、虛空の其の在る所に隨ひ、差別して用を異にし、而も彼の虛空の體性を壞らざるが如し。世尊、是くの如くに、法界は其の在る所に隨ひ、名と用とを差別し、而も彼の法界の體性を壞らざるなり。

世尊、諸根に入する時に卽是れ法界に入するなり。[一〇]諸根と言ふは、謂はゆる眼根・耳根・鼻根・舌

【九】地に非ず、亦、非地にも非ず。異譯本の此れに當るべき句には「境界に非ず、非境界に非ず。」とあり。本經の後文にも、亦、境界・非境界とあり。

【一〇】諸根（Indriya）。根は發生と增長との義に名く。諸根の中、眼根、乃至、意根は有情の身心の六根、男女の二つは性の器根、命根は壽命、樂根、乃至、捨根は感受の五根、信根、乃至、慧根は道品の五根、未知欲知根（又、未知當知根とも云ふ。）知根（又、具知根とも云ふ。）知已根（又、已知根とも云ふ。）の三は卽ち三無漏根なり。以上を合稱して二十二根と云ふ。

根・身根・意根・男根・女根・命根・樂根・苦根・喜根・憂根・捨根・信根・精進根・念根・定根・慧根・未知欲知根・知根・知已根なれど、彼の眼の眼たる體は不可得にして、根の根たる體も不可得なり。何を以ての故ぞ。是の眼は、眼の自性を離れたる故にて、法として體性無きを以て、彼れは卽物に非ず。物に非ざる故を以て、卽成就に非ず。成就に非ざる者は、彼れ卽生ぜず。若し生ぜずんば、卽是れ滅せず。生滅せざる故を以て、彼れに是の過去・現在・未來を言ふことをも說くべからず。若し三世の中に生滅せざる者なるに於ては、彼れは卽眼に非ず、亦眼の根に非ず。云何んぞ用も有らんや。と、應に是くの如くに知るべければなり。世尊、[一]譬へば、空拳の、虛誑にして物無く、但名字、乃至、言說のみ有つて、第一義の中に於ては、空拳も亦無きが如く、是くの如き眼及び眼根も、猶空拳の虛妄にして實に非ず、而も虛相を現して凡夫を誑惑して、但名字、乃至、言說のみ有るが如くに、第一義に於ては、眼及び眼の根は、俱に不可得なり。是くの如くに、世尊は、一切智を得已つて、衆生を度せんが爲めの故に、名けて根と爲すと說けども、彼等諸根は、第一義に於ては性自ら離るゝ故に、根の體は皆空なり。其の法の體にして空ならば、用も亦虛妄にして、有に非ず實に非ず、凡愚を誑惑するのみ。自性を離れたる故に、生ぜず滅せず。生滅せざる者は、說いて彼れに是の過去・現在・未來を言ふを得ず。若し三世の中に於て無き者ならば、彼れには卽名も無く相も無く、說く可きに非ず、他に爲つて說く可きにも非ず。生ぜるに非ず、生ず可きに非ず。已に知らるるに非ず、當に知るべきに非ず。已に聞かるるに非ず、當に聞くべきに非ず。識るに非ず、識る可きに非ず。已に證せるに非ず、當に證すべきに非ず。已に得たるに非ず、當に得べきに非ず。已に見たるに非ず、當に見るべきに非ず。已に到れるに非ず、當に到るべきに非ず。何を以ての故ぞ。彼れは有に非ざるが故なり。世尊、譬へば、人あつて、其の夢中に於て、樂を受けて喜笑し囈語し遊戲するに、是の人爾の時に、寐より寤め已つて、夢中の受樂遊戲を憶念し、念じ已つて之れを求むれど

【一】譬へば、乃至、亦無きが如く。異譯本に「譬へば、空拳の中には物ある無く、但、愚童を誑かして、唯假名のみなるが如く、勝義諦の中には、空拳と立つる所の名字に至るまで、亦得可からざるを以て」とあり。

も、見ず得ざるが如し。何を以ての故ぞ。彼の人の、夢中の受樂・喜笑・囈語・遊戲すら尙自ら實無きに、何に況んや寤むる時なるをや。見るが若き得るが若きは、是の處あること無ければなり。世尊、是くの如くに、諸根も猶夢中の受樂・遊戲の如くに實に不可得なり。是くの如くに、一切の諸法の體性も亦不可得なり。不可得なる故を以て、說いて、彼れに是の過去・現在・未來を言ふべからず。若し三世の中に於て得べからざる者ならば、彼れを卽一切の諸根と說くべからず。と、當に是くの如くに知るべきなり。

世尊、若し法界に入らば、卽一切の法に入り、一切の法に入らば、卽是れ法界に入る。世尊、四諦の法に入るは、卽是れ法界に入るなり。何等を四と爲す。謂はく。苦・集・滅・道なり。世尊、亦一切の諸法は皆悉く是れ空にして、衆生非ず、命非ず、福伽羅非ず、想非ず、相非ずと說くことは、我等、此の法の中に於ても疑慮ある無し。世尊、衆生無き故を以て、亦復、苦無し。何を以ての故ぞ。衆生の無き處には、苦諦も亦無ければなり。苦無き故を以て、集諦も亦無し。何を以ての故ぞ。是れ、因にして果無き如き者無ければなり。世尊、集無き故を以て、滅諦も亦無し。何を以ての故ぞ。集諦無き故に、亦集を斷ずることも無ければなり。滅無き故を以て、道諦も亦無し。何を以ての故ぞ。是れ、道として集を斷ぜざる者ある無ければなり。世尊、道の果をば是れを滅諦と謂へど、彼の煩惱は不可得なれば、煩惱を斷ずる滅も亦不可得なり。滅の不可得なる故を以て、道も亦不可得なり。是れ、道にして其の果無きものある無ければなり。此の四聖諦は、但是れ[二二]分別の虚妄にして、有に非ず。有に非ざる故を以て、說いて過去・現在及以び未來を言ふべからず。若し三世の中に於て得べからずば、彼れは卽、生に非ず、滅に非ず、相に非ず、想に非ず。設に非ず、設く可きに非ず。示に非ず、示す可きに非ず。顯に非ず、顯す可きに非ず。語言に非ず、[二三]語言す可きに非ず。言辭に非ず、言辭す可きに非ず。說に非ず、說く可きに非ず。見に非ず、見す可きに非ず。知に非

【二二】分別の虚妄にして有に非ず。異譯本に「分別して、假に施設して有り。」とあり。
【二三】語言す可きに非ず、乃至、證す可きに非ず。此等の語に對する異譯本は、其の說示に廣略及び異同の相違あれど、皆「言辭無きに非ず。乃至、證無きに非ず。」と反對語を列擧しあり。又、異譯本には重複せる說示は無し。

ず、知る可きに非ず。識に非ず、識る可きに非ず。測に非ず、測る可きに非ず。達に非ず、達す可きに非ず。到に非ず、到る可きに非ず。得に非ず、得可きに非ず。聞に非ず、聞く可きに非ず。見に非ず、見る可きに非ず。對に非ず、對す可きに非ず。證に非ず、證す可きに非ず。白に非ず、黑に非ず。明に非ず、暗に非ず。去に非ず、來に非ず。淺に非ず、深に非ず。淸に非ず、濁に非ず。畏に非ず、安に非ず。縛に非ず、解に非ず。憎に非ず、愛に非ず。煩惱に非ず、淸淨に非ず。智に非ず、非智に非ず。路に非ず、非路に非ず。壞に非ず、非壞に非ず。攝受に非ず、非攝受に非ず。生死に非ず、非生死に非ず。可得に非ず、不可得に非ず。衆生に非ず、非衆生に非ず。命に非ず、非命に非ず。壽に非ず、非壽に非ず。我に非ず、非我に非ず。物に非ず、非物に非ず。空に非ず、不空に非ず。相に非ず、非相に非ず。願に非ず、不願に非ず。[一四]依に非ず、不依に非ず。有爲に非ず、無爲に非ず。斷に非ず、常に非ず。邪に非ず。正に非ず。實に非ず、妄に非ず。妄想に非ず、非妄想に非ず。處に非ず、非處に非ず。宅に非ず、非宅に非ず。知に非ず、不知に非ず。捨に非ず、修に非ず。生死に非ず、涅槃に非ず。覺に非ず、不覺に非ず。凡夫の境界に非ず。聲聞の境界に非ず。緣覺の境界に非ず。菩薩の境界に非ず。佛の境界に非ず。境界に非ず、非境界に非ず。作に非ず、不作に非ず。と是くの如くに諦に入らば、卽是に法界に入り、法界に入り已るや、卽陀羅尼を得、陀羅尼を得已るや、卽辯才を得るなり。

十二因緣に入するは、卽是れ法界に入するなり。無明は行に緣とし、行は識に緣とし、識は名色に緣とし、名色は六入に緣とし、六入は觸に緣とし、觸は受に緣とし、受は渴愛に緣とし、渴愛は取に緣とし、取は有に緣とし、有は生に緣とし、生は老死の憂悲・苦惱に緣として、是に衆苦大に聚る。是くの如くなれば、無明滅せば則ち行は滅し、乃至、憂悲・苦惱滅せば衆苦の大聚は滅すれども、世尊、彼の無明の無明たる體は不可得なり。何を以ての故ぞ。性は自ら離れたる故なり。若し法

【一四】依。依は依止の略なり。

にして體性無くんば、彼れは卽物に非ず。物に非ざる故を以て、卽成就に非ず。成就に非ざる者は、生ずるに非ず、滅するに非ず。生滅に非ざる者は、卽過去に非ず、現在に非ず、未來に非ず。若し三世の中に於て得べからざる者ならば、名無く、形無く、相無く、想無く、亦差別も無くして、唯是れ但の名・但の假・但の用・但の世俗・但の言說にして、一切の凡夫衆生を敎化せん爲めの故なり。彼の無明は、第一義に於ては、實に不可得なり。不可得なれば卽差別の用非ずして、亦說くべからず。世尊、若し是れ但の名、乃至、但の施設ならば、彼れは卽、實に非ずして、唯是れ虛妄の言說・分別の覺觀なり。[一五]定に非ずして、但是れ戲論なり。彼の無明にして若し自性無くんば、云何ぞ能く行を生ぜん。無明無き故にて、行も亦生ぜず。生ぜざる故を以て、彼れ卽、老せず病せず死せず流轉せずして、卽不生なり。何を以ての故ぞ。若し生ぜずば、云何ぞ老有らん。老無き故を以て、乃ち不生に至ればなり。若し不生・不死ならば、卽是れ一切の過・現・未來の諸佛菩提なり。但し、世俗の名字は、第一義にて言ふ所の無明卽是れ菩提には非ず。當に知るべし、諸の有支も亦復是くの如きことを。是くの如くに十二因緣に入ることは、當に知るべし、卽是れ法界に入るものなることを。

世尊、如來は不生にして、一切の諸法も亦不生なり。是の故に、一切の法は卽是れ如來なり。如來は不滅にして、一切の諸法も亦不滅なり。是の故に、一切の法は卽是れ如來なり。世尊、如來は無相にして一切の諸法も亦無相なり。是の故に、一切の法は卽是れ如來なり。略して之れを言はば、是くの如き無相・不可得にして、垢に非ず淨に非ず愛に非ず憎に非ざる法界は、識る可からず、亦復知る可からず。世尊、眞如は卽是れ如來にして、一切の諸法は卽是れ眞如なり。是の故に、一切の法は卽是れ如來なり。世尊、實際は卽是れ如來にして、一切の諸法は卽是れ實際なり。是の故に、一切の法は卽是れ如來なり。世尊、隨所の法の中に卽、如來有り。其の法の中に於て卽、一切の法有り。是の故に、一切の法は卽是れ如來なり。世尊、若し人あつて、如來は阿耨多羅三藐三菩提を得と言

【一五】　定。決定不變の義なり。

はば、彼の諸の衆生の是れ計著の見なり。何を以ての故ぞ。如來は[16]不二にして、菩提も亦不二なり。不二の者は不二を覺悟する能はざればなり。世尊、若し復、人あつて、是くの如き言――如來は無上の法輪を轉じたまふ。――を作さば、彼の諸の衆生の是れ執著の見なり。何を以ての故ぞ。[17]如來には進退非ざればなり。世尊、若し復、人あつて、是くの如き言――如來は無量の衆生を滅度せしめたまふ。――を作さば、彼等は一切皆是れ執見なり。何を以ての故ぞ。一切の諸法には實に衆生無く、是の故に滅度を得る者ある無ければなり。世尊、若し復、人あつて、是くの如き言――如來は無量の衆生を利益したまふ。――を作さば、彼等は一切是れ取著の見なり。何を以ての故ぞ。如來は衆生を利益せんが爲めならず亦復衆生を利せざらんが爲めならずして世に出現すればなり。世尊、若し復、人あつて、未來世に於て、是くの如き言――如來は壽を捨てたまふ。――を作さば、彼の諸の衆生の皆是れ執見なり。何を以ての故ぞ。法界には攝受無く、亦捨も無き故なり。世尊、若し復、人あつて、是くの如き言――[18]如來は無餘涅槃界に入りたまふ。――を作さば、彼の諸の衆生の是れ計著の見なり。何を以ての故ぞ。[19]法界には生死非ず、亦涅槃も非ざればなり。世尊、若し復、人あつて、我が說く所の法に於て、能く決定して知らば、彼の諸の衆生は阿耨多羅三藐三菩提に於て皆退轉せざらん。世尊、假に法界をして其の變異あらしむとも、是の諸の善男子、善女人の能く是くの如くに信ぜん者の、必ず定つて當に無上菩提を覺ることに變退ある無かるべし。と。

爾の時に、八億の廣果の諸天は、世尊の所に於て、自己の證する所の法を演說し已つて、頭面にて足を禮し、右に遶ること三匝し、却いて一面に住り、合掌して立ち、異口同聲に偈を以て佛を讃ずらく。

善逝知法の者　那羅延力の大導師に敬禮したてまつる　一切を憐愍したまふ勝牟尼は[20]方便して眞實を示現したまふ　既に自ら一切の法を了知して　如實に諸の世間に顯示したまふ　無

【一六】不二。一實平等にして彼此の別無きを謂ふ。

【一七】「如來には」の一句。異譯本には「實に少法も如來として得可きもの無く、諸法の性は隨轉するに非ざるを以ての故なり。」とあり。

【一八】「如來は無餘涅槃に」の一句。異譯本には「如來は緣盡きて般涅槃に入りたまふと言はば」とあり。

【一九】「法界には」の一句。異譯本には「法性は常住にして、生滅非ざる故に。」とあり。

【二〇】「方便して」の一句。異譯本には「常に是くの如き第一義を說きたまふ。」とあり。

量の功德の身たる　智慧最勝なる無上士に稽首したてまつる　是くの如き眞實の微妙なる法の　聖說と相應して異るある無きにて　世尊無等の大醫王は　能く衆生をして法眼淨ならしめたまふ　〔二〕八種の眞聖の路を敷演して　無上の大菩提を得させたまふ　無量の功德の身たる智慧最勝なる無上士に歸敬したてまつる　菩提の正直道を顯示して　畢定して大涅槃に趣向し　無等の勝菩提を獲得し　寂滅安隱に最も堅固ならしめんとて　多億那由他の　生死に輪廻する苦の衆生を度脫したまふ　無量の功德の身たる　智慧最勝なる無上士に頂禮したてまつる

五陰を觀察するに悉く空無にして　〔三〕陰の體は畢竟じて不可得に　彼の陰の卽の體は諸觀を離れたるを　唯誑惑癡の衆生たる　凡夫は此れに於て悉く縛せらるること　猶獮猴の膠に粘けらるるが如くなれど　智者は斯れに於て解脫を得　遊行に礙無きこと空の風の如し　諸界の卽の體は性自ら空なりと　一切の智人は是くの如くに說き　彼の空も亦空にして自性無く究竟して之れを求むるに不可得なるを　凡夫は此れに於て皆縛せらるるは　都べて眞實の性を知らざるに由り　智者の觀察して解脫を得るは　其の三界に於て著する所無ければなり　諸入は體無くして自ら空寂なりと　一切の智人は是くの如くに說き　猶空拳の虛にして實に非ざる如くなるを　誑惑愚癡の衆生の輩たる　凡夫の妄に取著の心を起すは　皆法に於て疑惑を生ずるに由り　生死に墜落して皆喪壞することは　猶商人の巨海に沒するが如し　彼等諸根の性は自ら空にして　畢竟じて推求するに不可得なること　譬へば鏡中に面像を現ずに　其の像の實無くして畢竟空なるが如くなるを　凡愚無智の此れに於て著するは　正しく眞實の法を知らざるに由り　猶衆鳥の羅網に入れらるが如く　亦淵中にて釣らるる魚の如し　衆生には體無くして生の相を離れ　眞に依つて之れを求むれば不可得なること　譬へば壁上に彩畫せる像の如くに　究竟して實の衆生の性無きを　凡夫は無智にして著を取るは　皆眞實の義を知ら

【二】八種の眞聖の路。八聖道を謂ふ。

【三】陰の體は、乃至、離れたるを。異譯本に「蘊の體は、之れを求めて得可らず。依止する所無くして攀緣を絕ちたり。」とあり。

ざるに由り　智者は彼れを觀じて解脫を得ること　猶卵の生れて鷇より出づるが如し　因緣生の法は悉く無常なれば　皆悉く空寂にして樊緣を離れたることは　譬へば夢中に受くる所の樂の　實に非ざるが如くなるを誑惑せる癡の凡夫の　愚にして智慧無くして彼れに縛せらるるは　妄分別なるを思慮せざるに由り　智人の觀察して解脫を得ることは　猶飛鳥の籠の網より出づるが如し　佛の功德の如きは不思議にして　一切の諸法も亦是くの如く　諸法の無相なることは　[二三]牟尼の如く　法の體の寂滅なるは涅槃の如く　諸法の依る無きことは如來の　其の三界に於て取著せざるが如し　[二四]是の故は有らゆる佛を成ぜる者は　皆此の義を知るを得たる故に由る　諸法に怖無きこと世尊の如くなるは　自身及び他の想を起さざるにて　諸法の難思なること導師の如くなるは　唯佛のみ能く知つて群生を導きたまふ　法に分別なることゝ善逝の如くなるは　是の凡夫の心にて行ぜらるるに非ず　是れ諸の如來の妙境界は　唯佛大聖のみ能く了知したまへばなり　若し無智あつて是の言　佛は無等なる大菩提を證したまふを作さば　若し復人あつて是の言　世尊は已に妙法輪を轉じたまふを、作さば　若し復人あつて是の言　善逝は已に那由の衆を度したまふ、を作さば　彼れは悉く見に爲つて縛せられて　皆眞實の性を知らざるに由る　若し人佛は是くの如く　殺害の行陰及與び命を說きたまふと謂ひ若しくは　[二五]十力は涅槃に入つて　無量の衆生を利益し已りたまへりと言はば　彼の人は一切皆執見にして　魔の羅に入つて縛せられ　眞如の法を解知する能はざるものにして　知らざる故を以て佛を知らざるなり　[二六]若し是の非なることを善く知る者あらば　彼れは皆能く大導師を知りたるにて　當に無上なる功德聚を獲　成佛して世間を憐愍すべきは　斯れ卽眞如にして變易無き　一切の諸法に疑惑を離れたればなり　人中の無上なる最勝尊　我等已に是くの如き義を知れり　是くの如くに廣果の諸天衆は　咸く皆法に於て知ることを盡すを得　佛導師に對

【二三】　牟尼。此所の牟尼は、寂默の義を謂ふ。第二卷「牟尼」の解參照。

【二四】　是の故は、乃至、故に由る。異譯本に「佛は三界に於て著する所無く、如來は是れに由つて世に出でたまふ。」とあり。

【二五】　十力は、乃至、已りたまへり。異譯本には「無量の衆生を饒益し已つて、寂靜太涅槃に入りたまへりとは」とあり。

【二六】　若し是の、乃至、知りたるにて。異譯本には「若し斯の正法に達する者あらば、是の人は決定して菩提を得て、」とあり。

し自ら演說して　已れの內心の淨信解を現し　一切欣喜して疑慮無きは　各自ら已に當に成佛すべきを見たるにて　此れは是れ如來の微妙の法にて　彼れ卽自ら導師の記を受けたればなりと。

爾の時に、世尊は、廣果の諸天の深信具足して、佛の法中に於て決定して疑無きを知り、大衆をして善根を種ゑしめんと欲する故にて、微笑を現せり。

爾の時に、慧命馬勝は、偈を以て世尊に問うて言はく。

智慧の導師たる功德の山　是れ因無くして笑を現したまへるに非じ　我れ善逝に從つて親しく自ら聞けり　世尊の笑を現したまふことは必ず因ありと　如來は此の微笑の相を示して　衆をして皆清涼の樂を受けしめたまへば　天人修羅の大導師　唯願はくば笑の因緣を演說したまはんことを　今如來の面門より　現したまへる微笑の甚だ清涼なるを見たてまつり　此の諸の衆會は悉く疑を懷き　一心に如來の面を瞻仰したてまつる　大悲最勝なる人中の上　願はくば希有なる微笑の因を說きたまはんことを　世間は若し佛從りして聞くを得ば　決定して必ず疑惑の心を除けば　世尊彼等諸天衆の　咸く皆演說せる自の授記は　何の功德を以て何の果を獲るか　願はくば成佛の神通の事を說きたまはんことを　微妙なる梵音聲を開演して唯願はくは普く諸有の疑を斷ちたまはば　一切の大衆は佛の說を聞き　皆悉く踊悅して甚だ欣喜し　斯に等しく合掌して皆一心に　淨信し瞻仰恭敬して住せん　佛子たる天衆の各思惟して　希求せる無上の大菩提に　是の諸の衆會は疑惑を有てば　唯願はくば如來除斷を爲したまはば　必ず當に力を得て是非を知り　一切智を具足し成就すべく　如來の八種の音を聞くを得ば　天衆も皆喜悅せざる靡くして　當に如來の敎を護持し　正法に隨順して說の如くに行ずるを得べし　觀察して彼の天の心を知り已りたまへる　無上の大智願はくば解說したまはば

是れを以て大衆は欣喜を生じて　佛の法中に於て信解を得ん　今導師に於て聞くを得んことを願へば　天衆の過去に修行せる所を　若し如來の解說を蒙り已らば　願ふ所を皆悉く滿足するを得　廣果の諸天も法の如くに行じて　必ず一切智を成就するを得て　當に世間の諸の群生を度して　〔二七〕眞如の法體の性を顯示すべし　と。

爾の時に、世尊は卽、偈を以て慧命馬勝に答へて曰はく。

善い哉馬勝汝時を知つて　今は我れに問へること正に是れ宜し　我れは廣果の諸天の輩の爲めに　此の大衆に於て微笑を現せるなり　今當に汝が爲めに分別して說くべし　咸く皆一心に共に　諦に聽け　現す所の微笑の因緣の義を　汝及び大衆は悉く聞くを得ん　如來は一切智を具足して　〔二八〕因緣に三種あるを觀察し　二足の德聚は正しく觀じ已つて　微笑を現して世間に示すなり　涅槃に樂住せんとする者あつて　少智微淺にして聲聞を願ひ　復默然に樂住する者あつて　辟支佛の菩提を志求し　復世の導師を樂求するあつて　佛の大力那羅延を成ずるを

我れ彼等の深信を觀じ已つて　樂欲する所に隨つて度脫するなり　聲聞を求むるものの爲めに示現する者は　當に知るべし其の最下の笑なることを　應當に知るべし我が中品の笑は辟支を求むるものの爲めにて示現することを　馬勝當に知るべし此の上の笑は　諸の天衆の爲めに佛の記を授くるものなることを　我が說く此の三解の笑因　謂はゆる最下及び中上にて

善解世間の勝導師は　而ち微笑を作して瑞相を現すなり　佛は衆生の欲する三乘の　願樂にて聖果を證せんことを求むるを知つて　聲聞を求むるものの爲めに笑を現せば　微笑の光明は足從りして沒し　辟支を求むるものの爲めに示現する所は　當に知るべし笑光は臍輪に入ることを　無上の十力を受くるものの爲めならば　其の光は佛の頂上從りして入るなり　馬勝汝今應當に知るべし　微笑の因緣に三種あることを　我れの向に現す所の微笑の光　彼の光は

【二七】「眞如の」一句。異譯本には「眞如の法の自性を悟らしむべし。」とあり。

【二八】「因緣に」の一句。異譯本に「三種の因有つて光明を放ち、」とあり。

我が頂上に於て沒したれば　當に知るべし光の現れたる微笑は　悉く無上なる菩提の記たることを　我れ今當に更に汝が爲めに說くべし　微笑に復三種の因あることを　善い哉馬勝及び大衆　一心に意を靜めて倶に諦に聽け　前に現したる微笑の佛者の爲めならば　其の光は卽頂上從りして入り　光あつて少時身の腰に住り　須臾にして沒せば辟支の爲めにして　我が現せる微笑の、光明を放つて　暫時足の前に在つて住り　斯の光乘るに隨つて變現するは　當に知るべし此れは聲聞の人の爲めなることを　今復更に微笑の因を說かん　馬勝　諦に聽け三種あり　導師の放つ所の諸の光明の　出て已つて十力を圍遶し　其の光既に出でて皆疎に散り　還り復し速に聚つて身の腰を遶り　漸漸に轉じて復更に增廣り　亦還つて右に如來を遶り光あつて初は停つて後に廣大し　漸漸に右に我が身を遶り　彼の光悉く世尊の形に遍く　身と倶に等しくして異るある無く　其の光佛の身相を莊嚴して　暉赫して猶眞金の　聚　の如くなり　牟尼の放つ所の微笑の光は　當に知るべし此の光ならば刹土を記するものなることを光あつて出で已るや猶蓋の如くにして　上に於て遍く世尊の身を覆ふと　光あつて華の如くにして空中に住し　其の光導師を照曜するとの　彼の光は一切皆右に旋り　三匝して如來の身を圍遶せば　當に知るべし此の光は壽命を記せんとて　出世の大智は斯の瑞を現すものなることを　斯等の三種の微笑の光を　善逝は根に隨ひ差別し現すなり　馬勝汝今應當に知るべし此れは是れ三種の微笑の因にして　世間の導師の現す所の相は　善く衆生の深き信樂を知れるものなることを　今如來の敎法の中に於て　汝等此れを聞いて疑を除くを得たることを　是に諸の廣果天の衆等は　其の數滿足して八億あり　廣く微妙なる正法門を說き　各異刹に於て成佛するを得　壽命は量ある無きを具足し　多劫を經由して世に住せん　是の故に如來は斯の瑞　廣大なる光明　五種の色を現せるなり　此の諸の天衆は過去の　三十有六僧祇劫に於て

常に諸の世尊に値遇して　親承供養して諸善を習ふことを得しが　又復三十六　阿僧祇劫を經て廣く修行せん　斯等大士の世間に住するや　如來を供養して未だ曾て倦まず　思惟して衆生を救度せん故に　數數勤修して佛を供養し　世尊を供養すること其の宜に應じ　無上の大菩提を悕求せん　彼の諸の天衆は未來世に　當に佛那羅延と作つて　妙牟尼功德の山を成ずを得べく　其の劫を號して勝金幢と曰はん　是の諸の如來は各自ら　清淨に莊嚴せる國土の中に住し　彼の佛を同じく日光輪と號して　無量の功德衆を具足し　一一の如來は各世に住すること　無量那由劫を經ん　此の諸の善逝に集る所の衆は　無量無邊にして數ふべからずして　一一の導師の成佛の時に　有る所の聲聞の弟子の輩をば　十力は住すること那由劫を經て　彼の衆を算數すとも盡すべからず　若しくは算師あつて悉く共に聚つて　亦彼の衆を算ふとも盡す能はじ　當時に有る所の諸菩薩も　彼れ聲聞衆に倍多し　皆悉く發心して佛乘に住し　當に一切智を成ずべきを得んことを願ひ　其の清淨なる國土の中に於て　悉く當に成佛して十力を具すべく　是の諸の菩薩の修行する所は　皆本師の如くにして異ることある無きなり　彼の諸の如來の滅度の後　正法興顯して久しく世に住し　十二那由劫を經るまで　諸の佛子に爲つて護持せられん　此の諸佛の法の熾盛なる時に　無上の菩提心を發すものあつて　其の數恒河沙を過ぎ　皆悉く菩薩の行を勤修せん　彼の諸の善逝の滅度し已るや　有る所の一切の聲聞衆　斯の衆は皆悉く涅槃を得ること　大海の諸の沙の數より過ぎん　是くの如くに彼の諸佛の正法は　具足して世間に興顯し　無量なる諸衆生を饒益して　彼の教は法の如くに大に興盛せん

二九 是くの如くに佛の說く所を聞き已るや　一切の大衆は皆信解し　必ず當に佛世尊を成ずる得て廣く諸の群生を利益し能ふべしとて　是の時衆會は悉く欣喜し　頭面にて如來の足を禮拜し

【二九】「是くの如くに、乃至、供養せり」の一段。是れ亦、散文の記述たるべき内容なれば、段を改め置きたり。而して、異譯本も同樣なれば、恐らくば、梵原本に於て、既に誤りたる者なるべし。

無等に善逝を恭敬し　法の如くに天人師に供養せり
是の故に踊躍して精進を發すこと　猶人あつて頭の然ゆるを救ふが如くに　常に應に善知識に親近して　般若波羅蜜を勤修すべし　此れは是れ[三〇]見實の勝進の行なれば　汝等比丘應に修習すべくば　當に無上の二足尊を成じ　功德は山の如くにして世間を利すべし　と』。

【三〇】見實の勝進の行。異譯本には「最上眞實の門」とあり。

巻の第七十

菩薩見實會　第十六の十

淨居天子讚偈品　第二十三の一

爾の時に、淨居の諸天子は、無量の衆生の菩提に住するを得、佛法の中に於て疑慮ある無きを知り已つて、意に稱ひ踊悅して、各妙偈を以て、佛の功德を讃じたり。

爾の時に、信施天子は偈を以て讃じて曰はく。

愛する所の妻子をば施し　幷せて重ずる所の身　乃至王位と財とをも捨てたまへり　我れ檀[一]度の者を禮したてまつる　と。

爾の時に、樂持戒天子は偈を以て讃じて曰はく。

如來本戒を持したまふに　一切著する所無く　果を獲て彼岸に到りたまへり　我れ戒度の者を禮したてまつる　と。

爾の時に、樂忍天子は、偈を以て讃じて曰はく。

佛昔忍辱を修するに　支節を解くをも堪受したまひて　初より悔惱の心無かりき　我れ忍度の者を禮したてまつる　と。

爾の時に、樂精進天子は偈を以て讃じて曰はく。

不退の勇健者　精進に大力を有ち　已に菩提に上るを得たまへり　我れ進度の者を禮したてまつる　と。

爾の時に、樂禪天子は偈を以て讃じて曰はく。

佛の本禪定を修めたまふや　[二]世間をば知らざる所にて　[三]三際に平等を得たまへり　我れ禪度の

【一】檀度。梵漢合會の熟語にして、布施波羅蜜を謂ふ。第一巻の「檀」、第二巻の「六波羅蜜」の解、參照。因みに、以下の六偈は六度の德に就いて讃じたり。

【二】「世間をば」の一句。異譯本に「彼の世間に著せず」とあり。

【三】三際。前際(過去)中際(現在)後際(未來)にして三世と同じ。

者を禮したてまつる　と。

爾の時に、威德天子は偈を以て讃じて曰はく。

大雄は般若に於て　相續して修行し　無盡の慧を獲得したまへり　我れ智度の者を禮したてまつる　と。

*爾の時に、界慧天子は偈を以て讃じて曰はく。

【四】布施及び愛語　利益と同事と　此れを以て衆生を度したまふ　我れ大導師を禮したてまつる　と。

爾の時に、淨慧天子は偈を以て讃じて曰はく。

【五】大慈悲喜に於て　長夜に常に修習し　是れを以て群生を濟ひたまふ　大船師に歸命したてまつる　と。

爾の時に、淨心天子は偈を以て讃じて曰はく。

度無諍の行を以て　心を調じたまへる大牟尼は　能く未調の者を調じたまふ　我れ調御師を禮したてまつる　と。

爾の時に、無垢慧天子は偈を以て讃じて曰はく。

廣心柔軟心にて　心をば調じ及び諸根にて　諸の衆生の心を知りたまふ　我れ悉知の者を禮したてまつる　と。

爾の時に、淨意天子は偈を以て讃じて曰はく。

正念を具足せる者　堅慧の中に安住したまひ　明達して悉く了知したまふ　【六】覺覺他の者を禮したてまつる　と。

爾の時に、莊嚴心天子は偈を以て讃じて曰はく。

---

* 本偈以下「知生死」までの二百六十八偈は、異譯本には全く缺けて無し。故に異義を考證するを得ず。

【四】布施、乃至、同事。謂はゆる「四攝法」なり。第一卷、同名の解、參照。

【五】大慈・悲・喜。四梵行中の三を擧けたり。

【六】覺覺他。謂はゆる三覺の一の自覺覺他の略なれども、此所にては、佛の德稱に用ひたり。

佛は久くる心清淨にして　亦佛國土を淨め　及び群生の慧をも淨めたまふ　我れ淨法王を禮したてまつる　と。

爾の時に、無勝天子は偈を以て讃じて曰はく。

願ふ所を能く壞ること無く　魔怨の力を降伏し　諸の大願を滿足して　諸の天衆を悅豫せしめたまふ　と。

爾の時に、速營事天子は偈を以て讃じて曰はく。

如來は速に法を知り　亦疾く衆生を淨め　已に雜見の法を見たまへり　我れ速事の者を禮したてまつる　と。

爾の時に、堅精進天子は偈を以て讃じて曰はく。

處處を悉く解脫し　癡を離れて諸漏無く　已に彼岸に度つて住したまへり　我れ堅固力を禮したてまつる　と。

爾の時に、樂威儀天子は偈を以て讃じて曰はく。

欲を離れて諸過無く　闇を除いて漏の盡くることを得　世の勝福田と爲りたまへり　我れ應供の者を禮したてまつる　と。

爾の時に、善住天子は偈を以て讃じて曰はく。

世尊は正法に住したまひて　三界に供養せられ　一道安隱をば行じたまふ　是の故に我れ敬禮したてまつる　と。

爾の時に、無動天子は偈を以て讃じて曰はく。

佛は堅固の山の　風に爲つて動かされざる如くにして　毀譽常に平等なり　是の故に今敬禮したてまつる　と。

爾の時に、得平等天子は偈を以て讃じて曰はく。

大雄は色殊勝にして　三十二相を具し　大深なる智慧を有ちたまへり　我れ端正智を禮したてまつる　と。

爾の時に、深慧天子は偈を以て讃じて曰はく。

非身なる大身は　眞如の法に安住して　實際を顯說したまふに　世間に與に等しき無しと。

爾の時に、無等礙慧天子は偈を以て讃じて曰はく。

究竟して不二に同じき　勇健もて能く魔を伏し　深義を疑はずして　照法にて彼岸に到りたまへり　と。

爾の時に、喜意天子は偈を以て讃じて曰はく。

喜意にて本より勇健に　學ぶ所に皆通利し　此の三界を棄捨したまへること　蛇の故皮を脫げるが如し　と。

爾の時に、定意天子は偈を以て讃じて曰はく。

譬へば闇室の　燈の　油盡くる故にて明の滅するが如く　智をば是くの如くにして滅するは佛の法を聞くに由る故なり　と。

爾の時に、住舍摩他天子は偈を以て讃じて曰はく。

如來は普く　欲に爲つて結縛せらるるを觀察したまひ　佛の能く彼の羂を斷ちたまへるは　智劍を執りたまへる故に由る　と。

爾の時に、多舍摩他天子は偈を以て讃じて曰はく。

定の心及び定の行　定の威儀の境界にて　佛は能く煩惱を滅したまへり　我れ伏怨の者を禮

【七】照法。諸法皆空の理を照し明す教法を謂ふ。

したてまつる　と。

爾の時に、無畏舍摩他天子は偈を以て讃じて曰はく。

佛の舍摩他を學べる　菩薩は名稱を得　[八]正定にて　[九]導引する故に　定心の佛を成就するなり　と。

爾の時に、定食天子は偈を以て讃じて曰はく。

寂滅なる一切の法は　大雄の演說したまふ所なり　彼の大智を解する者は　疾く如來を成ぜんと。

爾の時に、常觀天子は偈を以て讃じて曰はく。

常に諸の衆生を觀ずるに　悉に如來に隨つて學ぶものは　勝菩提を獲得して　大智慧を滿足す　と。

爾の時に、持德天子は偈を以て讃じて曰はく。

如來の智の彼岸を　菩薩は修學する故にて　世の大威德を成じ　能く無量の法を見るなりと。

爾の時に、造光天子は偈を以て讃じて曰はく。

彼れ不思の光を得て　當に無垢の樂を得べきは　世を照したまふ如來の所にて　智の境界を聞くを得たればなり　と。

爾の時に、無垢光天子は偈を以て讃じて曰はく。

[一〇]諸法には分別無しと　善方便を以ての故に　是くの如き智を修習したまへる故に　妙丈夫を成じたまへり　と。

爾の時に、無所住天子は偈を以て讃じて曰はく。

【八】正定（Samyak-samādhi）。眞智を以ての無漏清淨の禪定なり。

【九】導引。他を教へ導くを謂ふ。

【一〇】諸法には分別無し。諸法の實相卽ち眞如は一切の相を離れたれば思慮分別すべからざるを謂ふ。

住る無く觸れ繞る無くして　諸法をば[一一]覺する所無く　自他をも覺せざるは　佛は眞實に依つて見たまへばなり　と。

爾の時に、宅慧天子は偈を以て讃じて曰はく。

諸法には[一二]窟宅無しと　導師は是くの如くに見たまへど　衆生の爲めに說くが故に　隨順して法の相を取りたまふのみ　と。

爾の時に、無依慧天子は偈を以て讃じて曰はく。

諸法は[一三]依る所無くして　彼此を遠離すと　如來は眞實を顯したまふことは　掌の[一四]菴羅果の如し　と。

爾の時に、虛空行天子は偈を以て讃じて曰はく。

法は虛空の如くにして　不生亦不滅なりと知りたまひ　佛は法を見たまふこと是くの如くなる故に世間を離れたまふ　と。

爾の時に、無積集天子は偈を以て讃じて曰はく。

求むる無く慢むる無く[一五]覺する無く覺せざる無きは　眞は自性無きに依ると　是く佛は世間を見たまふ　と。

爾の時に、修慧天子は偈を以て讃じて曰はく。

猶巧なる幻師の　幻作する種種の事の　實に非ざるが如しとして實を見たまふ　故に佛には與に等しきもの無し　と。

爾の時に、喜悟天子は偈を以て讃じて曰はく。

譬へば鏡中の像の　見ゆと雖も眞實に非ざるが如しと　佛は是くの如くに法を見たまひて　世間に迷ひたまはず　と。

【一一】覺。此所の覺は對象を了知する知覺の義を謂ふ。

【一二】窟宅。一定の形相を謂ふ。此れを主觀的に言はば、心意の思量計較なりとも謂ふべし。

【一三】依る。依は「依止」の義を謂ふ。

【一四】菴羅(Āmra)果。或は梨に似たりと云ひ、或は桃に似て桃にあらずと云ひ、或は柰なりと云ひ、傳ふ所一定せず。

【一五】覺。知覺の義に用ひたり。

爾の時に、除疑天子は偈を以て讚じて曰はく。
佛は浮ぶ聲響の如くに　諸法も亦復然く　說くと聞くとも倶に實に非ずと　是く佛は世間を見たまふ　と。
爾の時に、無礙辯天子は偈を以て讚じて曰はく。
正法に安住する者は　辯才深妙に說く　世尊は久しく法を證したまへる　故に能く辯を具足したまふ　と。
爾の時に、無障智天子は偈を以て讚じて曰はく。
眞に依らば自性無きこと　一切の法は是くの如きを　如來は實の如くに知りたまへる　故に能く闇冥を除きたまふ　と。
爾の時に、無憂天子は偈を以て讚じて曰はく。
憂無く亦惱無く　諍無く嬈濁無くして　諸法には垢染無しと　佛は眞實の性を見たまふ　と。
爾の時に、行具足天子は偈を以て讚じて曰はく。
來無く亦去も無く　諸法は有る所無しと　如來は眞實の見にて　是くの如くに世の爲めに說きたまふ　と。
爾の時に、勝慧天子は偈を以て讚じて曰はく。
染無く亦淨も無く　愚に非ず亦智にも非ずして　諸法に能所無しとは　佛は如實の見に依りたまへるなり　と。
爾の時に、得無礙天子は偈を以て讚じて曰はく。
明に非ず亦闇にも非ず　色に非ず非色にも非ず　縛に非ず解脫にも非ずと　佛の慧は實の如く

に見たまふ　と。

爾の時に、勇目天子は偈を以て讃じて曰はく。

局に非ず亦遍に非ず　有に非ず亦無に非ずして　夢にて五欲を受くるが如しと　佛は法を見たまふこと實の如し　と。

爾の時に、不瞬天子は偈を以て讃じて曰はく。

生ぜず亦滅せず　亦中間にも住せざるに　彼れに迷ふは無智の者にして　唯佛のみ眞實を見たまふ　と。

爾の時に、住空天子は偈を以て讃じて曰はく。

人非ず衆生非ず　用非ず世財非ず　〔一六〕隨ひ説く故に用有れど　佛は能く眞實に見たまふ　と。

爾の時に、住無相天子は偈を以て讃じて曰はく。

用ふる所の一切の法は　彼れ皆悉く無相にして　諸法の性相は離れたりと　導師は是くの如くに見たまふ　と。

爾の時に、無願天子は偈を以て讃じて曰はく。

法の空にして無相なるに因り　是れを以て願を起さず　假設ひ願求する有りとも　唯佛のみ實の如くに知りたまふ　と。

爾の時に、三昧流注天子は偈を以て讃じて曰はく。

已に解脱の門を得れば　解脱の者ある無く　煩惱も本より亦無しと　佛は眞實の性を見たまふと。

爾の時に、無毀天子は偈を以て讃じて曰はく。

一切の惡を捨棄し　諸の功徳聚を集めたまへる　故に佛をば毀呰するもの無く　亦毀呰の事も

【一六】隨ひ説く。世俗の覺知する所に隨つて説くを謂ふ。

無し　と。

爾の時に、電雲天子は偈を以て讃じて曰はく。

猶雷電雲の　雨を降して大地に充すが如くに　佛は正法の雨を注ぎて　諸の群生に充足せしめたまふ　と。

爾の時に、不唐願天子は偈を以て讃じて曰はく。

世尊は辭の無上もて　能く正法の輪を轉じたまふは　明に深法の理に達して　一切智を具足したまへばなり　と。

爾の時に、具智慧天子は偈を以て讃じて曰はく。

生無く亦滅も無き　諸法の自性の爾るを　如來は善く知りたまふ故に　亦復轉じて他に敎へたまふ　と。

爾の時に、師子吼天子は偈を以て讃じて曰はく。

如來は師子吼して　空の法を演說したまふ時に　外道は皆怖畏すること　獸の師子を畏るるが如し　と。

爾の時に、業無放逸天子は偈を以て讃じて曰はく。

(一七)現前に放逸無く　佛は菩提を修成したまひ　導師は正法に於て　無逸にして彼岸に到りたまへり　と。

爾の時に、無放逸生天子は偈を以て讃じて曰はく。

無放逸の助道を會めて　天に生ずるを得　此れを以て群生を濟ひ　佛も亦自ら解脫したまへり　と。

爾の時に、成無放逸天子は偈を以て讃じて曰はく。

【一七】現前。現に前に在る欲境を謂ふ者なるべし。

無逸にして成就するを得ば　諸の有の依をば解脫す　聲聞及び菩薩は　皆是くの如き學に從ふと。

爾の時に、不逸行天子は偈を以て讃じて曰はく。

有らゆる諸の佛子の　常に不放逸の行にて　能く一切智を取れるは　善く世間を觀ぜる故なりと。

爾の時に、無逸護天子は偈を以て讃じて曰はく。

佛は菩提を修したまへる時　不放逸を守護したまへるは　勝菩提を逮得し　大悲をば莊嚴せん故なり　と。

爾の時に、住不放逸天子は偈を以て讃じて曰はく。

若し不放逸に住して　一相の法を揀擇せば　佛子は大勇健にて　當に父の遺財を得べきなりと。

爾の時に、樂不放逸天子は偈を以て讃じて曰はく。

勇健に不逸を樂ひ　能く煩惱の山を破するは　是れ等しく佛智を以て　疾く高慢の聚をも滅するなり　と。

爾の時に、堅持不放逸天子は偈を以て讃じて曰はく。

無放逸を守護して　昔一切智を求めたまひて　阿僧祇億劫にも　佛の心には疲倦無かりきと。

爾の時に、舍摩他現前天子は偈を以て讃じて曰はく。

法の寂なることの自性の爾るは　是れ諸佛の境界にして　智者は彼れに依つて住して　能く勝菩提に趣けり　と。

爾の時に、依舍摩他天子は偈を以て讃じて曰はく。

諸佛は舍摩に依りたまひ　依つて而も取著せずして　衆生の煩惱をば滅したまふことは
雨の諸塵を淹ふが如し　と。

爾の時に、住舍摩他天子は偈を以て讃じて曰はく。

諸佛は舍摩に住して　動かざること大山の如くなれば　天魔も　心の寂を壞る能はざる故にて
歸命したてまつる　と。

爾の時に、舍摩他調伏天子は偈を以て讃じて曰はく。

舍摩にて調伏せる所の　佛子には譏毀無く　億の魔も動す能はざるは　欲を離るること羅漢の
如くなればなり　と。

爾の時に、修舍摩他天子は偈を以て讃じて曰はく。

大雄の昔　舍摩他定を修習したまへる時に　佛心を知るある無くんば　何に依つてか禪定を得
ん　と。

爾の時に、舍摩他上首天子は偈を以て讃じて曰はく。

佛の正法の輪を轉じたまふは　舊舍摩他を得たまへるにて　餘の法も悉く彼れに依り　是れを
以て菩提を得たまへり　と。

爾の時に、留舍摩他天子は偈を以て讃じて曰はく。

佛は舍摩他を說いて　是に心の籠網の爲めに　衆生の迷獄に墮せるに　佛は心を降伏すること
を敎へたまふ　と。

爾の時に、舍摩他境界天子は偈を以て讃じて曰はく。

諸佛の妙境界は　是れを舍摩他と爲す　此れを修めて無礙を得て　大導師を成就したまへり

と。

爾の時に、滿足舍摩他天子は偈を以て讃じて曰はく。

禪を以て心に充滿し　復更に慧を修習したまへる故に佛は菩提を得て　復能く衆生を安んじたまふ　と。

爾の時に、重舍摩他天子は偈を以て讃じて曰はく。

餘の道あるを見ず　唯佛法の中に在つて　大智慧を獲得して　無上士を成就したまへりと。

爾の時に、欣毘婆舍那天子は偈を以て讃じて曰はく。

佛は毘舍那に依つて　能く一切の法を視たまひ　菩薩は隨順して學んで　自然智を成就するなり　と。

爾の時に、生毘婆舍那天子は偈を以て讃じて曰はく。

智の彼岸に到れる故に　大醫王を成就したまひ　四眞諦を顯示したまへるは　皆毘舍那に由れり　と。

爾の時に、住毘婆舍那天子は偈を以て讃じて曰はく。

毘婆舍那に住して　實の如くに諸法を知り　勇健に菩提を證して　能く大導師を成じたまへり　と。

爾の時に、修盡毘婆舍那天子は偈を以て讃じて曰はく。

大士は智慧を以て　勝菩提を修習し　識の境界を生ぜずして　大導師を成就したまへりと。

爾の時に、樂毘婆舍那天子は偈を以て讃じて曰はく。

智者は眞實に依つて　如の此の法を觀察し　能く無等の果を獲　成佛して導師と號す　と。

爾の時に、勤習毘婆舍那天子は偈を以て讃じて曰はく。

智慧を勤修する故に　能く諸の苦行に立ち　彼れは降伏し難きを成じて　邪道に爲つて壞られざるなり　と。

爾の時に、毘婆舍那天子は偈を以て讃じて曰はく。

有らゆる諸の佛子は　法相を觀察する故に　彼れ法相を知り已るや　調御師を成就するなりと。

爾の時に、修毘婆舍那天子は偈を以て讃じて曰はく。

如來は長夜に於て　勝智慧を修習したまひ　能く一切智を成じて　無量の衆を度脫したまふと。

爾の時に、殊勝行天子は偈を以て讃じて曰はく。

佛は一切智を修して　大導師を成就したまひ　法を以て世間を濟ひて　駛流の水を越度せしめたまふ　と。

爾の時に　住毘婆舍那天子は偈を以て讃じて曰はく。

毘婆舍那に住して　一切の法を觀察せば　諸佛の法を出生すること　地に尼拘樹を生ず（るが如し）　と。

爾の時に、持毘婆舍那天子は偈を以て讃じて曰はく。

世尊の諸佛子は　勝智慧を攝受して　上菩提を得已り　能く諸の衆生を度するなり　と。

爾の時に、遊戲毘婆舍那天子は偈を以て讃じて曰はく。

諸法に遊戲するに[一八]佛の無所畏を得て　怯るる無く亦怖るる無きは　勝智の大牟尼なり

【一八】佛の無所畏。佛の四無畏の中の、一切智無所畏を指す。

と。

爾の時に、隨順毘婆舍那天子は偈を以て讃じて曰はく。

大雄は諸法に於て　皆毘婆舍那を會めて　無自性なるを觀察したまへるもの　是れ卽佛の菩提なり　と。

爾の時に、毘婆舍那堅固天子は偈を以て讃じて曰はく。

諸佛の智は堅固にして　法に於て畏るる所無く　群生の苦を觀見して　能く大悲の心を起したまふ　と。

爾の時に、毘婆舍那天子は偈を以て讃じて曰はく。

智を以て菩提に趣くに　[一九]有智を能く善く學んで　彼れは勝菩提を得て　諸の衆生を度したまふなり　と。

爾の時に、修空天子は偈を以て讃じて曰はく。

空の法を修習して　智者は菩提を悟り　能く諸の牢獄を壞り　亦結縛の者を度したまふと。

爾の時に、解空天子は偈を以て讃じて曰はく。

世尊は空を解したまへる故に　身と命とを見ず　[二〇]緣無く自性無きこと　是れに依つて世に說くことを爲したまふ　と。

爾の時に、空境界天子は偈を以て讃じて曰はく。

一切の佛の境界には　諸法の性自ら空なるに　大雄中に於て學びたまふは　衆生を愍濟せん故なり　と。

爾の時に、信空天子は偈を以て讃じて曰はく。

【一九】有智。生死の業因・果報（有の義）に通達する智の謂なるべし。

【二〇】緣無く。は、彼此の境の分別（卽ち緣）せられざる無差別平等の義にして、謂はゆる、無緣法界を謂ふものなるべし。

如來は臭穢を離れ　怖畏をも亦久し度し　諸法に著したまはざることは　風の依る所無きが如し　と。

爾の時に、樂空天子は偈を以て讃じて曰はく。
空の法を修習する者は　能く佛の境界を樂ひ　彼れ即佛を供養して　亦無上供を成ずるなり　と。

爾の時に、空建立天子は偈を以て讃じて曰はく。
空の法を修習する故を　導師は建立するを得　空法に通達し已つて　世間の親を成就したまへり　と。

爾の時に、向空天子は偈を以て讃じて曰はく。
佛は一法として　是れ涅槃ならざる者無きを知りたまふ　諸法にて涅槃に趣くこと　此れは是れ佛の菩提なり　と。

爾の時に、空成就天子は偈を以て讃じて曰はく。
已に空寂定を得れば　佛子をば成就することを得たり　彼等の佛を供養するは　是れ空の法を修する者なり　と。

爾の時に、趣空天子は偈を以て讃じて曰はく。
有らゆる歸空の者は　智あつて愚癡に非ず　著無くして煩惱を斷ち　垢を離れて菩提を得ん　と。

爾の時に、滿足空天子は偈を以て讃じて曰はく。
佛の法をば滿足するを得て　降伏し難きを成就したる　有らゆる修空の者は　能く世間を利益せん　と。

爾の時に、住空天子は偈を以て讃じて曰はく。

佛法の中に安住して　能く空智を修せる者をば　無量の諸魔の衆も　彼等を動す能はずと。

爾の時に、樂無相天子は偈を以て讃じて曰はく。

無相を喜樂して　有相の中に著せず　諸法を簡擇し已つて　佛は能く世間に超えたまへりと。

爾の時に、無相行天子は偈を以て讃じて曰はく。

無相を習行する時には　清淨寂滅の行なれば　離相の衆生等をば　魔は彼の趣を知らずと。

爾の時に、無相境界天子は偈を以て讃じて曰はく。

無相は佛の境界にして　如來は中に於て　無相の證解し難きを修したまへり　我れ定行の者を禮したてまつると。

爾の時に、渴樂無相天子は偈を以て讃じて曰はく。

此等の一切の衆は　無相の法を渴樂して　父の資財を希求し　天人の師を供養したてまつると。

爾の時に、修無相行天子は偈を以て讃じて曰はく。

如來は無相に於て　晝夜に常に修行したまへば　天人及び鬼神も　佛の趣ふ所を知らずと。

爾の時に、無相解脫天子は偈を以て讃じて曰はく。

大雄は無相に住して　一切の法　導師の修學する所を思量したまふ　是の故に我れ敬禮したて

まつる　と。

爾の時に、無相遊戯天子は偈を以て讃じて曰はく。

大慈は　遊戯[二]を現じたまふに　常に無相の法に依り　衆生を成熟せん故に　佛智の中に住したまふ　と

爾の時に、無相成就天子は偈を以て讃じて曰はく。

善く離相を修せば　能く佛の菩提を得　亦能く佛を供養すること　子の父を恭敬するが如くなり　と。

爾の時に、久樂無相天子は偈を以て讃じて曰はく。

彼れは佛の正法を愛せば　即是れ衆生の塔たらん　有らゆる衆相の者は　師の處に住するを得ればなり　と。

爾の時に、無相道天子は偈を以て讃じて曰はく。

衆生の諸　歸する所を　道に依つて濟度するを得るは　無著寂滅の行にして　如來は最も無上なり　と。

爾の時に、信無相天子は偈を以て讃じて曰はく。

無相を信解せば　寂滅して諸怨を離る　我れ一切の佛　自ら度し他を度する者を禮したてまつる　と。

爾の時に、趣無願天子は偈を以て讃じて曰はく。

世尊の有らゆる願は　之れを求むとも不可得なり　彼等に所作を離れて　是に佛は世間を出でたまへばなり　と。

爾の時に、修無願天子は偈を以て讃じて曰はく。

【二】遊戯。佛の衆生を教化することは、隨意・自在・安樂にして、宛も遊戯するが如くなるに由り、教化の代詞に用ふ。

不起の願を有つに於つて　寂滅の心を修行し　渇愛の縛を斷除して　是に佛は世間を離れたまへり　と。

爾の時に、無願生天子は偈を以て讚じて曰はく。

彼れ大精進もて　有に於て愛染を離るるを得たる　是等如來子は　悉く自己の父を禮したてまつる　と。

爾の時に、從無願生天子は偈を以て讚じて曰はく。

彼等不起の願にて　有に於てして有を壞り　能く愛縛を斷ちたる所にて　佛子は譏毀を離る　と。

爾の時に、無願解脫天子は偈を以て讚じて曰はく。

無願にて得る解脫は　諸縛を離るるを求めず　放捨して願を起さずして　佛子は威德を持つなり　と。

爾の時に、出無願天子は偈を以て讚じて曰はく。

憂の曠野を出離し　愛染の根を拔斷せんとする　彼等は如來　饑渇を除くを得たる者を禮したてまつる　と。

爾の時に、必定無願天子は偈を以て讚じて曰はく。

善く苦有ることを知る者は　亦世樂の妄なるを知る　佛は是れ彼等の父にして　彼れは導師の子たり　と。

爾の時に、向無願天子は偈を以て讚じて曰はく。

有に於て苦を見る者は　彼の人にて調伏することを得　我れ善調伏　有を破したまふ調御師を禮したてまつる　と。

爾の時に、超無願天子は偈を以て讃じて曰はく。

有の曠野を超度して　安隱の處に住するを得んと　普く大導師　已に煩惱の怨を伏したまへるを禮したてまつる　と。

爾の時に、被無願鎧天子は偈を以て讃じて曰はく。

戰勝つて怨敵　最も強くして伏し難き者を破り　諸の魔衆を降し已らんと　勇健にして有を求めざるなり　と。

爾の時に、無願力天子は偈を以て讃じて曰はく。

大力もて解脱に於て　能く諸の魔の縛を斷たんと　是の諸の佛子等は　魔を觀ること細草の如くなり　と。

爾の時に、觀身天子は偈を以て讃じて曰はく。

諸有に此の身を觀じて　彼れ能く佛の法　身無く作者無きことを〔三〕樂み　是に等しく法に隨順するなり　と。

爾の時に、念身天子は偈を以て讃じて曰はく。

有つ所の念は此の身の　穢惡不淸淨なることにして　已に身を實の如くに知つて　大導師を敬禮したてまつる　と。

爾の時に、厭患身天子は偈を以て讃じて曰はく。

念を內身に繫けて　不淨の相なるを觀見し　彼れは身の苦を離れ　調伏することを得ん故に敬禮したてまつる　と。

爾の時に　捨身天子は偈を以て讃じて曰はく。

此の膿血の身を捨つること　蛇の故皮を脫ぐが如くならんと　非身　是の大如來身を敬禮した

【三】樂。は憂へずして安んずる義を取る。

てまつる　と。

爾の時に、厭惡身天子は偈を以て讃じて曰はく。

膿血の身　不淨にして甚だ臭穢するを厭惡して　此の不淨の身を捨てんと　天人の師に歸敬したてまつる　と。

爾の時に、患身疲勞天子は偈を以て讃じて曰はく。

患ふる所の爛壞の身に　佛子は清淨を求めん　有に於て過を見已り　能く滅を知つて無畏ならんと　佛子は勤めて道を求めば　父の遺財を獲得せん　と。

爾の時に、棄有天子は偈を以て讃じて曰はく。

諸有を棄つることを修する所にて　大涅槃に樂住し　心淨く衆の結を離れんと　我れ大導師を禮したてまつる　と。

爾の時に、斷有天子は偈を以て讃じて曰はく。

有の根本を斷除して　三千界に照達せんと　世尊の諸子等の　學ぶ所は悉く通利なり　と。

爾の時に、度有天子は偈を以て讃じて曰はく。

已に有の海を度つて　孤獨を濟拔する者は　此の三界の中に於て　彼等は數に在らず　と。

爾の時に、破有天子は偈を以て讃じて曰はく。

佛子道を修むる者は　能く三有を破る　彼れは是れ佛を供養し　以に衆生を化する故なりと。

爾の時に、於有解脫天子は解を以て讃じて曰はく。

彼等は悉く佛、正法を修められたる身を禮したてまつる　と。

爾の時に、怖身天子は偈を以て讃じて曰はく。

此の四大は　猶悪毒の蛇の如くなるを觀知せる　彼等は身を超度せんとて　大導師を敬禮したてまつる　と。

爾の時に、見身過天子は偈を以て讃じて曰はく。

現前に身の過を見て　是に智慧の眼を得て　悉く此の三有を照さんと　智者は佛の慧に依るなり　と。

爾の時に、不樂身天子は偈を以て讃じて曰はく。

所有に身を樂まず　法の相に依つて住せず　諸の結に著する無く　彼等は調御を禮したてまつる　と。

爾の時に、於有起怨想天子は偈を以て讃じて曰はく。

有に於ては怨の想の如くにて　觀を修して諸有を壞らんと　佛子は是くの如くに學ばば　智は生じて菩提を悟らん　と。

爾の時に、壞有天子は偈を以て讃じて曰はく。

有の流に解脱を得　住の後際を究め竟へて　大雄は世間を出でたまへり　有を斷ぜる者を敬禮したてまつる　と。

爾の時に、滅有天子は偈を以て讃じて曰はく。

有の根本を滅除し　有を度つて彼岸に到り　已に後際を斷てること　世間に佛に如くもの無し　と。

爾の時に、住後際天子は偈を以て讃じて曰はく。

如來の後際の住は　寂滅の到彼岸にして　有を度れる一切智にて　未だ悟らざる者を覺了せしめたまふ　と。

爾の時に、於有住後際天子は偈を以て讃じて曰はく。

佛は後際の住に於ては　彼の三有の因として　諸結有るを見ざれば　後に能く有を生ぜずと說きたまふ　と。

爾の時に、得滅有天子は偈を以て讃じて曰はく。

有の空寂なるを知り已つて　能く三有の因を〔二三〕解きたまふに　精進にして怯弱ならざれば　我れ平等の者を禮したてまつる　と。

爾の時に、度有到彼岸天子は偈を以て讃じて曰はく。

有を度つて彼岸に到り　有の根源を拔除したまひ　諸の群生を救度せんとて　導師は一切を愍みたまふ　と。

爾の時に、於受無惱天子は偈を以て讃じて曰はく。

〔二四〕受に於て貢高無く　思無く亦慮も無く　禪事にて悉く知解したまへば　受を水泡の如しと觀じたまふ　と。

爾の時に、解受天子は偈を以て讃じて曰はく。

如來は諸の受は　本來自性無くして　凡夫の處に著する所は　夢に欲樂を受くるが如しと知りたまふ　と。

爾の時に、觀受天子は偈を以て讃じて曰はく。

智を有つて諸受を觀じて　能く善道を取らば　未來の受を生ぜずと　是くの如くに見たまふは導師なり　と。

爾の時に、離受天子は偈を以て讃じて曰はく。

受及び受くる所の者に　佛は自性無きを見たまひ　能く卽衆の爲めに　知り難き甚深の句を說

【二三】 解。解は「解脫」の意なり。

【二四】 受(Vedanā)。觸る所の境、卽ち對象の事物を受け納れて、起す所の感覺・感情を謂ふ。此れに、身に苦・樂・捨の三受あり、心に憂・喜の二受あり。

きたまふ　と。

爾の時に、決定知受天子は偈を以て讃じて曰はく。

諸の受は但世諦にして　第一義の中には無しと　如來は眞實を說きて　世間の疑を除斷したまふ　と。

爾の時に、善解受天子は偈を以て讃じて曰はく。

世尊は善く受は　猶空中の雲の如しと知りたまふを　誰も迷うは智者無きにて　獨佛のみ能く實解したまふなり　と。

爾の時に、通達受天子は偈を以て讃じて曰はく。

如來は諸の受に達し　受を解して彼岸に到りたまひ　受に我所無きを知つて　法を說きたまふこと最も上と爲す　と。

爾の時に、度受天子は偈を以て讃じて曰はく。

世尊は已に久しきに　最も難き　[二五]三受の海を度り　惡の汚泥を捨離したまへば　佛の智を無上と號す　と。

爾の時に、斷受天子は偈を以て讃じて曰はく。

導師は諸の受に於て　世間を出づることを了知し　汚染の泥を超え離れて　諸の有に著したまはず　と。

爾の時に、思受天子は偈を以て讃じて曰はく。

如來は諸受を念じたまふに　受に由つて世間に苦み　衆生は煩惱に縛せらると　佛は眞實の性を知りたまふ　と。

爾の時に、解心天子は偈を以て讃じて曰はく。

【二五】三受。一に、苦受（違情の境に對して、苦惱の感を起す者。）二に、樂受（順情の境に對して、適樂の感を起す者。）三に、捨受（順にも違にも非ざる境に對して、苦樂を捨離して、不苦・不樂なる者。）是れなり。尙、「受」及び「捨」の解、參照。

佛は心にて煩惱を伏し　亦諸の魔怨を降したまふに　眞に依つて破る所無し　故に佛をば牟尼と號したてまつる　と。

爾の時に、識心天子は偈を以て讃じて曰はく。

佛は久しく心の相は　猶巧なる幻師の　種種の像を幻作する如しと　知りたまへり　故に佛をば應供と號したてまつる　と。

爾の時に、心行天子は偈を以て讃じて曰はく。

大雄は已に修行して　能く心の緣ずる所を斷ちたまへば　億劫阿僧祇にも　心の性をば得べからず　と。

爾の時に、攝心天子は偈を以て讃じて曰はく。

躁動して調伏し難く　體無くして猿に住すれば　佛は速疾の心を斷じたまふ　故に能く勝供を受けたまふなり　と。

爾の時に、簡擇心天子は偈を以て讃じて曰はく。

佛は已に心を簡擇したまひて　衆生の心の爲めに縛せらるるを　佛は能く眞實に知つて　幻師の如しとて子に敎へたまふ　と。

爾の時に、修心境界天子は偈を以て讃じて曰はく。

行ずる所の心の境界を　導師は決定して　夢に五欲を受くるが如くなるに　彼れに迷ふは愚癡の者なりと見たまふ　と。

爾の時に、心自在天子は偈を以て讃じて曰はく。

作業を調伏し已れる　心には分別の事無しと　如來の見たまふ心相をば　世間は知らざる所なり　と。

爾の時に、心勇天子は偈を以て讃じて曰はく。
言ふ所の心の勇とは　能く魔軍の衆を破るものにして　心を以て心を見れば　心を觀ずるに疲倦せざるなり　と。
爾の時に、建立天子は偈を以て讃じて曰はく。
如來は衆生を　法に於て建立する者と觀じたまふ　心を以て能く心を知らば　彼れは則ち眞の佛子なり　と。
爾の時に、定心天子は偈を以て讃じて曰はく。
有らゆる伏心の者は　彼れ能く寂滅を行ずるものにして　是等は諸の縛を離れたれば　魔に爲つて惱されず・　と。
爾の時に、柔軟心天子は偈を以て讃じて曰はく。
勇健なる柔軟心は　衆生の輩を調伏す　佛の法を樂ふ所の者は　諸欲に著せざればなりと。
爾の時に、淨心天子は偈を以て讃じて曰はく。
善心にて清淨を樂み　審思して業を作すは　佛の正法を聞き已つて　深義を疑ふこと無ければなり　と。
爾の時に、住法天子は偈を以て讃じて曰はく。
有らゆる向法の心にて　深く不退沒を樂むは　彼れは是れ眞の佛子にして　已に調伏地に到れるなり　と。
爾の時に、思惟法天子は偈を以て讃じて曰はく。
法界を思惟するに　境界は一に非ざる無くして　一切の法界の淨なるは　諸佛の學ぶ所の處

なり　と。

爾の時に、法界建立天子は偈を以て讃じて曰はく。

法界に建立する所は　是れ大慈悲心にて　能く一相の中に住する　彼れは是れ眞の佛子なり　と。

爾の時に、法界境界天子は偈を以て讃じて曰はく。

世尊は法界を說いて　是れを諸佛の土にして　大士の行ずる所の處と爲したまふ　此の智は不思議なり　と。

爾の時に、法界生天子は偈を以て讃じて曰はく。

法界に出生する所の　是の智は思議し難く　深き佛法にて　亦諸根の性を知りたまふことをも疑はず　と。

爾の時に、入法界天子は偈を以て讃じて曰はく。

深き法界に入りたまへば　法を解するに與に等しき無く　是の力不思議にて　亦諸の妙願をも得たまへり　と。

爾の時に、法界無畏天子は偈を以て讃じて曰はく。

已に無畏の法を得て　是に安隱の處に住したまへば　有らゆる辯才力には　能く與に等しき者無し　と。

爾の時に、善解法界天子は偈を以て讃じて曰はく。

如來は法界を解したまひ　亦一切智に達して　法界の相を示現したまふこと　掌の菴羅果の如し　と。

爾の時に、住法界天子は偈を以て讃じて曰はく。

世尊は法界に住したまふや　法の眞實の性を見たまへば　依らず亦離れず　取らず亦捨てたまはず　と。

爾の時に、法界行天子は偈を以て讃じて曰はく。

如來の法界に　行[二六]じたまふや　寂靜なること虚空の　境界の如き大牟尼なり　慈悲の父に敬禮したてまつる　と。

爾の時に、歸法界天子は偈を以て讃じて曰はく。

其の種種の門に隨つて　世尊は法界としての　彼彼の法門の中には　心無く亦色も無しと說きたまふ　と。

爾の時に、法界精進天子は偈を以て讃じて曰はく。

世尊は精進にて　法界を知り能ふことを說きたまひ　精進を修したまへる故に因り　覺知は彼岸に到りたまへり　と。

爾の時に、法界充滿天子は偈を以て讃じて曰はく。

大慈は正法を以て　諸の世間に充ち飽せたまへば　能く法界を知らば　彼れは菩提に住するを得ん　と。

爾の時に、徹法界天子は偈を以て讃じて曰はく。

世尊は深法に徹したまへる　故に能く世間を觀じて　法界を悉く知り已りたまへり　我れ天人の師を禮したてまつる　と。

爾の時に、住智處天子は偈を以て讃じて曰はく。

是に人中の上に處りたまへる　如來の智にて得たまふ所の　法界及び十方は　導師の行ずる所の處なり　と。

【二六】行。は内心の外境に趣く義を取る。

爾の時に、住處天子は偈を以て讃じて曰はく。
法界は是れ住處なり　衆智にて行ずる所の道は　諸有の一切の法に　悉く一相の解を作せばなり　と。

爾の時に、知處天子は偈を以て讃じて曰はく。
世尊は法界を知り　已つて一相の修を作したまへども　衆生の諸の欲性をも　佛は亦悉く了知したまへり　と。

爾の時に、出處天子は偈を以て讃じて曰はく。
能く一切智を取らば　是れを諸佛の子と謂ふ　此の法界に於ける　[二七]處は　唯智のみ知り能ふ所なり　と。

爾の時に、學處天子は偈を以て讃じて曰はく。
法界を習ふ所の者は　菩提の中に安住し　自然の處に達するを得て　疾く如來を成ぜん
と。

爾の時に、非處學天子は偈を以て讃じて曰はく。
[二八]非處を見る所の者は　能く如來の教を樂めば　千億の衆魔の軍も　彼れを迷惑する能はず
と。

爾の時に、知非處天子は偈を以て讃じて曰はく。
有らゆる非處を知りたまへる　智者に欣喜を得て　我等菩提を修せば　億魔も動すこと能はず
と。

爾の時に、深密處天子は偈を以て讃じて曰はく。
深智の處を善く學んで　正法の中に安住したまへば　能く魔波旬に乘じたまふこと　車を調馬

【二七】處。は十二處即ち根と境との主客兩觀界を謂ふ。

【二八】非處。「處」は普通六根六境の十二處を謂ひ即ち有爲の色心界の全稱なり。随つて「非處」は其の反對の無爲界にして前二偈の一法界に於ける處「自然の處」も此れを指す者と見るべし。

に觸するが如し　と。
爾の時に、善非處天子は偈を以て讃じて曰はく。
非處の善法界に　一相を習學せば　魔の惱し能ふ若き者は　佛是の處無しと說きたまふ
と。
爾の時に、住處天子は偈を以て讃じて曰はく。
〔二九〕是の處及び非處を　愚癡の者に示現せんとて　如來は自覺し已つて　復衆生の爲めに說きたま
ふ　と。
爾の時に、善取天子は偈を以て讃じて曰はく。
彼の因にて取る所の　〔三〇〕事　及び昔作りし所の業　彼の因と修業との處を　世尊は皆悉く知りた
まふ　と。
爾の時に、巧業天子は偈を以て讃じて曰はく。
貪欲及び恚癡にも　佛は亦因業を知りたまひ　因と爲り業と爲る者は　如來は悉く彼れを知り
たまふ　と。
爾の時に、知當來天子は偈を以て讃じて曰はく。
彼の當來の世を知りたまひ　衆生の作る所の業と　彼の因の作る所の事と　是の處とを佛は悉
く知りたまふ　と。
爾の時に、思現在天子は偈を以て讃じて曰はく。
普く十方界に及んで　衆生の業と因との　處及び因業の事を　導師は悉く了知したまふ
と。
爾の時に、力境界天子は偈を以て讃じて曰はく。

【二九】是の處及び非處。是れ亦「有爲界」及び「無爲界」と見るべし。

【三〇】事。は理に對する語にして、普通には、因緣生の有爲法の名なれど、此の所は、次次の句の「業」と「處」とに對して「因の起す作用」と見るべきか。

若しは業若しは因と　處たる所及び出生を　如來は知りたまはざる無き　故に天人師と稱したてまつる　と。

爾の時に、樂力天子は偈を以て讃じて曰はく。

因業及び處たる所を　三世の果報の中にて　彼れに作す所の事あらば　如來は皆悉く知りたまふ　と。

爾の時に、力主天子は偈を以て讃じて曰はく。

因業の作る所の事たる　[三]報の因及び因の緣と　處たる所の性の　自ら離れたるは　是れ佛に等しきものある無し　と。

爾の時に、力吉祥天子は偈を以て讃じて曰はく。

因業の作る所の事と　處と因緣の世諦にて　受用する所の果報とは　佛彼れの悉く空なるを知りたまふ　と。

爾の時に、力悅天子は偈を以て讃じて曰はく。

因業の作る所の事と　俗諦の因緣の處とを　佛自ら悉く知り已りたまひて　彼れに自性無きを說きたまふ　と。

爾の時に、力遊戲天子は偈を以て讃じて曰はく。

因緣の作る所の事と　處との因緣の世諦は　自他に由つて生ぜずして　佛は緣從りして起ることを知りたまふ　と。』

【三】報の因及び緣。報は、因業に對する果報にして、其の因及び緣は、即ち前句の因と業たる事なり。

巻の第七十一

菩薩見實會　第十六の十一

淨居天子讃偈品　第二十三の二

爾の時に、力生天子は偈を說いて讃じて曰はく。

諸の因緣の業　及び得る所の果報の若きは　此の體性は悉く空なりと　佛の說きたまふことは師子の如し　と。

爾の時に、隨順力天子は偈を說いて讃じて曰はく。

業の因緣を以て　諸の[一]界を增長する若きを　兩足尊は能く知りたまへり　是の故に佛に等しきもの無し　と。

爾の時に、順行力天子は偈を說いて讃じて曰はく。

是くの如き[二]界を修習し　是くの如き業を造作せば　當に還つて是の報を得べきことを　佛眼は悉く能く知りたまへり　と。

爾の時に、力起天子は偈を說いて讃じて曰はく。

是くの如き界を修習して　是くの如き性を成就することを　佛は諸の衆生に知りたまふことは手の五指を觀るが如し　と。

爾の時に力行天子は偈を說いて讃じて曰はく。

是くの如き界を修習して　還つて是くの如き友に値ひ　是くの如くに相ひ親近することを　勝丈夫は悉く知りたまへり　と。

爾の時に力加天子は偈を說いて讃じて曰はく。

【一】界。亮本には「果」とあれど今元本及び宮本に據り「界」と爲す。

【二】界。第一卷「界處」の解、參照。

彼の界に　加持すれば　導師は能く了知したまひ　諸友に親近することを　人尊は悉く照見したまふ　と。

爾の時に決定界天子は偈を說いて讃じて曰はく。

彼の界をば彼れは要期し　彼の友と彼れは相應することを　佛は悉く決定して知りたまへる故に能く疑惑を除きたまふ　と。

爾の時に正定界天子は偈を說いて讃じて曰はく。

彼の界を彼れは相續するに　住する所の世間に　隨ひ[四]　行ずる所及び諸趣を　勝人は皆悉く知りたまへり　と。

爾の時に、學界天子は偈を說いて讃じて曰はく。

彼の諸界の中に於て　導師の智は能く知りたまへども　彼の智の體性は空なりと　勝智は是くの如くに說きたまふ　と。

爾の時に、乘界天子は偈を說いて讃じて曰はく。

彼の界を修習するに　機と時と住世とに隨ひ　佛は悉く實の如くに知りたまふ　故に無比の身と號したてまつる　と。

爾の時に、隨順界天子は偈を說いて讃じて曰はく。

彼の界を修習するに　得る所の功德に隨ひ　依因及び果報を　佛は知りたまひて悉く餘無しと。

爾の時に、共界住天子は偈を說いて讃じて曰はく。

界を修習する所に隨ひ　其の向ふ所の道に隨ひ　佛は悉く知りたまひて餘無き　故に智と爲して敬はれたまふ　と、

【三】加持。對象の事物に、業を加へて執持するを云ふ。

【四】隨ひ。俗語の「ママニ」のなり。

爾の時に、智行天子は偈を說いて讃じて曰はく。

界を修習する所に隨ひ　其の向ふ所の道に隨ひ　佛は衆生の行を知りたまふ　故に學智者と號したてまつる　と。

爾の時に、行無畏天子は偈を說いて讃じて曰はく。

正定及び邪定　及び不定の衆生　此の三聚の中に於て　佛は能く決定して知りたまふ　と。

爾の時に、乘行天子は偈を說いて讃じて曰はく。

正定の衆生の　涅槃に趣くに堪ふる者の若きには　佛は世間の日と爲つて　中に於て智は無礙なり　と。

爾の時に、解脫行天子は偈を說いて讃じて曰はく。

諸の衆生あつて　不定の聚に住して　諸の惡道に墮する若きにも　亦涅槃を說くことを爲したまふ　と。

爾の時に、力期會天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛は但假名にして　力智も亦是くの如く　及び四無畏等も　但言說に隨つて有るのみ　と。

爾の時に、見實天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛及び佛の法無く　亦餘の智聚も無しと　顯示したまふ第一義を　如來は實の如くに知りたまふ　と。

爾の時に、力住天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛の法力に住し　是れに因つて無畏を得　自在に欲する所に隨ふは　悉く是れ諸の佛子なりと。

爾の時に、法無畏天子は偈を說いて讃じて曰はく。

世諦及び眞諦と　此の二種を顯示したまひ　彼れは眞諦の中に於ては　不可得なりと言說したまふ　と。

爾の時に　智尊天子は偈を說いて讃じて曰はく。

法の言說は各異にして　法の相も亦復異るを　是の言說は無相なりと　佛は是の法の相を知りたまふ　と。

爾の時に、行精進天子は偈を說いて讃じて曰はく。

五處の不定に非ざる衆　或は異趣に向ふ　邪定の一切の處を　大牟尼は悉く知りたまふ　と。

爾の時に、信力天子は偈を說いて讃じて曰はく。

彼の界を修習して　如く信樂の心を起さば　貪は以て淨と爲るを見ることを　牟尼は悉く了知したまふ　と。

爾の時に、不淨乘天子は偈を說いて讃じて曰はく。

不實なる妄分別は　貪欲界を增長することを信ぜば　則ち彼の道を行ずることを　牟尼は實の如くに知りたまふ　と。

爾の時に、慈乘行天子は偈を說いて讃じて曰はく。

不實なるや妄分別は　瞋恚界を增長することを信ぜば　則ち彼の道に乘ずることを　牟尼は悉く了知したまふ　と。

爾の時に、乘因緣道天子は偈を說いて讃じて曰はく。

不實なる妄分別は　六愚癡界を增長することを　信ぜば則ち彼の道に乘ずることを　牟尼は悉く了知したまふ　と。

爾の時に、乘捨天子は偈を說いて讃じて曰はく。

【五】處の不定に非ざる衆。謂はゆる正定聚を謂ふ。第二卷「三聚」、第三卷「正定聚」の解、參照。

【六】愚癡界。略して「癡」とも云ふ。第一卷同名の解、參照。

不活の畏有る者は　嫉妬を增長することを　信ぜば彼れは則ち習行することを　牟尼は悉く了知したまふ　と。

爾の時に、習近善知識天子は偈を說いて讃じて曰はく。

善惡の友に近かば　還彼の惡界を增し　還彼の信を成ずることを　瞿曇は悉く了知したまふと。

爾の時に、識堅固天子は偈を說いて讃じて曰はく。

世間に流轉するは　隨所に界を修習するに　隨順して彼れを信じたるものなることを　佛は知りたまひて悉く餘無し　と。

爾の時に、行堅固天子は偈を說いて讃じて曰はく。

生死に流轉するは　是くの如き行を修習し　隨順して彼れを信じたるものなることを　佛は知りたまひて餘無し　と。

爾の時に、信根天子は偈を說いて讃じて曰はく。

若し諸の衆生あつて　隨所に界を修習せば　佛は悉く能く了知したまふ　故に無礙智と號したてまつる　と。

爾の時に、根行天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛は諸根は　其の方便に隨ひ　攀緣を起し及び境界に　隨所に入ること生ずるが如きを了知したまふ。

爾の時に、乘根天子は偈を說いて讃じて曰はく。

身の苦に逼迫せらるるは　貪著渴愛に由り　諸の渴愛を斷滅することは　唯佛智を勝れたりと爲す　と。

爾の時に、根境界天子は偈を說いて讚じて曰はく。
下根の衆生に　色愛を遠離することを教へ　利者に觀察することを教ふるは　兩足尊の說きたまふ所なり　と。
爾の時に、根勝天子は偈を說いて讚じて曰はく。
下根は空閑に住せば　能く貪欲を滅し　正しく渴愛を觀ずることを　兩足尊は能く知りたまふと。
爾の時に、根決定天子は偈を說いて讚じて曰はく。
先に起せる愛欲に於て　佛は無所得なるを觀じたまふ　知も無知にして寂滅なる　故に名けて勝根と爲す　と。
爾の時に、信根天子は偈を說いて讚じて曰はく。
慈を行ぜば瞋恚を除き　能く　[七]衆生智を起さば　彼れ能く恚界を滅することを　人尊は悉く能く知りたまふ　と。
爾の時に、求根天子は偈を說いて讚じて曰はく。
瞋らずして過惡無く　慈行の性も寂滅にして　淨穢も得べからざる　故に人中の尊と號したてまつる　と。
爾の時に、根順行天子は偈を說いて讚じて曰はく。
邪分別を行じ　他の爲めに邪行を說き　惑重くして方便無きをも　佛は　[八]見て解脫したまふと。
爾の時に、智起天子は偈を說いて讚じて曰はく。
貪瞋恚癡等は　[九]前事に取著するものにして　彼れに達せば智明を得ることを　大名稱は悉く

【七】衆生智。此所に言ふ衆生智とは、無衆生の智を謂ふものなるべし。

【八】見。の字の下には宮本には「倒」とあれど宋本の「而」を採用せり。

【九】前事。は現在前の事物なり。

知りたまふ　と。

爾の時に　離智愛天子は偈を說いて讃じて曰はく。

貪瞋及び愚癡　及び明闇の中の事は　其の性不可得なるを　兩足尊は悉く知りたまふ　と。

爾の時に、持威德天子は偈を說いて讃じて曰はく。

衆生の得る所の智を　得たる智の多少に隨ひ　成す所の智器に隨ひ　如來は悉く能く知りたまふ　と。

爾の時に、求根天子は偈を說いて讃じて曰はく。

智を以て智にて　諸の煩惱を遠離することを知るを　天人の師は悉く知りたまへる　故に我れ稽首して禮したてまつる　と。

爾の時に、一向樂根天子は偈を說いて讃じて曰はく。

國土及び時節　法を觀察する方便　煩惱穢及び淨を　如來は悉く空なりと知りたまふ　と。

爾の時に　智幢天子は偈を說いて讃じて曰はく。

衆生の根と欲と信との　上中下の差別　縛と解及び智慧を　悉く覺知無しと見たまふ　と。

爾の時に、根幢天子は偈を說いて讃じて曰はく。

諸根の上中下　煩惱と智及び受の　調伏と不調伏とを　佛は悉く無相なりと說きたまふ　と。

爾の時に、修根天子は偈を說いて讃じて曰はく。

禪たる　〔一〇〕解脫煩惱　〔一一〕正受三摩提にて　清淨を起す衆生を　如來は悉く能く知りたまふ　と。

爾の時に、力速疾天子は偈を說いて讃じて曰はく。

〔一二〕禪の寂滅を得たまへる故に　諸法の自性に於て　悉く皆能く了知したまふ　故に一切智と號したてまつる　と。

〔一〇〕解脫煩惱。解脫は禪定の別稱なり。禪定に依つて、繫縛・煩惱を脫却すること自在なるに由つて名く。此れに三解脫・八解脫等の種類あり。第一卷の各、同名の解、參照。
〔一一〕正受。三昧(Samādhi)の譯なり。無念無想にて諸法を領受すること、明鏡の物を映ずる如き者を謂ふ。
〔一二〕禪の寂滅。禪定の利益たる安住佛境の德を謂ふ。

爾の時に、力鎧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

若しは法及び自性を　能く此の法を說き　能く實の如くに正受したまふ　故に三世に著したまはず　と。

爾の時に、樂力天子は偈を說いて讃じて曰はく。

煩惱邪分別は　[一三]生を四種に起すを　能く業の生ずる所を知りたまふ　故に無比人と號したてまつる　と。

爾の時に、知力天子は偈を說いて讃じて曰はく。

能く清淨の法を知り　煩惱を對治して　能く業を宣說したまふ　故に佛を無比と號したてまつる　と。

爾の時に、[一四]力生天子は偈を說いて讃じて曰はく。

禪解脫に於て　三摩提正受を起せば　煩惱及び清淨を　佛は悉く虛假なりと說きたまふ　と。

爾の時に、力生天子は偈を說いて讃じて曰はく。

禪解脫の清淨　三昧及び正受は　彼れは不逸より生ずと　佛は此れに於て悉く知りたまふ　と。

爾の時に、力增長天子は偈を說いて讃じて曰はく。

大雄は此の中に於て　能く禪等に於て轉ずるに　[一五]捨の無礙に入るを知りたまへることは　風の空を行くが如し　と。

爾の時に、知前際天子は偈を說いて讃じて曰はく。

無數億の劫に於て　諸有の中に住しながら　過染を有つことを爲したまはざりし　故に勝丈夫と號したてまつる　と。

【一三】生を四種に起す。胎・卵・濕・化の四生を生ずるを謂ふ。

【一四】力生。麗本には「力士」とあれど、今、三本・宮本に據る。

【一五】捨。此所の「捨」は、內心寂靜にして何者にも執著せざる、謂はゆる「行捨」なり。

爾の時に、住前際天子は偈を說いて讚じて曰はく。

曾て過去世に於て　種種に佛に施し奉り　其の種種なる辯に於て　人尊は悉く獲得したまへり　と。

爾の時に、前際喜巧天子は偈を說いて讚じて曰はく。

昔世間に流轉しながら　法の如くに如の行を學び　曾て無量の佛に見えたまへる　故に能く深く法を解したまふ　と。

爾の時に、學前際天子は偈を說いて讚じて曰はく。

諸佛法王の所にて　大雄は昔修行し　佛の邊に於て學び已りたまへる　故に衆行を知りたまふを禮したてまつる　と。

爾の時に、本方便具足天子は偈を說いて讚じて曰はく。

無量億の劫に於て　無邊の諸佛の行を　修行したまふに勝精進なりしは　佛智を求めたまはんが爲めの故なりき　と。

爾の時に、本方便決定天子は偈を說いて讚じて曰はく。

一切の法を決定して　多億の劫に觀察し　一切法には入[一六]無く　但緣の和合なりと說きたまふ　と。

爾の時に、思前際天子は偈を說いて讚じて曰はく。

無量億の劫に於て　導師は曾て修行して　處と非處とを知りたまへる　故に　解世間と名けたてまつる　と。

爾の時に、簡擇前際天子は偈を說いて讚じて曰はく。

處と非處とに住して　業因と　界と根と禪解脫とを觀察したまふに　佛は悉く能く彼れを知り

【一六】入。此の「入」は「處」の義にして、即ち「十二入」を指す者なるべし。

たまへり　と。

爾の時に、觀察前際天子は偈を說いて讃じて曰はく。

過去に曾て觀察して　智慧力を增長したまへる　十力は大雄猛に　智を以て世間を觀じたまふ　と。

爾の時に、前際境界天子に偈を說いて讃じて曰はく。

大雄は本修行して　一切衆生の　淨行と不淨行とを知りたまへる　故に能く衆生を治したまふ　と。

爾の時に、觀察前際行天子は偈を說いて讃じて曰はく。

先づ衆生の　過去の所行たる　信樂及與び界を觀じて　然る後に衆生を治したまふ　と。

爾の時に、信力天子は、偈を說いて讃じて曰はく。

我れ今如來を信じたてまつる　不可思議の劫にて　本行じたまへる所を觀察するに　心悉く著する所無かりしことを　と。

爾の時に、智信天子は偈を說いて讃じて曰はく。

無數億の劫に於て　佛の昔行じたまへる所を思ふに　善男子能く　如來の德を測り盡すこと無かりき　と。

爾の時に、觀後際善巧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

如來は佛眼を以て　十方の衆生の　初生及與び死と　種種の業の相應とを觀じたまふ　と。

爾の時に、學後際天子は偈を說いて讃じて曰はく。

若き因及以び業にて　佛道に趣向するに隨ひ　牟尼は悉く彼れを知りたまふ　故に一切智と號したてまつる　と。

爾の時に、識生死天子は偈を說いて讃じて曰はく。
若し衆生は界の熏習を以て　諸業を造らば　衆生及び業習に　佛は[17]覺無きことを了知したまふ　と。
爾の時に、知生死天子は偈を說いて讃じて曰はく。
是くの如き朋友に近づき　是くの如き業を造作して　是くの如き道に趣向することを　牟尼は悉く了知したまふ　と。
爾の時に、[18]所須善巧天子は偈を說いて讃じて曰はく。
[19]須つ所のものは　其の作る所の業に隨ふことを能く知りたまへば　是くの如くに業を作り已らば　如來は悉く了知したまふ　と。
爾の時に、事善巧天子は偈を說いて讃じて曰はく。
是くの如き事に依り　是くの如き業を造作することを　佛の悉く能く彼れを知りたまへるは　皆是れ佛の境界なればなり　と。
爾の時に、知事天子は偈を說いて讃じて曰はく。
執著する所の事に隨つて　能く造作する所あるを　佛は諸根を了したまへる故に　悉く能く彼れの業を知りたまふ　と。
爾の時に、智善巧天子は偈を說いて讃じて曰はく。
若き智及與び事を　佛は彼れの妄想なりと知りたまひ　彼れに隨つて執著する如きをも　佛は亦知りたまふことに餘無し　と。
爾の時に、修作善巧天子は偈を說いて讃じて曰はく。
執著に隨つて業を造るは　煩惱に由る故なりと　佛は悉く能く彼れを知りたまへる　故に世間

【一七】覺。菩提の覺悟の義なり。別に事理を覺察する義に用ふることあり。
【一八】所須善巧。異譯本中にて、此れに當るべき者には、「明福業」とあり。
【一九】須つ所の、乃至、能く知りたまへば。異譯本の、此れに當るべき句には、「若し彼の福業を修せば、勝報は常に現前するを、」とあり。

の歸と爲したてまつる　と。

爾の時に、趣善巧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

趣に隨つて、業を造り　業に隨つて彼の果を得る如き　隨所の緣にて業を作ることを　佛眼は悉く了知したまふ　と。

爾の時に、攀緣善巧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

能く所緣に於て　緣ずるに隨つて業の成熟するを知りたまひ　諸趣に於て受くる報をも　佛は悉く知りたまひて失ふこと無し　と。

爾の時に、習氣善巧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

惡業の習氣を知りたまひ　善業のも亦復然く　過去に行へる所にて　衆生の趣中に趣くことを知りたまふ　と。

爾の時に、業善巧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

能く三種の業にて　現と未及び過去に　衆生は趣中に於て　凡べて中に於て迷惑することを知りたまふ　と。

爾の時に、報善巧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

少しく作りて多くの報を得　多く作りて少しき報を得るもの　及び多少の等を　外道は中に於て惑ふものを知りたまふ　と。

爾の時に、學業天子は偈を說いて讃じて曰はく。

〔二〇〕現報の業を知り　亦〔二一〕生報の業　及以び〔二二〕後報の業を知ることを　佛眼は悉く能く了したまふ　と。

爾の時に、知現法業天子は偈を說いて讃じて曰はく。

【二〇】現報の業。又、順現受業と云ふ。現生に因業を作り、現生に果報を受くる者を謂ふ。

【二一】生報の業。又、順生受業と云ふ。現生に因業を作り、未來の次生に果報を受くる者を謂ふ。

【二二】後報の業。又、順後受業と云ふ。現生に因業を作り、未來の第二生以後に果報を受くる者を謂ふ。

若し現世に業を作らば　現在に則ち報を受くるものを　佛は悉く能く了知したまへども　凡夫は解すること能はず　と。

爾の時に知生報天子は偈を說いて讃じて曰はく。

若し是くの如き業を作らば　[二三]異生に於て報を得ることを　彼れ大智は悉く知りたまへども　衆生は了すること能はず　と。

爾の時に、知後報天子は偈を說いて讃じて曰はく。

若しくは業の多億の劫にて　然る後に報を受くるを得るもの　或は復彼れに過ぎたるをも　如來は悉く了知したまふ　と。

爾の時に、知業不熟天子は偈を說いて讃じて曰はく。

若しくは造作する所の業の　其の業緣は未だ熟せずんば　未だ果報を得ざることを　如來は悉く了知したまふ　と。

爾の時に、觀業[二四]未熟天子は偈を說いて讃じて曰はく。

如來は善く業を觀じたまひて　若し[二五]業の相應する時には、諸の衆生に生ずることを　悉く皆能く善く說きたまふ　と。

爾の時に、善知業熟天子は偈を說いて讃じて曰はく。

彼の業は若し成熟せば　能く當來の報を與ふることを　佛は能く實の如くに知りたまひ　亦彼の智の空なることをも知りたまふ　と。

爾の時に、業熟決定天子は偈を說いて讃じて曰はく。

一切智は　輕き業及以び重きに了達して　能く衆生の[二六]欲を知りたまふ　故に我が尊と爲したてまつることを得　と。

【二三】異生。は異譯本に「凡生」とあり。

【二四】未熟。の「未」は恐らくは衍字なるべし。因みに、異譯本には「受報成熟」とあり。

【二五】業の相應。有漏の心心所と相應するを謂ふ。相應とは、契合一致の義なり。異譯本には、「和合」とあり。

【二六】欲(Rajas)。此の欲は倶舍に謂はゆる「作す所の事業を希求する」義なり。

爾の時に、知業輕重天子は偈を說いて讚じて曰はく。

惡道に趣く衆生の　其の業に隨ふをば見るが如くに　彼の業の若しは輕き重きをも　智者は悉く了知したまふ　と。

爾の時に、知衆生行天子は偈を說いて讚じて曰はく。

衆生の行ずる所　及び輕重の諸業を見て　雄猛は隨順して知りたまへども　外道は了すること能はず　と。

爾の時に、[二七]觀衆生行天子は偈を說いて讚じて曰はく。

[二八]衆生の行を觀じて　業報を宣說したまふこと　器の恒河の水に　鹽を投ずること一兩なるが如し　と。

爾の時に、[二九]學業天子は偈を說いて讚じて曰はく。

若し　[三〇]思を受けたる業ならば　佛は業は究竟せりと說きたまひ　亦學と無學との報をも　勝仙は已に宣說したまへり　と。

爾の時に、樂佛智天子は偈を說いて讚じて曰はく。

佛の勝眼にて見たまふ所は　三界の中の愚と智との　業に隨つて報を受くるを　見たまふこと微細なれば頂禮したてまつる　と。

爾の時に、說業盡天子は偈を說いて讚じて曰はく。

生死の衆生の所を　世尊大導師は　悉く了知したまひて餘無き　故に智無畏を禮したてまつる　と。

爾の時に、無所得天子は偈を說いて讚じて曰はく。

[三一]若き業及び生死　衆生の各趣く趣たる　彼の報は猶夢の如くなるを　兩足尊は悉く知りた

【二七】觀衆生行。異譯本には「善思惟」とあり。

【二八】「衆生の行等」の一偈。異譯本には「能く思擇せる善行ならば、少善たりとも勝報を招くことは、涓滴の水を以て海に置くに、永く滅(滅か)ずること無きが如し」とあり。

【二九】學業。異譯本には「入解諸法」とあり。

【三〇】思を受けたる業。思の心所に依る業にして、審慮し決定し及び思惟しつつ動作する業、即ち唯識家の謂はゆる實業に當る者なるべし。但し、此の一偈に當るべき異譯本の句には、「若し人能く永く有漏の分別の業を盡さば、當に無學の果を證すべしとは、是れ如來の說きたまふ所なり。」とあり。而して、若し此の異譯は正譯ならば、本譯の「受」の文字は何等かの誤寫にして、又、偈文全體の意義も異る者となるべし。

【三一】若き、乃至、趣たる。異譯本には「衆生の行ずる所は、唯、生滅に趣き、」とあり。

まふ　　と。

爾の時に、[三二]求煩惱天子は偈を說いて讃じて曰はく。

[三三]貪欲と瞋恚と癡とを　兩足尊の悉く盡したまへることは　猶夢に渴せる人の　諸冷水を飲みたるが如し　　と。

爾の時に、離分別天子は偈を說いて讃じて曰はく。

分別從りして　貪欲瞋恚癡を生ずることは　猶夢中の戲の如くなれば　勝說の者に歸命したてまつる　　と。

爾の時に、滅分別天子は偈を說いて讃じて曰はく。

若し分別を滅せば　則ち煩惱を盡すと名くること　[三四]夢に雲の散ずるを見るが如しと　人尊は此れを顯現したまふ　　と。

爾の時に、觀察漏盡天子は偈を說いて讃じて曰はく。

夢に天雨を見るが如くに　[三五]漏を起すことも亦是くの如しと　大雄は能く　漏を起す因緣を顯示したまふ　　と。

爾の時に、觀察夢天子は偈を說いて讃じて曰はく。

[三六]夢に天雨を見るが如くに　漏を起すことも亦是くの如しと　大雄は能く　凡べて迷惑して漏を生ずることを顯示したまふ　　と。

爾の時に、觀如夢を、天子は偈を說いて讃じて曰はく。

夢に天雨を見るが如く　隨順して諸漏を起せば　大雄は能く　凡べて迷うて諸漏を生ずることを顯示したまふ　　と。

爾の時に、如自性知天子は偈を說いて讃じて曰はく。

【三二】求煩惱。異譯本には「伏諸惑」とあり。偈文に照せば、偈題は、彼れと此れとを交換するを可とす。

【三三】「貪欲等」の一偈。異譯本には「愚癡にして欲に著する者は、渴して鹹水を飲むが如し。是の故に調御師は、之れを觀ること夢の事の如くにしたまふ。」とあり。

【三四】夢に雲の散ずるを見るが如し。此れに當るべき異譯本の句は「夢の中に夢の事を說くは、顚倒の所より起る。」とあり。

【三五】漏を起すことも、乃至、顯示したまふ。此れに當るべき異譯本の句は「夢の體の本無きを了せば、應に漏も有に非ざることを知るべし。」とあり。

【三六】夢に天雨、乃至、是くの如しと。異譯本には「夢の境は本假たれば、何ぞ曾て其の漏を見ん。」とあり。

女の夢に子を生み　生み已り還つて復死するに　喜を生じ亦悲を生ずるが如しと　佛の世を觀たまふことも亦然り　と。

爾の時に、思量夢天子は偈を說いて讃じて曰はく。

夢に首を斬らると見るが如くに　[三七]漏を盡すことも亦是くの如しと　自ら解し亦他に敎へたまふ故に悉解の者を禮したてまつる　と。

爾の時に、修習慧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

[三八]法を見て能く　夢に愛事に遇ふが如く　遠離せば彼れは實に非ざれども　是くの如くに世間を悅ばすと解了したまふ　と。

爾の時に、智心天子は偈を說いて讃じて曰はく。

[三九]如來の法を聞かば　空の法を以て自ら悅ぶは　夢の中に夢を說くが如しと　是くの如くに世間を曉したまふ　と。

爾の時に、歡喜意天子は偈を說いて讃じて曰はく。

禪定は能く　世間の天人をして喜ばしめ　諸趣を觀察することも　猶鏡中の像の如し　と。

爾の時に、決定慧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

如來の法を聞くに　猶空谷の音の如くにして　[四〇]人天の疑海を渡したまふ　故に人中の王を禮したてまつる　と。

爾の時に、幻喜天子は偈を說いて讃じて曰はく。

人の幻化を作すが如きは　愚人を迷惑すれども　智者は終まで迷はざるは　幻の實ならざるを知る故なり　と。

爾の時に、除相天子は偈を說いて讃じて曰はく。

【三七】漏を盡すことも、乃至、敎へたまふ。異譯本の此れに當る句には「彼れは、本よりの無得を、誰れか能く斷ずることを爲す者ぞと識りたまふ。」とあり。

【三八】「法を見て等」の一偈。異譯本には「彼の智にて、諸法は夢の境の和合の事も無く別離も無きが如く、此れを眞の勝義と爲すことを了したまふ。」とあり。

【三九】「如來の法を等」の一偈。異譯本には「佛に從つて正法を聞かば、心に虛空なる夢の中に夢の因を尋ぬるが若く、法の性も本是くの如きを了せん。」とあり。

【四〇】人天の疑海を渡したまふ。異譯本には「諸の天人を饒益したまふ。」とあり。

一切の世を觀ずるに　猶夢に幻を作すが如しと　我れ中に於て疑無きは　佛の法を聞く故を以てなり　と。

爾の時に、學幻天子は偈を說いて讃じて曰はく。

幻師の幻を作すが如きは　自は幻に於て迷はざるは　幻の虛なるを知る故を以てなり　佛の世を觀たまふことも亦然り　と。

爾の時に、觀妄想天子は偈を說いて讃じて曰はく。

妄想にて世間を生ずることを　大導師は悉く　精進して佛を念ぜば　夢中に卽佛を見るが如しと知りたまふ　と。

爾の時に、滅妄想天子は偈を說いて讃じて曰はく。

事に非ざるに能く欲を生ずるは　皆妄想に由つて起るを　四一不實なるに妄に欲を起すことを　人尊は實の如くに知りたまふ　と。

爾の時に、識解天子は偈を說いて讃じて曰はく。

猶深谷の聲の　其の響の實ある無きが如く　是の故に世に著せずと　是くの如くに世間を觀じたまふ　と。

爾の時に、說善巧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

四二彼の聲に實ある無きに　而も中に於て聽聞するを　人尊は此れを宣說して　諸の凡愚を救拔したまふ　と。

爾の時に、四三如說行善巧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

四四法の別義の中に於ては　衆生は異りて妄に取れども　能く行ずる者は法を知つて　中に於て疑惑を除く　と。

【四一】「不實なるに」一句。異譯本には「思無くんば亦貪無きこと、」とあり。

【四二】彼の聲の、乃至、聽聞するを。異譯本には「人の谷の響を聞くが如き、彼の聲は得べからざるを、」とあり。

【四三】如說行善巧。異譯本には「各各入解」とあり。

【四四】法の別義、乃至、妄に取れども。異譯本には「諸の愚夫は、執著して勝義の法に達せざれども、」とあり。

爾の時に、順義行天子は偈を說いて讃じて曰はく。

[45]若き義及び法をば實に　能く了する者ある無く　說くことも無く亦證することも無しと　牟尼は是の說を作したまふ　と。

爾の時に、[46]法假名行天子は偈を說いて讃じて曰はく。

煩惱たる垢漏習は　皆想の妄分別にして　穢汙及び清淨も　但假名の言說なりと　と。

爾の時に、[47]分別善巧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

一切は但名字なり　謂はく煩惱たる漏等　穢汙及び清淨は　大智の說きたまふ所なり　と。

爾の時に、[48]無依慧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

三界に於て著したまはずして　其の心は虛空の如くに　[49]惡を離れたる眞の福田なれば　心寂滅に頂禮したてまつる　と。

爾の時に、[50]不下劣天子は偈を說いて讃じて曰はく。

色に非ず非色に非ず　[51]欲に非ず涅槃に非ずして　佛心は依る所無きこと　其れ猶虛空の如くなり　と。

爾の時に、無欲天子は偈を說いて讃じて曰はく。

欲界の愛に離れ　色無色にも亦然く　貪癡を解脫したまへり　愛盡の者を頂禮したてまつる　と。

爾の時に、遠離愛天子は偈を說いて讃じて曰はく。

有と無有との中に於て　佛は永斷じて　三界を遠離したまひて著したまふこと無し　牟尼王を頂禮したてまつる　と。

爾の時に、障愛天子は偈を說いて讃じて曰はく。

【四五】「若き等」の一偈。異譯本には「最上なる勝義の法は、諸佛等しくして異る無し。說くことも無く亦聽くことも無く、及び彼の領悟する者も。」とあり。

【四六】法假名行。異譯本には「入解法」とあり。

【四七】分別善巧。但し偈文の內容は大に異り。異譯本には「善思惟」とあり。

【四八】無依慧。異譯本には「無依止」とあり。

【四九】惡を離れたる眞の福田なれば。異譯本には「善く施して報を希はず。」とあり。

【五〇】不下劣。異譯本には「無染汚」とあり。

【五一】欲に非ず涅槃に非ずして。異譯本には「欲に於て踏貪を離れ。」とあり。

三界を障蔽して　丈夫の行を行じ　能く衆生を解脱したまふ　救濟の者に歸命したてまつる
と。

爾の時に、解脱渇愛天子は偈を說いて讃じて曰はく。

結使を遠離し　後に於て生滅を盡したまひ　身心皆清淨なり　無怨親を頂禮したてまつる
と。

爾の時に、知自性天子は偈を說いて讃じて曰はく。

大雄は自性を解して　法の中には事無く　縛無く亦解も無きことを知りたまふ　見實の者を頂禮したてまつる　と。

爾の時に、出淤泥天子は偈を說いて讃じて曰はく。

愛欲の泥を遠離し　亦諸有をも離れたまひつつ　取も無く亦捨も無し　盡後有を頂禮したてまつる　と。

爾の時に、吐棄資緣天子は偈を說いて讃じて曰はく。

垢及び資緣を棄て　罪を捨て亦愛に遠り　亦諸蓋を離れたまへり　大導師に歸命したてまつる
と。

爾の時に、棄欲天子は偈を說いて讃じて曰はく。

利と不利とを棄捨し　無著の行 決定して　魔網を出離したまへり　無著の者を頂禮したてまつる　と。

爾の時に、[五三]樂利益天子は偈を說いて讃じて曰はく。

自及び他の道にて　惱熱を遠離する若き者ならば　大雄は彼の道を見しめたまへば　無礙見を頂禮したてまつる　と。

【五三】 樂利益。異譯本には「施無畏」とあり。

爾の時に、得名稱天子は偈を說いて讃じて曰はく。
佛智と相應して　說くの如くに觀ずる如き者は　彼れ能く煩惱を除けば　解世間を頂禮したてまつる　と。
爾の時に、無畏天子は偈を說いて讃じて曰はく。
諸法に於て決定したまひて　能く當に對すべき者無ければ　師子吼は無畏にして[五三]智海の吼も亦然り　と。
爾の時に、一切處無所畏天子は偈を說いて讃じて曰はく。
善く一切處を度り　諸の毒箭を遠離したまひて　無畏にして怯弱ならざれば　我れは最勝の者を禮したてまつる　と。
爾の時に、[五四]無所希天子は偈を說いて讃じて曰はく。
天乾闥婆に非ず　魔及與び梵に非ず　能く難問する有る者は　故に佛は師子の如し　と。
爾の時に、師子遊步天子は偈を說いて讃じて曰はく。
佛は法に於て無畏なるは　諸法を曉了したまへる故にして[五五]無礙なる故に著したまふこと無ければ　能く難問する者無きなり　と。
爾の時に、無怖天子は偈を說いて讃じて曰はく。
山林の師子の　怖無く亦畏無く　諸の禽獸を摧伏して　林中にて大に吼ゆるが如くに　世尊も是くの如くに吼えたまひて　諸の外道　天龍乾闥婆を驚怖せしめて　敵對する者を見ず　と。
爾の時に、一切處超勝天子は偈を說いて讃じて曰はく。
一切の三界の中にて　悉く皆都べて　力の佛に敵する者ある無し　故に我が歸依と爲したてまつる　と。

【五三】智海の吼も亦然り。異譯本に「智海は廣くして極無し。」とあり。

【五四】無所希。異譯本には「無所著」とあり。

【五五】無礙。とは差別の事相に善く通達するを謂ふ。

爾の時に、師子慧天子は偈を説いて讃じて曰はく。

大智は一切を見たまひて　諸法に於て畏無きこと　世間に與に等しきもの無ければ　我れ無所畏を禮したてまつる　と。

爾の時に、[五六]稱順生天子は偈を説いて讃じて曰はく。

自ら是れ正覺なるを知りたまふを　法の如くに能く難ずるもの無し　[五七]若く能く難ずる者あることは　世間には悉く有ること無し　と。

爾の時に、持藏天子は偈を説いて讃じて曰はく。

佛は師子吼を作して　諸の法藏を開顯したまふに　億の梵は説を聞き已つて　悉く菩提の心を發せり　と。

爾の時に、順威儀天子は偈を説いて讃じて曰はく。

彼の衆は大利を得ん　佛の威儀に順ずる者にして　菩提心を發し已らば　必ず勝導師と作ればなり　と。

爾の時に、順樂法天子は偈を説いて讃じて曰はく。

[五八]彼の世の大衆王は　佛の法を聞くを得已つて　能く菩提の心を發さば　必ず妙丈夫を成ぜん　と。

爾の時に、淨心天子は偈を説いて讃じて曰はく。

佛の説を聞くを得已つて　[五九]世間に與に比する無く　千億の衆生は等しく　勝菩提の心を發せり　と。

爾の時に、清淨流天子は偈を説いて讃じて曰はく。

人王は長夜に於て　[六〇]佛の學をば善く修習したまへる　故に佛の身は清淨にして　相の三十二を

【五六】稱順生。異譯本には「隨佛受生」とあり。

【五七】若く、乃至、有ること無し。異譯本には「佛所に隨つて生を受け、深妙の義を宣べんことを請ふ。」とあり。

【五八】彼の世の大衆生。異譯本には「彼の大心の衆生、」とあり。

【五九】世間に與に比する無く。異譯本の此れに常るべき語に「心清淨に」とあり。

【六〇】佛の學をば善く修習したまへる。異譯本には「理の如くに衆行を修め、」とあり。

嚴りたまへり　と。

爾の時に、無漏心天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛は漏を盡すことを得たまへる故　にて師子吼を作したまふに　上智慧の山を得たまへば　能く難問する者無し　と。

爾の時に、順衆生天子は偈を說いて讃じて曰はく。

三界の中にて悉く　天人及び修羅の　佛の漏は盡きじと言ふもの無き　故は佛は十力を具したまへばなり　と。

爾の時に巧慧漏天子は偈を說いて讃じて曰はく。

大勝沙門の漏は　皆悉く盡きて餘無ければ　是れに於て能く難ずるもの無し　故に佛は是れ我が父なり　と。

爾の時に寂滅行天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛は已に貪瞋　愚癡及び習氣を斷ち　亦惡業の[六一]行を滅したまへば　我れは寂滅の者を禮したてまつる　と。

爾の時に[六二]方便行天子は偈を說いて讃じて曰はく。

[六三]若く方便觀を以て　諸の煩惱を斷盡して彼の佛は[六四]智を滿足したまへり　是の故に我れ頂禮したてまつる　と。

爾の時に方便解天子は偈を說いて讃じて曰はく。

無量の巧方便を　導師は中に於て修し　彼の諸の煩惱を斷じたまへるに　皆悉く盡きて餘無し　と。

爾の時に、[六五]方便慧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

【六一】行。は集起の義を取り、有爲の五蘊を指すものなるべし。

【六二】方便。異譯本には「相應」とあり。以下、皆同じ。

【六三】若く方便觀を以て。異譯本の此れに當る句に「正行と常に相應し」とあり。

【六四】智。佛の一切智（一切智・道種智・一切種智を總括したる稱）を指す。但し異譯本には「一切智處」とあり。智處は、智地と同じく、即ち佛果を指す。

【六五】方便慧。俗諦の事相を照了する有分別の智にして謂はゆる如量智を指すものなるべし。

導師の世間を照したまふ　巧慧は盡くることある無き　故に諸の煩惱　及以び習氣を斷ちたまへり　と。

爾の時に、修寂滅天子は偈を說いて讃じて曰はく。

諸の煩惱を斷じたまへる故に　習氣も悉く餘る無く　是れに於て佛の大智は　不動にして畏る所無し　と。

爾の時に、觀道理天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛は煩惱を斷じ盡し　及び諸の習氣をも滅したまひ　照明なること佛の如きは　世間に更に比するもの無し　と。

爾の時に、斷使天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛は諸の習氣を斷じたまひて　腥臭の事ある無き　故に佛の一切智は　天中の最も勝慧なり　と。

爾の時に、住邊天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛は今の最後身にて　已に生の因緣を斷ち　諸漏を盡したまへる故に由り　世親として無畏を得たまへり　と。

爾の時に、無量智天子は偈を說いて讃じて曰はく。

大雄は種子を斷ちて　苦惱の芽を焚燒し　憂の枝蔓を枯涸せしめたまひたり　我れ離惱の者を禮したてまつる　と。

爾の時に、出坑澗天子は偈を說いて讃じて曰はく。

世尊は一切智にて　已に無明の坑を離れたまひ　佛行に已に淨を得たまひたる　故に佛は無畏を得たまへり　と。

爾の時に、度有天子は偈を說いて讃じて曰はく。

已に有の海を度つて　導師は作す所をば辦じたまひ　亦彼岸の　自利を捨てて[六六]無畏を得たまへり　と。

爾の時に、入涅槃天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛は已に寂滅を得て　悉く諸の煩惱　乃至少しの習氣をも破したまへば　世親には皆悉く無し　と。

爾の時に、法幢天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛は正法の幢を建てて　憍慢の幢を摧折したまはんとて　大雄は已に[六七]無量なる諸の法行を顯示したまへり　と。

爾の時に、[六八]法性天子は偈を說いて讃じて曰はく。

性に諸の[六九]了本を與へて　牟尼は諸法に達したまひ　善く群生に友たれば　我れは最勝海を禮したてまつる　と。

爾の時に、法充天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛法を渴樂したまへる　故に無所畏を得　著無くして諸の佛子に　而も師子吼を作したまふ　と。

爾の時に、求法天子は偈を說いて讃じて曰はく。

諸法を求めん爲めの故に　佛子は發心を得　及び佛の無畏を見て　有智は菩提を求む　と。

爾の時に、渴法天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛法を渴樂する故に　多億の衆生の輩は　佛の無畏を聞き已つて　深く大精進を發す　と。

爾の時に、法起天子は偈を說いて讃じて曰はく。

【六六】無畏。衆生を攝化するに、畏るるなき德を謂ふ。

【六七】無量なる諸の法行を顯示したまへり。異譯本には「衆生に正法を示したまへり。」とあり。

【六八】法性。異譯本には「法海」とあり。

【六九】了本。毫本には「子本」とあれど、意義通ぜざれば、明本に據つて改めたり。次に了本を了本際の約と見ば、諸法本來の究竟所を照了する事となる。因みに、此の偈の前二句に當るべき異譯本の句は「牟尼は諸法を說きて、大法の寶藏と爲し」とあるのみ。

佛の說法の勝れて　正法を建立したまへるを見　無畏に布施し已つて　佛子は菩提を求む
と。
爾の時に、持法天子は偈を說いて讃じて曰はく。
世尊の說きたまふ所の法の　甚深にして見るべき難きを　佛子は聞くを得已つて　無上菩提を
求む　と。
爾の時に、無悋天子は偈を說いて讃じて曰はく。
身命及び餘の財を　佛子は悋惜すること無く　佛の師子吼を聞いて　悉く妙菩提を求む　と。
爾の時に、無異慧天子は偈を說いて讃じて曰はく。
佛の說法を聞き已つて　心思に異るものある無く　佛無畏の所に於て　法を求めて律儀を持す
と。
爾の時に、無異行天子は偈を說いて讃じて曰はく。
法王の吼を聞き已つて　異路に趣かず　二乘に遠離して　無上菩提を求む　と。
爾の時に、近住天子は偈を說いて讃じて曰はく。
佛の師子吼を見　諸子は聞くを得已らば　定つて勝菩提を得て　當に如來の身を成ずべし
と。
爾の時に、近辯天子は偈を說いて讃じて曰はく。
佛世尊の所に於て　辯才を聞くを得已つて　如來の妙法の中に　深く喜樂の心を生ず　と。
爾の時に、得辯才天子は偈を說いて讃じて曰はく。
佛吼の無畏の時に　說きたまふ所は毀るべからざれば　信樂して心決定せば　終まで退轉の意
無し　と。

爾の時に、常喜天子は偈を說いて讃じて曰はく。

十力の吼の無畏を　有らゆる諸の佛子は　一切の時に歡喜し　心調じて菩提を求む　と。

爾の時に、無怯弱心天子は偈を說いて讃じて曰はく。

常に不怯弱を喜み　世尊の諸の佛子の　樂うて勝菩提を求むるは　佛語を聞く故を以てなり　と。

爾の時に、無礙心天子は偈を說いて讃じて曰はく。

彼等の佛を求むる心の　終まで退轉あらざるは　欣喜せる微妙の心にて　佛の善說を聞く故なり　と。

爾の時に、巧知無邊法天子は偈を說いて讃じて曰はく。

正法を修する故を以て　白法の黨は滅ぜずと　導師は[七〇]非處を知りたまへば　厭足の心を生じたまはず　と。

爾の時に、巧說法天子は偈を說いて讃じて曰はく。

黑法を修行する黨の　退滅せざる若き者にも　世尊は非處なるを知りたまへる　故に佛は畏るる所無し　と。

爾の時に、法性無畏天子は偈を說いて讃じて曰はく。

黑法は體性として爾く　必ず當に淨法を穢すべきも　彼れにて心を汚さざるは　佛は彼れの非處なるを知りたまへばなり　と。

爾の時に、行相應天子は偈を說いて讃じて曰はく。

黑法及び白法の　二は異にして相ひ合せざるを　佛は彼の義を說きたまへる　故に佛は是れ我が師なり　と。

【七〇】非處。は「是處」の誤寫なるべし。是處は道理を謂ひ、非處は不道理を謂ふ。因みに、異譯本の此れに當るべき句に「彼れの依る所の處を知りたまへばなり。」とあり。

爾の時に、巧知善不善天子は偈を說いて讃じて曰はく。

大雄は皆悉く　諸法は雜聚ならざるに　妄想にて分別する故にて　善法の中に於て退くことを知りたまふ　と。

爾の時に、如說行滿足天子は偈を說いて讃じて曰はく。

煩惱を行ずる者は　終まで白法を生ぜず　白法を生ぜざる故にて　當に知るべし必ず退滅することを　と。

爾の時に、樂解脫天子は偈を說いて讃じて曰はく。

若し解脫を樂ふ者にして　黑法を修行せば　佛は彼れの有つ障を說きたまふ　故に佛は一切智なり　と。

爾の時に、淨心天子は偈を說いて讃じて曰はく。

心に解脫を樂ふ者は　須く煩惱の事を知るべく　大雄は此の法を說きたまへる　故に佛は應受供なり　と。

爾の時に、見煩惱天子は偈を說いて讃じて曰はく。

煩惱の中に行じながら　煩惱を識らざる者をば　彼れは正法を知らずと　善逝は是くの如くに說きたまふ　若しくは諸惡を行じながら　善法より退かずと言ふ者は　解脫に於て器に非ずと

兩足尊は說きたまふ所なり　と。

爾の時に、調伏天子は偈を說いて讃じて曰はく。

欲及び憒鬧を離れ　亦瞋癡等を離るるには　佛の說く所の法の如くに　應當に是くの如くに修すべし　煩惱及び白法を　愚癡にして知らざる者は[七二]佛は彼れに於て師に非ずと　大仙は是くの如くに說きたまふ　と。

【七二】佛は彼れに於て師に非ずと。異譯本の此れに該當すべき句には「極りたる愚癡の者と爲す。」とあり。

爾の時に、勤修解脫天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛の對治の法を說きたまふは　煩惱を除かん爲めの故にして　彼れを行ずとも惑を盡さずと
能く撃難する者無し　と。

爾の時に、向解脫天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛の是くの如き法を說きたまふは　煩惱を斷ぜん爲めの故にして　若し修すとも惑を滅せずと
能く撃難する者無し　と。

爾の時に、方便相應天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛の是の說法は　諸の聲聞等の爲めなるに　若し修すとも證せざる者と　能く佛を撃難するもの無し　と。

爾の時に、趣解脫天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛の說きたまふ是くの如き法は　煩惱を斷ぜんと欲する爲めなるに　若く惑を滅せざる者と　能く佛を撃難するもの無し　と。

爾の時に、無畏功德天子は偈を說いて讃じて曰はく。

煩惱を滅せん故の爲めに　佛は不淨觀を說きたまふに　若く盡滅せざる者と　能く佛を撃難するもの無し　と。

爾の時に、善發心必修天子は偈を說いて讃じて曰はく。

慈にて能く瞋恚を斷ずるに　慈を修すとも若く斷ぜずと　能く佛を撃難するもの無きは　世尊は無畏を得たまへばなり　と。

爾の時に、淨目天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛は能く彼の智慧を修せば　愚癡を除くと說きたまふを　若く彼れは斷ぜざる者と　能く佛を

擊難するもの無し　と。

爾の時に、滅覺觀天子は偈を説いて讃じて曰はく。

七二 覺の對治を爲さん故に　七三 安般の念を説きたまふを　彼れを修すとも滅せざる者と　能く佛を擊難するもの無し　と。

爾の時に、尊重無相天子は偈を説いて讃じて曰はく。

吾我を斷ぜん爲めの故に　佛は空たる寂滅を説きたまふを　彼れを以て滅せざる者と　是れに於て能く難ずる者無し　と。

爾の時に、斷我慢天子は偈を説いて讃じて曰はく。

憍慢を斷ぜん爲めの故に　佛は無相の法を説きたまふを　若く修すとも滅せざる者と　能く佛を難ずるを見ず　と。

爾の時に、淨身天子は偈を説いて讃じて曰はく。

七四 深心に信清淨ならば　一切の煩惱盡くるを　彼れを修すとも斷ぜざる者と　能く擊難する者無し　と。

爾の時に、深解想天子は偈を説いて讃じて曰はく。

對治及び朋黨の　煩惱道を求むるものにして　畏無く佛を難ずる者を　如來は初より見たまはず　と。

爾の時に、解用天子は偈を説いて讃じて曰はく。

世尊は但名用にして　七五 此に彼の盡不盡をば　無畏に問難する者　彼れも亦但假名なり　と。

爾の時に、調伏身業天子は偈を説いて讃じて曰はく。

七六 智を以て善く解し已りたまひ　身業の流行を得べきものを　世尊は悉く　七七 遍知したまふ　故に

【七二】覺。覺觀の略にして、新譯の尋・伺に當る。卽ち粗と細との思慮なり。

【七三】安般(Ānāpāna)。出息入息と譯す。息の出入を數へて心を鎭むる觀法にして、之れを數息觀と名く。

【七四】深心に信清淨ならば。異譯本の此の句に當るべき者に「永く諸の疑惑を斷ちて、深心に常に寂靜ならば、」とあり。

【七五】此に彼の盡不盡をば無畏に問難する者。異譯本の此の句に當るべき者に「世俗は唯假名にして、唯對治道を起すのみ。」とあり。

【七六】智を以て、乃至、遍知したまふ。異譯本に此れに該當する者に「智を以て前導と爲し、身業は法に隨つて行じ、」とあり。

【七七】遍知。俗諦の事相たる有爲法を、其れ〴〵分別して皆知るを謂ふ。

一切智と號したてまつる　と。

爾の時に、知身天子は偈を說いて讚じて曰はく。

身業甚だ清淨なる　大雄は悉く餘無く　群生を憐愍したまへば　我れは世間の親を禮したてまつる　と。

爾の時に、身業簡擇天子は偈を說いて讚じて曰はく。

善く身業を簡擇して　衆生を憐愍し等しく　世を照して造作したまふ　故に勝丈夫と號したてまつる　と。

爾の時に、善見身業天子は偈を說いて讚じて曰はく。

身業に清淨を得たまへる　導師は悉く觀見して　諸の群生を憐愍したまふ　故に一切智と號したてまつる　と。

爾の時に、善觀身天子は偈を說いて讚じて曰はく。

善く觀得したまへる清淨に　身業は相應するを得て　群生を憐愍したまへる故に　勝丈夫は遊行したまふ　と。

爾の時に、成就語言天子は偈を說いて讚じて曰はく。

甘美なる功德を具し　綺澁を離れたる語の　智慧の相の圍遶せるにて　世親は而ち演說したまふ　と。

爾の時に、時語天子は偈を說いて讚じて曰はく。

時に依り義と相應し　無益の事を遠離せる　佛の言には不忠無ければ[七八]　衆生は悉く受けて行ず　と。

爾の時に、[七九]成就智慧天子は偈を說いて讚じて曰はく。

【七八】衆生は悉く受けて行ず。異譯本の該當句に「世間は成く尊重す。」とあり。

【七九】成就智慧。異譯本には「成就義利」とあり。

〔八〇〕惱まさずして衆生を愍むと　不濁と相應することを成ずるとにて　因果を壞らずと　佛は本より　是くの如くに說きたまふ　と。

爾の時に、不相違天子は偈を說いて讃じて曰はく。

乃至身命の爲めにも　未だ曾て妄語する有らば　是の故に佛の功德は　世に於て礙有る無し　と。

爾の時に、實語天子は偈を說いて讃じて曰はく。

〔八一〕佛は實語を行じたまへる因にて　是れを以て世は瞻仰して　至心に樂うて聽聞す　佛法を得んが爲めの故に　と。

爾の時に、〔八二〕從實生天子は偈を說いて讃じて曰はく。

世尊は實語を以て〔八三〕漸く菩提を備へ成し　諸法の眞實の性を　世尊は皆悉く知りたまふ　と。

爾の時に、實精進天子は偈を說いて讃じて曰はく。

諸の有爲の法に於て　性の如くに眞實に見たまへば　世尊は皆悉く　諸法の眞實の相を知りたまふ　と。

爾の時に、簡擇業天子は偈を說いて讃じて曰はく。

已れ及與び他に於て　身口意の業を知りたまふに　其の智の清淨なるを以ての　故に佛を無等と號したてまつる　と。

爾の時に、觀察意業天子は偈を以て讃じて曰はく。

人王の心意の業の　有らゆる思量の事は　衆生を悲念したまふなり　故に愍世者を禮したてまつる　と。

爾の時に、巧覺觀意天子は偈を以て讃じて曰はく。

【八〇】惱まさず、乃至、因果を壞らず。異譯本には「不饒益を遠離すると、安樂と相應するとにて、果報を壞らず。」とあり。

【八一】「佛は實語を」の一偈。異譯本には「佛の世間に出でて說きたまふ所は、皆眞實なり。是の故に諸の天人は、咸く樂うて妙法を聞く。」とあり。

【八二】從實生。異譯本に了實際とあり。

【八三】漸く菩提を、乃至、知りたまふ。異譯本には「最正覺を成ずるを得、衆生の諸法を了したまへば、正遍知者と名く。」とあり。

世尊の心に處を緣じたまふや　是の心は皆調柔にして　衆生を悲念したまふなり　故に愍世者を禮したてまつる　と。

爾の時に、巧方便天子は偈を說いて讃じて曰はく。

衆生の心に緣ずる所　意業の起作する所に　種種の智慧の生ず　世尊は悉く彼れを知りたまふ　と。

[八四]爾の時に、解慧天子は偈を說いて讃じて曰はく。

意業は是れ佛地にして　衆生を愍觀する故の　[八五]方便智も淸淨なるは　佛智に體性無ければなり　と。

爾の時に、巧知過去天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛は過去世を知りたまへば　人の行ぜる所の業の　戒と忍と精進と智との若きをも　佛は皆悉く彼れを知りたまふ　と。

爾の時に、觀察過去天子は偈を說いて讃じて曰はく。

[八六]過去の行を觀察するに　能く多億の佛の　過去に行じたまひし所の處にて　勝菩提を求めたまへる故を知る　と。

爾の時に、本行具足天子は偈を說いて讃じて曰はく。

本行の事を　億劫阿僧祇に憶念するに　佛は心に　佛の本行じたまへる所の處に著したまへる所無かりき　と。

爾の時に、觀察本行天子は偈を說いて讃じて曰はく。

阿僧祇億の佛に　導師は悉く曾て問ひたまひて　[八七]三昧力なる　種種の成佛の法を出生したまへり　と。

【八四】「意業は等」の一偈。異譯本には「佛は意を以て地と爲し、大悲もて衆生を觀じて、法の自性の空なるを知らせんとて、方便して開悟せしむ。」とあり。

【八五】方便智。衆生教化の方法手段即ち權方便の智なれば、又、之れを權智とも曰ふ。

【八六】「過去の行を」の一偈。異譯本には「宿に諸の德本を植ゑ、事を多億の佛に承け、今彼の昔心を滿して、菩提の果を獲得したまへり。」とあり。

【八七】三昧力なる等。異譯本には「三摩地に樂住して、種種の法を出生したまへり。」とあり。

爾の時に、本行生天子は偈を說いて讃じて曰はく。

無量の阿僧祇に　導師は三昧門を　過去の諸佛の所にて　曾て問うて亦修行したまへり　と。

爾の時に、觀察本住天子は偈を說いて讃じて曰はく。

八八 生死の中の多過なるに　應供と非應供とを　觀じ已つて衆生を化し　盲冥より度脫せしめたまへり　と。

爾の時に、厭過去世天子は偈を說いて讃じて曰はく。

彼此相ひ食噉し　亦曾て相ひ戲樂し　迭互に相ひ殺害せるを　世尊は皆悉く知りたまへり　と。

爾の時に、知未來境界天子は偈を說いて讃じて曰はく。

導師の未來の時の　智慧に礙ある無く　八九 衆生の信と業と報と　諸趣とを佛は能く知りたまふ　と。

爾の時に、九〇 從本行來天子は偈を說いて讃じて曰はく。

九一 世尊は過去に於て　智慧に障礙無く　善業の三摩提にて　趣を離れて諸趣を知りたまへり　と。

爾の時に、巧知未來天子は偈を說いて讃じて曰はく。

佛は未來の時に於て　智慧に障礙無く　死及び生の處を終めたまひ　業報に於ても亦爾り　と。

爾の時に、離有法天子は偈を說いて讃じて曰はく。

世尊は三界に王として　三世の中にて說の勝れたるは　佛智は常に無礙に　善く有の境界を知りたまへばなり　と。

【八八】生死の中の、乃至、非應供とを。
異譯本には「生死に過失多きに、應に作すべきと應に作すべからざるとを」とあり。

【八九】衆生の信と、乃至、諸趣とを。
異譯本には「衆生の行ずる所の行と、業に隨つて受くる其の報」とあり。因みに「信」は「心」の誤寫ならざるか。

【九〇】從本行來。
異譯本には「了前際」とあり。

【九一】「世尊は」の一偈。
異譯本に「如來は世間に出でたまひて、禪定の智力を以て、能く過去世の諸趣を知りたまふことに礙ある無し。」とあり。

爾の時に、九二用行天子は偈を說いて讃じて曰はく。

九三衆生の業行の趣　及び受くる果報の事　此等は但假名なりと　世尊は是くの如くに說きたまふ
と。

爾の時に、觀察現在天子は偈を說いて讃じて曰はく。

世尊は現在に王として　智慧は終まで礙らず　無數の佛土に於て　牟尼は皆悉く知りたまふ
と。

爾の時に、現在無畏天子は偈を說いて讃じて曰はく。

世尊は正しく　三世は悉く平等にして　九四究竟して有る所無きを觀察したまふに　迷惑するは凡
夫の智なり　と。

爾の時に、智無所住天子は偈を說いて讃じて曰はく。

導師は是くの如くに見たまふ　三世は住する所無し　九五法性に依るを以て　諸法には事無き故に
と　と。

爾の時に、教三世天子は偈を說いて讃じて曰はく。

九六過去及び未來と　陰は生ずれば必ず敗壞して　事無く自性無しとは　導師の顯說したまふ所な
り　と。

爾の時に、意無著天子は偈を說いて讃じて曰はく。

世尊は三世を　皆悉く堅牢無きこと　幻の如く亦焰の如しと說き　猶響の如しとも說言し
たまふ　と。

爾の時に、三世自在富天子は偈を說いて讃じて曰はく。

九七世尊は三世に於て　常に勤めて智慧を增したまひ　諸行は幻の如くにして　諸根の著する所無

【九二】用行。異譯本には「了世俗」とあり。

【九三】衆生の、乃至、果報の事。異譯本には「衆生は歸趣する所に、種種の想を起せども、」とあり。

【九四】究竟して有る所無きを。異譯本に「諸法に自性無きを、」とあり。

【九五】法性に、乃至、故にと。異譯本に「法は自性を離れたるを以て、一切得る所無し。」とあり。

【九六】過未、乃至、自性無しとは。異譯本には「過未は無躰にして、蘊起るとも倏ち滅に歸する、是くの如き輪迴の相を了せよ、」とあり。

【九七】「世尊は等」の一偈。異譯本に「如來の慧は無等にして、能く三世の諸根の、自性は空にして、一切は皆幻の如きを了知したまふ。」とあり。

きを知りたまふ　と。

爾の時に、[九八]欲到彼岸天子は偈を以て讃じて曰はく。

大雄は其の夜に於て　上菩提を證するを得たまひてより　世尊の勤進の欲は　今に至るまで退滅せず　と。

爾の時に、欲作精進天子は偈を以て讃じて曰はく。

[九九]世燈の有ちたまふ所の欲には　常に退滅あらずして　世尊の諸の子等も　甚だ精進の欲を樂ふと。

爾の時に、[一〇〇]建立欲作天子は偈を説いて讃じて曰はく。

[一〇一]世尊は欲の起るに從ひたまへども　猶水中の蓮の如くにして　世に爲つて染せられたまはざること　蓮の水に處るが如し　と。

爾の時に、欲解脱天子は偈を説いて讃じて曰はく。

欲及び世間親の　此の二つを法界と名くれども　不二にして二體無きを　世尊は皆悉く見たまへり　と。

爾の時に、精進生天子は偈を説いて讃じて曰はく。

精進の威德を以て　大菩提を剋く證したまひ　其の是と非との法に於て　終まで精進を捨てたまはず　と。

爾の時に、念具足天子は偈を以て讃じて曰はく。

佛は一切の處に於て[一〇二]心を發したまふに皆　其の善惡の法に隨順したまひたれば　佛の念には損減あらず　と。

爾の時に、攝心天子は偈を説いて讃じて曰はく。

【九八】欲到彼岸。異譯本に「樂欲行」とあり。

【九九】世燈の、乃至、退滅あらず。異譯本に「一佛は世の光明と爲らんとて、精進したまひて損減無し。」とあり。

【一〇〇】建立欲作。異譯本には「超欲想」とあり。

【一〇一】「世尊は等」の一偈。異譯本には「佛は世間に出でたまひて、極めて勇猛に精進にして、能く欲の淤泥を超えたまへること、蓮の水に著かざるが如し。」とあり。

【一〇二】心を發したまふに、乃至、損減あらず。異譯本に「常に彼の正念を起したまひ、是の故に道を成じ已つて、念の無減を獲得したまへり。」とあり。

〔一〇三〕世親は常に心を攝めて　諸の衆生の行を知りたまひ　其の修むる所の行に隨つて　其れが爲めに法を說きたまふ　と。

爾の時に、敬重般若天子は偈を說いて讚じて曰はく。

世尊の智慧の海の　邊際は得べからず　億の僧祇劫を經て　佛は說きたまふとも盡すべからず　と。

爾の時に、學解脫天子は偈を說いて讚じて曰はく。

無等の佛世尊の〔一〇四〕解脫は損減あらずして　解脫及び脫せる者を　佛に求むとも得る能はず　と。

爾の時に、會解脫智天子は偈を說いて讚じて曰はく。

世尊の解脫は　解脫知見にて　眞實は不滅なるを解したまへるに等し　自性無きを知りたまへるを以てなり　と。

爾の時に、觀察身天子は偈を說いて讚じて曰はく。

佛は〔一〇五〕然燈の始に於て　常に〔一〇六〕眞實の行を修したまひて　三業に過失無かりし　故に號して佛と爲さんと嘆ぜられたまへり　と。

爾の時に、深行天子は偈を說いて讚じて曰はく。

世尊に過失無きこと　餘の衆生の如くならざるは〔一〇七〕諸法の自性と　佛の自性とを知つて惑ひたまはざればなり　と。

爾の時に、大慧天子は偈を說いて讚じて曰はく。

佛は一切の種に於て　心念は迷惑したまはず　其の念の常に現前すること　譬へば油を鉢に滿せるが如し　と。

【一〇三】世親は、乃至、知りたまひ。異譯本には「如來は常に定に在つて、衆生の性欲を知りたまひ」とあり。

【一〇四】解脫は、乃至、得る能はず。異譯本には「最上の解脫を樂ひ、解脫を證したまへる故に出り、三有に於て著したまはず。」とあり。

【一〇五】然燈(Dipaṁkara)。又、錠光と譯す。釋尊の因行中の、第二阿僧祇劫の滿時に於て、未來成佛の記別を授けられたる佛なり。

【一〇六】眞實の行を修し。異譯本に「勝義法の行に達し、」とあり。勝義法とは大般涅槃を謂ふ。

【一〇七】諸法の自性と等。異譯本に「法の自性は空にして三際に於て礙無きことを知りたまへばなり。」とあり。

爾の時に、心不散亂天子は偈を說いて讃じて曰はく。
乃至少し許の時も　心念は終に亂れざるは　佛は不共の法を得たまへばなれど　衆生は悉く知らざるなり　と。
爾の時に、善解智慧天子は偈を說いて讃じて曰はく。
一〇八 思量の捨有る若きは　善逝には此の事無し　世尊の不共の法たる　其の法や不思議なり　と。
爾の時に、超一切天子は偈を說いて讃じて曰はく。
是の三界の中に於て　其の一切の法を知りたまへることは　一切、佛に如くは無し　故に難降伏と號したてまつる　と。
爾の時に、堅持天子は偈を說いて讃じて曰はく。
無上堅固の士　法に於て畏るる所無く　一切の佛に等同に　能く未覺の者を覺したまふと。』

【一〇八】思量の捨、乃至、此の事なし。異譯本に「一切衆生に於て、未だ曾て擇び捨てず。」とあり。

卷の第七十二

菩薩見實會　第十六の十二

[一]遮維迦波利婆羅闍迦外道品　第二十四

爾の時に、[二]遮維迦波利婆羅闍迦外道の八千人は、諸の阿修羅・迦樓羅・龍女及び諸龍・鳩槃荼・乾闥婆・夜叉・緊那羅・摩睺羅伽・空行の諸天・四天王天・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天・梵天・光音天・遍淨天・廣果天・淨居天等の、世尊を供養するを見、及び讃歎するを聞きて、希有の心を生じ、此の法門を聞きて便ち疑慮を生じたり。未だ聞かざる法を聞きたればなり。

彼れ外道等は、佛に白して言はく。瞿曇、我等は此の昔より未だ聞かざる法を聞けるが、聞き已つて遮維迦波利婆羅闍迦外道たるを樂まざるも、亦家に在るをも樂まず。我れ此の法に於ても、復疑慮を生じて敬信を生ぜず。都べて昔より來未だ聞かざる此の法なるに由つてなり。是の故に、我れも瞿曇沙門の所に於て、亦因縁を有てり。何を以ての故ぞ。沙門瞿曇の是くの如き神通變化を作せるを以てなり。是くの如き神通變化を作し已るや、其の變化を以ての故に、我等は此の諸天等の微妙の身を得たるを見、及び大衆の、瞿曇に歸伏する者の至つて多き——瞿曇の善く法を説くことを知れるを以ての故に、——を見たり。是の故に、瞿曇の所に於て復微信を生じたり。瞿曇は復、廣果天の爲めに是くの如き法を説きたり。一切の法は是れ如來なりと言ふ者なり。我等此れに於て甚だ疑慮を生じたり。云何ぞ、一切の法を名けて如來と爲すか。我等は、瞿曇の所に於て是くの如くに信を生ぜり。惟瞿曇のみ、我等の意の是くの如くなるを知るあり。と。是くの如くなれば、我等が爲めに説いて、令く我等をして此の所説の義を解して、疑網を離るるを得しめよ。と。座よりして起ち、是の請を作し已れり。

【一】當品名。異譯本には「外道婆羅門授記品」と爲しあり。
【二】遮羅迦波利婆羅闍迦。異譯本には「鉢哩沒囉惹迦」とあり。是れ波利婆羅遮伽(Parivrājaka)即ち普行外道なり。

世尊は、是くの如くに彼等に答ふらく。是を以て、我れ今還つて汝等に問はん。汝の意に隨つて答へよ。と。外道は佛に白さく。善い哉、瞿曇、瞿曇の我れに問ふことや。我れ今當に說くべし。と。佛は即彼れに問はく。汝等、知るや不や、云何にして母腹に胎入するかを。と。是くの如くに問ひ已るや、外道は佛に答ふらく。瞿曇、我れ諸論の中にて、三種の因緣和合せば母腹に胎入すと說けるを聞く。父母相ひ近づきて、貪染を生じて欲事を思量すると、思ふ故に欲を行ふと、是の故に胎入すると、是くの如くにして胎を成ず。と。佛言はく。汝等外道、意に於て云何。父母思ふ時に、彼の貪は母の心より起ると爲すや。外道言はく。不なり、瞿曇。佛言はく。母の思量より起るべきや。外道言はく。不なり、瞿曇。佛言はく。彼の貪は父の心より起るべきや。外道言はく。不なり、瞿曇。佛言はく。父の思量より起ると爲すや。外道言はく。不なり、瞿曇。佛言はく。意に於て云何。彼の父の貪欲は母腹に入るべきや。外道言はく。不なり、瞿曇。佛言はく。意に於て云何。父の心は母腹に入るや。外道言はく。不なり、瞿曇。佛言はく。意に於て云何。父の分別は母腹に入るや。外道言はく。不なり、瞿曇。佛言はく。意に於て云何。彼の胎は天の終より、已り來つて母腹に入るや。外道言はく。知らざるなり、瞿曇。佛言はく。意に於て云何。彼の胎は地獄の終より、已り來つて母腹に入るや。外道言はく。知らざるなり、瞿曇。佛言はく。意に於て云何。彼の胎は畜生の終より、已り來つて母腹に入ると爲すや。外道言はく。知らざるなり、瞿曇。佛言はく。意に於て云何。彼の胎は餓鬼の終より、已り來つて母腹に入ると爲すや。外道言はく。知らざるなり、瞿曇。佛言はく。意に於て云何。彼の胎は阿修羅の終より、已り來つて母腹に入ると爲すや。外道言はく。知らざるなり、瞿曇。佛言はく。意に於て云何。彼の胎は非色より來つて母腹に入るべきや。外道言はく。知らざるなり、瞿曇。佛言はく。意に於て云何。彼の胎は是れ色の來つて母腹に入ると爲すや。外道言はく知らざるなり、瞿曇。佛言はく。意に於て云何。受・想・行・

識の來つて母腹に入るや。外道言はく。知らざるなり、瞿曇。と。是の答を作し已るや、佛は外道に告げて是くの如き言を作さく。此の法は甚深なる寂滅にして、善く說くとも微妙にして測り難く、思量の境界に非ざれば顯示すべき難く、汝の知る所に非ず。是れ諸の外道は、異なる見・異なる忍・異なる種にて、正に非ざる處を樂欲して精進に行を修め、異なる見の中に於て決定して趣向すればなり。と。

佛は外道に言はく。若し善男子・善女人にして、[三]是くの如き善知識に遇はば、甚深なる法の中に於て眼目を生ずることを得ん。外道、譬へば、人あつて、其の眼根を患ふるに、良醫に遇ふことを得て眼目を治し瘥さば、其の淨眼を以て、現身に、能く昔より未だ見ざる色を覩るが如し。是くの如くに、外道、若し善男子・善女人あつて、信等の五根を具せざるに、善知識に遇ひて慧眼淨まるを得ば、淨慧の眼を以て深き法を見ることを得るなり。是の故に、汝等諸の外道の輩の、本昔より長夜に、邪論に誑惑せられて異見を作し、其の非なる法に於て善法の相を取り、解脫に非ざるに於て解脫の相を取り、出に非ざる處に於て其の出の相を生ぜるは、汝が師自ら壞りて亦汝等を壞れるなり。外道、人の自ら盲なるに、復餘の盲に、我れ汝を將ゐて去かんと語るが如きは、智者は當に、此等の二人は、其の路に非ざるに於て必ず墜落して、其の辛苦に遭ふこと有るを知るべし。外道、是くの如くに、若しは沙門若しは婆羅門にして、實には導師に非ざるに自ら導師と稱し、實には正覺に非ざるに我れは正覺なりと言ひ、實には出世の道を知る能はざるに我れ能く知ると言ひ、實には出世の道を見る能はざるに我れ能く見ると言ひ、實には淺き度の處を知る能はざるに我れ能く知ると言ひ、實には教師に非ざるに我れは是れ師なりと言ひて、彼の教ふる所の者は、是れを邪教と爲す。自ら正覺せるに非ずして教ふる所の悟は、亦是れ邪覺なり。實には出づることを解せずして我れ能く解せりと言ひて、彼れの教ふる所の出は、是れを邪出と爲す。實には道を知らずして我れは道を

【三】是くの如き、乃至、得ん。異譯本には「唯、正見を具して專心に修學せば、此の理趣に於て、方に能く了知せん。」とあり。

知れりと言ひて、其の示す所の者は、皆是れ邪道なり。實には淺き處を知らずして我れは處を知れりと言ひて、其の度す所の者は、反つて困厄せしむ。外道、譬へば、牛を牧する人の、淺き處を知らずして牛を驅つて水に入れ、深き處に於て彼の牛を渡して此れを捨つるや、未だ彼の岸に到らざるに、其の中流に於て困厄を受けて、救護を有つこと無きが如し。何を以ての故ぞ。牛を牧する人の、淺き處を知らざるに由る。外道、是くの如くに、汝等は、實には導師に非ざるに導師の想を作さば、其の化せらるる者は反つて困厄を受くるなり。外道、我れは是れ導師にして、實に化導に堪へたれば、其の化する所の者は正しく彼等を化するなり。我れは是れ正覺にして、言ふ所のものは虛ならざれば、我が悟れる所の者を、其れをして正しく悟らしむるなり。我れは是れ能く出でたるものにして、言ふ所のものは虛ならざれば、教へて出す所の者は、其れをして正しく出でしむるなり。我れは道を見たる故に、復能く他に示して、其の導かるる者に其の正路を示すなり。我れは淺き處を知つて、言ふ所のものは虛ならざれば、是を以て我が度す所の者は、其れをして正しく度らしむるなり。我れは教化の法を知りたれば、是を以て能く他を化するなり。我れは佛の法を知りたれば、能く他を覺悟せしむるなり。我れは出の法を知りたれば、他をして出づることを得しむるなり。我が正見に由る故に、復能く正しく他に示すなり。我れは度るべき處を知りたる故に、他を度し能ひて、將に度らんとする所の者に好き道を得しむるなり。汝等外道、解脫を樂はば、我れは是れ導師として今現前に在れば、汝等應に來つて、我が能く正悟せるにて具に出の法を解し、善く出の道を見て、能く淺き度の處と作すべし。汝等、一心に諦に聽いて善く思ひ、悉く樂願を生じて、正念の現前することに心を當に流注すべく勤精進を發せ。未だ證せざる法を證することを得しめん爲めの故に。未だ逮得せざる法を、獲得せしめん故に。昔より未だ行ぜざる道に、路を進めしめん故に。昔より未だ到らざる處に、到るを得しめん故に。未だ伏せざる魔を、降伏せしめん爲めの故

に。昔より未だ求めざる伴をば、伴侶に求めしめん故に。未だ得ざる[四]法方便に、方便を得しめん爲めの故に。外道我が説く所の如くんば、三つの法和合して受胎を得るなり。我れ今當に説くべし。汝等外道、一心に諦に聽け。當に汝等が爲めに受胎の法門を説くべし。外道、我れの、母と言ふ者は、是れ其の[五]過去に作る業の緣なり。我れの、父と言ふ者は、是れ其の過去に作る業の因なり。我れの、[六]乾闥婆と言ふ者は、謂はく。是れ業にて招く識なり。外道、我れの、迦羅羅と言ふは、謂はく。是れ業の定置せるものなり。外道、我れの、母腹と言ふは、業にて識を安んずる依處たる所なり。識は腹に住し已るや、生は增長するを得、漸漸に廣く闊ること、外道、譬へば、藥草の叢林の、大地に依つて增長するを得て、漸漸に廣く闊るが如し。外道、是くの如くに、彼の識の、母腹に入り已るや、增長し廓闊することも亦復是くの如くにして、彼の母腹中の嬰孩は、成長して方に產出することを得るなり。生じ已つて、漸く增して既に長大なるを得るや、行は、宿時の性——終り來りし處にて、彼れが過に行へる所に隨ふ、——を、此にて習起することを現ずるなり。彼れは、是れ智のみ知るものにして、愚は了し能ふに非ざれども、共に住せる交友を常に恒に觀察せば、方に其の性を知らん。外道、諦に聽け。彼の人は、若し地獄より終り來つて人中に生ぜる者ならば、當に是の相あるべきことを、智者は應に知るべし。其の聲は、嘶き破れたる騾の聲・忽急の聲・怖畏の聲・高き聲・淺き聲にして、小心にて常に怖れ、數數戰き悚れて其の毛數竪ち　夢中に多く大火の熾然たるを見、或は山に走るを見、或は火の爇を見、或は釜鑊の沸涌するを見、或は人あつて杖を執つて走るを見、或は己れの身の鋒れに爲つて刺るるを見、或は羅刹女を見、或は群れる狗を見、或は群象の來つて己れの身を逐ふを見、或は己れの身の四方に馳走して歸する處無きを見、其の心は少信にして親友ある無く、外道、是等の如き無量なる衆の相あれども、我れ今略して是等の如き相を説くのみ。是れを地獄より終り來つて人間に生ず　名け、此れは智の知る所にして、愚の

【四】法方便。異譯本の此れに當るべき句には「正法の藏」とあり。

【五】過去に作る業。胎兒の受生以前に於ける、母の作業を謂ふ。因みに、以下、皆父母の業を指す者とす。

【六】乾闥婆(Gandharva)。香食・尋香・香陰など譯す。卽ち中有・中陰の身を謂ふ。別に、帝釋天の侍神の名にも用ふ。

測り能ふものに非ず。外道、諦に聽け。彼の人は、若し畜生より終り來つて人中に生ぜる者ならば、當に是の相あるべきことを、智者は應に知るべし。闇鈍・少智・懈怠・多食にして、樂うて泥土を食ひ、其の性怯弱にして言語辯[七]ぜず、癡人に與して知友と爲り、黑闇の處を喜び、濁水を愛樂し、草木を嚙むことを喜び、脚の指を以て地を剜り掘ることを喜び、頭を動して蠅・虻を驅り遣ることを喜樂し、常に頭を昂げて欠し・呿き・空に噍むことを喜び、常に脚を跪め宜に隨つて地に臥すを喜んで、穢汚を避けず、常に空に嗅ぐことを喜び、裸形を喜樂し、常に虛詐・異言・異作を喜び、多く綺語を喜び、泥もて身に塗るを夢み、或は夢に、己れの身の田野に於て草を食ふを見、或は夢に、己れの身の衆くの蛇に爲つて纏繞せらるるを見、或は夢に、己れの身の山谷・叢林の中に入るを見る。外道、是等の如き無量なる衆の相あれども、我れ今略して是等の如き相を說くのみ。是れを畜生より終り來つて人間に生ずと名け、智者は能く知れども、愚は測り能ふに非ず。外道、諦に聽け。彼の人は、若し餓鬼より終り來つて人中に生ぜる者ならば、當に是の相あるべきことを、智者は應に知るべし。其の頭髮黃にして、目を怒らして直視し、常に飢渴・慳貪・嫉妬を喜び、飮食を饞ることを喜び、背いて人に說くことを喜び、身體饒毛にして眼精の光赤く、多く衆食を思ひ、貪つて積集することを樂んで割捨することを欲せず、善人を見ることを樂まず、見る所の財物を其の心に盜まんと欲し、乃至、其の少し許の財物を得れば卽便に欣喜し、常に財利を求め、不淨の食を樂み、他の資產を見れば便ち嫉妬を生じ、復他の財に於て己れの有の想を生じ、他に受用せらるれば便ち悋惜を生じ、好き食を說くを聞けば心に不樂を生じ、乃至、非路にて遺落せる果及び五穀を見れば、便ち貪心を生じて採取し收斂す。外道、是等の如き無量なる衆の相あれども、我れ今略して是等の如き相を說くのみ。是れを餓鬼の中より終り來つて人中に生ずと名け、智者は能く知れども、愚は測り能ふに非ず。外道、諦に聽け。若し阿修羅より終つて人中に生ぜる者ならば、當に是の相

【七】「辯」は「辨」の誤寫なるべし。

あるべきことを、智者は應に知るべし。高心・我慢にして、常に忿怒を喜び、鬪諍を好樂し、怨を挾んで忘れず、增上の慢を起し、其の身は洪壯に、眼白くして犬の如く、齒長くして多く露れ、勇健大力にして常に戰陣を樂み、[八]亦兩舌を喜んで他の人を破壞し、疎齒・高心にして他の人を輕蔑し、造くる所の書にて他の人を論ずるに、語の巧にして微密なるを知ると雖も、亦智力及び煩惱力あつて自ら身を養ふことを樂む。外道、是等の如き無量なる衆の相あれども、我れ今略して是等の如き相を說くのみ。是れを阿修羅より終り來つて人間に生ると名け、智者は能く知れども、愚の測る所に非ず。外道、諦に聽け。若し人より終り還人中に生ぜる者ならば、當に是の相あるべきことを、智者は應に知るべし。其の人は賢直にして、善人に親近して惡人を毀呰し、門望を好み惜み、篤厚にして信を守り、名聞及以び稱譽を樂好し、工巧を愛樂し、智慧を敬重し、慙と羞恥とを具へ、心性柔軟にして恩養を識知し、善友の所に於て心順じて違ふこと無く、捨施を好み喜び、人の高下を知り、善く前人の有益と無益とを觀て善く答對し能ひ、其の言義を領して善く和合し能ひ、亦乖離し能ひ、善く使を作して言語を宣傳し能ひ、種種の語に於て善く通達し能ひて憶持して忘れず、亦復是處と非處とを知り能ふ。外道、是等の如き無量なる衆相あるを、我れ今略して是等の如き相を說くのみ。是れを人中より終つて還人間に生ずと名け、智者は能く知れども、愚は測り能ふに非ず。外道、諦に聽け。若し天中より終つて人間に生ぜる者ならば、當に是の相あるべきことを、智者は應に知るべし。人と爲り端正にして清淨を樂好し、華鬘及以び香熏を著くるを喜び、香もて身に塗ることを樂み、常に洗浴を喜び、樂む所の五欲には、好き者を簡擇して惡しきを喜ばず、樂の音聲及以び歌舞を喜び、純ら上人に與して交友と爲り、下人に與して朋黨と爲らず、樓閣・高堂・寢室を好み喜び、慈を樂んで道を爲し、笑を含んで瞋らず、言を吐くに柔美にして、言語は善巧にして人をして喜悅せしめ、瓔珞及び好き衣服、嚴身の具を喜樂し、常に出入・行來に暢に步するを樂み、

【八】　亦兩舌を喜んで、乃至、樂む。異譯本に「多く脣吻を恃んで他を陵蔑し、亦、智力及び無畏力を有つて他の論を攻破し、以て自ら活命す。」

作す所は精勤にして終まで懈怠せず。外道、是等の如き無量なる業の相あれども、我れ今略して是等の如き相を說くのみ。是れを天中より終つて人間に生ずと名け、此れは智は能く知れども、愚は測り能ふに非ず。

外道、若しは善男子若しは善女人にして、此の相を超えんと欲せば、應に善知識に近づきて彼の人の意に順じ、彼れの作す所の者をば卽隨つて之れを作すべくば、彼の善知識は、彼れをして超度せしめんとて、其れが爲めに法を說かん。外道、地獄より終つて人間に生ずる者は、[九]地獄以前に人身を作せる時に、諸の過惡を造り瞋恚を起せる故に便ち殺害を作し、其の彼の業を以て牽かれて地獄に墮せるものにして、彼れは地獄に在るや種種の苦を受けたれば、後に人間に生ずるも猶習氣あるなり。是の人既に是くの如き相を知り已らば、必ず須く自ら、我れは地獄より來つて人間に生ぜるなりと知るべきなり。是の人、地獄の因緣を捨てん爲めには、應に善知識を求むべく、知識に遇ひ已らば、彼の善知識は瞋業を除かん爲めの故に慈悲を說き、亦慈悲と相應せる助道を說き、此等の行を以て、能く彼の人の餘殘の習氣たる地獄の因緣を除くなり。彼の善知識は、或は是の人の爲めに、慈悲と相應せる尸波羅蜜を說きて、彼の人の瞋恚過惡を斷除せんに、是の人慈悲を修する時に、六波羅蜜をば當に滿足することを得て、福德を增長すべきなり。外道、畜生より終り來つて人間に生ぜる者は、畜生已前に人身を作せる時に、愚癡の法を修行し積習し、癡を習へる故を以て便ち惡業を行ひ、彼の業を作れるに由つて畜生の中に生れたるなり。彼の人は、本畜生の身を受けし時に、諸の畜生と久しく居住せる故にて、畜生の儀式を行ひたれば、彼れは畜生より終り已りたれども、猶習氣の畜生の行法あるなり。是の人は、得たる人身に已に是くの如き法を聞かば、己身の行を見て、應當に自ら、我れは本必ず畜生の中より終り來つて人間に生ぜるなりと知るべきなり。是の人は畜生の行を捨てん爲めの故には、應に知識を求むべく、彼の善知識は是の人の愚癡の業を

【九】地獄以前に人身を作せる時に。異譯本には、單に「其の先因を以て」とあり。以下、皆然り。

除かん爲めの故十二因緣を說き、是の法を以ての故に愚癡は除くことを得るなり。彼の善知識は、或は彼の人の爲めに般若波羅蜜を說くに、旣に般若波羅蜜を聞く故にて、彼の人の愚癡の體性は自ら離れ、〔一〇〕是の觀を作す時に便ち智慧を生ずるなり。外道、餓鬼より終つて人間に生ぜる者は、餓鬼以前に人身を作せる時に、慳貪の法を修行し積集し、是の人慳貪の法を修行せる故に堅持して彼の業力を捨てざる故に、餓鬼の中に生じたるにて、諸の餓鬼と久しく居住せる故に、餓鬼の業を行ひたれば、彼れは餓鬼より終り已りたれども、由習氣の餓鬼の行法あるなり。是の人は、得たる人身に、已に是くの如き法を聞かば、己身の行を見て、應當に自ら、我れは本必ず餓鬼の中より終り來つて人間に生じたるなりと知るべきなり。是の人、餓鬼の行を捨てん爲めの故には、應に善知識を求むべく、彼の善知識は、彼の人の慳貪の業を除かん爲めの故に布施を說くを爲し、是の法を以ての故に、慳貪は除くことを得るなり。彼の善知識は、或は彼れが爲めに施と相應する助菩提の法を說き、其の慳貪をして悉 斷除することを得しめん。彼の善知識は、或は彼の人の爲めに檀波羅蜜を說かんに、是の人は檀波羅蜜を修行する故にて、〔一一〕六度は滿つるを得ん。彼の善知識は、或は彼の人の爲めに、一切の法の皆悉く平等なるを說かんに、是の人は法の平等を修する故を以て、般若波羅蜜は滿つるを得、般若波羅蜜を修する故を以て、流注して一切智の處に趣向せん。外道、阿修羅の中より終つて人間に生ぜる者は、阿修羅の已前に人身を作せる時に、多く善根を作せども憍慢を行ひたり。彼れは慢の故を以て諸業を作し、憍慢の業を修行し積集し已つて、彼の業力の故にて阿修羅の中に生れ、諸の修羅と久しく居住せる故に、阿修羅の業を行ひたれば、修羅より終り已りたれども、習氣の修羅の行法あるなり。是の人、得たる人身に、已に是くの如き法を聞かば、己身の行を見て、當に須く自ら、我れは本必ず修羅の中より終り來つて人間に生じたるなりと知るべきなり。是の人、修羅の行を捨てん爲めの故には、應に知識を求むべく、彼の善知識は、彼の人の憍

【一〇】「是の觀を」の一句、異譯本に「覺悟を生じて淨慧を發生せしめ」とあり。

【一一】六度。六波羅蜜に同じ。

慢の業を除かん爲めの故に[一二]聖住の處を說くことを爲し、是の法を以ての故に、彼れをして憍慢の業を除くことを得しめん。或は彼の人の爲めに空法門を說き、是の空法を以て、其の彼の人の慢業をして除くことを得、亦吾我を除いて無我の解を得しめん。或は彼れが爲めに、因緣の和合の故に諸法あり、和合の故を以て所作あれど、若し和合無くんば亦作す所無しと說かんに、是の觀を作し已つて、慢の[一三]使及び業を悉く除斷するを得るなり。或は彼の人の爲めに諸法の一相なるを說くに、彼れを修行する故に般若波羅蜜は滿つるを得、般若波羅蜜を修すること滿ち已つて、速に一切智を證して終まで退轉せざるなり。外道、人中より終つて人間に生ぜる者は、彼の人は昔人身を作せし時に、十善の業道を修行し積習し、彼の業を作し已るに數數修行し、彼の業力を以て還人中に生ぜるものにして、昔人と作りし時に、人と久しく居つて人の儀式を行ひたれば、今還人を得て由習氣あるなり。是の人は、是くの如き法を聞くを得已らば、應當に自ら、我れは本必ず人中より終り已つて、還人中に生じたるなりと知るべく、是の人、彼の習氣を超えん爲めの故には、應に知識を求むべく、彼の善知識は其れが爲めに、彼の人に無常の想を說き、無常の想を以て習氣を除かしむるなり。彼の善知識は、或は是の人の爲めに、生死の過と涅槃の至樂とを說かんに、是の人は、能く生死の過を厭ひて、涅槃の樂を欣ぶことを得るなり。彼の善知識は、或は是の人の爲めに六波羅蜜を說かんに、既に聞くを得已れば、無上菩提の心を發すなり。彼の善知識は、或は是の人の爲めに善方便を說かんに、是の人は此の善方便を以ての故に、即六波羅蜜を堅持し能ひ、速に一切智を證して終まで退轉せざるなり。外道、天中より終つて人間に生ぜる者は、天身の已前に人身を作せし時に、修する所の梵行、布施・持戒は皆來報を希ひ、是の人是くの如くに作業を修行し積習すること久しうし訖り、是の業力を以て天上に生じたり。天に生ずるを得已るや、天と久しく居りて天の儀式を行ひたれば、天より終り已りたれど、由習氣たる諸天の行法を有てるなり。是の人は得た

【一二】聖住の處。聖住とは「聖者の修行する所」の謂ひにして、即ち三十七道品を指す。（集異門足論に據る。）第一卷、同名の解、參照。而して、異譯本には「六度を說くを爲し」とあれど。「六」は「七」の誤記ならざるか。

【一三】使。使は驅役の義なり。煩惱は、該の人を驅役するに由り、煩惱の異名と爲す。

る人身に已に是くの如き法を聞かば、己れの身の行を見て、應當に自ら、我れは本必ず天中より終り來つて人間に生じたるなりと知るべきなり。彼の人天中の習氣を超えん爲めには、應に知識を求むべく、彼の善知識は、其の彼の人に、梵行を修持して來報を期せざらんことを教へ、報を求むるに於ては是れ其の過惡なることを說き、但淨梵行を修して依著する所無くんば、福を得ること無量なることを顯說し、[一四]布施を行じて來報を期せざらんことを教へ、報を求むるに於ては是れ其の過惡なることを說き、但布施を行じて依著する所無くんば、福を得ること無量なることを顯說することを爲し、持戒を行じて來報を期せざらんことを教へ、報を求むるに於ては、是れ其の過惡なることを說き、但禁戒を受持して依著する所無くんば、功德は無量なることを顯說することを爲すなり。彼の善知識は、或は彼れが爲めに善巧方便を說かんに、是の人は此の善方便を以ての故に、能く六波羅蜜を行じ、六波羅蜜を行じ已るや、六波羅蜜は漸く滿足することを得て、速に一切智を證して終まで退轉せざるなり。

外道、地獄より終つて人身を得たる者ならば、彼れは應に善知識に依るべし。知識に依り已つて、應に三世の佛の平等の法を聽くべし。平等の法を聞き已つて、應に勤精進を發して、[一五]城邑・聚落に依つて大衆と共に居り、四部の處を具して、更に互に相ひ佛法を論量することに於て、學問・難答すべくんば、三世の法の平等なることは、現に在前することを得て、一切の法に自性ある無きことを解せん。此の解を修する故にて、煩惱は漸く除せん。外道、畜生の中より終つて人間に生じたる者ならば、彼れは應に善知識に依り、親近して多聞すべし。近づきて多聞するを以て、愚癡を斷除せん。是の人は、復多聞の人及び諸の經論を求むと雖も、有に非ざる想を作さば、是の人は非有の想を觀察し已つて、自然に無自性の法を解證せん。是の人は、此の三世の法の平等なることの自然に現前するを以て、速に一切智を證して、終まで退轉せざらん。外道、餓鬼より終つて人間に生じ

【一四】「布施を行じて」の一句。異譯本に「布施を行じて、應に報を希ふべからざるを教へ、」とあり。

【一五】城邑、乃至、難答すべくんば。異譯本に「或は聚落城邑の中に於て、諸の比丘及び比丘尼諸の優婆塞、優婆夷等を化して、正法を講宣せば」とあり。

たる者ならば、彼れは應に善知識に依つて、布施を修行して其の慳貪を除き、諸の功德を作すべし。捨を修する故を以て、心積聚せず。是の人は此の三世の法の平等なることの自然に現前するを以て、一相の解を作さん。言ふ所の一相とは、卽是れ無相なり。是の人は此の無相の解を修せる故にて、速に一切智を證して、終まで退轉せざるなり。外道、阿修羅より終りて人間に生じたる者ならば、彼れは應に善知識に依つて、煩惱の魔と戰ふべし。何者か是れ煩惱の魔なる。謂はゆる憍慢なり。是の時に、彼の人は應當に觀察すべし。何者か是れ慢ぞ。是れは其れ誰れの慢ぞ。誰れか是の慢を受くるぞ。誰れか此の慢を以て煩惱の使を起すぞ。誰れか此の慢を捨つるぞ。と。是くの如くに推求する時には、慢の得べき無く、亦人あつて慢攝受する者あるを見ざるなり。彼の人、是くの如くに義を觀察する故に、慢の得べき無く、慢を起す者無く、慢と相應する境界も亦得べからず、亦人あつて能く慢を捨つる者あるをも見ず。と是くの如くに觀じ已つて、一法も得べき無きなり。復是の觀を作さん。[一六]惡攝受を以て、自ら己が身を誑し、他をも亦是くの如くすと。是の觀を作す時に、能く諸法には悉く自性無きを見、諸法に自性無きを見る故を以て法は有に非ざるを見、有に非ざる故を以て成就せざるを知り、成就せざる故に、卽、生せざるを知るなり。若し不生ならば彼れ不滅なるを知り、若し不生・不滅ならば、彼れは說くべきに非ず。若し不可說なるを解せば、則ち過去に非ず現在に非ず未來に非ずして、三世に得べからず。若し法は三世に不可得ならば、當に知るべし、未だ曾て得有り失有らざることを。と。外道、當に知るべし、此に是れ一切の法は平等なることを。此の一切法の平等なるを以て、當に知るべし、一切の法は是れ眞如の不變・不異にして、如來も亦眞如の不變・不異なれば、以て一切の法は卽是れ眞如なることを。是の故に慢を觀て知るを得ることは、是の人は人中より終つて人間に生ずるを得たるなり。憍慢の習氣力あるを以ての故に。乃至、彼の地獄の中より終つて人間に生ずるを得たるなり。慢の習を以ての故に。と、此の

【一六】惡攝受。慢に關する實存に執著するを謂ふ。

相を知ることを得るなり。若し慢の習無くんば、此れは人より來れり、乃至、此れは地獄の中より來れりと說くを得べからざるなり。外道、[17]此れを離慢の智慧と名け、彼の相には要ず巧方便を具するを以て、乃ち能く知ることを得るなり。又、般若波羅蜜は此の人を加持するに爲り、方に乃ち知ることを得るなり。と。

爾の時に、八千の諸外道等は、此の法を說くを聞きて無生法忍を得たり。彼等は無生忍に住するを得已るや、座よりして起ち佛足を頂禮し、却いて一面に住れり。彼の諸の外道は、却いて一面に住り已るや、異口同音に偈を說いて讃じて曰はく。

導師の智力の建立する所は　諸道の趣を知るに他に由らずして　諸の衆生の諸趣に遊ぶを知ること　掌中の菴羅果を見るが如し　諸見に由つて濁世間に趣くこと　譬へば雲霧の虚空を障ふるが如く　是れを以て群愚の常に流轉すること　譬へば衆盲の正路を失へるが如し　[18]世間を常と爲し無常と爲し　復有常亦無常と言ひ　又非常非不常と言ふは　譬へば盲象の城に入つて行くが如し　[19]世には邊有り復は邊無しと言ひ　復亦は有亦は無邊なりと言ひ　又非邊非無邊なりと言ひ、是れを以て流轉すること籠の鳥の如し　又身に即して是れ　[20]神我なりと言ひ　又身に離れて神我有りと言ひ　妄想の分別にて纒縛せらるること鳥の網を被つて心に苦を生ずるが如し　又　[21]自在天の化する所なりと言ひ　[22]非因の生ずる所なりと言ふあつて　一切衆生の　[23]見取の覆は　譬へば雲霧の月を障ふるが如し　由籠中の卵生の鳥の　諸の孔の中より常に出でんと欲するが如く　見取の衆生の是くの如き癡は　解脫せざるに於て籠の鳥の如し　又梵王及び　[24]世主を禮し　及び童子幷に　[25]圍紐を禮し　又　[26]方海の毘沙門を禮すること　賊に捉へられて諸神に求むるが如し　猶貧人の債主に遇ひて　債主の與めに保證に立たんことを求むるが如く　是くの如くに世間の、見取に著する　愚癡は天を求めて欲樂を希ふなり

【一七】此れを、乃至、具するを以て。異譯本には「此れを我慢を捨離する善巧方便波羅蜜多と名け」とあり。

【一八】世間を常と爲し、乃至、非不常と言ふは。此れは過去に於ける色心界、即ち世間の常住と・無常とに就いて、外道の立てたる見解にして、(一)常なり。(二)常なり。(三)常なるあり、無常なるあり。(四)常にも非ず、無常にも非ず。とする四種なり。

【一九】世には邊有り、乃至、非無邊なりと言ひ。此れは現在に於ける色心界、即ち世間の邊際の有と無とに就いて、外道の立てたる見解にして、(一)邊有り。(二)邊無し、(三)邊有る者あり、邊無き者あり。(四)邊有るにも非ず、邊無きにも非ず。とする四種なり。以上二項は、謂はゆる外道六十二見中の前四十句に當る。

【二〇】神我(atman)。數論外道の、常住・實在・靈妙なる我の體有りと執する者を謂ふ。此れに即蘊(身)の我と、離蘊(身)の我との區別を立つ。

【二一】自在天の化する所。自在天(即ち摩醯首羅)外道の見解にして、世界の有情非情の森羅萬象は、大自在天の身の顯現なりとする者を謂ふ。

佛は衆生の依る眞實を見たまふこと　譬へば手掌の五指を見るが如く　諸趣の中に於て百苦を受くること　譬へば群賊の牢獄に入れるが如くなるをも　世尊は彼れに於て慈悲を生じて諸の道行を修めて諸趣を知り　世尊は已に出獄の法を說きたまへること　王の子を生みて大赦を放つが如し　世を愍んで僧祇劫をも思はず　諸の苦行を修めて菩提を得たまひ　見取に壞らるる愚癡の輩に　佛は彼等をして解脫を得しめたまふ　是れと以に善逝人師子は　諸法の中に於て自在を得たまひ　我等見取にて正路を失へるを　佛は見取に於て我等を拔きたまふ　是れと以に世尊具大力の　無畏にして怨對する無きを具足したまひ　衆中に大吼したまふこと師子の如くなれば　我等も亦彼の法を得んことを願ふ　[二七]彼の能く三界を動かすと以に　亦彼の法を以て普く遍照したまひ　彼れを以て諸の衆生に授記したまへば　亦願はくば我等も彼れに値遇せんことを　と。

世尊は、彼れ諸の外道の、等しく得たる其の深信を知り、微笑を作すに如つて瑞光明を現せり。

爾の時に、慧命馬勝比丘は偈を以て佛に問はく。

佛は世間を愍み微笑を現して　以て此等外道の衆を見たまふ　唯願はくば如來彼の因　現したまふ所の微笑に何の義あるかを說きたまはんことを　善く因を解せる者は　因無くして微笑の瑞光明を現したまへるに非ず　善い哉能く微笑の光を現したまへることや　大衆は悉く皆佛を瞻仰したてまつる　世尊大衆は悉く疑を懷き　善逝の現したまへる笑光の　悉く皆猶滿月を觀るが如くなるを見たてまつるを以て　佛を瞻たてまつる願はくば微笑の因を說きたまはんことを　誰れか今日に於て勝れたる供を設け　誰れか今日に於て慈父を悅ばせ　誰れか今佛の功德に住するを得たる　善い哉大智願はくは演說したまはんことを　大衆は之れを聞かば必ず歡喜せん　皆外道の授記を得るに由つて　唯願はくは導師普く說くことを爲したまはん

【二二】　非因の生ずる所。非因外道卽ち自然外道の見解にして、萬物は因よりも緣よりも生ぜず、只、自然にして生ずるのみ。とする者を謂ふ。

【二三】　見取。劣又は邪の見解を確取執着するを謂ふ。

【二四】　世主を禮し及び童子。「世主」は或は大自在天或は梵天又は四王天を指すことありて一定せず。又「童子」は何者を謂へるか不明なり。而して、異譯本には此の句は全く無し。

【二五】　圍紐（Visnu）。大自在天の別名なり。

【二六】　方海の毗沙門。方海は「北海」の誤寫ならざるか。異譯本には、只「多聞天」とあり。第一卷「多聞天」の條、參照。

【二七】　彼の能く、乃至、値遇せんことを。異譯本には「如來は能く三千界を動かし、無量の光を放つて普く照明し、一切の諸有情を成熟したまふ。唯願はくば、菩提の記を與授せられんことを。」とあり。

ことを　何の乘中に於て如に道を得たるかを　善い哉牟尼心の惑を除かんとて　其の疑ふ者に於て疑網を斷ちたまはば　是れを以て大衆は歡喜を得て　一に佛に向趣して退轉せざらんと。

爾の時に、世尊は偈を以て馬勝に答へて曰はく。

善い哉馬勝巧に時を知り　能く如來に怨者を降せることを問へり　世間を憐愍して是の說を作して　能く導師自然の士に問へり　我れ當に彼の笑を現せる事を說くべければ　一心に諦に作せる所の因を聽け　汝宜しく欣喜して我が說　令く笑の義の爲る所の者を說くを聽け　此の諸の外道は皆調伏して　諸の惡見を捨てて善見に住し　是の世間の見取の惱を覩て　悉く悲心を起して菩提を求め　一切の見取を悉く捨つるを得　不濁の正見を知る故を以て　我れより無礙の記を聞くことを得て　悉く皆一切智を樂求せるは　過去の佛の所にて〔二八〕信を得已りて大慈なる兩足尊を供養することを　二億の諸佛の所に具足し　以て無上菩提に上れる故なり

佛の所にて檀を行ぜることも亦少からず　亦淨く戒を持ち禪定を修め　淨く智慧を修め精進を發し　諸の群生に於て忍辱を修め　常に六波羅蜜を修習し　智慧を簡擇して菩提を求めたるなり　馬勝の請問せる怨者を降すとは　發心して佛の菩提を樂求したるにて　彼の諸の苦惱は惡黨にて　有惡見取の中に依止したるに由れど　彼等は今勝導師を見て　諸の惡見を捨てて悉く餘す無く　眞に如來の教を解するを得たるを以て　佛の法に隨順して深き信を起したるなり　彼れは當來の多億の佛に於て　皆悉く供養して菩提を求め　其の未來の星宿劫に於て　皆佛と作るを得同一の號にて　號して普聞と曰ひ高き名稱にて　彼等大智は世間を度せん　彼の佛の國土は甚だ淸淨にして　種種の莊嚴は與に等しき無く　彼にて惡見を離れたる衆生の輩は　純ら菩提たる賢聖の處を求むれば　彼の國の衆生は惡趣を離れ　是の時も亦一切

〔二八〕信、麗本には「記」とあれど、前後の文意に由り、宋・元・宮・聖本の「信」とあるを採りたり。

の難無けん　彼等諸佛の壽命を得ることは　皆悉く壽を同じうして八萬歲にして　衆生の彼の佛の名を聞く者は　皆悉く上菩提を退かず　若し衆女あつて佛の名を聞かば　彼の女は皆悉く男身を得ん　と。

是くの如くに世尊降怨者の　諸の外道の與めに授記せらるるや　一切の天人は彼れを記するを聞き　欣喜して敬信を生ぜるは無かりき

卷の第七十三

菩薩見實會　第十六の十三

六界差別品　第二十五の一

爾の時に、淨飯王及び諸の眷屬は、阿修羅・迦樓羅・龍及び龍女・鳩槃荼・乾闥婆・夜叉・緊那羅・摩睺羅伽・呵羅竭闍天・四天王天・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天・梵摩天・光音天・遍淨天、乃至、廣果天を見、彼の供養を見及び授記を聞き、又、淨居の諸天の、偈を說いて佛を讃ずるを聞き、復、外道も亦授記を得るを聞き、淨飯王は是の思惟を作さく。是の事は、希有にして思ひ議るべからず。と。世尊の是くの如くに善く說き、一切の世間は聞き已つて咸く皆欣喜するや、是の時に淨飯王は、子を愛戀する故を以て、情意慇懃なり。

爾の時に、世尊は父の王に告げて言はく。我が說く所の法は、初に善く中に善く後にも善く、其の義深邃にして、其の味も亦善く、淳淨にして雜無く、淸白にして染無く、顯に梵行を說く法なり。何者か梵行なる。謂はゆる、六界を分別する法門なり。王、今諦に聽いて、善く之れを思念したまへ。當に王の爲めに說くべし。と。王言はく。善い哉、我れ今諦に聽かん。惟願はくば、之れを說きたまはんことを。と。佛言はく。大王、何者を六界を分別する法門と爲す。大王、言ふ所の六の界は、卽是れ[一]丈夫なり。六の[二]觸入も、亦是れ丈夫なり。十八の意識の境界も、亦是れ丈夫なり。大王、我が言ふ所の、六の界は卽是れ丈夫なりとは、我れ何が故に是くの如くに說くか。大王、何者か是れ六界なる。謂はゆる地界・水界・火界・風界・空界・識界なり。大王、此れを六界と名く。言ふ所の、六界は是れ丈夫なりとは、謂はゆる此れなり。我が言ふ、六の觸入を名けて丈夫と爲すとは、何が故に是くの如くに說くか。大王、言ふ所の觸入とは、何者か是れなる。謂はく、

【一】丈夫。「人」の意に用ひたる者の如し。但し、後には「男子」の意に使用しあり。

【二】觸入。意譯本に「觸處」とあり。

〔三〕眼の觸入にて諸の色を見る故なり。是くの如く耳・鼻・舌・身も亦是くの如くに、意の觸入にて法を知るを爲す故なり。我が言ふ六の觸入は是れ丈夫なりとは、此れを謂ふなり。我が言ふ、十八の意識の境界は是れ丈夫なりとは、何が故に是くの如くに說くか。大王、此の十八の意識の境界とは、何者か是れなる。謂はく。眼にて可意の色を見、以て憶想分別して思覺を生じ、不可意の色を見已つて、亦憶想分別して思覺を生じ、捨處の色を見已つて、亦憶想分別して思覺を生じ、耳・鼻・舌・身にも亦是くの如く、意にて法を知るにも可意の處の法をば知り已つて思想分別し、不可意の處の法をば知り已つて亦思想分別し、捨の處の法をば知り已つて亦思想分別するなり。大王、我が言ふ、十八の意識の境界は是れ丈夫なりとは、此れを謂ふなり。大王、地界に二種あつて、內あり外あり。大王、何者を內の地界と爲す。謂はく。自の身內に有つ所の、彼彼の身內に有つ所の、取ること有るを得て堅き者・强き者、謂はゆる髮・毛・爪・齒・塵・垢・皮・肉・筋・骨・髓・脾・腎・肝・肺・大腸・小腸・大便・脬膜・腦胲・大王、是等を名けて身內の地界と爲すなり。大王、何者か是れ身外の地界なる。謂はく。身外の所有にして得ず、取らざる堅き者、强き者、大王、是れを身外の地界と名くるなり。大王、身內の生ずる時には、從つて來たる所無く、滅する時にも去く所無きなり。大王、時有つて、女人は自ら、我れは是れ女人なりと分別す。自ら我れは是れ女人なりと分別し已るや、外の丈夫を見て、復彼れは是れ丈夫なりと分別を生ず。是の女人は彼れ是れ丈夫なりと分別し已るや、卽欲想を生ず。欲想を生じ已るや、欲の和合を樂うて、彼れ男子に於て染愛を生ずるなり。彼れ男子も亦是の分別を作すなり。我れは是れ男子なりと。自ら、我れは是れ男子なりと分別し已るや、外の女人を見て、復彼れは是れ女人なりと分別を生ず。此の男子は、是の分別を作し已るや、彼れ女人に於て染愛を生ずるなり。是に男子・女人、倶に染愛を生じ已つて、便ち和合するや、和合の故を以て歌羅羅有れども、大王、彼の〔四〕丈夫の分別及び所分別の事は、二つ倶に不可得

【三】「眼の觸入にて」の一句。異譯本に「眼は處に觸れて色を見、」とあり。

【四】丈夫の分別及び所分別。男子が女人なりと認識する事と、認識せらるる女人とを謂ふ。

なれば、女人の女人たる性も亦不可得に、男子の男子たる性も亦不可得なり。是れを以て[五]不相續にして分別を生ずる彼の分別も、亦自性は不可得なり。分別の自性の不可得なるが如く、是の和合の和合たる性の如きも亦不可得なり。和合の和合たる性の不可得なる如くに、是の歌羅羅の歌羅羅たる性の如きも不可得なり。若し自性にして不可得ならば、彼に云何ぞ能く堅強を生ぜん。大王、當に知りたまふべし、分別の故に因つて堅き者強き者あることを生ずれども、彼の堅、強の生ずる時に從つて來たる所無きことを。大王、時あつて此の身は終に塚間の死屍と爲るも、彼の死屍の堅・強の相の變壞する時に、東方に向はず、亦南・西・北方、四維・上下に向はざるなり。大王、是くの如きを、當に內身の地界と爲すことを知りたまふべし。大王、時あつて、世間の居處の悉く皆空虛なるに、復梵天の七寶の宮殿を生ずるも、彼の宮殿の堅・強の相の生ずる時に、從つて來たる所無し。是くの如くに、他化自在の諸天の、七寶の宮殿の堅・強の生ずる時にも、從つて來たる所無く、是くの如くに、化樂天・兜率陀天・夜摩天・三十三天・四天王天の有つ所の、七寶の宮殿の堅相の生ずる時にも、從つて來たる所無く、鐵圍山、大鐵圍山の堅固牢實にして、同一なる金剛の堅、強の生ずる時にも、從つて來たる所無く、是くの如くに、須彌山・[六]尼民達山・[七]育乾達山・[八]伊沙達山・[九]佉提羅迦山・[一〇]鞞達略山・[一一]毘那多迦山・[一二]阿葉波竭那山・鐵圍山・大鐵圍山・[一三]蘇達舍那山・[一四]摩訶蘇達舍那山・[一五]優常伽羅山・雪山・[一六]香山・諸の餘の[一七]黑山及び三千大千世界の成ずる時の若きも、彼の一切の堅強の生ずる時に、從つて來たる所無く、此の大地の厚さの、一百六十萬由旬の生じ已つて住するにも、大王、彼の堅強の生ずる時に、從つて來たる所無し。大王、又時に此の世界は壞するも、是の世界の壞せんと欲する時に、此の大地は、或は火に爲つて燒かれ、或は水に爲つて漂はされ、或は風に爲つて吹れて、悉く皆散滅すれども、彼の地の火に爲つて燒かるる時、乃至、煙・灰は、都べて見らるる無きこと、大王、譬へば、酥油の、火に爲つて燒かるるに、遺餘ある無きが如し。大王、是くの如くに、

【五】　不相續。或は不相應の誤なるべし。異譯本の次下の文に「身體實無くして、相應に非ざる故に」とあり。
【六】　尼民達(Nimiṃdhara)山。地持山と譯す。
【七】　育乾達(Yugaṃdhāra)山。持雙山と譯す。
【八】　伊沙達山。又、伊沙達羅山と書す。第二卷、同名の解、參照。
【九】　佉提羅迦(Khadiraka)山。檐林山と譯す。
【一〇】　鞞達略(Potalaka)山。又、補達落迦山と書し、海嶋、又、百花山など譯す。
【一一】　毗那多迦(Vinataka)山。障礙山と譯す。
【一二】　阿葉波竭那(Aśvakarṇa)山。馬耳山と譯す。
【一三】　蘇達舍那(Sudarśana)山、善見山と譯す。
【一四】　摩訶蘇達舍那(Mahāsudarśana)山。大善見山なり。
【一五】　優常伽羅山(原語不明)と書し、增一阿含經には「優閦伽羅」と書し、鐵圍山の表の香積山の側に在りとせらる。
【一六】　香山。又、香醉山と譯す。第三卷、同名の解(一二一頁)參照。
【一七】　黑山。又、黑嶺と云ふ。雪山の北、香醉山の南に在る群山を謂ふ。雪山に對して降雪少なく、山膚の常に見ゆる

此の三千大千世界の燒け已つて、灰燼は現れずして、後に水に爲つて漂はさる時にも、亦遺餘の見らるる無きこと、大王、譬へば、鹽を以て水に投ずるに、消滅して餘無きが如く、大王、是くの如くに、是くの如き三千大千世界も、水に爲つて漂ひ已るや、亦遺餘無きなり。大王、是くの如くに、三千大千世界を風の吹き壞る時に、遺餘ある無きこと、大王、譬へば、[一八]毘嵐の猛風の、諸の飛鳥を吹くに、彼の鳥は散滅して遺餘ある無きが如く、大王、是くの如くに、是くの如き此の三千大千世界も、毘嵐の猛風の吹き壞る所と爲つて、一切散滅して遺餘ある無きなり。大王、彼の地界の成ずる時に、從つて來たる所無く、壞る時にも去く所無きこと、大王、是くの如し。是くの如くに、內身の地界の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも亦去く所無くして、大王、彼の地界の生ずる時にも亦空に、住する時にも亦空にして、生、住の二時の體性は俱に空なるなり。

大王、彼れ水界にも亦二種あつて、內あり外あり。大王、是の內身の水界とは、謂はく。自の身內に有つ所、及び餘の彼彼の身內に得る所攝むる所の、若しは水、若しは水の性、若しは水の體、若しは潤、若しは潤の性、若しは潤の體にして、謂はゆる此の身中の淚・汗・洟・唾・膿・血・瘡汁・肪膏・髓・乳・痰・小便なり。大王、是等の如き物を身內の水界と名く。大王、何者か是れ身外の水界なる。身に得ざる攝めざる所の者の水、及び水の性、水の體、潤及び潤の性、潤の體にして、大王、此れを身外の水界と名く。大王、彼の身內の水界の生ずる時には、從つて來たる所無く、滅する時にも去く所無し。大王、愛する所の人を見て眼中に淚を流し、苦惱に逼られて亦復淚を流し、法を聞き敬信して亦復淚を流し、若しくば風、寒に遇ひて亦復淚を流し、眼の赤く痛む時にも亦復淚を流すが如きに、大王、彼の淚の出づる時に、從つて來たる所無く、滅する時に去く所無きを謂ふなり。大王、又、時に身內の水界は增長し、增長し已るや、彼れ水界を益して能く身內の火界を滅するに、彼の火界の滅する時にも、亦去いて至る所無し。大王、彼の[一九]身內たる外界の生ずる時にも、

に由つて名あり。

【一八】毘嵐。吠嵐婆と同じ。第二卷、同名の解(二六〇頁)參照。

【一九】身內たる外界。謂はゆる「內外身」と云ふ者にして、自已以外の他人の身體を謂ふ。

亦從つて來たる所無く、滅する時にも亦去く所無し。大王、彼の身內たる外界の生ずる時にも亦空にして、滅する時にも亦空なれば、其の水界の性も自ら是れ空なり。大王、時有つて彼の內の火界增長し、增長し已るや、能く身內の水界を竭すに、彼の水界の燒け竭くる時にも、去いて至る所無し。大王、彼の身內の水界の生ずる時に、從つて來たる所無く、滅する時にも亦去く所無ければ、大王、彼の身內の水界の生ずる時にも亦空にして、滅する時にも亦空にして、體性自ら空なり。

大王、又、時として此の世界は壞る。大王、此の世界の壞れんと欲する時に、虛空の中に於て三十二重の雲を興して住る。遍く三十二重の雲を興して住り已るや、遍く三千大千世界を覆ふ。遍く三千大千世界を覆ひ已るや、五中劫を經るまで天より大雨を降らし、流れ注いで絕えざること象王の尿の如し。其の後、復五中劫を經るまで、麁き大雨を降らす。爾の時に當つて、其の水積み滿ちて上梵天に至る。大王、彼の大水界の初め生ずる時に、從つて來たる所無し。大王、又、時として此の世界の居處の壞るる時に、此の世界の中に第二の日出で、二つの日の出づる時に、小河の泉源は悉く皆枯れ盡く。大王、又、時に此の世界に第三の日出で、第三の日の出づる時に、大池・江河悉く皆枯れ竭く。大王、又、時に此の世界に第四の日出で、第四の日の出づる時に、四大河の本源も亦悉く枯れ盡く。大王、世界に又、時に第五の日出で、第五の日の出で已るや、大海の中の水の、一由旬・二由旬・三由旬・四・五、乃至、十由旬は悉く皆枯れ盡き、二十・三十・四十・五十由旬の海水は枯れ盡き、一百由旬・二百由旬・三百、乃至、千由旬も亦皆枯れ盡き、二千・三千・四千、乃至、一萬由旬も悉く亦枯れ盡き、二萬・三萬、乃至、四萬四千由旬の大海の水も盡きて皆枯涸す。大王、又、時に大海の中の餘殘の水は、四萬由旬の餘殘の水在り。三萬・二萬・一萬由旬の餘殘の水在り。後復漸く盡きて、九千・八千、乃至、一千由旬、九百・八百、乃至、一百由旬の餘殘の水在り。九十由旬、八十・七十・六十・五十・四十・三十・二十、乃至、十由旬・九由旬・八由旬、乃至、一由旬の餘殘の水在り。五

里、下至、十多羅樹・九多羅・乃至、一多羅、十人、乃至一人の餘殘の水在り。一人の身に於て、咽に齊しく、腋に至り、臍に至り、腰に至り、胯に至り、〔二〇〕蹲に至り、踝に至つて餘殘の水在り。乃至、牛跡の水在り。大王、爾の時に當り、大海の中に唯少しく濕へる相あること、麁き雨の、時に乍ち濕ひ乍ち乾くが如し。大王、譬へば、麁き雨の滯滯として濕ふあるが如くなれども、未だ周く匝らざるが如くに、大海の水も亦復是くの如し。大王、又、時に大海の中に有つ所の濕へる處は、唯一指の面を潤すのみ。大王、彼の水界の漸く滅する時、去くに至る所無く、亦東・西・南・北・四維・上下に詣らざれば、大王、彼の水界の生ずる時も亦空に、住する時も亦空に、滅する時も亦空なり。是くの如くに、大王、〔二一〕彼れ水界の性は不可得にして。唯但の用あるのみ。然く彼れは但の用にして男に非ず女に非ざるなり。

大王、火界にも亦二種あり。一には內、二には外なり。大王、何者か是れ內の火界なる。大王、身內に有つ所及び他の身內に有つ所、取る所の、火と火の體と火の相と、熱と熱の體と熱の相との謂はゆる能く飲食を消す者にして、身中に有つ所の溫・暖・蒸・熱の、熱の數に入る者なり。大王、此れを身內の火界と名く。大王、何者を身外の火界と爲すか。身外の所有にして、取らず受けざる者、謂はゆる火と火の體と火の相との溫・暖・蒸・熱なり。大王、此れを身外の火界と名く。大王、又、時に歌羅羅の胞胎の中の身內の火界の增盛なるや、水界は漸く微なり。是の故に歌羅羅は漸く稠に漸く堅きこと、大王、譬へば、鐵器にて錫の餔を煎煮するに火力の故を以て漸漸に稠に强きが如くに、大王、是くの如し。是くの如くに、火力を以ての故に歌羅羅の漸く稠に漸く堅きや、歌羅羅の、漸く稠に漸く堅き故にて遏浮陀と名け、遏浮陀の、火力を以て成ずる故にて名けて卑尸迦と爲し、卑尸迦の、火力を以て成ずる故にて名けて堅固と爲し、堅固の、火に爲つて成ずる故にて五支を生ずること是くの如し。是くの如くにして、大王、彼の水界は火界に爲つて成熟するなり。是

【二〇】蹲。は原本に「蹲」あれど誤なるべければ改めたり。

【二一】彼れ水界の、乃至、女に非ざるなり。異譯本に「自性空なる故、男相ある無く亦女相無く、但唯、言說の顯示する所のみ。」とあり。

くの如くに、是に彼の水界の漸く稠に漸く堅き故にて肉團を成ずる如きも、大王、彼の火界の生ずる時に、從つて來たる所無くして、能く彼の水界を燒滅するなり。大王、又、時として當に病人あつて、身內の火界の悉く皆滅盡するあるべし。彼れ病人の身內の火界の旣に滅盡し已るや、食ふ所の物を復と消化せず。其の彼の病人の消すこと能はざる故に、後に於て復更に食に進む能はず。食すること能はざる故にて、身內の火界は悉く皆滅盡す。彼の人、食に進むこと能はざるを以て、身內の火滅する故にて、必ず當に命終るべし。大王、火界の滅する時に、東方南・西・北方・四維・上下に至らざれば、大王、彼の火界の生ずる時にも亦空に、滅する時にも亦空にして、彼れ火界は本より以來、體性自ら空なるなり。大王、時あつて世界は壞る。世界の壞るる時に、身外の火界は、增盛に洞なること一なり。洞なること一にし已つて遍く三千大千世界を燒けども、大王、彼の身外の火界の生ずる時に、從つて來たる所無し。大王、又、時として彼の大火聚は遍く三千大千世界を燒き已り、還つて復滅盡すれども、大王、彼の火の滅する時に、東方・南・西・北方・四維・上下に至らざれば、大王、彼の身外の火界の生ずる時も亦空に、滅する時も亦空なり。彼の大火界の體性は、自ら空にして有に非ざれば、不可得にして唯是れ但の用なり。然く、彼れは但の用にして男に非ず女に非ざるなり。

大王、風界にも亦二種あり。一には內、二には外なり。大王、何者か是れ身內の風界なる。自己の身內及び他の身內に有つ所の風界にして、受くる所取る所の風と風の體と風の名と、速疾、不速疾の體と速疾の名となり。謂はゆる、身の四支に住する者は、是れ風なり。胃に住する者は、是れ風なり。五體に行く者は是れ風なり。諸の子支に行く者も、亦皆是れ風なり、遍く大小の支に行く者も、亦是れ風なり。出入の息は、亦是れ風なり。略して之れを言はば、身に遍うして行くもの、悉く皆是れ風なり。大王、此れを身內の風界と名く。大王、又、時として身內の風界は增長に集合

す。彼の増長に集合する時に、能く水界を枯燥し、亦能く火界を損滅す。時に于て水界を枯燥し火界を損滅し已るや。人身をして、潤澤無く亦溫暖無く、心腹鼓脹し、四支僵强し、諸脈洪滿し、筋節拘急ならしめ、彼の人、爾の時に大苦惱を受け、或は復命終れども、大王、彼の身內の風界の生ずる時に、從つて來たる所無きなり。大王、又、時に彼の病人の、良醫に遇値するや、醫は彼の病人を觀已つて、病に應じて藥を處するに、病に隨ひ藥を與ふる故にて風病除愈すれども、大王、彼の風界の滅する時にも、亦去く所無きなり。大王、彼の身內の風界の生ずる時にも亦空に、滅する時にも亦空にして、身內の風界の體性は自ら空なるなり。大王、何者か是れ身外の風界なる。身外の所有にして、身に取らず受けざる所の者の風と風の體と風の名と、速疾と速疾の體と速疾の名となり。大王、此れは是れ外の風界なり。大王、又、時に彼の外の風界は增盛し、增盛する故にて風界は集合し、集合する時に、葉を落し、枝條を折り、樹を折り、根を拔き、山峯を崩摧し、大山を倒壞し、破析し分段して、漸次に散壞して乃ち微塵に至る。而して此の三千大千世界の、風に爲つて吹かれ、周く廻つて旋轉すること、大王、譬へば、陶師の杖を以て輪を轉ずるが如く、三千大千世界の、風に爲つて轉ぜらるること亦復是くの如くに、少しき麥麨の風に爲つて吹かれ、末に碎け塵となり、見ることを得べき難きが如し。是くの如くに、大王、此の三千大千世界の、風に爲つて吹かれ、破析して末と作り已つて微塵を成し、微塵を成し已つて亦見るべからざること、大王、譬へば大猛なる風輪の起れるに、一把の土を以て風に隨つて之れを散ずるに、乃至微塵をも亦見るべからざるが如し。是くの如くに大王、此の三千大千世界は、風に爲つて吹かれ分析して末と作り、分析して末と作り已つて、乃ち一の餘殘の微塵も見るべき無きに至るも、大王、彼の外の風界の生ずる時に、從つて來たる所無きなり。大王、又、時に夏の初に、彼の外の風界は皆悉く隱れ滅す。隱れ滅する故に暑熱して風無く、草木の上に於て露無し。露無き故を以て一切の草木に濕潤ある無

きも、大王、彼の外の風界の滅する時にも、亦去く所無きなり。大王、彼の風界の生ずる時も亦空に、滅する時も亦空にして、彼の風界の體性は自ら空なり。大王、彼の内の風界及び外の風界の、二つ倶に皆空にして、體性は自ら離れ、相も亦自ら離れ、性も亦得べからず、滅の相も亦離れたり。何を以ての故ぞ。彼の風界は、作に非ず作者無き故なり。

大王、何者か是れ虛空界なる。虛空界も亦二種にして、内あり外あり。大王、何者か是れ内の虛空界なる。若しは自の身内若しは他の身内に、受くる所取る所の、謂はゆる虛空と虛空の體と虛空の名とにして、此の身内に生ずる所の、陰の數に入り、亦入の數に入り、亦界の數に入る有らゆる空なる孔竅なり。大王、此れを身内の虛空界と名く。大王、何者か外の虛空界なる。外の所有にして、色に非ざる者の、乃至、毛の如きをも有つ無くして、虛空の處に等しきを、名けて虛空と爲すなり。大王、此れを外の虛空界と名く。大王、又、時に業の因緣に由る故にて諸入を生ずるに、彼の入等生じ已つて空界を圍遶する是の時に、内の虛空界の數に入ると名くることを得。大王、是くの如き一一の法中に推求するに、一の眼入にも得可きこと無く、唯但の用あるのみ。大王、何を以ての故に空なるぞ。地界の清淨なる故なり。地界の清淨空なる故の如くに、是の水・火・風界の如きも清淨なる故にて空なれば、[三] 彼れは從つて來たる所無きなり。大王、又時として、一切の諸色の、悉く皆壞滅するをば、以て虛空と爲すなり。何を以ての故ぞ。虛空の界は無盡なる故なり。大王、唯内の虛空界は安住して動かざること、大王、譬へば、無爲涅槃界の安住して動かざるが如し。當に知るべし、是くの如くに、虛空界の、一切處に遍することを。大王、譬へば、人あつて空澤・曠野に於て泉池・陂井を掘作するが如きに、大王、意に於て云何。彼の諸の虛空は、何よりして來れるか。王言はく。世尊、從つて來たる所無きなり。佛、言はく。大王、若し彼の人をして還土を以て塡めしめば、大王、意に於て云何。彼の虛空界は何の所に去り至るか。王言はく。去る所

【三】彼れ。は、前の諸入の圍繞する虛空界を指す者と見るべし。

無きなり。何を以ての故ぞ。世尊、彼れ虚空界は、來たる無く去る無ければなり。何を以ての故ぞ。彼れ虚空界は、男女に非ざる故なり。佛言はく。大王、外の虚空界も亦復不動にして性に變易無きは、虚空界の空は、是れ有の法に非されぱなり。何を以ての故ぞ。虚空界は、男に非ず女に非ざればなり。

大王、何者か是れ識界なる。眼は主と爲つて色を攀縁する如きに、色に對して知る故にて眼識生じて、或は能く青・黄・赤・白・雜色を知り、亦長・短・麁・細を知る。是くの如くに、一切有る所の色等の物を、眼識にて能く覩る所の者を、名けて眼識界と爲すなり。是くの如くに、若しは聲を知り、若しは香を知り・若しは味を知り、若しは觸を知り、若しは法を知り、或は六根にて縁ずる所、知る所を知るもの、是れを意識界と名く。大王、又、此の識界は諸根に依らず、亦界に依らず。[二三]何を以ての故ぞ。大王、地の淨色に非ざるを[二四]眼入と爲し、水・火・風の淨に非ざるを眼入と爲せばなり。何を以ての故ぞ。地界の清淨及び諸の餘の法に非ざるをば、以て眼入及び眼入を具する者と爲し、是くの如くに、乃至、水・火・風界の清淨色及び諸の餘の法に非ざるをば、以て眼入及び眼入を具する者と爲せばなり。何を以ての故ぞ。[二五]諸の法には、知無きが故に、了別無きが故に、堪能無きが故に、初非ず中非ず後非ざる故なり。内に非ず、外に非ず、亦中間に非ず。大王、此の識界の如きは、前の事を了し已るや、即便に謝滅して復更に生ぜず。彼れ識の生ずる時に、從つて來たる所無く、及び其の滅する時も、亦至る所無きなり。

大王、何を謂ひて[二六]眼入と爲す。謂はく。四大にて成れる所の清淨色なれども、若し諸法の體性をして自ら空ならしめば、何者か是れ清にして、何者か是れ濁なる。諸法の中に於て淨・穢ある無きに、云何ぞ中に於て淨・穢の是くの如きを見ん。大王、是の故に當に知りたまふべし。眼入は、定つて體性畢竟空寂にして、前際にも後際にも皆得可からざることを。何を以ての故ぞ。未來は

【二三】何を以ての故ぞ、乃至、初非ず、中非ず、後非ざる故なり。異譯本には、此の文に當るべき者を缺き、直ちに「内に非ず、外及び中間に非ず。」と續けたり。蓋し、本文は、謂はゆる「諸根界に依らざる」所以の說明の文と見るべきなり。

【二四】眼入（入 Pravea）。眼の「識」該の者を指すものと見るべし。以下、皆同じ。

【二五】諸の法。此所にては識以外の諸の色法を指す文意となる。

【二六】眼入。此所の眼入は、異譯本には「眼處」（處 Ayatana）とあつて、眼の「根」を指したり。前の「眼入」即ち「識」との紛雜を避くるためには、當に「眼處」とあつて然るべし。「耳入」以下も皆然り。

未だ至らざる故に得可からず。過去は已に滅せる故に得可からず。未來の未來たる事は得可からざれば、彼れ眼處も亦得可からず。自性は離れたる故なり。[二七]若く體性にして得可からずんば、亦男女の性の得べきも無し。既に男女の性無くんば、何ぞ我・我所あらん。大王、若し我・我所あらば是れ魔の境界にして、我我所無くんば是れを諸佛如來の境界と名くるなり。何を以ての故ぞ。一切の諸法に我・我所を離れたる故なり。大王、實の如くに眼入の空なるを了知せば、眼入の自性も空なり。何を以ての故ぞ。此の眼入の相の得可からざる是の故に、此の眼入の體性も空寂なればなり。此の空にて眼入の相を離れたる、是れを無相と名け、相に於て求むる無き故を無願と名く。大王、是れを、眼入の中にて、三空解脫門は前に現在すと名くるなり。

大王、何者か是れ耳入界、乃至、身入なる。大王、[二八]此の一切の法も、三解脫門の現前するに對しては、決定して法界に趣き、究竟して遍く虛空に、名くべからず、說くべからず、用ふべからず、示すべからず、諍論ある無く、語言ある無く、測量すべからざるなり。大王、[二九]眼を以て色に對する者を、名けて轉倒と爲し、是くの如くに耳と聲・鼻と香・舌と味・身と觸・[三〇]意と法とにも略說し、是の故にて諸法を[三一]意の境界と名くるなり。大王、[三二]眼入の色に對する者は、往き矚めて取著するに、此の眼を三種に礙へ、順境を照矚せば愛の想を生じ、若し違境を覩ば恚の想を生じ、中庸の境を矚めば捨の想を生ず。是くの如くに、諸餘の耳・鼻・舌・身も皆亦是くの如く、其の意にて法を矚むるにも亦復是くの如くに、若し順境を緣ぜば愛心を生じ、違境を緣ぜば則ち瞋恚を生じ、中庸の境に於ては愚惑の心を生ずるなり。是くの如き境界は、是れ意の[三三]行ずる所にして、意は遍く行ず。故に意の境界と名くるなり。大王、彼の意の行ずるや、順色に於ては貪欲の[三四]行を生じ、違色に於ては則ち恚怒の行を起し、中庸の色には無明を起す。是くの如くに、聲・香・味・觸と、意の緣ずる所の法にも、亦三事を行じて貪・瞋・癡を起すなり。謂はく。意は順境を緣じて、意の法に貪欲を

【二七】若く體性にして、乃至、如來の境界を名くるなり。異譯本に「若し自性にして有る無くんば、則ち男相無く、亦女相無く、何ぞ愛樂あらん。若し愛樂を生ぜば是れ魔の境界なれども、若し愛樂無くんば是れ佛の境界なり。何を以ての故ぞ。若し愛樂無くんば、則ち能く一切の諸法を遠離すればなり。」とあり。

【二八】此の一切の法も、乃至、測量すべからざるなり。異譯本に「諸法の解脫にして、決定して現前せば、法界の如きは、空にして施設すべからず。」とあり。

【二九】眼を以て、乃至、轉倒と爲し、異譯本に「眼は色を緣ずる時に、而ち愛樂を生ず。是の故に、色を說いて眼の境界と爲す」とあり。

【三〇】意。六根中の意根を指す。

【三一】意の境界。此の「意」は、唯識家卽ち相宗の阿賴耶識、又、性宗の阿梨耶識の思想に通ずる者なるべし。

【三二】眼入の、乃至、三種に礙へ。異譯本に「又、此の眼根の色境を緣ずるに、三種の相あり。」とあり、

【三三】行。此の行を、內心、

生じ、意は違境を緣じて、意の法に瞋恚を生じ、意は中庸の境を緣じて、意の法に無明を生じ愚癡を起すなり。大王、應當に是くの如くに、諸根は猶幻化の如しと知り、彼の境界は其れ猶夢の如しと知りたまふべし。

大王、人の夢中に、諸の婇女及び衆人等と共に相ひ娛樂するが如きに、是の人覺め已つて、夢中の衆人、婇女を憶念するに大王、意に於て云何。夢中に見る所は、是れ實に有りや、不や。王言はく。不なり。大王、意に於て云何。是の人夢る所をば執して實と爲すと謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中に見る所の衆人・婇女は、畢竟じて是れ無く、亦得べからず。何に況んや、共に相ひ娛樂することは是の人は、但自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、愚癡・無聞の凡夫は、意ふ可き色を見るや、眼に色を見已つて心に執著を生じ、執著を生じ已つて愛重を起し、愛重を起し已つて染著を生じ、心に染著を生じ已つて染著の業、謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を作るに、彼の業を造り已るや卽便に謝し滅し、是の業滅し已るや東方に依つて住せず、亦復南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。[三五]是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るは、大王、是の人の自の分の業盡きて、異業の現前せるにて、大王、夢覺めて夢中の事を念じたるに似たる如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中に識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天人の中に生ずるも、[三六]前識は既に滅して[三七]生分の識生じ、生分の相續する心の種類の絕えざるのみにて、大王、[三八]一法として、此の世より他の世に至るものある無くして生滅有るなり。作る所の業及び受くる果報の皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、亦報を受くる者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を、名けて死

外境に趣きて識知する義なり。

【三四】 行。此の行は、造作の義にして、卽ち煩惱の發現するを謂ふ。

【三五】 是くの如き業は、乃至、似たる如きなり。異譯本には「死の邊際に、命根の滅する時に於て、自分の業報の皆悉く現前するは、猶夢覺めて、夢中の事を念じたるが如きなり。」とあり。

【三六】 前識既に滅して、乃至、絕えざるのみ。異譯本には「初識生じ已つて、其の報を受くるや、同分の心品は相續して隨轉す。」とあり。

【三七】 生分の識。一の生の入胎の初に起る識、(十二因緣の第三位)にして、相宗の謂はゆる阿賴耶識に當る。

【三八】 一法として、乃至、生滅有るなり。異譯本に「少しの法として、此の世より他の世に至るものある無し。所以は何ぞ、性は生滅なる故に。」とあり。

の數と爲し、若しくば初識の生ずるを、名けて生の數と爲せども、大王、彼の後識の起る時に、從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも、亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の業の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも亦至る所無し。死する時も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。【三九】其の生も、亦從つて來たる所無く、滅の時も、亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、【四〇】受の受たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、【四一】起の起たる體性は空に【四二】壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作業と果報とは皆失壞せざれども、作業の者ある無く受報の者ある無く、但世俗に隨ふ故に有るのみにて、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし。一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切諸法の空なるは是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若く相に於て無なれば則ち願求する無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くにして、大王一切の法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くに虛空の際に周遍するなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く境界は夢の如きことを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。

大王、猶夢中に怨と共に鬪ふが如きに、是の人覺め已つて、夢中にて怨と共に鬪へることを憶念するに、意に於て云何。夢中に見る所は、是れ實に有りや、不や。王言はく。不なり。大王、意に於て云何。是の人、夢みる所をば執して實と爲すと謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中には畢竟じて怨無し。何に況んや鬪戰することは、是の人

【三九】其の生も、乃至、至る所無し。此の一句は、異譯本には此れに該當する文無くして、直ちに後句に續けたり。但し、次下の文中の「受の受たる、乃至、壞の壞たる等」の句に對照せば、生滅該の者を指したる者なるべく、然らば「滅の時」の「時」は不用の文字なるべし。

【四〇】受。は「受生」の義なり。後の同類の文には「受生」とあり。

【四一】起。は「生起」の義なり。

【四二】壞。は「滅壞」の義なり。

徒に自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、愚癡・無聞の凡夫は、眼に不愛の色を見るや心に喜樂せず、喜樂せざることに於て執著を生じ、執著を生じ已つて便ち瞋恚を生じ、瞋恚を生じ已つて其の心濁亂して、瞋業謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を造作するに、彼の業を造り已るや即便に謝し滅し、是の業滅し已るや東方に依つて住せず、亦復南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見る。大王、是の人見已るや、心に恐怖を生ずれども、自の分の業盡きて異業の現前せるにて、大王、夢覺めて夢中の事を念じたるに似たるが如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中に識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔界に生じ、或は阿修羅處に生じ、或は天人の中に生ずるも、前識は既に滅して生分の識生じ、生分の相續する心の種類の絕えざるのみにて、大王、一法として、今世從り後世に至るものある無くして、生滅有るなり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、作業の者ある無く、亦受報の者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を名けて死の數と爲し若しくば初識の生ずるを、名けて生の數と爲せども、大王、彼の後識の起る時に、從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも、亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも亦至る所無し。其の業の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。死する時も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の生も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受の受たる體性は空に、世間の

世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作業と果報とは皆失壞せざれども、作業の者ある無く受報の者ある無く、但世俗に隨ふ故に有るのみにて、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし、一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若く無相なれば則ち願求する無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くにして、大王、一切の法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、諸相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くに虛空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く境界は夢の如きことを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。

大王、猶人あつて、其の夢の中に於て、鬼に爲つて嬈されて心に恐怖を生ずるが如きに、是の人覺め已つて夢中に夢みる所の鬼を憶念せば、意に於て云何。夢中に見る所は、是れ實に有りや、不や。王言はく。不なり。大王、意に於て云何。是の人、夢みる所をば執して實と爲すと謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中に見る所には、畢竟じて鬼無し。何に況んや怖るることや。是の人、但自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、愚癡・無聞の凡夫は、眼にて色を覩已るや、捨處の色に於て妄に執著を生じ、執著を生じ已つて、執著の業、謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を作るに、彼の業を造り已るや卽便に謝し滅し、是の業滅し已るや東方に依りて住せず、亦復南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち命根盡きんと欲し、死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るなり。是の人見已るや、心に怖懼を生ずれども、自の分の業盡きて異業の現前せるにて、大王、夢覺めて夢中の事を念じたるに似たるが

如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中の識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅處に生じ、或は天人中に生ずるも、前識既に滅して生分の識生じ、生分の相續する心の種類の絶えざるのみにて、大王、一法として、今世從り後世に至るものある無くして、生滅あり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、作業の者ある無く、亦受報の者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を、名けて死の數と爲し、若しくは初識の生ずるを、名けて生の數と爲せども、大王、彼の後識の起る時に、從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも、亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の業の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも亦至る所無し。死する時も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く滅する時にも亦至る所無し。其の生も亦從つて來たる所無く、滅する時も亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受の受たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作業と果報とは皆失壞せざれども、作業の者ある無く、受報の者ある無く、但世俗に隨ふ故に有るのみにて、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし。一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは、是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若し無相なれば則ち願求する無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くにして、大王、一切の法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虛空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く境界は夢の如きことを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。』

卷の第七十四

菩薩見實會　第十六の十四

六界差別品　第二十五の二

大王、人の夢中に、國中の第一なる端正最勝の女人を見、彼の女の邊に於て、微妙にして愛づべき音樂を聞くを得、彼の人聞き已つて、彼の樂音を以て自ら娛樂して、五欲の樂を受くるが如きに、是の人覺め已つて、夢中の愛づべき音樂を憶念せば、意に於て云何。夢中に見る所は是れ實に有りや、不や。王言はく。不なり。大王、意に於て云何。是の人夢みる所をば執して實と爲すと謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中に見る所の最勝なる女人、愛づべき音樂は、畢竟じて是れ無し。況んや五欲の樂は、是の人但自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。是くの如くに、愚癡・無聞の凡夫は、最勝なる女人及以び音樂を見て、其の意に【一】稱可するや心に執著を生じ、執著を生じ已つて愛樂を起し、既に愛樂し已るや染著の心を生じ、染著を生じ已つて染著の業、謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を作るに、彼の業を造り已るや即便に謝し滅し、是の業滅し已るや東方に依つて住せず、亦復南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るなり。大王、是の人見已るや心に忙しき怖を生ずれども、自の分の業盡きて異業の現前せるにて、大王、夢覺めて夢中の事を念じたるに似たる如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中に識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅處に生じ、或は天人の中に生ずるも、前識既に滅して生分の識生じ、生分の相續する心の種類の

【一】稱可。は意に適して宜しとする義なり。

絶えざるのみにて、大王、一法として、此の世從り他の世に至るものある無くして生滅あり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、作業の者ある無く、亦受報の者も無きなり。
大王、彼の後識の滅する時を、名けて死の數と爲し、若しくば初識の生ずるを、名けて生の數と爲せども、大王、彼の後識の起る時には、從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも、亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の業の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。死する時も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の生も、亦從つて來たる所無く、滅の時も、亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受の受たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。
大王、是くの如くにして、作る業と果報とは皆失壞せざれども、作業の者ある無く、受報の者ある無く、但世俗に隨ふ故に有るのみにて、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし、一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは是れ空解脫門に、空に空の相無きは是れ無相解脫門にして、若し相無ければ則ち願求する無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くにして、大王、一切の法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虛空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし。諸根は幻の如く、境界は夢の如きことを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。
大王、耳に惡聲を聞いて惡心を生ずるも、大王、人の夢中に、親愛との別離に大なる苦惱を生じ

て悲號し啼哭し、或は父母・妻子・愛する所の眷屬に離るる如きに、是の人覺め已つて、夢中の親愛との別離・悲哭等の事を憶念せば、意に於て云何。是の人、夢中に見る所は是れ實に有りや、不や。王言はく。不なり。佛言はく。大王、意に於て云何。是の人、夢みる所をば執して實と爲すと謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中に見る所の親愛との別離は畢竟じて是れ無く、何に況んや、悲泣は是の人徒に自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。是くの如くに、愚癡無聞の凡夫は、惡聲を聞いて執著を生じ、執著を生じ已つて愛せざる心を起し、愛せざる故を以て瞋の心を生じ、瞋の心を生ずる故に瞋の業、謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を造作するに、彼の業を造り已るや即便に謝し滅し、是の業滅し已るや東方に依つて住せず、亦復南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るなり。大王、是の人見已るや、心に憂怖を生ずれども、自の分の業は盡きて異業の現前せるにて、大王、夢覺めて夢中の事を念じたるに似たるが如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中の識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天・人の中に生ずるも、前識既に滅して生分を受くる識生じ、生分の相續する心の種類の絕えざるのみにて、大王、一法として、今の世從り後の世に至るものある無くして生滅あり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、亦報を受くる者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を、名けて死の數と爲し、若しくば初識の生ずるを、名けて生の數と爲せども、大王、彼の後識の起る時には、從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも、亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の業の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦

至る所無し。死する時も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の生も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受の受たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作る業と果報とは皆失壞せざれども、業を作る者ある無く、報を受くる者ある無く、但世俗に隨ふ故に有るのみにて、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし、一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若し相無ければ則ち願求無きを無願解脫門と名くるなり。是くの如くにして、大王、一切の法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定し法界の如くにして、虛空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如くに、境界は夢の如くなることを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。

大王、耳に捨の聲を聞いて捨の想を起すも、大王、人の夢中に、[二]不了の句義の聲を聞く如きに、是の人覺め已つて、夢中に聞く所の聲を憶念せんに、意に於て云何。夢中に聞く聲は、是れ實に有りや、不や。王言はく。不なり。大王、意に於て云何。是の人、夢みる所を執して實と爲すと謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中には、畢竟じて音聲の得べきもの有る無し。何に況んや、當に了義及び不了義の句あるべきをや。是の人空しく自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、愚癡無聞の凡夫は、捨聲を聞いて執著を生じ、執著を生じ已つて迷惑を生じ、迷惑を生じ已つて癡の業、謂は

【二】不了の句義の聲を聞く如きに。異譯本に「他の不了の義句を宣說するを聞きて、」とあり。

ゆる身の三・口の四・意の三種の業を造作するに、業を造作し已るや便卽に謝し滅し、是の業滅し已るや東方に依つて住せず、亦復南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るや、是の人見已つて心に執著を生ずれども、自の分の業は盡きて異業の現前せるにて、大王、夢覺めて、彼の夢中の不了の句義を念じたるに似たる如きなり。大王、是くの如くにして、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中に識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天・人の中に生ずるも、前識旣に滅して生分を受くる識生じ、生分の相續する心の種類の絕えざるのみにて、大王、一法として、今の世從り後の世に至るものある無くして、生滅あるなり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、亦報を受くる者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を、名けて死の數と爲し、若しくば初識の生ずるを、名けて生の數と爲せども、大王、彼の後識の起る時には從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも、亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも亦至る所無し。其の業の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。死する時も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の生も、亦從つて來たる所無く、滅の時も、亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受生の受生たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作る業と果報とは皆失壞せざれども、業を作る者ある無く、報を受くる者ある無く、但世俗に隨ふ故に有る

のみにて、第一義に非ざるたり。大王、當に知りたまふべし、一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは、是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若く無相なれば則ち願求無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くにして、大王、一切の諸法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虛空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く、境界は夢の如くなることを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。

大王、人の夢中に、栴檀香或は多摩羅葉香及び諸種種の餘の香を以て、用ひて己れの身に塗るが如きに、是の人覺め已つて、夢中の栴檀の香及び多摩羅香並に餘の香の等を憶念せば、意に於て云何。夢中に見る所の如きは、是れ實に有りや、不や。王言はく。不なり。大王、意に於て云何。是の人、夢みる所をば執して實と爲すと謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢の中には、畢竟じて諸の香ある無く、況んや其の身に塗ることは、是の人徒に自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、愚癡無聞の凡夫は、妙香を觸聞するや便ち愛著を生じ、愛著を生じ已つて復更に深樂し、深樂を生じ已つて染著の心を起し、染著を生じ已つて染著の業、謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を作るに、彼の業を造り已るや卽便に謝し滅し、是の業滅し已るや、東方に依つて住せず、亦復南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るは、大王、夢覺めて、夢中に聞く所の諸香を憶念したるに似たるが如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中に識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天・人の中に生ずるも、前識は既に滅して受生分の識生じ、生分

の相續する心の種類の絕えざるのみにて、大王、一法として、今の世從り後の世に至るものある無くして、生滅あるなり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、亦報を受くる者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を、名けて死の數と爲し、若しくば初識の生ずるを、名けて生の數と爲せども、大王、彼の後識の起る時にも、從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の業の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。死する時も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の生も、亦從つて來たる所無く、滅の時も、亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受生の受生たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くに、作る業と果報とは皆失壞せざれども、業を作る者ある無く、報を受くる者ある無く、但世俗に隨ふ故に有れども、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし、一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは、是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若く無相たれば則ち願求無きを無願解脫門と名くるなり。是くの如くにして、大王、一切の諸法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虛空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く、境界は夢の如くなることを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。

大王、人の夢の中に、死蛇・死狗・死人等の尸の、頸に繫著するを見るが如きに、是の人覺め已つ

て、夢中に見る所の死蛇・死狗・死人の尸を憶念して、心に怖畏を生ぜば、大王、意に於て云何。是の夢中に、或は一の尸を以て頸に繫著する如きも、是れ眞實なりや、不や。王言はく。不なり、世尊。佛言はく。是の人夢中に於て見る所の尸を執せば、智と爲すや、不や。王言はく。不たり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中には、畢竟じて死蛇・死狗・死人の尸ある無く、況んや將頸に繫ることをや。是の人徒に自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、無聞愚癡の凡夫は、既に臭惡を見て執著を生じ、執著を生じ已つて愛せざる心を起し、愛せざる故を以て瞋の心を生じ、瞋の心を生ずる故にて、瞋の業、謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を造作するに、彼の業を造り已るや便卽に謝し滅し、是の業滅し已るや、東方に依つて住せず、亦復南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るや、大王、是の人は見已つて心に厭惡を生ずれども、自の分の業は盡きて異業の現前せるにて、大王、夢覺めて、夢中の事を念じたるに似たるが如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の一緣を以て、生分の中の識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天・人の中に生ずるも、前識は既に滅して生分を受くる識生じ、生分の相續する心の種類の絕えざるのみ。大王、一法として、今の世より後の世に至るものある無くして、生滅あるなり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、亦報を受くる者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を、名けて死の數と爲し、若しくば、初識の生ずるを、名けて生の數と爲せども、大王、彼の後識の起る時には、從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも、亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の業の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。死

する時も、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の生も、亦從つて來たる所無く、滅の時も、亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受生の受生たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作る業と果報とは皆失壞せざれども、業を作る者ある無く、報を受くる者ある無く、但世俗に隨ふ故に有れども、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし、一切の諸法は皆悉く空寂なることを、一切の諸法の空なるは、是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若く無相なれば則ち願求無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くにして、大王、一切の法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虛空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く、境界は夢の如くなることを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。

大王、人の夢中に、鼻根の壞るるを夢みる如きに、是の人覺め已つて、夢中に壞るる所の鼻根を憶念して、意に於て云何。夢中に見る所は、是れ實に有りや、不や。王言はく。不なり。大王、意に於て云何。是の人、夢みる所をば執して實と爲すと謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中には畢竟じて鼻根ある無く、況んや復壞るることをや。是の人、徒に自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、愚癡無聞の凡夫は、鼻根の壞るるを見て便ち執著を生じ、執著を生じ已つて恐懼を起し、既に恐懼し已つて染著を生じ、心に染著を生じ已るや、染著の業、謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を

作るに、彼の業を造り已るや即便に謝し滅し、是の業滅し已るや、東方に依つて住せず、亦復南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識、滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見る。大王、是の人見已るや、心に忙しき怖を生ずれども、自の分の業は盡きて異業の現前せるにて、大王、夢覺めて、夢中の事を念じたるに似たるが如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中の識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天・人の中に生ずるも、前識は既に滅して生分を受くる識生じ、生分の相續する心の種類の絶えざるのみ。大王、一法として、今の世從り後の世に至るものある無くして、生滅あり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、亦報を受くる者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を、死の數に入ると名け、若しくば、初識の生ずるを、生の數に入ると名くれども、大王、彼の後識の起る時には、從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の業の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。死する時も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の生も、亦從つて來たる所無く、滅の時も、亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受生の受生たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作る業と果報とは皆失壞せざれども、業を作る者ある無く、報を受くる者ある無く、但世俗に隨ふ故に有れども、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし、一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは、是れ空

解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若く無相なれば則ち願求無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くに、大王、一切の法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虛空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く、境界は夢の如くなることを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。

大王、人の夢中に、自身飢渴して百味の饌を得、意を恣にして食するが如きに、是の人覺め已つて、夢中の百味の飮食を憶念せば、意に於て云何。是の人の夢みる所は、是れ眞實なりや、不や。王言はく。不なり。佛言はく。大王、意に於て云何。是の人、夢みる所をば執して實と爲すと謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中には、畢竟じて飮食あること無く、況んや復食することをや。是の人徒に自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、愚癡無聞の凡夫は、百種の食を見已るや心に執著を生じ、執著を生じ已つて貪樂の心を起し、既に貪樂し已つて心に染著を生じ、染著を生じ已つて染著の業、謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を作るに、彼の業を造り已るや即便に謝し滅し、是の業滅し已るや、東方に依つて住せず、亦復南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るや、大王、是の人は見已つて心に貪樂を生ずれども、自の分の業盡きて異業の現前せるにて、大王、彼の夢覺めて、夢中の事を念じたるが如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中の識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天・人の中に生ずるも、前識は既に滅して生分を受くる識生じ、生分の相續する心の種類の絕えざるのみ。大王、一法として、今の世從り後の

世に至るものある無くして、生滅あり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、亦報を受くる者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を、死の數に入ると名け、若しくば、初識の生ずるを、生の數に入ると名くれども、大王、彼の後識の起る時には、從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも、亦至る所無し、其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の業の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。死する時も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の生も、亦從つて來たる所無く、滅の時も、亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受生の受生たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作る業と果報とは皆失壞せざれども、業を作る者ある無く、報を受くる者無く、但世俗に隨ふ故に有れども、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし、一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは、是れ空解脱門にして、空に空の相無きを無相解脱門と名け、若く無相なれば則ち願求無きを、無願解脱門と名くるなり。是くの如くに、大王、一切の法には皆三解脱門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虛空の際に周遍せり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く、境界は夢の如くなることを、一切の譬喩にて當に是くの如く知るべきことを。

大王、人の夢中に、飢に爲つて逼られて、遇苦瓠幷に拘奢得子[三]及び紝婆子[四]等を得て、便[五]ち之れを食するが如きに、是の人覺め已つて、夢中に食する所の苦瓠子等を念ぜば、意に於て云何。

【三】拘奢得子。若し Kuṣṭha に對する假借文字とせば、廣木香と譯し、熱病・胃病・皮膚病などに効ある一種の藥品なり。

【四】紝婆子。若し Jambīra の假借文字とせば天梅子又は柑子と譯し酸き物なり。然るに異譯本には「畢祖摩哩捺子」とあり。而して此れ若し Veśavāra の假借文字とせば藥味として用ふる種々の「辛き物」を謂ふなり。因みに、前二項の「子」は凡べて微小なる物に用ふる意味無き接尾語なり。

【五】便ち之れを食するが如きに、異譯本には「便ち之れを食うて恚恨を生じ、」とあり。

是の人の夢みる所は、是れ眞に苦瓠を食へるや、不や。王言はく。不なり。大王、意に於て云何。是の人、夢みる所をば執して實と爲すと謂ひて便ち瞋恚を生ぜば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中には、畢竟じて苦瓠及び拘耆得子等ある無く、況んや、復食することをや。是の人、徒に自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、愚癡無聞の凡夫は、[六]夢(のごとく)に、飢に爲つて逼られて、心に執著を生じ、執著を生じ已るや執著の業、謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を作るに、彼の業を造り已るや卽便に謝し滅し、是の業滅し已るや、東方に依つて住せず、亦復南・西・北方、四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、死に臨む時、最後の識 滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るや、是の人見已つて心に妄想を生ずれども、自の分の業は盡きて異業の現前せるにて、大王、彼の夢覺めて、夢中の事を念じたるが如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中の識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天・人の中に生ずるも、前識は旣に滅して、生分を受くる識生じ、生分の相續する心の種類の絕えざるのみ。大王、一法として、今の世從り後の世に至るものある無くして、生滅あり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、亦報を受くる者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を、死の數に入ると名け、若しくば、初識の生ずるを、生の數に入ると名くれども、大王、彼の後識の起る時には、從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも、亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の業の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。死する時も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。

【六】夢(のごとく)。文意を明にするために括弧内の文字を加へたり。

其の生も、亦從つて來たる所無く、滅の時も亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受生の受生たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作る業と果報とは皆失壞せざれども、業を作る者ある無く、報を受くる者ある無く、但世俗に隨ふ故に有れども、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし。一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは。是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若く無相なれば則ち願求無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くに、大王、一切の法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虛空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし。諸根は幻の如く、境界は夢の如きことを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。

大王、人の夢中に、舌根の壞るるを夢みる如きに、是の人覺め已つて、夢中に舌根の毀敗したるを憶念せば、意に於て云何。是の人の夢みる所は、是れ眞の壞なりや、不や。王言はく。不なり。大王、意に於て云何。是の人、夢みる所をば執して實の壞なりと謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中には、畢竟じて舌根ある無く、況んや、復壞るることをや。是の人、徒に自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、愚癡無聞の凡夫は、舌根の壞るるを見るや、心に執著を生じ、執著を生じ已つて愛せざる心を生じ、愛せざるを生じ已つて染著の業、謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を作るに、彼の業を造り已るや卽便に謝し滅し、是の業滅し已るや、東方に依つて住せず、亦復南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、

先の所作の、心想の中に現ずるを見るや、大王是の人見已つて心に怖懼を生ずれども、自の分の業は盡きて異業の現前せるにて、大王、彼の夢覺めて、夢中の事を念じたるが如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中の識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天・人の中に生ずるも、前識は旣に滅して生分を受くる識生じ、生分の相續する心の種類の絕えざるのみ。大王、一法として、此の世從り他の世に至るものある無くして、生滅あり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、亦報を受くる者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を、死の數に入ると名け、若しくば、初識の生ずるを、生の數に入ると名くれども、大王、彼の後識の起る時には、從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも、亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の業の生ずる時にも亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。死する時も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時も亦至る所無し。其の生も、亦從つて來たる所無く、滅の時も、亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受性の受性たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作る業と果報とは皆失壞せざれども、業を作る者ある無く、報を受くる者ある無く、但世俗に隨ふ故に有れども、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし。一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは、是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若し無相なれば則ち願求無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くに、大王、一

切の法には皆三解脱門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虚空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く、境界は夢の如くなることを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。

大王、猶夢中に、自ら國中の最勝の女を視て、共に相ひ抱持するが如きに、是の人覺め已つて、夢中に得る所の細なる觸を憶念せば、意に於て云何。是の人の夢みる所は、是れ眞實なりや、不や。王言はく。不なり。大王、意に於て云何。是の人、夢みる所をば執して眞實なりと謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中には、畢竟じて此の女あること無く、況んや細なる觸を受くることは、是の人、徒に自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、愚癡無聞の凡夫は、意ふ可き色を見るや、眼に色を見已つて心に執著を生じ、執着を生じ已つて愛欲を起し、愛欲を起し已つて染著の心を生じ、染著を生じ已つて、染著の業、謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を作るに、彼の業を造り已るや即便に謝し滅し、是の業滅し已るや、東方に依つて住せず、亦復南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るや、大王、是の人見已つて、心に愛喜を生ずれども、自の分の業は盡きて異業の現前せるにて、大王、彼の夢の覺めて、夢中の事を念じたるが如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中の識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天・人の中に生ずるも、前識は既に滅して、生分を受くる識生じ、生分の相續する心の種類の絕えざるのみ。大王、一法として、此の世從り他の世に至るものある無くして、生滅あり。作る所の業及び受くる果

報の、皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、亦報を受くる者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を、死の數に入ると名け、若しくば、初識の生ずるを、生の數に入ると名くれども、大王、彼の後識の起る時には、從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも、亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。死する時も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。其の生も、亦從つて來たる所無く、滅の時も、亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受生の受生たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作る業と果報とは皆失壞せざれども、業を作る者ある無く、報を受くる者ある無く、但世俗に隨ふ故にて有れども、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし、一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは、是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若く無相なれば則ち願求無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くに、大王、一切の法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虛空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く、境界は夢の如くなることを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。』

巻の第七十五

菩薩見實會　第十六の十五

六界差別品　第二十五の三

大王、人の夢中に、自ら熱せる銅葉を持ちて其の身に纒ひ被らするが如きに、是の人覺め已つて、夢中に被る所の銅葉を憶念せば、意に於て云何。是の人の夢みる所は、是れ眞實なりや、不や。王言はく。不なり。大王、意に於て云何。是の人、夢みる所を執して眞實なりと謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中には、畢竟じて銅葉ある無く、況んや、以て身に衣るは、是の人徒に自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、愚癡無聞の凡夫は、恐懼の事を見るや心に執著を生じ、執著を生じ已つて怖畏を起し、怖畏し已つて、怖畏の業、謂はく、身の三・口の四・意の三種の業を作るに、彼の業を造り已るや即便に謝し滅し、是の業滅し已るや、東方に依つて住せず、亦復南・西・北方 四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るや、大王、是の人は見已つて、心に忙しき懼を生ずれども、自の分の業は盡きて異業の現前せるにて、大王、彼の夢覺めて、夢中の事を念じたるが如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中の識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天中に生じ、或は人中に生ずるも、前識は既に滅して、生分を受くる識生じ、生分の相續する心の種類の絕えざるのみ。大王、一法として、今の世從り後の世に至るものある無くして、生滅あり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、亦報を受くる

者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を、死の數に入ると名け、若しくば、初識の生ずるを、生の數に入ると名くれども、大王、彼の後識の起る時には、從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも、亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の業の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも亦至る所無し。死する時も、亦從つて來たる所無く、滅する時も、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の生も、亦從つて來たる所無く、滅の時も亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受生の受生たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作る業と果報とは皆失壞せざれども、業を作る者ある無く、報を受くる者ある無く、但世俗に隨ふ故にて有れども、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし、一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは、是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若く無相なれば則ち願求無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くに、大王、一切の法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虛空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く、境界は夢の如くなることを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。

大王、人の夢中に、身根壞れて諸の觸を覺えざるを見るが如きに、是の人覺め已つて、夢中の敗壞の相を憶念せば、意に於て云何。是の人の夢みる所は、是れ眞實なりや、不や。王言はく。不なり。大王、意に於て云何。是の人、夢みる所をば執して眞實なりと謂はば、是れを智と爲すや、不や。

や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中には、畢竟して身根ある無く、況んや敗壞することをや。是の人徒に自ら疲勞して、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、愚癡無聞の凡夫は、自ら身根の敗壞するを見るや、心に執著を生じ、執著を生じ已つて恐怖の心を起し、恐怖の心を起し已つて、恐怖の業、謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を作るに、彼の業を造り已るや即便に謝し滅し、是の業滅し已るや、東方に依つて住せず、亦復、南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るや、大王、是の人は見已つて、心に怖懼を生ずれども、自の分の業は盡きて、異業の現前せるにて、大王、彼の夢覺めて、夢中の事を念じたるが如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中の識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天の中に生じ、或は人の中に生ずるも、前識は旣に滅して生分を受くる識生じ、生分の相續する心の種類の絕えざるのみ。大王、一法として、今の世從り後の世に至るものある無くして、生滅あり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、報を受くる者ある無きなり。大王、彼の後識の滅する時を、死の數に入ると名け、若しくば、初識の生ずるを、生の數に入ると名くれども、大王、彼の後識の起る時には、從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも、亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の業の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の生も、亦從つて來たる所無く、滅の時も、亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體

性は空に、受生の受生たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作る業と果報とは皆失壞せざれども、業を作る者ある無く、報を受くる者ある無く、但世俗に隨ふ故に有れども、第一義は非ざるなり。大王、當に知りたまふべし、一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは、是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若く無相なれば則ち願求無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くに、大王、一切の法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虛空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く、境界は夢の如くなることを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。

大王、人の夢中に、幻師の五欲を幻作するを夢見し、自ら己身と彼の鬧遶せるものと、共に相ひ娛樂するを見るが如きに、是の人覺め已るや五欲を見ざるに、便ち夢中の五欲の樂を憶はば、意に於て云何。是の人の夢みる所は、是れ眞實なりや、不や。王言はく。不なり。大王、意に於て云何。是の人、夢みる所をば執して眞實と謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中には、畢竟じて幻師あること無く、況んや、復五欲を幻作して遞に相ひ娛樂することは、是の人徒に自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり、佛言はく、大王、是くの如くに、愚癡無聞の凡夫は、是の幻師の五欲を幻作するを見るや、心に執著を生じ、執著を生じ已つて愛重を起し、愛重を起し已つて染著を生じ、心に染著を生じ已つて、染著の業、謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を作るに、彼の業を造り已るや卽便に謝し滅し、是の業滅し已るや、東方に依つて住せず、南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るや、大王、是の人

は見已つて、心に愛著を生ずれども、自の分の業盡きて異業の現前したるにて、大王、彼の夢覺めて、夢中の事を念じたるが如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因縁の故と、此の二縁を以て、生分の中の識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天・人の中に生ずるも、前識は既に滅して、生分を受くる識生じ、生分の相續する心の種類の絶えざるのみ。大王、一法として、今の世從り後の世に至るものある無くして、生滅あり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、亦報を受くる者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を、死の數に入ると名け、若しくば、初識の生ずるを、名けて生の數に入ると名くれども、大王、彼の後識の起る時には、從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも、亦至る所無し。其の縁の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の業の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。其の生も、亦從つて來たる所無く、滅の時も亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、縁の縁たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受生の受生たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作る業と果報とは皆悉く壞せざれども、業を作る者ある無く、報を受くる者ある無く、但世俗に隨ふ故に有れども、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし、一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは、是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若く無相なれば則ち願求無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くに、大王、一切の法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、

究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虚空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く、境界は夢の如くたることを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。

大王、人の夢中に、大水の己れの身及び妻子眷屬を漂蕩するを夢見し、既に漂はされ已つて心に無量なる種種の憂惱を生ずるが如きに、是の人覺め已つて、夢中に水に爲つて漂はされたる憂苦の事を憶念せば、意に於て云何。是の人の夢みる所は、是れ眞實なりや、不や。王言はく。不なり、佛言はく。大王、是の人、夢みる所をば執して眞實と謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世尊。何を以ての故ぞ。夢中には畢竟じて大水ある無く、況んや復漂蕩して大憂惱を生ずることは、是の人徒に自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、愚癡無聞の凡夫は、水に漂蕩せらるるや心に執著を生じ、執著を生じ已つて其の心喜ばず、心喜ばざる故に喜ばざる業の、身の三・口の四・意の三種の業を作るに、彼の業を造り已るや即便に謝し滅し、是の業滅し已るや、東方に依つて住せず、亦復南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るや、大王、是の人は見已つて、心に忙しき怖を生ずれども、自の分の業盡きて異業の現前したるにて、大王、彼の夢覺めて、夢中の事を念じたるが如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中の識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天の中・人の中に生ずるも、前識は既に滅して生分を受くる識生じ、生分の相續する心の種類の絕えざるのみ。大王、一法として、今の世從り後の世に至るものある無くして、生滅あり。作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、亦報を受くる者も無し。大王、彼の

後識の滅する時を死の數に入ると名け、若しくば、初識の生ずるを生の數に入ると名くれども、大王、彼の後識の起る時には從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも亦從つて來たる所無く、滅する時にも亦至る所無し。其の業の生ずる時にも亦從つて來たる所無く、滅する時にも亦至る所無し。死する時も亦從つて來たる所無く、滅する時も亦至る所無し。初識の生ずる時にも亦從つて來たる所無く、滅する時にも亦至る所無し。其の生も亦從つて來たる所無く、滅の時も亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受生の受生たる體性は空に、世間の世間たる體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作る業と果報とは皆失壞せざれども、業を作る者ある無く、報を受くる者ある無く、但世俗に隨ふ故に有れども、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし、一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは、是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若く無相なれば則ち願求無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くに、大王、一切の法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虛空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く、境界は夢の如くなることを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。

大王、人の夢中に、自ら己れの身酒を飲み、惛醉して、覺知する所無く、罪福・善惡・尊卑・優劣を識らざるを見るが如きに、是の人覺め已つて、夢中に酒を飲んで迷亂せることを憶念せば、意に於て云何。是の人の夢みる所は、是れ眞實なりや、不や。王言はく。不なり。大王、意に於て云何。是の人、夢みる所をば執して眞實なりと謂はば、是れを智と爲すや、不や。王言はく。不なり、世

尊。何を以ての故ぞ。夢中には竟に酒あること無く、況んや、飮んで惛亂して、貪卑・善惡・優劣を識らざることは、是の人徒に自ら疲勞するのみにて、都べて實あること無ければなり。佛言はく。大王、是くの如くに、愚癡無聞の凡夫は、夢(のごとく)に飮酒惛醉を見るや心に執著し、執著を生じ已つて染愛の心を起し、染愛の心を起し已つて染愛の業の、謂はゆる身の三・口の四・意の三種の業を作るに、彼の業を造り已るや卽便に謝し滅し、是の業滅し已るや、東方に依つて住せず、亦復南・西・北方・四維・上下に依つて住せざるなり。是くの如き業は、乃ち死に臨む時、最後の識の滅するに至つて、先の所作の、心想の中に現ずるを見るや、大王、是の人は見已つて心に愛著を生ずれども、自の分の業は盡きて、異業の現前したるにて、大王、彼の夢覺めて、夢中の事を念じたるが如きなり。是くの如くにして、大王、最後の識は主と爲ると、彼の業の因緣の故と、此の二緣を以て、生分の中の識心初めて起つて、或は地獄に生じ、或は畜生に生じ、或は閻魔羅界に生じ、或は阿修羅に生じ、或は天の中・人の中に生ずるも、前識は既に滅して生分を受くる識生じ、生分の相續する心の種類の絕えざるのみ。大王、一法として、今の世從り後の世に至るものある無くして、生と滅とを有ち、作る所の業及び受くる果報の、皆失壞せざるを見れども、業を作る者ある無く、亦報を受くる者も無きなり。大王、彼の後識の滅する時を死の數に入ると名け、若しくば、初識の生ずるを生の數に入ると名くれども、大王、彼の後識の起る時には從つて來たる所無く、及び其の滅する時にも亦至る所無し。其の緣の生ずる時にも亦從つて來たる所無く、滅する時にも亦至る所無し。其の業の生ずる時にも亦從つて來たる所無く、滅する時にも亦至る所無し。死する時も亦從つて來たる所無く、滅する時も亦至る所無し。[一]其の生も亦從つて來たる所無く、滅の時も亦至る所無し。何を以ての故ぞ。自性は離れたる故に、彼の後識の後識たる體性は空に、緣の緣たる體性は空に、業の業たる體性は空に、死の死たる體性は空に、初識の初識たる體性は空に、受生の受生たる

【一】其の生も等。前例に據れば、此の句と前の句との間に「初識の生ずる時にも、亦從つて來たる所無く、滅する時にも、亦至る所無し。」の一句を、原本に誤脫したる者と認む。

體性は空に、涅槃の涅槃たる體性は空に、起の起たる體性は空に、壞の壞たる體性は空なればなり。大王、是くの如くにして、作る業と果報とは皆失壞せざれども、業を作る者ある無く、報を受くる者無く、但世俗に隨ふ故に有れども、第一義に非ざるなり。大王、當に知りたまふべし、一切の諸法は皆悉く空寂なることを。一切の諸法の空なるは、是れ空解脫門にして、空に空の相無きを無相解脫門と名け、若し無相なれば則ち願求無きを、無願解脫門と名くるなり。是くの如くに、大王、一切の法には皆三解脫門を具して、空と共に涅槃の先道を行きて、相を遠離し願求を遠離したれば、究竟せる涅槃界は、決定して法界の如くにして、虛空の際に周遍せるなり。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如く、境界は夢の如くなることを、一切の譬喩にて當に是くの如くに知るべきことを。

四轉輪王品　第二十六の一

爾の時に、佛は淨飯王に告げて言はく。大王、上に說く所の法の如きを心に繫けて、精勤に當に自ら觀察し修行して、他に隨ひたまふこと勿かるべし。此の法は、乃ち是れ過去・未來・現在の[二]諸佛の菩提にして、能く一切の世間を超ゆること自在なれば、能く一切の渴愛を除き、我慢を降伏し、罪過を滅除して、一切の諸法に而く平等を得るものにして、彼れは凡夫地に非ず、一切の聲聞の到る能はざる所、一切の辟支佛も其の境界に非ずして、一切の菩薩の修行する所、一切の諸佛の證得する所なれば、大王は、此の法の中に於て應當に安意したまふべく、應に是の念を作したまふべし。我れ當に云何にせば、天・人の中に於て眼目と爲ることを得、燈明と爲ることを得、大炬と爲ることを得、船栰と爲つて善く水路を知ることを得、導師と爲ることを得、商主と爲ることを得、導首と爲ることを得べきか。我れ當に云何にせば、自ら度し已つて復能く他を度し、自ら既に解脫して他をして解脫せしめ、自ら安隱を得て他をして安隱ならしめ、自ら涅槃を證して他をして涅槃ならし

【二】諸佛の菩提にして、乃至、自在なれば。異譯本に「諸佛は此れに依つて、無上菩提を證するを得」とあり。

め得べきか。と。大王、當に知りたまふべし、過去世の際に經し所の豪富自在を觀ずべからざることを。大王、諸根は幻の如くにして滿足する時無く、亦能く滿す者無く、境界は夢の如くにして色・聲・香・味・觸に於て厭足することある無ければなり。

大王、過去の世に、轉輪王の無邊稱大王と名くるありき。彼の無邊稱王は、無量なる衆寶の輦輿を具足し、軍衆・象馬・無礙なる輪寶の七寶をば具足し、有つ所の軍乘をば能く壞る者無きは、先佛の所に於て諸の善根を植ゑ、意力成就したれば、念に隨つて卽辦ずればなり。大王、彼の〔三〕無量稱王は、憶念する所あれば、意に隨はざる無かりき。何を以ての故ぞ。善根力を具足し成就せる故なり。大王、爾の時に、無量稱王は是くの如き念を作せり。我れ今、自ら福德の力を試みん。と。時に無量稱王は、卽是の念を作せり。我が威力を以て、此の四天下の有らゆる樹木をして、常に華果あつて、之れを用ふるに盡くること無からしめん。と。大王、彼の無量稱王は是の念を作し已れるに、四天下に於ける有らゆる樹林の華果は繁茂し、用ふれども窮り盡くること無かりき。大王、無量稱王は復是の念を作せり。四天下の有らゆる人民の諸の欲願する所をして、意に隨つて違ふこと無からしめん。と。大王、彼の無量稱王は是の念を作し已れるに、四天下の中の一切の人民の一切の願ふ所のものは、悉く充滿することを得たりき。大王、無量稱王は復是の念を作せり。我れ當に更に善根の力を試みるべし。若し我れに福あらば、四天下をして香水を降し注がしめん。と。是の念を作し已れるに、四天下に於て、尋いで香雨を降せり。大王、爾の時に、無量稱王は卽是の念を作せり。我れ今當に更に自ら福力を試みるべし。と。大王、時に無量稱王は復是の念を作せり。若く我が福力にて、四天下をして普く妙華を雨らしめん。と。是の念を作せる時に、四天下に於て、尋いで妙華を雨せり。大王、爾の時に、無量稱王は復是の念を作せり。我れ今當に更に自ら福力を試みるべし。若し我れに福あらば、四天下をして普く妙衣を雨らしめん。と。是の念を作し已れる

【三】無量稱王。異譯本には以下皆「無邊稱王」とあり。

に、四天下に於て、尋いで天上の劫貝樹の衣を雨したり。大王、彼の無量稱王は復是の念を作せり。我れ今自ら福力を試みん。若し我れに福あらば、四天下をして普く銀雨を雨らしめん。と是の念を作し已れるに、四天下に於て、尋いで銀雨を降したり。大王、彼の無量稱王は復是の念を作せり。我れ今當に更に自ら福力を試みん。と。復是の念を作せり。若し我れに福あらば、四天下をして普く金雨を雨らしめん。と。是の念を作し已れるに、四天下に於て、尋いで金雨を雨したり。何を以ての故ぞ。無量稱王の願ふ所の意に從へるは、皆過去に、一切の衆生に於て、(四)共業の善を修めたるに由るなり。

大王、爾の時に、此の閻浮提の地は縱廣正しく等しく一萬八千由旬なりしが、爾の時に當つて、此の閻浮提に六十千萬の諸の大城郭ありき。大王、爾の時に、此の閻浮提の中に於て、置き立てたる隍城を寶莊嚴と名けしが、其の城の縱廣十二由旬にして、四面は平正妙巧に成ぜられ、街巷の莊嚴は、界分して分明なりき。其の城外に於て、多羅樹の七重に行列したるあつて、其の多羅樹は四寶にて合成せり。謂はゆる金・銀・瑠璃・玻瓈にて莊飾せられて、端嚴なること甚だ愛樂すべし。其の金樹は、根・莖・枝・條悉く皆是れ金にして、其の葉・華・果は悉く是れ白銀なり。其の銀樹は、根・莖・枝・條悉く皆是れ銀にして、其の葉・華・果は皆是れ黃金なり。毘瑠璃樹は、根・莖・枝・條悉く是れ瑠璃にして、其の葉・華・果は皆是れ玻黎なり。其の玻璃樹は、根・莖・枝・條悉く是れ玻璃にして、其の葉・華・果は皆毘瑠璃なりき。大王、爾の時に、彼の寶莊嚴の城の周匝に、七重に懸けたる寶の鈴網を、種種に莊嚴せること微妙にして第一に、復種種なる衆寶の羅網を以て、其の上に彌覆したり。其の城外に於て七重の寶塹ありしが、彼の一一の塹の深さは半由旬に、廣さは一由旬に、其の七重の塹の底と岸とは平正にして、八功德の水は淸淨に盈滿して、衆鳥飮み易く、彼に諸の華、謂はゆる優鉢羅華・拘物頭華・波頭摩華・分陀利華あつて其の中に彌滿し、底に金沙を布きたり。其の塹の四

【四】共業の善を修めたるに由るなり。異譯本に「共に修めたる善業の獲得する所なり。」とあり。
共業。各人共同にて同樣の善惡の業を作り、隨つて各人共同にて同樣の苦樂の果報を感ずる（卽ち依報たる山河大地の如き）者を謂ふ。

邊に周匝せる階道は、四寶にて莊嚴せり。謂はゆる金・銀・瑠璃・玻瓈にして、種種に微妙なること甚だ愛樂すべし。彼の諸の階道も四寶にて合成し、黄金を階と爲したるには白銀を隥と爲し、白銀を階と爲したるには黄金を隥と爲し、瑠璃と玻瓈と上下に間錯して、交互に莊飾し周匝したる欄楯も七寶にて成ぜられて、端嚴なること比無く、一一の階道に七重の寶門あつて、種種に莊嚴して微妙なること最上に、一一の階道には、其の兩邊に於て金の芭蕉樹[五](あり。)其の塹の四邊に周匝せる階道は、其の兩頭に於て一一皆七寶の妙座ありしが、彼の諸べて有る所の種種なる莊嚴は、皆悉く是れ彼の無量稱王の福德の致す所なり。其の寶莊嚴の城外に周匝して、八萬の園林ありしが、無量稱王は此の園林を作るや、我所に愛著する心を起さずして、悉く衆生に施して、共に同じく樂を受けたり。是の一一の園に八つの大池あつて、一一の大池は縱廣半由旬にして、其の池中に於て種種の華——優鉢羅華・波頭摩華・拘物頭華・分陀利華——あつて、是くの如き衆の華は其の上に彌覆したり。一一の池の邊に八つの階道あつて、一一の階道は四寶にて成ぜられ、端嚴なること殊妙なり。其の階道の頭に七寶の幢門を建て、謂はゆる金・銀・瑠璃及び瑪瑙等にして、其の階の兩邊には、閻浮檀金もて芭蕉樹と爲して、莊飾せること嚴麗なり。八功德の水は池中に彌滿して、衆鳥飮むに堪へ、其の池の四邊には諸の妙華を植ゑたり。謂はゆる阿提目多伽華・薝蔔華・阿輸伽華・[六]拘羅婆華・波吒黎華・[七]迦膩迦羅華・[八]婆拘羅華・[九]婆利師迦華・[一〇]末利迦華・蘇摩那華・[一一]摩樓多華・[一二]陀㝹師迦華の是くの如き等は、陸地に華を生じたり。無量稱王は、諸人をして適樂を受けしめん爲めの故に、是くの如き種種の妙華を種植したれば、是の諸の人民は、其の中に遊戲し、歡娛して樂を受けたり。大王、彼の寶莊嚴城の有らゆる寶鈴・羅網・寶多羅樹を、微風吹き動して和雅の音を出せることは、譬へば、人あつて、善く五種の微妙なる音樂を作して、其の聲和雅にして甚だ愛樂すべきが如くに、彼の無量稱王の有らゆる宮城の鈴網・寶樹・園林の樂具の出せる妙音の、甚だ愛樂すべきこと

【五】(あり)。文意の有る所に由り、括弧内の文字を加へたり。
【六】拘羅婆(Kuravaka)華、勝邊華と譯すべきか。
【七】迦膩迦羅華。略して迦膩羅華と云ふ。第二卷、同名の解、參照。
【八】婆拘羅(Bakula)華。美人酒を啣みて濺げば忽ち開くとせられて、醉花と譯す。
【九】婆利師迦華。婆師迦華と略稱す。第一卷、同名の解、參照。
【一〇】末利迦(Mallika)華。鬘生と譯す。即ち茉莉華なり。
【一一】摩樓多華。摩樓(Maru)樹(堅と譯す)の華を謂ふか。不明なり。
【一二】陀㝹師迦華。Dhanuṣketaki 華の假借文字なるべきか。不明なり。

も亦復是くの如くなりしかば、大王、爾の時に、寶莊嚴王の城中の有らゆる人民は、彼の妙音を以て娯樂して樂を受けたり。時に、彼の寶莊嚴城は、豐樂安隱に、人民充滿し、豪富自在にして、[13]處處に皆優鉢羅華・波頭摩華・拘物頭華・分陀利華ありき。

大王、彼の無量稱王は、又異る時に於て、復是の念を作せり。我れ今當に西[14]、瞿陀尼に往くべし。と。是の念を作し已れるに、王及び四兵は、倶に虛空に昇つて瞿陀尼に往き、王既に彼に至るや、彼の諸の小王は皆來つて奉迎し、各國土を以て大王に獻じ奉れり。時に無量稱王は、彼に於て止住すること百千萬歲にして、彼に於て王は大王を領したり。彼の無量稱王は、復是の念を作せり。我れ今當に東、弗婆提に往くべし。と。是の念を作し已れるに、即四兵と倶に虛空に昇つて弗婆提に往き、王既に彼に至るや、彼の土の小王も亦皆奉迎し、復國土を以て大王に上げ奉れり。無量稱王は、彼に於て止住すること百千萬歲にして、彼に於て王は大王を領したり。彼の無量稱王は、復異る時に於て是の思惟を作せり。我れ當に彼の北[16]、鬱單越に往くべし。と。是の念を作し已れるに、即四兵と虛空に上昇して鬱單越に詣り、王既に彼に至るや、彼の諸の人民は歡喜して歸化せり。王は彼に於て住すること多くの百千歲にして、王の領受する樂をば、己が眷屬にも敎めたり。大王、彼の無量稱王は彼に於て久しき時なりしが、復是の念を作せり。我れ曾て、三十三天あつて、須彌の頂に住せることを聞けり。我れ今宜しく忉利天上に往くべし。と。是の念を作し已るや、即[17]龍象に乘り、復四兵と虛空に飛昇して須彌山に上れり。大王、爾の時に無量稱王は、御臣に問はく。汝、須彌及以び大海并に四天下を見るに、其の事云何。と。御臣は王に答ふらく。我れ須彌及び大海水・四天下等を見るに、悉く皆旋轉すること、猶陶師の杖を以て輪を轉ずるが如くに、我れの見る須彌及び四天下の悉く皆旋轉することも、亦復是くの如し。と。王は御臣に告ぐらく。[18]此の龍象王は大に行いて未だ止らざればなり。と。大王、爾の時に無量稱王は、復更に前進して御臣に問うて

【一三】處處に、乃至、分陀利華なりき。此の一句は、無用の文字にして、恐らくば衍文なるべし。異譯文にも此れに該當する句無くして、直ちに次下の文に續けたり。

【一四】瞿陀尼(Godāniya)。須彌山の西方に在る大洲と云はれ。牛貨洲と譯す。

【一五】弗婆提(Pūrva-videha)。須彌の東大洲と云はれ、勝身洲と譯す。

【一六】鬱單越(Uttaravatti)。須彌の北大洲の名にして、勝生洲と譯す。

【一七】龍象(Hasti-ratnam)。轉輪王の七寶の一なる象寶を謂ふ。「龍」は「良」と同じく美稱なり。

【一八】「此の龍象王は」の一句。異譯本に「汝の見る所は、此の龍象王は大に行いて、未だ止らざればなり。」とあり。

言はく。汝、須彌・大海及び四天下を見るに、復更に云何。御臣答へて言はく。我れ須彌及び大海水・四天下等を見るに、悉く皆振動す。と。王は臣に答へて言はく。今將に須彌山の頂に到らんと欲して、此の龍象王は小しく行きて、猶未だ止らざればなり。と。大王、彼の無量稱王は、復更に前行して御臣に問うて曰はく。汝須彌及び大海水並に四天下の相を見るに、復云何。と。御臣答へて言はく。我に須彌及び大海水・四天下等を見るに、動かず轉ぜず。と。王は臣に告げて言はく。此の龍象王は、今已に彼の須彌山の頂に到れるなり。と。爾の時に無量稱王及與び四兵は、尋いで卽彼の須彌山の頂に到れり。大王、爾の時に、帝釋は遙に無量稱王を見、歡喜して來り迎へて、是の言を作さく。善く來れり、大王。と。卽半座を分けて、王に命じて坐せしめたり。王は卽坐に就き、彼の天上に在ること無量歲を經、彼の天主と半を分つて治めたり。大王、爾の時に無量稱王は、復久しき時に於て、是くの如き念を作さく。我れ今寧ろ彼の天主を退くべくば、卽其の中に住して獨り天王爲らん。と。是の念を作し已るや、無量稱王及以び四兵は、彼の三十三天より卽便に退落して、閻浮提の寶莊嚴城に還つて、七寶の園中に墮ちたり。爾の時に、寶莊嚴城中の人民は、城外に出でて寶篋園の中に至れるに、無量稱王及び諸の四兵の、天よりして墮ちて彼の園中に在るを見、衆人見已るや速疾に城に入つて、城中の人に告げて、是くの如き言を作さく。今天子幷及に四兵の、天よりして來るあつて、寶篋園の中に在り。と。爾の時に、寶莊嚴城中に復一王あつて、名けて作愛と曰ひ、國事を秉執せしが、彼の作愛王は、天子幷及に四兵の、天よりして墮つるあつて寶篋園に在るを聞き、聞き已るや速疾に四兵を嚴しく敕め、善き乘に駕御して、諸の城人と寶莊嚴城より出でて寶篋園に詣り、王及び城人は無量稱王を見るや、未曾有と怪みたり。爾の時に、作愛王は尋いで敕して、速に種種の香華・末香・塗香を辦じ、疾く無量稱王の所に至つて、偏に右肩を袒ぎ、右膝をば地に著け、合掌し長跪して、無量稱王に向つて是の言を作さく。汝は是れ誰れと爲すか。

と。王は卽答へて言はく。汝は昔來に於て、頗は曾て無量稱王有りしを聞けりや。不と以すや。と。時に作愛王及び諸の臣民は、皆云はく。我れ昔曾て、先舊の人に從つて、本大王の無量稱と名くるあつて四天下に王たりしが、其の四兵と忉利天に昇りしと聞けり。と。無量稱王は卽之れに答へて言はく。汝の聞く所の無量稱王の如きは、卽我が身是れなり。と。爾の時に無量稱王は、初めて天より下つて、彼の人間の飮食の[一九]精氣を聞きて心に愛樂せず、堪忍し能はずして、身體沈惛すること、猶醍醐を熱沙の中に投ずるに、尋いで卽沈沒して、暫くも停ることを得ざるが如くに、無量稱王は、閻浮提に於て諸味を飮食するに、愛樂を生ぜずして、身心沈沒することも亦復是くの如くなり。爾の時に、作愛王は無量稱王の、人中の香氣・飮食に堪へず、身心頓に弊れて止住する能はざるを見るや、便ち是の語を作さく。無量稱王、何の善言ありとも、我れ來世に於て、何所にても傳說せん。と。大王、時に無量稱王は、作愛王に告げて言はく。汝、今當に知るべし。無量稱王は、昔より已來、四天下に王として威德自在に、念を須ふる所有れば意に隨はざること無く、樹林・華果及び隨意の果にて、能く一切衆生の苦惱を除き、諸の衆生の須ふる所の具に隨ひ、皆意の如くならしめたり。我れ復又能く天香を降し、天衣・天華を雨し、銀を雨し、金を雨し、四天下に王として豪富自在に、忉利天に昇つて、帝釋と座を分ちて共に、天の事を治めしが、貪つて厭く無き故にて、天に於て退沒して閻浮提に下だり、遂に便ち終沒するなり。と。時に、無量稱王は作愛王に告げて言はく。上の衆事の如くなれば、汝未來に於て、當に是くの如くに說くべし。無量稱王は豪富自在なりしが、貪求して厭くこと無かりしかば、自ら命終を取れり。と。是の語を作し已つて、卽便に命終れり。

佛言はく。大王、當に知りたまふべし、異觀を作す勿く、猶豫疑惑の心を生ずる莫からんことを。爾の時の無量稱王は、豈異人ならんや。我が身是れなればなり。大王、是の故に當に知りたまふべ

【一九】精氣。異譯本に「氣味」とあり。

し、諸根は幻の如くに、境界は夢の如くなることを。大王、是くの如くなれば、應當に心を正觀に繫けたまひて、他を信ずる勿かるべし。」と。

爾の時に、世尊は卽偈を說いて言はく。

常に法の自在を樂み　數數其の心に策ちて　貪欲の自在の中をば　智心にて應に遠離すべし
　欲の自在を離れ已つて　法の自在の中に住し　若し能く心を降伏せば　則ち能く煩惱を伏せん　若し能く煩惱を降さば　卽業道を離るるを得　若し業道を離れ已らば　卽世間の塔と爲らん　欲に爲つて穢れ染らず　煩惱の過を顯示し　衆生を饒益せんことを念ずる　故に號して[二〇]支提と爲す　貪欲の過を聞き已つて　便ち能く貪欲を離れて　一切智にて心を淨めたる　故に號して支提と爲す　最勝なる大丈夫は　衆生の惡を滅せんことを念じて　彼の瞋恚を解脫せる　故に號して支提と爲す　最勝なる大丈夫は　衆生の癡を滅せんことを念じて　彼の愚癡の心を脫したる　故に號して支提と爲す　調御大人の師　衆生の慢を滅せんことを念じて　彼の衆生の心を淨めたる　故に號して支提と爲す　と。」

[二〇]　支提（Caitya）。新譯には「制多」「制底」と書す。功德積集の義なり。轉じて、靈廟・塔婆の名にも用ふ。

巻の第七十六

菩薩見實會　第十六の十六

四轉輪王品　第二十六の二

大王、過去に、王の名けて地天と曰へるあり。法の如くに王と爲つて、[一]名けて法王と爲し、七寶具足したり。謂はゆる輪寶・象寶・馬寶・明珠寶・玉女寶・長者寶・主兵寶、是れを七寶と名く。大王、彼の地天王の父を、名けて地生と曰ひしが、彼の地生王の命終に臨める時に、其の地天は最も長子たれば、其の地生の命終の後に、輔相の大臣は地天の頂に灌ぎ、以て大王と爲したれば、即刹利の灌頂の大王と爲れり。時に地天王は、既に刹利灌頂大王と爲り已り、十五日の月の盛に圓滿なる、受[二]齋の日に於て、沐浴して頭を洗ひ、鬚髮及以び爪の甲を剪除し、已つて新淨なる衣を著け、諸の華鬘・種種の瓔珞・天冠・臂の印環・釧・耳璩を以て其の身を莊嚴して、高樓の上に在り、婇女圍繞せるに、即東方に於て金輪寶あつて、千輻減ぜず、轂輞具足し、光明照り曜き、縱廣七肘にして純ら是れ眞金なりき。大王、時に地天王は是の事を見已るや、即是の念を作さく。我れ昔曾て、先舊人の說を聞くに、若し刹利の灌頂せる王は、十五日の月の圓滿なる時、受齋の日に於て、沐浴して頭を洗ひ、鬚髮を剪除し及び爪の甲を除き、汚れざる衣を著け、諸の華鬘・種種の瓔珞・天冠・臂の印環・釧・金の璩を以て其の身を莊嚴して、高樓に在つて婇女圍繞せるに、若し東方に於て、金輪寶の轂輞具足し千輻減ぜずして來り應ずる者あらば、當に知るべし、是の王は、定つて當に轉輪聖王と作るを得べし。と。復是の念を作さく。我れ今豈、輪王と作るべきか。我れ今當に試みるべし。と。大王、爾の時に地天王は、即座より起ち、偏に右の肩を袒ぎ、衣服を整へ理め、右膝をば地に著け、輪に對して合掌し、彼の天輪に向つて是くの如き言を作さく。寶輪下つて地に在つて住すべ

【一】名けて法王と爲し。異譯本に「善法にて世を治め、」とあり。

【二】齋（Upoṣatha）。清淨增上の義にして、罪を懺じ、善根を增長するを謂ふ、假借文字にて、「布薩」と書する者是れなり。

し。と。是の語を作し已るや、彼の天の寶輪は、空より地に下つて、王の前に住在したり。時に地天王は、卽妙音を以つて用ひて其の手に塗り、勝妙なる好衣にて以て輪寶を拭ひ、其の右手を以て輪寶を接け取つて左手の中に置き、復右手を以て其の輪を摩し拭うて、是くの如き言を作さく。汝、今應當に東方を降伏すべし。と。是の語を作し已れる時に、金輪寶は虛空に飛昇し、左右に旋轉して卽東方に往き、彼の往昔の轉輪王の道――其の道は平正にして、諸の華を布き散して甚だ愛樂すべき――に至るに、輪の經る所の處は、皆悉く平正にして高下ある無く、王の福力を以て、河・池・井・泉の枯竭せる處に、八功德の水悉く皆盈滿し、一切有る所の樹林・花果の枯悴せる者は、悉く皆敷き榮え、已に敷き榮えたる者は、更に鬱茂を增したり。大王、爾の時に地天轉輪聖王は、卽四兵と輪に隨つて去き、輪寶若し住らば王も亦隨つて住るに、王の至る所の處の、有らゆる國土の大小の諸王は、其の臣民と各金の盤に銀の粟を盛り滿したるを以て、或は銀の盤に金の粟を盛り滿したるを以て、大王を迎へ奉つて各是の言を作せり。善い哉、大王。善く來れり、大王。此の諸の國土は安隱豐樂にして人民熾盛なれば、唯願はくば大王、此の國土を受けて人民を攝化したまはば、我等皆當に左右に給じ奉るべし。唯願はくば、止住したまはんことを。と。爾の時に地天轉輪聖王は、彼の諸の國王及び臣民等に告ぐるに、是くの如き言を作さく。我れ今國土・寶物を須ひず。汝自ら受け用ひよ。汝今若し我れに隨順せんと欲せば、應に殺生を離れ、亦偸盜することも莫く、亦邪婬することも莫く、亦妄語することも莫く、亦兩舌することも莫く、亦惡口することも勿く、亦綺語することも莫く、亦貪欲することも莫く、亦瞋恚することも莫く、亦邪見することも莫かるべし。汝等、應當に自ら十善に住し、亦他人に敎へて十善に住せしむべくば、我れは則ち、汝が我れに歸從して、我が敎勅を受けたることを知り、我れ汝等を觀ること、猶我が子の如くならん。汝等、常に應に父母・師長及び諸の沙門・婆羅門等を供養し、非法・不善・惡の行を作す莫く、亦他人に勸めて

善法を行はしむべし。若し能く是くの如くたらば、我れは汝等一切の國土の有らゆる人民の、悉く皆我れに歸從し降伏したることを知らん。と。又復告げて言はく。汝等、常に應に父母を孝養し、師長及び諸の沙門・諸の婆羅門を恭敬し、非法・不善・惡の行を作す莫く、亦他人に勸めて善法を行はしむべし。若し能く是くの如くならば、我れは汝等一切の國土の有らゆる人民の、悉く皆我れに歸從し降屬したることを知らん。と。爾の時に、聖王及び諸の四兵は、[三]是くの如くに漸漸大海を度り、弗婆提を降し、人境を過ぎ盡して、輪寶乃ち住ること是くの如くに、乃至、南・西・北方及び鬱單越をも悉く降伏し已り、彼の北海を度り、人境を盡し已つて、王及び輪寶は閻浮提に還り、本宮の門の上にて虛空の中に在り、停住して動かざりき。

爾の時に、地天轉輪聖王は、是くの如くに四天下を降伏し已り、閻浮提に還つて卽便に止住せしが、地天大王及與び輪寶の、還り來つて此の閻浮提に至れる時に、彼の四天下は、變じて七寶を成して、端嚴なること殊特なりき。何をか七寶と謂ふ。謂はゆる金・銀・瑠璃・玻瓈・硨磲・赤珠・碼碯なり。爾の時、輪寶の四天下に於て周迴し旋轉し已つや、[四]一切の地獄・畜生・餓鬼・八難消滅し、四天下に於て有る所の一切の不善・惡の聲は悉く皆除滅せり。況んや、諸の惡業を造作することある者をや。何を以ての故ぞ。皆是れ地天聖王の本願力の故なり。又復輪寶の周く旋轉せる時に、四天下の中に、種植することを假らずして、處處に皆自然の秔米の、淨くして糠糩無きものを生じたり。又復輪寶の周く旋轉せる時に、四天下の中に、自然にして[五]天樹の寶衣を生じたり。又復輪寶の周く旋轉せる時に、四天下の中の一切の病患は、悉く皆除愈したり。唯三患を除くのみ。何等を三と爲す。一には求欲なり、二には[六]段食なり、三には衰老なり。又復輪寶の旋轉せる時に、四天下の中の有らゆる人民の壽は[七]千萬歲なり。又復輪寶の周く旋轉せる時に、四天下の中の一切の人民の有らゆる苦惱は、自然に消滅したり。是等の如き無量無邊の希有・不可思議なる事は、世に出現せり。

【三】是くの如くに漸漸、乃至、彼の北海を度り、人境を盡し已つて。此の間の說述は極めて不文にして、寧ろ異譯本の「勝身洲にて、人境を過ぎ盡してより、漸く大海を度り、牛貨洲及び俱盧洲に至つて、王の德化を宣べ、悉く降伏し已つて」の簡明なるに如かず。特に本文中の「南・西・北方」の「南」の如きは、漫然、筆を奔らせたる不注意の文字(卽ち南閻浮提を指す)にして、又其の「北方及び鬱單越」の如きは、重複せる無意味の文字を列ねたる者とす。

【四】一切の、乃至、八難消滅し。地獄等は八難の中の者なれば、此所は「餓鬼等の」の意義の句法と見るべし。

【五】天樹の寶衣を生じたり。異譯本に「諸の劫波樹に天の寶衣を出し、」とあり。

【六】段食(Piṇḍa)。香・味・觸を體としたる飮・食物を分分・段段に受用するを謂ひ、卽ち有情の飮・食物なり。

【七】千萬歲。異譯本には「千歲」とあり。

爾の時に、地天大王は、復久しき時に於て、是くの如き念を作せり。我れ今此に於て諸の快樂を受くれども、五欲の衆具にして、頗は更に處の此れより勝れたるあらんか。不と以すか。と。復自ら思念すらく。我れ昔曾て、須彌山上に三十三天ありと聞きしが、五欲の資具は其の事云何。と。爾の時に、地天大王は、未だ愛欲を除かずして、人間の有つ所の五欲の資財の具を厭ひ惡み、彼の天中なる上妙の樂を欣ひたれば、我れ今寧ろ彼の天上に往くべし。と。爾の時に、地天大王は是の念を作し已るや、王及び四兵は、忽然の頃に忉利天に至れり。爾の時に、帝釋は遙に地天大王を見て、是くの如き言を作さく。善く來れり、大王。善い哉、大王。と。即半座を分つて王に命じて坐せしめたれば、王は即坐に就きたり。爾の時に、地天は彼の天上に在つて、無量なる百千歳を經、位を分つて治めたり。爾の時に、地天大王は、復久しき時に於て、大なる貪心を生じて、是くの如き念を作さく。我れ今、應當に彼れ天主を退けて、獨り天王と爲るべし。と。是の念を作し已るや、即帝釋の半座よりして墮ち、幷に四兵と閻浮提の[八]安隱城の中に至れり。爾の時に、地天大王は、久しく天上に在つて、勝妙の樂を受けて心に耽樂を生じたりしに、忽ち人間に至りたれば、人中の資具を堪受すること能はずして、身心沈沒すること、猶醍醐を熱沙の中に置くに、尋いで即消化して所在を知ること莫きが如くに、大王の身心の沈沒して、人中の有らゆる飲食の精氣を堪忍し能はざりしことも、亦復是くの如くなりき。

爾の時に、地天大王は、身心疲れ頓りて、偈を說いて言はく。

[九]諸王の大自在も　渇愛を除き能はざることは　乾れたる草の火に遇ふが如くなれば　是の故に
應に欲を捨つべきなり　常に婬欲を行ひて　未だ曾て滿足せざる時は　渇して鹹水を飲むが
如くに　終まで渇を除くこと能はず　衆の流の海に歸すれども　終まで滿ち足ることある無
きが如くに　愛欲も亦是くの如く　曾て滿ち足る時無し　火の草木を焚くに　厭き足る時あ

【八】安隱城。異譯本には「末土羅城」とあり。

【九】諸王の大自在も。異譯本に「王者自在と稱すれども」とあり。

る無きが如くに　愛欲も亦是くの如く　終まで滿ち足ることある無し　猶深谷の響の聲に隨つて休息すること無きが如くに　聲を聞くことも亦是くの如く　亦休息する時無し　亦香を盛る篋の香を受くるに簡擇する無きが如くに　香を嗅ぐことも亦是くの如く　亦厭き足ることあること無し　杓にて〔一〇〕美食を撓すに　終まで止足することを知る無きが如くに　舌の美味を貪り嗜むことも　亦止み足ること無し　鏡の面像を現ずるにも　亦厭足ある無きが如くに　是の欲を行ふ人の如きは、欲に於て厭き足ること無し　虚空の風を受くるに　未だ曾て厭足あらざるが如くに　身に常に諸の觸を受くるも　終まで厭き足る時無し　夢中に水を飲むに　終まで渴を除く能はざるが如くに　意にて受くる所の諸法も　亦厭き足ることある無し　愛欲を貪り求むる人は　復愛欲を增長し　諸の境界を觀るや　愛して厭き足る時無し　欲の苦惱を增すを見ること　猶火の薪を焚くが如くにして〔一一〕諸の愛欲を滅除せば　亦水の火を滅するが如くなり　と。

佛言はく。大王、汝知りたまふや。爾の時の地天大王は豈異人ならんや。大王、當に知りたまふべし。異觀を作すこと勿れ。地天王は、即我が身是れなることを。大王、當に知りたまふべし、彼の地天大王は、往昔の時、豪富自在なりしが、貪り求めて厭くこと無かりしかば、遂に便ち命終せることを。何を以ての故ぞ。諸根は厭くこと無くして境は能く滿すこと無く、諸根は鏡の如くにして境は光影の如く、諸根は幻の如くにして境界は夢の如くなればなり。大王、應當に心を此の法に安んじて深く自ら觀察し、他の教に隨ひたまふこと勿かるべし。大王、此の法は、乃ち是れ過去・未來・現在の諸佛世尊の無上の菩提なれば、大王、應當に一切の豪貴を遠離したまふべく、應當に一切の渴海を消し竭し、憍慢の山を倒し、一切の衰禍を遠離して、一切の法に於て平等なるべし。一切の凡夫の地に非ず、亦、聲聞の行じ能ふ所に非ず、又、一切の緣覺の境界に非ずして、乃ち是れ

〔一〇〕美食を撓す。異譯本に「美餌を和するに」とあり。

〔一一〕諸の愛欲等。異譯本に「當に淨智の水を以て之れを滅して餘ある無かるべし。」とあり。

一切の菩薩の行ずる所、一切の諸佛の正覺の證する所なれば、王當に心を安んじて散亂せしむる勿かるべく、應に是の念を作したまふべし。我れ當に云何にせば、未來世に於て、一切の世間の天人の中にて、燈明と爲り、炬と爲り、光と爲り、船と爲り、導と爲り、師と爲るを得、商主と爲り、首と爲り、無上と爲るを得て、自ら度して彼れを度し、自ら脫して彼れを脫し、自ら安んじて彼れを安んじ、自ら涅槃を得て他をして涅槃せしめんかと。大王、[一二]先際に更たる所の豪富の自在なりしを觀じたまふこと莫かれ。大王、當に知りたまふべし、諸根は幻の如くにして厭き足ることある無く、滿し能ふ者無く、境界は夢の如くにして滿さしめ能はざることを。と。

佛言はく。大王、過去に、王の名けて[一三]頂生と曰へるあり。大威德を有ち、大神足を有ち、大威勢を有ちて、[一四]父烏哺沙王、頂上よりして生れたり。[一五]久しく善根を積み、曾て無量無數の諸佛に見えて諸の善根を修め、諸の世尊に於て恭敬し供養して、善本を積集したれば、四天下に於て豪貴自在なりき。大王、時に頂生王は灌頂して位を受くるや、七日にして已に七寶具足して、轉輪王と爲れり。何者をか七つと爲す。一には、金輪寶の、千輻減ぜず、轂輞具足すること自然にして、縱廣七肘あつて、來つて、之れに應じたり。二には、白象寶の、六牙具足し、七肢にて地を拄へ、白きこと雪山の如くなるもの、自然にして至れり。三には、馬寶の、其の色紺艷にして、來つて之れに應じたり。此の上象馬は、旦より食するに至るまでに、四天下に於て八方に周遍し、大海の際を盡して還つて本の處に住するなり。四には、珠寶の、大さ人ハ髀の如くなる純青の瑠璃の、其の光周匝八方各一由旬を照曜するなり。五には、長者寶の、豐饒なる財寶の巨富無量にして、王の念ずる所に隨ひ、皆能く之れを辨ずること自然にして應ずるなり。六には、玉女寶の、形容端正・微妙なること第一にして、長からず、短からず、白からず、黑からず、諸の毛孔より栴檀の香を出し、口氣の淨潔なること靑蓮華の如く、其の舌は廣大にして、出せば能く面を覆ひ、形色は細薄にして

【一二】先際。前際と同じ、第一卷、同名の解、參照。

【一三】頂生。異譯本に「曼達多」とあり。

【一四】父烏哺沙王頂上。異譯本に「彼の父王頂上」とあり。

【一五】久しく善根を積み。異譯本に「已に先の世に於て、久しく梵行を修め、」とあり。

赤銅の鋌の如く、身體柔軟なること猶骨無きが如く、冬は溫に夏は涼しく、其の心は慈悲にして常に軟語を出し、手を以て王に觸るれば、卽王の心の念ずる所の處を知るものなり。七には、主兵寶の、自然にして出でて、勇猛・策謀・武略第一にして、預め王の心の七日の念ずる所を知り、善く四兵の鬪戰の法を知つて、未だ集らざる者をば集めしめ、已に集れる者をば散らしめ、千子をば具足して、勇健・端正に能く怨敵を降すなり。大王、爾の時に頂生轉輪聖王は、七寶をば具足し、四天下に王として、法の如くに世を化し、四天下をして、豐樂安隱に、人民熾盛に、城邑聚落は次第に相ひ近づきて、雞飛んで相ひ及ばしめたり。爾の時に、大地には、一切沙礫・荊棘あること無く、多饒に衆生具足し、無量の園林・泉池は端嚴殊妙にして、甚だ愛樂すべかりき。何を以ての故ぞ。皆是れ頂生聖王の安住せる法力なればなり。爾の時に當つて、若しは天若しは人は、欲樂中の最も第一と爲すものを受けたり。爾の時に、頂生大王の住する所の城を阿踰闍と名けしが、其の城の東西は十二由旬に、南北の長さは七由旬にして、其の城は七寶の衆寶の羅網にて其の上を彌覆し、衆の寶鈴を懸けて、其の城の內外の種種なる莊嚴は、悉く皆上の無量稱王の寶莊嚴城の如くにして、等しくして異るあること無く、[16]亦忉利の得勝の堂の如くなりき。大王、頂生大王は三種の殿を造れり。一を月出殿と名け、盛夏の熱時に於て、王は其の中に居るなり。其の第二殿を毘瑠璃藏と名け、春月の時に於て、王は其の中に居るなり。其の第三殿を日威德起と名け、冬寒の時に於て、王は其の中に居るなり。爾の時、頂生は、玉女寶并に諸の婇女の前後に圍遶せると、月出殿に入る時に、身體の清涼なること、猶[17]牛頭栴檀もて其の身體に塗れるが如く、王は眷屬の前後に圍遶せると、若し彼の毘瑠璃殿に入る時は、身心の調適すること、猶[18]多摩羅葉の香を用ひて其の身に塗るが如し。大王、其の頂生大王は、復眷屬婇女の圍遶せると、彼の日威德殿に入る時には、身體の和煖なること、猶沈水香を用ひて其の身に塗るが如く、彼の殿に入る時の身體の和煖なることも、亦復是くの

【一六】忉利の得勝の堂。異譯本には「帝釋の妙見大城」とあり。
【一七】牛頭栴檀。栴檀に同じ。
【一八】多摩羅葉。多摩羅跋香に同じ。

如きなり。大王、是の頂生王は、欲するに隨つて自在にして、諸殿の等をして、其の時節に隨つて樂の觸を生じ、意に隨つて風を出し、意に隨つて雨を出し、種種の音樂は意に隨つて至り、資生に須ふる所も亦意に隨つて現ぜしむるなり。大王、爾の時に、頂生は其の宮內に於て、七日の中、天より金銀を雨せしが、七日を過し已つて、是くの如き念を作さく。甚だ奇にして希有なること思議すべからず。[一九]此くの如きは、清淨の業にて獲られたる果報の、意に隨つて現じて我が意を充滿せるにて、福德の致す所として差違無けれども、也誰れか是くの如き果報を、修せる福德に於て見ることを得たればとて、知足を生ずることあらん。と。大王、頂生聖王は、閻浮提に於て百千歲を經已つて、是くの如き念を作さく。我れ今此の閻浮の大洲に於て、安隱に豐に樂み、人民は熾盛にして悉く皆我れに歸屬し、宮內に七日寶を雨したれば、我れ今は當に西、瞿陀尼に往くべし。と。是の念を作し已つて、頂生大王は、卽四兵と虛空に上昇し、閻浮提より漸次に彼れ西、瞿陀尼に至れり。王は旣に彼に至るや、無量の百千歲に於て、彼に在つて王として領せり。頂生大王の[二〇]依報は人に過ぎたれば、未だ天の報を得ざれども、大王、頂生聖王は、瞿陀尼に於ても、意に隨つて寶を雨して其の宮內に滿したること、閻浮提の如くに等しくして異るある無かりき。大王、爾の時、頂生は、復後の時に於て是くの如き念を作さく。我れ閻浮提に王として、豐樂安隱に人民熾盛にして、又、宮內に於て意に隨つて寶を雨し、此の瞿陀尼も、亦皆安隱豐樂に人民熾盛にして、又、宮內に於て意に隨つて寶を雨したり。我れ今亦、東に大洲の弗婆提と名くるもの有るを知れば、我れ今當に往くべし。と。是の念を作し已るや、卽、四兵と俱に虛空に昇り、瞿陀尼より漸次にして東、弗婆提に往きたり。王は旣に彼に至るや、弗婆提に於て止住して、王として領すること無量の千歲にして、五欲の樂を受くる依報は人に過ぎたれば、未だ天の報を得ざれども、大王、頂生聖王は、弗婆提に於て、意に隨つて寶を雨し、其の宮內に滿せること、閻浮提の如くに等しくして異ることある無

【一九】此くの如きは、乃至、差違無けれども。異譯本には「清淨なる福業の感報、此くの如し。」とあり。

【二〇】依報。正報たる心身の依り止まる所の身外の諸物にして、山川・國土・家屋・衣食・器具等を謂ふ。

かりき。大王、爾の時頂生は、復後の時に於て、是くの如き念を作さく。我れ閻浮提にて豐樂安隱に人民熾盛にして、又、宮內に於て意に隨つて寶を雨し、及び瞿陀尼も亦皆安隱豐樂に人民熾盛にして、亦、宮內に於て意に隨つて寶を雨したり。此の弗婆提も皆悉く安隱豐樂に人民熾盛にして、亦、宮內に於ても意に隨つて寶を雨したり。我れ今亦、北に大洲の欝單越と名くるもの有つて、[二二]其の中の人民には我・我所無きを知る。復此くの如しと雖も、我れ當に彼に往いて、自ら眷屬を試みるべし。と。頂生大王は是の念を作し已るや、其の四兵と倶に虛空に昇り、弗婆提より漸次にして北、欝單越に往きたり。王は旣に彼に至るや、欝單越に於て、[二三]無量の千歲、眷屬を教誡したりしが、復久しき時に於て、是くの如き念を作さく。我れ閻浮提にて、豐樂・安隱にして已に七寶を雨し、及び瞿陀尼にて、人民熾盛・安隱にして寶を雨し、東弗婆提にても、亦皆是くの如くに意に隨つて寶を雨し、此の欝單越にても、悉く亦安隱なり。我れ曾て三十三天あつて、須彌の頂に住せるを聞けり。我れ今當に往いて、躬自ら之れを觀るべし。と。爾の時に、頂生は是の念を作し已るや、卽四兵と倶に虛空に昇つて、須彌山の頂に往けり。爾の時に當つて、釋提桓因は、三十三天と善法堂に集つて、人天の事を論ぜしが、爾の時帝釋は、遙に頂生の遠くよりして來たれるを見、卽出でて之れを迎へて、是くの如き言を作さく。善く來れり、大王。善く來つて此に至れり。と。卽、半座を分つて、王に命じて坐せしめたれば、王は卽、座に就きたり。時に、頂生王の半座に坐せる時に、卽、十種の勝事あつて諸天を映蔽せり。何等を十と爲す。一には、壽命は天に勝れたり。二には、容色は天に勝れたり。三には、名稱は天に勝れたり。四には、受樂は天に勝れたり。五には、王領の自在は天に勝れたり。六には、形貌は天に勝れたり。七には、音聲は天に勝れたり。八には、香氣は天に勝れたり。九には、食味は天に勝れたり。十には、細觸は天に勝れたり。大王、爾の時に、頂生と彼れ帝釋とは、形容・相貌・行動・威儀、等しくして差別無く、飲食・衣服・資生の具も悉く異るこ

〔二二〕其の中の人民、乃至、試みるべし。異譯本に「其の中の人民は、我我所を分別する想を生ぜずと、今當に彼に往いて之れを試驗すべし」とあり。
〔二三〕「無量の千歲」の一句。異譯本には「其の眷屬を驗して、乃ち實に爾るを知り、」とあり。

とある無く、唯視ることの瞬あつて、別異と爲すのみ。而して諸天等は、天王と人王との二種の別を分別し識知するなり。

佛言はく。大王、甚だ奇にして希有なり。帝釋と頂生とは、人と天と既に別なるに、形容・相貌等しくして異ることとある無きことや。大王、當に知りたまふべし、福德の力は、其の事是くの如くなることを。誰れか福德に於て足ることを生ぜんや。大王、爾の時に頂生は、忉利天に於て、無量の千歲、增上なる自在を爲したり。大王、爾の時の頂生は、四天下に於て豪富自在に、復忉利天上に於ても豪富自在にして、帝釋と治を分ちしが、猶厭足せずして復是の念を作せり。我れ寧ろ獨にて天主と爲るべく、何ぞ帝釋を用ひん。宜しく應に之れを退くべし。と。大王、爾の時、頂生の是の念を作し已るや、天より退下して閻浮提に還り、阿踰闍城の最上園の中に於れり。王の下る時に當つて、威光照曜して、閻浮提の一切の諸方に遍うして、日光を映蔽したり。亦日出でて月に光明無きが如くに、日光は空に在れども復の光明無く、王の光の映蔽したることも亦復是くの如し。日輪の出でて月輪を映蔽するが如くに、頂生の威光の彼の日輪を映したることも、亦復是くの如し。大王、爾の時に、阿踰城の人は城を出でて遊觀せしが、彼の頂生并及に四兵の、天よりして退いて其の園中に墮ちたるを見たり。彼の人見已るや未曾有と怪み、卽、城中に入つて遍く城人に告げて言はく。今、天子并及に四兵あつて、空よりして下つて、彼の王の最上園の中に墮ちたり。と。大王、爾の時に、城中の王及び臣民は、種種の歌舞・岐樂・塗香・末香・寶幢・幡蓋・華鬘・瓔珞を辦具し、身體・衣服をば悉く皆淸淨にして、速疾に城を出でて彼の園中に詣れり。大王、爾の時、頂生の天より墮ちたる時に、一切の大地は六種に震動せり。爾の時に當つて一切の人中は、有らゆる莊嚴をし、最勝の妙香をば用ひて其の身に塗り、悉く園中の頂生王の所に至れり。爾の時に、頂生は天中の上妙なる香塵に耽著したれば、人中の資具の有つ所の香氣に堪へ忍ぶこと能はずして、沈惛して地に在る

こと、喩へば生酥・醍醐を極熱の沙中に投ずるに、停り住することを得ざるが如く、爾の時の頂生の沈惛して住せざることも、亦復是くの如くなりき。爾の時に、城中の王及び臣民の内外の人衆は、頂生王の、彼の園中に在つて沈惛して地に在るを見、即便に問うて言はく。天は是れ誰れと爲すか。と。爾の時に、頂生は即彼の王及び諸の人民に告げて言はく。汝は昔曾て、頂生大王ありしことを聞けりや、不や。と。爾の時に、國王及び諸の人民は、咸く皆答へて言はく。我れ昔曾て、耆舊の人に從つて聞きし所にては、大王の名けて頂生と曰へるありしが、人身を捨てずして、諸の眷屬幷及に四兵を將ゐて天上に昇れりと。と。爾の時に、頂生は諸人に告げて言はく。昔の頂生とは、我が身是れなり。我れ及び四兵は、天よりして墮ちたるなり。と。

爾の時に、國王及び城の内外の有らゆる人衆は、即偈頌を以て、頂生に問うて曰はく。

我れ舊人より聞く所にては　威德の王あつて　號名を頂生と曰ひ　極めて大名稱ありしが　已身及び四兵は　此より天上に昇り　幷及に　[三]諸の眷屬を　法王として法の如く治めたりと

人王の勝王は言ふ　無常の力に害せられ　天の樂より退きて苦を受くる　頂生とは我れ是れなりと　諸人は皆合掌して　大王の足を頂禮し　何なる希有の事かある　未來に當に傳へ說くべしと

天よりして退きたる者　苦を受くる王は說いて言はく　汝希有の事を聽くに　欣樂して放逸なる莫かれ　頂生大王は　四天下を統領して　樂を受くること天人に過ぎたりしが　欲に厭くこと無くして死を致せり　其の後宮の內に於て　七日珍寶を雨し　法の如くに天下を治めしが　欲に厭くこと無くして死せり　彼の天帝釋と　半座を分つて坐せしが　惡覺に惱亂せられ　多欲の故にて退墮せり　其の生死の海に於て　無智の故にて沈沒して　五欲に樂著せる者は　天の欲にも厭く無くして死せり　渴して夢に水を飲むに　其の渴を除くこと能はざるが

【三】諸の眷屬を、乃至、法の如く治めたり。異譯本に「諸の天人を教化し、爲めに正法を說きたり。」とあり。

如くに　五欲を受くることも亦爾く　終まで厭き足ることある無し　智慧は諸の衆生に　愚癡の闇を斷除せしむれば　彼の智者は足ることを知りて　正しく諸の有の趣を觀ずるなり
智にて有の趣を觀察し　慧にて老病死を見　諸の渇愛を斷除して　有趣を捨てて著する無し
觸を觀ること火の燒くが如くにして　便ち渇愛を捨て　受を觀ることも亦是くの如くにして
愛の是れ善に非ざるを知るなり　衆の音樂を撃つが如くに　根と境界とも亦然りと　聖教の中にて調伏して　能く根の自性を捨つるなり　[二四]一切五種の人は、名色從り生じ　識は中に於て分別して　則ち思覺を生ずと　聖者は是の觀を作して　趣の有に於て著せず　智者は慧をば滿足して　滅を證すること薪の盡くるが如きなり　と。
頂生は彼の王と　臣民とに向つて是れを說き已るや　諸有の無常を示して　即便に終沒を取りぬ

佛は大王に告ぐらく。汝知りたまふや。爾の時の頂生王は、豈異人ならんや。異觀を作す勿く、疑惑を生じたまふこと莫かれ。我が身是れなるなり。我れ昔曾て頂生王たりし時に、人天を統領して豪貴自在なりしに、貪欲に厭くこと無くして終沒を取れるなり。是の故に、大王、應に豪富・憍慢の自在を捨てて、不放逸に住したまふべし。若し能く不放逸の行に住せば、是の人は即能く諸の善根を修するなり。大王、若し不放逸ならば、復能く法界の平等に入るなり。大王、若し人能く放逸を離れば、利益を成就するなり。大王、[二五]有爲と無爲との界は、男に非ず女に非ず、過去に非ず未來に非ず現在に非ざるに、大王、當に此の法に於て自心を安住して、他の敎に隨ひたまふこと勿かるべし。大王、此の法は乃ち是れ過去・未來・現在の諸佛世尊の無上なる菩提なれば、大王、應當に一切の豪貴を遠離し一切の渇海を消し竭し、憍慢の山を倒し、一切の衰禍を遠離して、一切に於て平等なるべし。一切の凡夫の地に非ず、亦聲聞の能く行ずる所にも非ず、又一切の緣覺の境界に非ず

【二四】一切五種の人、乃至、思覺を生ずと。異譯本には「六處、寂靜ならずして、唯、遍計して分別すれど、」とあり。因みに「五種の人」は、舊譯の「五衆」と同じく「五蘊」を指す者なるべし。

【二五】有爲と、乃至、非ざるに。異譯本に「若しは有爲界、若しは無爲界は、二種平等にして、男相あるに非ず、亦女相非ず、亦、過去現在未來非ずと」とあり。

して、乃ち是れ一切の菩薩の行ずる所、一切の諸佛の正覺の證する所なれば、王は當に心を安んじて散亂せしむる勿るべく、應に是の念を作したまふべし。我れ當に云何にせば、未來世に於て、一切の世間の天・人の中にて、燈明と爲り、炬と爲り、光と爲り、船と爲り、導と爲り、師と爲るを得、商主と爲り、首と爲り、無上と爲るを得て、自ら度して彼れを度し、自ら脫して彼れを脫し、自ら安んじて彼れを安んじ、自ら涅槃を得て他をして涅槃せしめんかと。大王、先際に經し所の豪富自在を觀じて、大王、當に諸根は幻の如くにして厭き足ることある無く、能く滿す者無く、境界は夢の如くにして滿しめ能はざることを知りたまふべし。

大王、過去に、王の名けて尼彌と曰へるあり。諸法に了達して、法の如くにして王と爲りしが、不放逸を重んじ、作す所の事の若きも、諸の放逸を離れたり。大王、是の尼彌王は、常に三世の平等なるを觀じ、又、一切の諸法を觀ずること猶三世の平等の如く、〔三六〕過去の一切の諸法を觀ずるに自性を遠離し、未來の一切の諸法を觀ずるに自性を遠離し、現在の法を觀ずるにも、亦復是くの如くに、自性を遠離したり。大王、彼の尼彌王は、一切の三世の法の平等なるを觀じ已つて、諸法に於て取著を生ぜざりき。彼の尼彌王は、一切の世間は、四顚倒の顚倒する——不淨なる法の中に於て淨の想を起し、苦なる法の中に於て樂の想を生じ、無常なる法の中に於て常の想を起し、無我なる法の中に於て我の想を生ずる——所たるを觀じ、世を見ること是くの如くにして、便ち是の念を作さく。世間の敗壞たるや、甚だ大なる敗壞たること此くの如くなるに、衆生は、一切の諸法の自性の空寂なるを而ち覺知せず。と。大王、爾の時に尼彌王は、復是くの如き念を作さく。我れ當に四攝の法を以て、諸の衆生を攝むべし。若し我れ四法にて衆生を攝めば、是の諸の衆生は、我れに隨順して我が言敎を受けん。と。爾の時に尼彌大王は、先づ是の方便を作し已り、即四攝を以て諸の衆生を攝め、諸の衆生を攝め已るや、尼彌大王は、即、人民に一切の諸法の平等なることを教へん

【三六】「過去の一切の諸法等」の一句、異譯本に「彼の過去の一切諸法の、平等の理に住して、本より自性を離れたるを觀じ、等」とあり。

とて、是くの如き言を作さく。汝、諸の衆生、一切の諸法は自性を離れたり。若く一切の法は自性を離れたれば、彼の法は、亦過去にも非ず、未來にも非ず、現在にも非ざるなり。何を以ての故ぞ。彼の法の自性には實無きが故に。若く法は自性を離れたれば、彼の法にて、亦是の過去・未來・現在をも說くべからざるなり。と。爾の時に彼の尼彌王は、彼の衆生の所に於て、是の三世平等の法を敎へ已るや、彼の諸の[二七]衆生の八十千萬那由他無量百千の衆生は、無生法忍を得たり。大王、爾の時に、三十三天は善法堂に在つて、聚集して坐せしが、是の議を作して言はく。善い哉、善い哉。[二八]鞞提呵國の人は大に善利を獲たり。是れ尼彌王は諸法を解了して、法の如くにして王と爲り、方便を具足して、顚倒の衆生の所に於て、善方便にて不顚倒の法を示せるを以てなり。と。爾の時に、釋提桓因は、餘の處に在つて、善法堂を去ること遠かりしも、卽、天耳を以て彼の天の說くを聞き、聞き已るや、尋いで來つて善法堂に詣り、座に就いて坐し、旣に座に就き已るや、彼の天に問うて言はく。汝、諸天等は、善法堂に在つて何を論じ說く所ぞ。と。是の問を作し已れる時に、諸天は等しく帝釋に報じて言はく。唯然り。天主、我が說く所を聽きたまへ。我等向に來つて、善法堂に集つて論ずる所の事は、彼の鞞提呵國の人の、善く利益を得たることを說きたるなり。是れ尼彌王は、[二九]諸法を解了し、法の如くにして王と爲り、方便を具足して、顚倒の衆生の所に於て、善方便を以て不顚倒の法を示したればなり。謂はゆる諸法の自性を顯示したればなり。と。彼の諸天等の是の語を作し已るや、爾の時に、帝釋は諸天子に報じて、是くの如き言を作さく。是れ尼彌王は、不可思議なる善巧方便を具足し成就すればなり。汝等、此の忉利天上に在りながら、彼の尼彌王を見るを得ることを欲するや、不や。と。爾の時に、諸天は咸く皆同聲にて、是くの如き言を作さく。唯然り、天主。我等此に在りながら、彼の尼彌大王を見るを得んことを欲す。と。爾の時に、帝釋天主は、卽、御臣の[三〇]摩多梨と名くるに告げて言はく。汝當に前み來たるべし。疾く諸天の千

【二七】衆生の八十千萬、乃至、衆生。異譯本には「衆會の百千俱胝那由他の衆生」とあり。

【二八】鞞提呵(Videha)。勝身と譯し、普通には、謂はゆる東弗婆提洲なり。然るに、異譯本の此の間に當る句には、「天眼にて遙に見るに、閻浮提中に」とあり。又、本經の後文に至つて、「閻浮提の鞞提呵國」とあり。蓋し、同名異國なるべし。

【二九】諸法を、乃至、王と爲り。異譯本には、單に「深く諸法に達し」とあり。

【三〇】摩多梨(Mātali)。天神にして意譯して「無著處」と云ふ。

馬の寶車を嚴り備へて、閻浮提の鞞提呵國の尼彌王の所に往き、是くの如き言を說くべし。此に是の諸天の千の調馬の車をば遣し來つて王を迎ふ。唯願はくば、大王、此の寶車に昇つて怖畏を生ずること勿れ。三十三天は、悉く皆願樂して、大王を見んと欲す。と。若し車に上り已らば、是くの如き言を作せ。大王、我れ今王を將ゐるに、何れの道より去いて彼の天上に詣らんか。顚倒地に住せる衆生の道よりして去くを爲さんか、不顚倒地に住せる衆生の道よりして去くを爲さんか。と。爾の時に、摩多梨は帝釋に答へて言はく。唯然く敎を受けたり。と。此の語を聞き已るや、卽便に千の調馬の車を嚴り備へて、自ら其の上に昇り、彼の忉利より閻浮提に下つて、鞞提呵國の尼彌王の所に至り、尼彌王に語るに、是くの如き言を作さく。忉利の諸天は、今千の調馬の車を送りたり。王、車に昇り、怖畏を生ずること勿るべし。忉利の諸天は王を見んことを願樂すればなり。と。爾の時に尼彌大王は、畏無き心を以て、便卽に之れに登れり。旣に車に昇り已るや、摩多梨は是くの如き言を作さく。我れ今王を將ゐて、何れの道より去かんか。顚倒地に住せる衆生の道より去くを爲さんか。不顚倒地に住せる衆生の道より去くを爲さんか。と。王は卽報じて言はく。汝我れを將ゐて、彼の二道の中間よりして去くべし。と。爾の時に摩多梨は、卽、尼彌王を將ゐて、顚倒地の衆生の所と不顚倒地の衆生の所と二處よりして去けり。大王、爾の時に尼彌王は、摩多梨に語つて言はく。汝、少時車を停めて住すべし。我れ當に彼の顚倒の衆生の住する所の處を觀るべし。と。爾の時に摩多梨は、卽、王の敎を受けて、暫く馬車を止めたり。爾の時に尼彌王は、少時の間に於て、八十千萬の衆生をして、見實三昧の中に安住せしめたり。何を以ての故ぞ。是の王は、少時の間に於て、是くの如き衆をして見實三昧の中に住せしめたるは、此の王は善く不放逸の行を習ひたる故にして、此の衆生の三昧に住する者をして、後に於て悉く無生法忍をも得しめたり。是の時に、摩多梨は、都べて王の爲作する所を覺知せざりき。爾の時に摩多梨は、又復王を將ゐて須彌の頂に

到れり。爾の時に尼彌王は、遙に青く茂れる叢林を見て、摩多梨に告げて言はく。彼の林は、定つて是れ不顚倒の衆生の居る所の處ならん。と。摩多梨言はく。大王、此れは是れ忉利の諸天の善法の堂なり。彼の忉利の天衆は、集つて堂上に在つて、王を見るを得んことを欲せり。唯願はくば大王、怖畏を生ずる勿くして、當に此の堂に昇るべし。と。爾の時に尼彌王は、心に恐懼せずして便ち堂上に昇れり。爾の時に帝釋は、遙に尼彌王の來れるを見て、卽ち是の言を作さく。善く來れり、大王。と。便ち半座を分つて、王に命じて坐せしめたり。時に尼彌王は、卽、帝釋の半座に就いて坐したり。爾の時に帝釋は、美言を以て、共に相ひ慰め問うて言はく。大王は快く善利を獲、能く佛法をして熾然增長せしめたまふ。と。爾の時に帝釋は、忉利天衆に向つて、是くの如き言を作さく、此の尼彌王は、不可思議なる善巧方便を成就し具足したまひたれば、是の王は少時の間に於て、能く八十千萬の衆生をして佛法の中に住せしめたまへり。然れども、摩多梨は都べて覺知せざるなり。と。爾の時に尼彌王は、卽、忉利の諸天の爲めに、廣く種種なる勝妙の法を說き、天衆を利益し已つて、帝釋に白して言はく。我れ今閻浮提に還るを得んことを欲す。何を以ての故ぞ。閻浮提に於て、佛の正法を護持せんと欲する故の爲めなり。と。帝釋報じて言はく。今正に是れ時なり。と。復御臣、摩多梨に勅して言はく。汝還千の調馬の車を駕し、尼彌王を送つて閻浮に還歸すべし。と。其れにて尼彌王は、閻浮提に到り已つて、大慈の善巧方便を成就して、無量の衆生をして佛法に安住せしめたり。大王、異疑を作す莫く、異觀を生じたまふこと勿れ。昔の尼彌王は、我が身是れなりき。大王、當に不放逸の力の思議す可き難きことを觀じたまふべし。尼彌大王は、帝釋の座に昇つてすら、尙貪著する無かりき。是の故に、大王、佛法の中に於て、當に勤めて精進して不放逸を修したまふべし。大王、何をか佛法と謂ふ。大王、一切の諸法は皆是れ佛法なり。と。

　爾の時に、淨飯王は此の語を聞き已るや、卽、佛に白して言はく。若し一切の法は是れ佛法なら

ば、一切の衆生も亦應に是れ佛なるべし。と。佛言はく。若し[三一]顚倒せざる見の衆生ならば、即是れ其の佛なり。大王、言ふ所の佛とは、實の如くに見る衆生なり。實の如くに見る衆生ならば、即是れ實際を見るなり。實際とは、即是れ法界なり。大王、法界は顯示すべからず。但の名但の俗は、[三二]但是れ俗の數なれば、但言說あるのみ、但假の施設のみと、應に是くの如くに觀じたまふべし。大王、[三三]一切の法の無生なるは、此れは是れ陀羅尼門なり。何を以ての故に、此れを陀羅尼門と名くる。此の一切の法に於ける無動・無搖・無取・無捨、是れを陀羅尼門と名くればなり。大王、一切の諸法の不滅なるは、是れ陀羅尼門なり。何を以ての故に、不滅なるは是れ陀羅尼門なる。中に於ては、一切の法は無動・無搖・無取・無捨なればなり。彼の陀羅尼門には、相貌ある無く、自性ある無く、施設す可き無く、作無く、造無く、來無く、去無く、衆生無く、[三四]命無く、人無く、養育無く、[三五]對治非ず、形無く、狀無く、纒無く離無く、穢無く淨無く、愛無く、憎無く、縛無く解無く、[三六]命者無く、[三七]出無く退無く、得無く、住無く、定無く亂無く、知無く無知に非ず、見に非ず不見に非ず、戒に非ず犯に非ず、悔に非ず不悔に非ず、喜に非ず不喜に非ず、[三八]猗に非ず不猗に非ず、苦に非ず樂に非ず、定に非ず不定に非ず、實に非ず倒に非ず、[三九]涅槃に非ず不涅槃に非ず、愛に非ず離愛に非ず、見に非ず不見に非ず、解脫に非ず不解脫に非ず、智に非ず不智に非ず、視に非ず不視に非ず、業に非ず不業に非ず、[四〇]道に非ず不道に非ざるなり。大王、應當に此の[四一]六十七の法門を以て、一切の法に入りたまふべし。大王、是れ色の自體は、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ず。是くの如くに、受・想・行・識の體性も亦復是くの如く、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ざるなり。大王、鏡中の像の、有るに非ず無きに非ざる如くに、是の色の體性も、亦復是くの如くに、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ず。受・想・行・識も亦復是くの如くに、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ざるなり。大王譬へば、響の聲の、

【三一】顚倒せざる見の衆生ならば。異譯本に「衆生にして顚倒の見に住せずんば、」とあり。

【三二】但是れ俗の、乃至、施設のみと。異譯本には「但、俗諦に依つて推求し詮表するのみにして、勝義諦にて是の說を作すに非るなり。」とあり。

【三三】一切の、乃至、陀羅尼門なり。異譯本に「一切諸法の本より生滅無き、此れを阿字の陀羅尼門と名く。」とあり。

【三四】命。異譯本に「壽者」とあり。

【三五】對治。異譯本に「戲論」とあり。

【三六】命者。前の「命」と同じ者なり。異譯本には、此れに當る句無し。

【三七】出。異譯本には「進」とあり。

【三八】猗。依に同じ。

【三九】涅槃。異譯本に「靜」とあり。

【四〇】道。異譯本には「報」とあり。

【四一】六十七の法門。前の「無動・無搖・無取・無捨」の四を加へたる數に當る。

曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ざるが如くに、大王、是の色の體性の如きも、亦復是くの如くに、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ず。受・想・行・識も亦復是くの如くに、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ざるなり。大王、譬へば、陽焰の、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ざるが如くに、是の色の體性も、亦復是くの如くに、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ざるなり。大王、譬へば、聚れる沫の、堅實ある無くして、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ざるが如くに、是の色の體性も、亦復是くの如くに、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ず。大王、是の受・想・行・識の體性の如きも、亦復是くの如くに、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ざるなり。大王、譬へば、夢中に、國中の最勝なる女人を夢見すとも、是の夢に見る所も、亦曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ざるが如くに、是の色の體性も、亦復是くの如くに、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ず。是の受・想・行・識の體性の如きも、亦復是くの如くに、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ざるなり。大王、譬へば、石女の、夢に子を生むと見るとも、是の夢に見る所も、亦曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ざるが如くに、是の色の體性も、亦復是くの如くに、曾て有りしに非ず、當に有るべきに非ず、今有るに非ず。是の受・想・行・識も亦復是くの如くに、曾て有りしに非ず。當に有るべきに非ず、今有るに非ざるなり。大王、色は依る所無く、乃至、識も亦依る所無し。大王、譬へば虛空の依る所無きが如く、是くの如くに、大王、色は依る所無く、乃至、識も亦依る所無きなり。大王、色には生あること無く、乃至、識にも亦生あること無し。大王、色には滅あること無く、乃至、識にも亦滅あること無し。大王、涅槃界には生あること無く、亦滅あること無きが如くに、大王、是の色の如きも、亦生無く滅無く、乃至、識

にも亦生無く滅無きなり。大王、譬へば、法界にも亦生無く滅無きが如くに、大王、是の色の如きも、亦生無く滅無く、乃至、識にも亦生無く滅無きなり。是くの如くにして、大王、[四二]一切の法は、是れ如來の境界の不可思議なり。亦是れ如來の境界の不共の法なり。亦是れ如來の境界の、一切の凡夫の境界と共ならざる故なり。是の故に、[四三]一切の聲聞・緣覺は、毀らず讃めず、得ず失はず、覺るに非らず覺らざるに非ず、知るに非ず知らざるに非ず、識るに非ず識らざるに非ず、捨つるに非ず捨てざるに非ず、修するに非ず修せざるに非ず、說くに非ず說かざるに非ず、證するに非ず證せざるに非ず、顯示するに非ず顯示せざるに非ず、聞く可きに非ず聞く可らざるに非ず。何を以ての故ぞ。大王、彼の法は、是くの如き法にて扶け擧ぐることを得べく、摧き倒すことを得べきあること無ければなり。何を以ての故ぞ。一切の諸法は自性を離れたる故なり。大王、今此の法中に於て其の心を安んじ、深く此の法を觀じて他を信じたまふこと勿るべし。と。

爾の時に、淨飯王は、是の念を作さく。諸法の中に於て、法として得可きもの無ければ、「是くの如き法あること無しと、是の法を證することを得たる」をば、號して佛者と爲す。諸法は實に不可得なるを、佛は衆生の爲めに、但假に言說したまふのみ。と。爾の時、世尊の是の法を說ける時に、淨飯王等の七萬の釋種は無生法忍を得たり。爾の時に、世尊は諸の釋種の深信を得たることを知り已つて、微笑を現せり。

爾の時に、慧命、馬勝比丘は、偈を以て問うて曰はく、

大雄尊導師　世の爲めに微笑を現したまふ　唯願はくば世の明炬　微笑の事を演說したまはんことを

十力一切智　何の因にて微笑を現したまへる　願はくば微笑の因を說きて　世の諸の疑網を斷ちたまはんことを

佛は釋種の爲めの故にて　微笑の端を現したまへば　諸の人天の衆の爲めに　速に諸の疑網を除きたまはんことを

大雄の說きたまふこと聞くを得

【四二】一切の法は、乃至、不可思議なり。異譯本に「此の法は、乃ち是れ如來の行ずる所にして、不可思議微妙の境界なり。」とあり。

【四三】一切の聲聞、乃至、聞くべからざるに非ず。異譯本には單に「諸の聲聞及び辟支佛・凡夫・異生の及び能ふ所に非ず。」とあり。

ば　世間は諸の疑を離れ　其の心皆欣喜して　佛法の中に安住せん　世尊の諸子等も　微笑の事を知るを得ば　堅固に誓願に住して　智慧は必ず通達せん　唯願はくば尊導師　大衆の疑を斷除したまはば　衆等しく疑を除き已つて　必ず廣大なる樂を得ん　と。

爾の時に、世尊は偈を以て、馬勝に答へて曰はく。

我れ寂滅の笑を現せることを　馬勝當に諦に聽くべし　我れ今實の如くに　釋種の決定せる智を說かん　諸法の不可得なることを　釋種は皆知ることを得　是の故に佛法に於て　決定して心安住せり　名稱大釋種は　〔四四〕無所得に依つて　當に上菩提を得て　一切の法を曉り知るべし　人中にて命終し已るや　此の釋種は決定して　安樂國に生ずるを得て　面り無量壽に奉らん　安樂國に住し已るや　無畏にして菩提を成じ　能く十方界に趣きて　無量の佛を供養せん　一の佛土に安住しながら　能く十方の佛に供じ　諸の衆生を愍む故にて　無上道を求めん　諸の佛國を遊歷して　彼の佛等を供養するに　皆已に神力到れば　佛の出づる所の處に隨はん　無量の僧祇劫に　諸の導師を供養するに　種種の妙供を以てし　後當に佛道を成ずべし　一一成佛し已るや　能く無量の衆を度して　佛道を成ずるを得しめんとて　復諸の衆生を化せん　彼の國の衆生の輩は　皆當に佛道を成ずべきも　彼の諸の世尊等は　聲聞の衆を度せじ　一一の諸佛等は　倶に壽は一劫歲にして　彼の佛の正法の住することは　無量阿僧祇なり　彼の佛の滅度の後に　大智の菩薩衆は　法を持ちて世を化すること億歲阿僧祇なり　彼の諸佛子等は　無量の衆を敎化して　無上道に置くに　法の悉く空寂なるを說きて　不放逸に住せしむるは　空寂の法を修集して　能く一切智を得　不放逸を樂へる輩なればなり。

是の釋種の趣を　世尊の說く所の者を聞くや　天人咸く、欣喜して　佛道を志求したり。

【四四】無所得に依つて、乃至、曉り知るべし。異譯本に「法の依る所無きを了して、彼の疑心を離るることを得たれば、未來に當に佛と作るべし。」とあり。

爾の時に、世尊は、慧命舍利弗に告ぐらく。舍利弗、此れは是れ菩薩の見眞實三昧なれば、汝當に【四五】阿毘跋智の諸菩薩の爲めにのみ之れを說くべし。何を以ての故ぞ。舍利弗、此の三昧は說くを得べからずして、如來は彼の三昧の中に於ては、一法をも得ざればなり。若く得ざる者は、彼れをば【四六】覺すべからず。若く覺すべからざる者は、彼れをば則ち說くべからず。若く說くべからざる者は、彼れをば則ち知るべからず。彼れをば知るべからざる者は、卽是れ過去・未來・現在の諸佛の法なり。舍利弗、我れ今汝に付囑する此れは是れ菩薩の見實三昧なれば、應當に受持し讀誦して、廣く顯說することを爲すべし。舍利弗、若し善男子、善女人の、大乘に住する者あつて、十劫を經歷するまで、五波羅蜜――般若波羅蜜を離す。――を修行すると、若しくば復、人の、是の菩薩の見實三昧を聞くことを得るある者とは、得る所の福德は、復彼れに過ぎたり。若し復、人あつて、是の菩薩の見眞實三昧を聞くことを得已つて、一人の爲めに說かば、此の人の得る福は、復彼れに勝れたり。若し復、善男子、善女人の、十劫を經歷するまで聞き已つて、他の爲めに解說すると、若しくば復、人あつて、乃至、一刹那の間、此の菩薩の見眞實三昧を修する者とは、得る所の福德は、復彼れに過ぎたり。是の故に舍利弗、汝應に此の菩薩の見眞實三昧經を以て、諸の菩薩の爲めに說きて、敎示し修行せしむべし。舍利弗、若し此の菩薩の見實三昧を修せば、當に無生法忍を獲べし。舍利弗、此の會中に於て、我が授記せる所の無上道中の諸の菩薩は、悉く此の菩薩の見眞實三昧の中に安住することを得たるなり。と。是の時に一切の諸の菩薩・聲聞・天人・一切の大衆・阿修羅・乾闥婆・人非人等は、佛の說きたまへる所を聞き、歡喜して奉行せり。』

【四五】阿毘跋智。阿惟顏と同じ。第一卷、同名の解、參照。

【四六】覺。覺知の義なるべし。

卷の第七十七

姚秦　鳩摩羅什　漢譯

富樓那會　第十七の一

菩薩行品　第一

是くの如くに我れ聞けり。一時、佛は王舍城の竹園の中に住し、大比丘の衆と俱にして、及び大菩薩摩訶薩の其の數も無量なりき。

爾の時に、慧命、富樓那彌多羅尼子は坐よりして起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝をば地に著け、合掌して佛に向ひ、佛に白して言はく。世尊、我れ少しく問ふ所あらんと欲す。唯願はくば、如來、愍を垂れて聽許したまはんことを。と。佛　富樓那に告ぐらく。意の問ふ所に隨ひ、吾れ當に解說して、汝をして歡喜せしめん。と。富樓那言はく。我れ今「諸行の上功德を爲めて、名聞高遠に、常に衆生の爲めに安樂を求むる者たる諸の菩薩摩訶薩の故」を、諮ひ請ふ所あらん。と。

爾の時に、富樓那は偈を以て頌して曰はく。

最上の功德を行じて　名稱極めて高遠に　淨戒にて法を樂む者に　我れ其の行ずる所を問ふ
云何か心を修治し　云何か廣く施を行ひ　云何か衆生を度し　喜心にて常に道を行ずる　と。

富樓那は佛に白して言はく。我れ今是の諸の大士の爲めの故に、是くの如き事を問ひたてまつる。菩薩は、云何に多聞を修集すること、猶大海の竭盡すべからざるが如く、云何に能く多聞の寶藏を集め、能く諸法に於て決定の義を得、諸の語言に於て善く章句を了するか。と。而して、偈を說いて言はく。

【一】富樓那彌多羅尼子(Pūrṇamaitrāyaṇī-putra)。今漢譯ならば、滿慈子又は滿願子と云ふべし。釋尊の十大弟子中、說法第一と稱せられたり。

菩薩は云何に　多聞を求むること大海の如くにして　法に於て定れる義を得て　能く佛道を善く知るか　云何に一言に於て　無量の義を解し　能く智慧力を以て　一切の法に通達するか　多聞に窮盡無く　問難に心動かず　慈愍の故にて法を說き　以て衆生の疑を斷ずるか

と。

富樓那は佛に白して言はく。世尊、我れ今、地の智力に隨つて如來に請問したてまつる。諸の菩薩摩訶薩は、云何にして能く阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せざるか。と。而して、偈を說いて言はく。

云何に衆難を離れて　諸佛に値遇することを得　諸佛に値ふことを得已つて　速に清淨の信を得るか　無上の信を得已つて　捨て難きを而も能く捨て　一切を棄捨し已つて　力めて無礙の道を行ずるか　云何に出家を樂み　閑靜にて空智を修し　云何に法に逆はざるか　願はくば具に是の事に答へたまはんことを　と。

富樓那は佛に白して言はく。世尊、我等悉く、佛の已に一切の智慧を具足し、已に一切の神通の彼岸に度り、三界の中に於て第一の高尊にして、比するある無き微妙の大智を得、諸法の中に於て行じたまふに無障礙なることを知れり。是の故に我れ今是の事を請問したてまつる。と。偈を以て讃じて曰はく。

佛は上功德に住し　已に神通の岸に度つて　無障礙の智を得たまひたれば　我れは勇猛の問を爲したてまつる　善く一切の法を學んで　功德は最も高勝に　闇を破つて慧明を生じ　衆をして悉く歡喜せしめたまふ　怨親に憎愛無く　憂無く欺誑無く　大戰して死王に勝ち　魔軍の衆を摧破したまふ　刀杖を執らずして　諸の怨敵を降伏し　常に慈悲の心を有ち　堅く清淨の戒に住したまふ　世尊には諂曲無く　慢無く戯調無く　明解脫を證することを得たまひ

【二】地。證達の地位を謂ふ。此所にては阿羅漢を指す。

て　功德の中の最勝なり　本行じたまへる所の道の如きを　得たまへる所の勝智慧にて　願はくば今我が爲めに說きたまはんことを　云何に行じて道を得るかを　と。

爾の時に、佛は富樓那に告げて言はく。善い哉、善い哉。汝能く如來に是の事を諮問せり。諦に聽け。諦に聽きて善く之れを思念せよ。當に汝が爲めに、諸の菩薩の、發心して行ずる所にて、一切の無量の佛法を修集することを說くべし。と。

爾の時に、世尊は偈を以て頌して曰はく。

我れ今菩薩の　初めて菩提心を發すや　常に勇猛の力を以て　樂んで菩薩の道を行ずることを說かん　諸の菩薩の行ずる所は　種種なる深心の行にて　佛に於て受記を得るものにして是の事を當に略して說くべし　深心に法を樂ふ心は　無量にして邊あること無く　種種に現す諸行は　一事を以て成ぜざるなり　喜心內に充滿し　而して布施を行ひ　施し已つて心に悔ゆること無く　其の意は益歡悅するなり　菩薩は是の念を作さく　衆生は常に貧窮にして　多聞の財あること無ければ　我れ當に爲めに之れを求むべし　衆生の常に貧窮なるは皆懈怠に由れば　我れ當に勤精進し　是れに從つて菩提を得べし　我れ當に衆生の爲めに心を加へて忍辱を行じ　惡の言罵捶打をも　默受して報いざるべく　當に念ずべし誰れか我れを罵る　罵る者は得可からず　罵詈瞋恨の者も　皆是れ空事なりと　是くの如くに思惟し已つて　心に瞋恨ある無く　常に忍辱を修行し　是れに從つて佛道を成ぜんと　衆生に善心無ければ　當に爲めに世の燈と作り　其れをして歸趣を得しめ　財無きには足すに財を以てすべし　衆生は愍傷すべし　皆共に邪道を行へば　我れ當に之れを度脫して　涅槃に住せしむべし　衆生は皆貧窮にして　智慧の財あること無ければ　我れは一切智を得て　其れをして充足を得しむべしと　是くの如くに諸の菩薩は　衆生を度せん爲めの故に　發心して菩提を求

むるに　是くの如き等の願を行ずるなり　と。

佛は富樓那に告ぐらく。諸の菩薩摩訶薩は、種種の因縁に其の心を示現して、一法に住らざるなり。所以は何ぞ。諸の菩薩は一切の法を學び、然る後に道を得ればなり。菩薩には四つの大なる希有の事あつて、餘の法の此の事に勝れたる者を見ず。何等か四つなる菩薩は、能く懈怠の衆生に於て、精進を勤行する、是れを希有と名く。能く强梁なる瞋恚の衆中に於て、忍辱を修行する、是れを希有と名く。諸の衆生の邪道を行ふを見て、自らは正道を勤むる、是れを希有と名く。衆生を度して生死を轉ずることを爲させん故にて、阿耨多羅三藐三菩提を發す、是れを希有と名く。富樓那、此の四つの希有、是れを菩薩の最大なる希有と名くるなり。と。

爾の時に、世尊は偈を以て頌して曰はく。

懈怠の衆生を見て　勤めて心に精進を發し　我れ應に彼の　諸の非法の事を行ずるに效ふべからずと　應に瞋恚に效ふべからず　瞋恚は佛道に非ず　常に慈悲の心を修せば　菩提は是れより生ずと　衆生は邪徑を樂み　邪徑に依止すれど　菩薩は正道を求めて　衆をして正道に住せしめんと　生死の過患を見て　一心に佛智を求めて　我れ無上の財を得て　當に諸の衆生を度すべしと　是くの如き希有の事は　餘に更に勝れたる無ければ　是の故を以て當に知るべし　障礙を離るる法を得たることを　設使ひ身の衣を燒き　頭然をも猶救はずとも　懈怠の心若し生ぜば　卽應に速に除滅すべきなり　と。

佛は富樓那に告ぐらく。菩薩に、四法の能く喜心を生ずるあり。何等か四なる。諸の衆生の、生死に安じ處つて、精進すること能はざるを見るや、自ら其の身の、佛道に在つて精進を修行するを見、便ち喜心を生ずるなり。諸の衆生の、心に常に懈怠するを見るや、自ら其の身の、佛法に在つて、勤めて精進を行ずるを見、便ち喜心を生ずるなり。諸の衆生の、瞋り恨み嫉妬するを見るや、

自ら其の身に恚嫉あること無く、常に慈悲を懷くを見、便ち喜心を生ずるなり。餘人の、佛法を勤行すること、我れと等しき者を見ざるや、便ち喜心を生ずるなり。と。

爾の時に、世尊は偈を以て頌して曰はく。

衆生の懈怠を見るや　己身に精進を行じ　是の故に此の菩薩は　自ら歡喜の心を得るなり
生死の過患を見て　厭離の心を生じ　三界の獄を怖畏して　勤心にて捨離を求むるなり　衆生は瞋恨を樂めども　自は慈悲の心に住し　是の故に此の菩薩は　歡喜悅樂を生ずるなり
衆生の作す可しとする所は　皆應に作すべからざる所なり　是の故に我れは當に　上ある無き佛道　是れを眞實の智と名けて　諸佛の稱歎したまふ所のものを求むべく　我れは當に是の智を學び　衆生に歸趣を得しむべしと　是の故に此の菩薩は　常に歡喜の心を得て　有無の空僞を　從[三]つて　當に眞實の法を生ずべきなり　と。

佛は富樓那に告ぐらく。菩薩は、四法を有つて、諸難を離るるを得て無難の處に値ひ、値ひ已つて能く佛法を修することを失はざるなり。何等か四なる。一には、菩薩は謙遜にして其の心柔軟なれば、凡べて衆生を見れば、常に「善く來れり」と言ひて和顏悅色し、先意にて問訊して、之れと共に語り言ふに、常に笑を含むなり。二には、一心に法を求め、常に樂んで諮問し、勤めて善利を求めて、厭き足ることある無きなり。三には、常に空閑を樂み、遠く離れて獨り處るなり。四には、自身に佛菩提の道に安住し、亦衆生をも化して佛道に住せしむるなり。菩薩に是の四法有らば、諸難を離れて無難の處に値ひ、値ひ已つて能く佛法を修することを失はざるを得るなり。と。

爾の時に、世尊は偈を以て頌して曰はく。

柔軟の心を具足して　常に樂んで慈悲を行ひ　若し衆生と語らば　謙下して心は和悅するなり
常に佛の歎ずる所の　甚深なる微妙の法を求め　常に清淨なる戒を持ち　樂んで頭陀の事

【三】從。「從」は「縱」と通ず。

を行じ　頭陀を行ずと雖も　亦深妙の智を行ずる　是の故に此の菩薩は　難を離れて無難に値ふなり　常に諸佛の所に於て　諸の深法を諮問する　是の故に智は増長して　諸の難處を生ぜざるなり　常に樂んで空閑に在つて　清淨に頭陀を行ずる　是の故に此の菩薩は　難を離れて無難に値ふなり　諸べて智慧有る者は　此の四法に親近し　能く一切の難を離れて　諸佛に値遇するを得　諸佛に値ふことを得已つて　不壞の信を具足し　能く上精進を發し　以て佛智を求むるなり　是の故に智を求めば　應當に正法を學ぶべく　若し能く正法を學ばば　佛道を得んこと難からざるなり　と。

多聞品　第二

佛は富樓那に告ぐらく。菩薩は、四法を有つて、則ち能く多聞を修し集むること、猶大海の竭盡すべからざるが如くに、常に能く多聞の寶藏を修し集め、能く諸法に於て決定せる義を得、諸の語言に於て善く章句を了するなり。何等か四なる。菩薩は、法謂はゆる十二部經――[4]修多羅・[5]祇夜・[6]受記經・[7]伽陀・[8]憂陀那・[9]尼陀那と、是くの如き諸經、[10]本生經・[11]方廣經・[12]未曾有經・[13]阿波陀那・[14]論議經と。*――を求め、求め已つて誦讀し、誦讀し已つて正しく憶念し、――正しく憶念し已つて說く所の如くに行ずるなり。富樓那、菩薩は此の初の法を有たば、則ち能く多聞を修め集むること、猶大海の竭盡すべからざるが如くに、常に能く多聞の寶藏を修め集め、能く諸法に於て決定せる義を得、諸の語言に於て善く章句を了するなり。復次に、富樓那、菩薩は一切の法の中に於て依止する所無く、禪定に入ると雖も而も依る所無く、依る所無き故に諸法の中に於て不住の智を得、不住の智を得已つて、諸法の中に於て無礙の知見を得るなり。何を以ての故ぞ。富樓那、法の貪つて障礙を作す可き者無ければなり。菩薩は此の二の法を有たば、則ち能く多聞を修め集むること、猶大海の竭盡すべからざるが如くに、能く常に多聞の寶藏を修め集め、能く諸法に於て決定せる義

【四】 修多羅(Sūtra)。契經と譯す 理と機とに契ふ義なり。經典中、直ちに法義を說ける長行の散文、此れに當たる。

【五】 祇夜(Geya)。應頌又は重頌と譯す。前の長行の文に應じ、重ねて其の義を述ぶる義なり。頌は、字句の一定せる讃文を謂ふ。

【六】 受記(Vyākarana)經。和伽羅と書す。菩薩に成佛の記(保證宣言)を授くる義なり。此れを菩薩より見て、受記と云ふ。

【七】 伽陀(Gāthā)。孤起頌(又諷頌)と譯す。長行に對せる重頌にあらずして、獨立に讃頌する偈文を謂ふ。

【八】 憂陀那(Udāna)。自說と譯す。問者無きに、佛自ら說く經を謂ふ。

【九】 尼陀那(Nidāna)。因緣と譯す。經文中、衆生の見佛聞法又は佛の說法敎化の因緣を說く處にして、諸經の「序說」は多く此れに當たる。

【一〇】 本生(Jātaka)經。闍多伽と書す。佛自身の本の生、即ち過去世の生活の狀態・因緣を說く義なり。

【一一】 方廣(Vaipulya)經。毘佛略と書す。方正廣大の眞理を說く義なり。

【一二】 未曾有(Adbhuta dharma)經。阿浮達磨又は阿毘達

を得、諸の語言に於て善く章句を了するなり。復次に、富樓那、菩薩は法の因緣を以て、佛を念じ及び佛の法を念ず。是の人、法の因緣を以て佛を念じ佛の法を念ずる時に、法の貪愛すべき者有るを見ず。是の人、貪愛せざる故にて、一切の法に於て心著する所無し。是の人、一切の法に於て著する所無き故にて、諸の問難に於て、問ふ所に隨ひ、答へて礙あること無きなり。菩薩は此の三の法を有たば、則ち能く多聞を修め集むること、猶大海の竭盡すべからざるが如くに、能く常に多聞の寶藏を修め集め、能く諸法に於て決定せる義を得、諸の語言に於て善く章句を了するなり。復次に、富樓那、菩薩は無所得の慈を成就して、行に於て礙無きなり。無所得の慈とは、諸事を受けざるなり。何を以ての故ぞ。富樓那、〔一五〕此の相に住する者は、或は貪欲を生じ、或は瞋恚を生じ、或は愚癡を生じ、彼の相に住する者も、亦或は貪欲を生じ、或は瞋恚を生じ、或は愚癡を生じ、事の相、物の相、陰の相、入の相、界の相、法の相、非法の相に住する者も、亦或は貪欲を生じ、或は瞋恚を生じ、或は愚癡を生ずればなり。是の故に、富樓那、有らゆる受相を皆邪見と名くるなり。菩薩の、悉く一切の諸相を滅して慈心を修め集むるや、衆生は敗壞するが故に相も亦敗壞し、相は敗壞するが故に事も亦敗壞し、事は敗壞するが故に見も亦敗壞するなり。菩薩、爾の時に一切の法を壞して慈を修め集むる、是くの如き慈をば、名けて無所得の慈と爲し、是くの如き無所得の慈を名けて法の慈と爲し、是くの如き法の慈を名けて佛の慈と爲すなり。富樓那、何をか佛の慈と名くる。作無く壞無きもの、是れを佛の慈と名くるなり。復次に、富樓那、實の如くに一切の諸法に通達する、是れを佛の慈と名く。世尊、云何なるを名けて、實の如くに一切の諸法に通達すと爲すか。佛、富樓那に告ぐらく。通達する所の者は、是の法を言はず非法を言はざるなり。何を以ての故ぞ。富樓那、若し法有りと言はんに、即是れ法非ず。若し〔一六〕法無しと言はんに、法非ること有る無ければ、則ち其の中に戲論ある無く、若く戲論無き、是れを涅槃と名くればなり。汝、具に之れが極めて遠

磨と書す。佛が種々不思議の神力を現せるを記せる經文を謂ふ。

【一三】阿波陀那(Avadāna)。譬喩と譯す。經文中の譬喩の處を指す。

【一四】論議(Upadeśa)經。法理を問答議論する經を謂ふ。

※　本事(Itivṛttaka)經。佛の弟子の、過去世の生活の狀態・因緣を說く者を謂ふ。(因みに、本經の缺けたるは、漢譯の際の誤脫なるべし。故に今、補說す。)

【一五】此の相。とは、次の「彼の相」に對する者にして、「所得」の相を謂ふ。即ち後の「受相」と云ふ者の一つなり。

【一六】法無しと言はんに。原本には「有無法」とあれども「有」は「言」の誤寫なるべし。然らずんば、意義通ぜず。又、前句と相應せず。

く極めて近きことを觀ぜよ。富樓那言はく。遠からず近からずとは、何を以ての故ぞ。世尊、是くの如き義には、方無く處無く內無く外無ければなり。佛言はく。是くの如くなるも、富樓那、法に於て〔一七〕數を作すのみ。世尊、何等の法に於て、之れが爲めに數を作すか。富樓那、諸の凡夫の著する所の法の如きは、如來は得ず修せず證せず通達せざれども、如是の法には、之れが爲めに數を作すなり。富樓那、是の諸の法の數は、法を分別することを爲さざる故なり。富樓那、今汝が爲めに說く是くの如き第一寂滅の法には、能く佛道を攝むれども、富樓那、當來に人あつて、欣んで世利に赴くものは、若し此の經を聞かば、聽受することを樂はじ。富樓那、我が此の菩提をば、汝等は但音聲・章句を以て少しく之れを知るのみにして、其の中の義趣は、汝の知らざる所なり。此の義は玄遠にして言宣すべからず、唯智ある者のみ以て內に知るべければなり。と。

爾の時に、世尊は而ち偈を說いて言はく。

義を知ること能はざる者は、佛の法を聞きて憂苦すれども　若し義を知り能ふ者ならば　如來は爲めに師と作らん　若し人佛を師と爲さば　是に則ち涅槃を求めて　諍訟の心ある無けん　能く正しく法を思量せば　此の中には法の生ずる無く　亦法の滅することある無くして　生無く滅ある無きは　是れ諸法の實相なり　若し法にして生ある無くば　即作起あること無く　是非と一異と　此の法の中に皆無く　是れを名けて涅槃と爲す　中に滅する者ある無きに　若し極つて遠近なりと言はば　是の二は倶に空と爲す　若し能く空を知らば　即涅槃を知ると名け　若し涅槃を知らば　是れを我が弟子と名くるなり

富樓那、菩薩は、此の四法を有たば、則ち能く多聞を修め集むること、猶大海の而ち竭盡せざるが如くに、能く常に多聞の寶藏を修め集め、能く諸法に於て決定せる義を得、諸の語言に於て善く章句を了するなり。と。

【一七】數。此所の數は、「智慧」の異名なり。(此の義は「了義燈」三の本に據る。)

爾の時に、世尊は偈を以て頌して曰はく。

常に多聞を欲求せば　諸佛に稱歎せられ　能く定れる實義を得る　是の故は大海の如し
能く一字の中　及與び一句の義に於て　千萬億劫に於て　之れを說くとも而も盡きざるなり
故に當に正法を求むべく　求め已らば正しく思量して　法の相を貪取する勿く　佛に讃ぜらるるを貪らざれ　諸の如來を憶念し　及び正法を念ずるも　貪競の心を以てせずして　導師を求めよ　常に諸の衆生に於て　慈愍の心を修行し　而も衆生に著せず　一切の法を散滅せよ　大名稱菩薩にして　是くの如き法を修せば　疾く陀羅尼を得て、多聞は是れ從り生ぜん
猶虛空の性の　增無く減ある無きが如く　法の性も亦是くの如くに　增無く減ある無し
我れ智慧力を以て　無量劫に法を說き　說く所無央數なりとも　猶亦說きたりと名けじ
諸の衆生の性を盡して　皆人身を得て　普く共に出家を行じて　多聞なること阿難の如くならしめ　陀羅尼の菩薩は　是の一切の人の爲めに　千億劫法を說くとも　智慧は猶盡きざるなり
佛の智慧の無等なることは　虛空の無量なるに同じく　虛空には生起無く　智慧も亦是くの如し　龍の水を取らずして　能く大水を雨すに　是の水は住する處無く　雨す所も窮盡無きが如く　菩薩も亦是くの如くに　此の陀羅尼を得ば　諸法は住する處無し　是の緣は說くとも盡きざる　故に應に多聞を求むべく　求め已つて正しく思惟し　法の緣を以て佛を念ぜば
多聞は是れ從り生ぜん　慈もて普く衆生を覆ひながら　衆生の相を散滅し　亦諸法の相をも滅せば　多聞は是れ從り生ぜん　と。

不退品　第三

佛は富樓那に告ぐらく。菩薩は、四法を成就して、能く阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せざるなり。何等か四なる。菩薩は未だ聞かざる法を聞くや、義理を思量して、卽には非なりと言はざるな

り。菩薩にして此の初の法を成就せば、則ち阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せざるなり。と。

爾の時に、世尊は偈を以て頌して曰はく。

未だ聞かざる所の法を聞くに　其の心違いで逆はず　其の義理を思量して　卽には非の法なりと言はざれ　若し空法を聞きて　常に其の義理を求めば　是の故にて智は増長し　佛道是れ從り生ぜん　未だ聞かざる所の法を聞き　應に其の義理を求むべくば　菩提より退かずして智慧は増長することを得ん　未だ聞かざる所の法を聞かば　惡慢の心に隨はず　諂曲をも生ぜざれ　生ぜば則ち菩提に非じ　未だ聞かざる所の法を聞かば　應に其の義を解せんことを求むべく　先に未だ曾て聞かずと雖も　一心に應に思念すべし　是の人法を求むる時に能く正法を聞くことを得ば　常に諸佛に値遇して　菩提を退失せじ　諸佛に見ゆるを得已らば　則ち能く正しく問難せよ　聲聞の人も聞くことを得ば　咸く以て歡喜を爲さん　是の人は甚だ希有なり　能く是くの如き問を作せば　我等は尙無心なり　況んや能く是の事を聞くことをやと　聲聞は希有と稱し　天神は皆歡喜し　諸佛も其の名を稱するは　此れは是れ多聞の果なるなり　若し問ふ所ある時に　佛は其の問ふ所に答へば　無量の諸大衆は　皆大饒益を得ん　是の多聞の　菩薩の問答する所を聞くことを得ば　無量の衆は皆　無上の法眼を得ん　と。

佛は富樓那に告ぐらく。是の因緣を以て、當に知るべし、菩薩は未だ聞かざる法を聞くに、信受して逆はず、正しき心にて思量して、卽には非と言はずんば、則ち能く無量の衆生を饒益することを。富樓那乃往無量無邊不可思議の阿僧祇劫を過ぎ去れる爾の時に、佛あつて、一切功德光明王如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と號せり。富樓那、是の一切功德光明王佛の壽は八十億歲にして、其の佛の一つの會の聲聞の弟子にして、諸法を受けず漏

盡きて解脱せるもの恒河沙の數にして、此に計るべからず。是の諸の阿羅漢と皆共なる解脱を得たる菩薩衆の數も、亦復是くの如くなりき。富樓那、其の佛の滅後に、法の住ること六萬歳なりしは、涅槃せんと欲する時に、百億の菩薩は皆神力を興して、法を獲ることを爲さん故に、悉く百億の閻浮提の內に遍うして、一一の閻浮提に、各一の菩薩有りたればなり。富樓那、一切功德光明王佛の滅度の後に、諸の弟子衆は漸く皆懈怠して、復是くの如き深經を誦持せずして、諸法の空經・淨戒・頭陀の經は、漸く皆滅盡せり。以ふに其の讀誦し說くこと能はざる故は、其の法は廣大にして、八百四萬の法藏を有ち、一一の法藏に六十八百萬億那由他の修多羅を有ち、一一の修多羅の中に三萬六千の憂陀那を有ち、一一の憂陀那の中に七百六萬億の偈を有ちたればなり。富樓那、最後の末世に、法の滅せんと欲する時に、此の爾所の佛の法藏の中に於て、餘は但一つの修多羅と憂陀那とのみありき。時に、比丘法師の那羅延と名くるあり。此の閻浮提の中に於て、佛は神力を與へて、法を護らせん爲めの故に、是の那羅延法師は、多聞廣博にして善く法を說き能ひ、嚴飾せる文辭にて義理明了に、每に常に未だ聞かざる所の法を樂み說きしが、法を說く時に當つて、多く人衆の違逆し毀破するありき。那羅延法師は、便ち此の念を作さく。是の諸の人衆は、未だ聞かざる所の法をば聞きたれば、信ずること能はずして聽受することを樂はず。若し聽くとも解せざれば、心は隨順せずして、聞き已るや違逆し破壞し、過を出して是の言を作すなり。此れは佛の語に非ず、大師の敎に非ず。所以は何ぞ。我等未だ曾て、師の和上從り是くの如き經を聞かず。又諸の長老の比丘も、亦復師の和上に從つて展轉して聞く所と言はざればなり。今の諸の比丘には、唯一つの餘れる修多羅と憂陀那とあるのみ。と。我れ今何ぞ閑靜に獨處せざらんや。と。富樓那、那羅延法師は、是の念を作し已るや、獨り深山に入れり。爾の時に、閻浮提の中には、劫初より來、六萬八千の大城あつて、城の長さは十二由旬に、廣さは七由旬にして、莊校に嚴飾し、街巷は相當し、人民

は充滿して、豐樂安隱なりしが、其の後續いて八十四億の小城を造つて、廣さ七由旬或は六五四三二由旬あり、其の最も小なる者は廣さ一由旬なりき。

富樓那、爾の時に閻浮提の中に、一大城の名けて安樂と爲せるあり。中に長者の名けて闍匿と爲せるあつて、一子の摩訶耐摩陀と名くるを有てり。是の長者の子は、空閑の處に在りしに、一天の來たるあつて、爲めに偈を說いて言はく。

汝は當に勤めて法を求むべく　求め已つて正しく思惟せよ　功德王如來は　已に汝の佛と作ることを記したまへばなり　と。

富樓那、天は偈を說き已るや、忽然として現れざりしが、時に長者の子は、卽父の所に詣り、頭面にて足を禮して、是くの如き言を作せり。我れ出家して、一切功德光明王佛の法中に於て、梵行を修習せんことを欲す。と。

爾の時に、闍匿長者は、偈を以て答へて言はく。

我が家には財寶多く　金銀は量ある無し　閻浮提に無き所のものも　我が家には悉く具りて有り　我が求めし所の財寶は　子の愛欲の　樂の爲めなれば　云何ぞ出家を行ひて　世に爲つて輕賤せられんや　と。

爾の時に、長者の子は、偈にて父に答へて曰はく。

我れは常に法を求め　求め已つて正しく思惟することを樂んで　富樂を受くることを樂まざれば　當に世の爲めに佛と作るべし　家業の寶を須ひずして　我れは少欲より　出づる所の法財を欲求すれば　今當に出家を行ふべし　諸佛の世に出でたまふことは難く　佛の法を說きたまふことも亦難きに　我れ今佛法に値ひたれば　云何ぞ當に捨離すべけんと。

富樓那時に長者の子は、頭面にて父の足を禮し、遶り已つて出でて、此の偈を說いて言はく。

設ひ一億の父あり　及び百億の母ありとも　猶尚　今の我が出家の心を遮ること能はじ　我れは身と壽命と　父母と親族と財とを捨つとも　唯佛法を捨てずして　當に出家の求を行ふべし　と。

富樓那、時に長者の子は、此の偈を說き已るや、出家して道を爲めんとて、卽、那羅延法師に詣り、求めて法を聽かんと欲したり。時に那羅延法師は、卽爲めに未だ聞かざる所の經を演說せり。時に摩訶耐摩陀比丘は、未だ聞かざる所の經を聞き已るや、那羅延法師に問うて言はく。我れ此の經に於ては、先に未だ聞かざる所なり。是くの如き諸經をば、誰れか讀み誰れか誦し誰れか受持せる者にして、何處より聞けるか。と。那羅延の言はく。我れ宿命の善根の因緣の故を以て、亦一切功德光明王佛の威神力の故を以て、是くの如き深經は自然に心に在るなり。と。富樓那、是に摩陀比丘は、此れを說くを聞き已るや、心を加へて思念せるに、智力卽生じたれば、大智慧の方便力の故を以て、那羅延法師に難問せるに、那羅延は、義に隨ひ答へ已つて、是の言を作さく。一切功德光明王佛の時に、一の比丘あつて佛に是の事を問へること、汝の今問へるが如くにして、佛の是くの如くに答へたまへる時に、是の比丘は聞き已つて歡喜せり。と。富樓那、是に摩訶耐摩陀比丘は、復那羅延法師に問へるに、那羅延は言はく。一切功德光明王佛の時に、一の比丘あつて是くの如き事を問へること、汝の今問へるが如くにして、佛の是くの如くに答へたまへる時に、是の比丘は聞き已つて歡喜せり。と。〔一八〕摩訶耐摩陀比丘は、復那羅延法師に問へるに、那羅延は言はく。一切功德光明王佛の時に、一の比丘あつて、是くの如き事を問へること、汝の今問へるが如くにして、佛の是くの如くに答へたまへる時に、是の比丘は聞き已つて歡喜せり。と。富樓那、時に摩陀比丘は、那羅延法師に語つて言はく。正士は、昔日佛に從つて、是くの如き幾の問答の事を聞けるか。と。

【一八】摩訶耐摩陀比丘、乃至、歡喜せり。と。此の一節は、臺本には無けれど、三本其の他に皆在るに由り加へたり。

那羅延の言はく。此れを置け。是の事を問ふ勿れ。餘人の身を信じ難し。未だ證せざる增上の法も、亦復信じ難ければなり。と。第二第三にも亦是くの如くに問ひ、摩訶耐摩陀は問うて言はく。正士は、昔日佛に從つて是の幾の問答の事を聞けるか。と那羅延の言はく。此れを置いて問ふこと勿れ。已を得ずんば、今當に汝が爲めに譬喩にて解說すべし。諸べて智ある者は譬喩にて解することを得ん。比丘、我れ一切功德光明王佛の所に於て、衆生の性の地の種よりも多きことを聞くを得たり。比丘、假に一切の三千大千世界の衆生の、若しは[一九]有色若しは[二〇]無色、若しは[二一]有想若しは[二二]無想、若しは[二三]非有想若しは非無想をして、皆其の數を盡さしめて、得しめたる人身の、智慧力を有てる一一の衆生の、彈指の頃に於て、能く恒河沙等の問を起し、然も其の問答する所は各不同に、比丘、是くの如くに展轉して、乃ち十方の餘無き世界の一切の衆生に至るまで、若しは一劫に、若しは一劫を過して、此の諸問を起したる、復一人あつて、能く彈指の頃に、爾所の人の一切の諸問の差別の各異るを起し、是の一人の如くに、復一切の餘無き衆生を盡して、若しは一劫に、若しは一劫を減じたるにて、種種の問を起したらば、汝が意に於て云何。是の起す所の問をば、寧ろ多と爲すや不や。答へて言はく。甚だ多くして、是の譬喩の能く及び得る所に非ざるなり。と。那羅延は摩陀比丘に語つて言はく。我れ今明了に汝に告ぐ。疑悔を生ずること勿れ。彼れが如き一切餘無き衆生の、若しは一劫に於て、若しば一劫を減じて起す所の疑問も、我れの佛從り聞ける一法門の中に、答ふる所のものは彼れよりも多きなり。是くの如くにして、二門、三・四・五門、十・二十・三・四・五十、乃至、百千萬億門と、比丘、我れ當に略して說くべくば、一切有る所の算數、名字の無量無盡不可思議なるを、是の諸數を過して、我れは盡く誦持せり。比丘、此の諸答は悉く皆總べて一法門の中に在るを、我れ悉く之れを知れり。謂ふ所のものは、一切功德光明王如來は、是の道の句・門の句・印の句・本事の句・金剛の句・重の句・不可動の句・難得底の句を說

【一九】有色。三界中の欲界(Kāma-dhātu)と色界(Rūpa-dhātu)とを指す。

【二〇】無色。無色界(Arūpa-dhātu)の空無邊處(Ākāśānantyāyatana)を謂ふ。

【二一】有想。無色界の識無邊處(Vijñānānantyāyatana)を謂ふ。

【二二】無想。無色界の無所有處(Ākiṃcanyāyatana)を謂ふ。

【二三】非有想若しくは非無想。無色界の非想非非想處(Naivasaṃjñānāsaṃjñāyatana)の中、前の識無邊處の有想を捨つるを非想と云ひ、無所有處の無想を捨つるを非非想と云ふ。即ち非有想と非無想となり。

きたまひしも、比丘、一門の中に於て一切の法を攝したり。謂はく。無作の門なり。一切の諸法・一切の諸句は、是の門をば本と爲して、皆是の門に入るなり。一切の修多羅・憂陀那も、皆門の句の分別に入るは、一字に能く多字を入るればなり。比丘、是くの如くにして、能く七萬八千の諸の陀羅尼をも入るゝなり。是の中に九萬二千の諸根の差別を有つ是の衆生の〔二四〕行の門の中、八萬億の形色あつて、〔二五〕諸道に於て差別すれども、是の諸の形色をば、我れ其の名を知れり。一一の色の中にて、我れ百の名を知り、是くの如くに、二百の名字、三百の名字、乃至、千の名字を知れるが、皆の名字をば、我れ皆知ることを得。要を擧げて之れを言はば、佛の有つ所の力にて、諸法の中に於閻浮提の中に在るものなり。又復、是を過ぎたる十方の佛國の、其の中の有らゆる各各の緣、各各てする各各の差別・問答の差別をば、我れ皆之れを知るは、皆是れ一切功德光明王如來の威神の力なり。と。

富樓那、時に摩陀比丘は、那羅延法師に語つて言はく。唯願はくば、正士、聚落・城邑に還り詣り、隨つて一切功德光明王如來の法輪を轉ぜんことを。願はくば、我が請を受けたまはへ。我れ當に衞護して法を受くる者と爲るべし。と。那羅延の言はく。且く置いて說く勿れ。今の世の比丘は、悉く皆懈怠にして、善法を集むる中に深欲あること無し。と。摩陀、復言はく。我れは今日よりして、當に善法に於て深く欲心を生じ、是の法を求めんが爲めには敢て懈怠せざるべし。と。富樓那、摩陀比丘は、卽、那羅延を請じて聚落に還り入り、正法を說かしめ、隨つて衞護して、未だ聞かざるを諦聽することに當れり。富樓那、爾の時の摩陀比丘は、多く人衆に供養し恭敬せられて、時の人は、皆持戒・智慧・多聞の最上の功德は無量なりと謂へり。時に、摩陀比丘は城邑・聚落に入るや、那羅延法師を稱讚して、衆生をして正法に入らしめ、又佛法をして普く流布することを得しむることを爲せり。富樓那、時に摩陀比丘は、多く人衆を導きて法を供養し、那羅延法師を恭敬

【二四】行。此の「行」は因緣に由つて成立せる「有爲法」の義に用ひて、衆　の身體を指す者と見るべし。

【二五】諸道。六道を謂ふ。第三卷、同　の解、參照。

し守護せしめたるは、法を熾かせたる爲めの故なり。富樓那、其の復那羅延法師は、摩陀比丘に爲つて守護せられし已後は、城邑・聚落に入り、種種に廣く一切功德光明王如來の阿僧祇劫に修めし所の菩提を說きて、普ね流布をせしめたり。是くの如くにして、富樓那、摩陀比丘は百歲の中に於て、常に那羅延法師に隨つて問ふ所の諸法は、常に是れ新異にして、未だ曾て重說あらざりき。富樓那、那羅延法師は、是の摩陀比丘に護助せらるるを得たる故にて、無量の衆生をして聖法の中に住せしめ、無量の衆生は佛の菩提に住したり。富樓那、汝は爾の時の那羅延法師として法を守護せる者、善く說法せる者を、豈異人なりと謂はんか。卽彌勒菩薩是れなり。

富樓那、摩陀比丘は、法師を守護して勸請を佐助せしが、是の福德の力を以て、命終の後に、卽下方の第十世界の上衆佛の所に生じ、彼の佛前に於て、一切衆生の疑ふ經を問斷したり。佛は時に、百千善い哉ゝと稱讃し、卽演說して一切衆生の疑ふ經を斷ずることを爲せしが、是の經を說ける時に、無量の衆生は初めて阿耨多羅三藐三菩提の心を發して、卽、必定に入れり。富樓那、摩陀比丘は、命終の後に、復須彌山佛に値ひ、彼の佛前に於て攝出一切法の經を問へり。時に佛は、百千善い哉ゝと稱讃し、卽廣く攝出一切法門の經を說くことを爲せしが、是の經を說ける時に、無量の衆生は、必定して阿耨多羅三藐三菩提を得たり。命終の後に、復山王佛に値ひ、彼の佛前に於て諸法門の經を問へり。時に佛は、百千善い哉ゝと稱讃し、卽廣く一切法門の經を說くことを爲せしが、是の經を說ける時に、無量の衆生は阿耨多羅三藐三菩提を必定せり。命終の後に、復梵音聲佛に値ひ、彼の佛前に於て攝一切法の經を問請せり。時に佛は、百千善い哉と稱讃し、卽廣く攝一切法の經を說くことを爲せり。是の經を說ける時に、無量の衆生は阿耨多羅三藐三菩提を必定せり。富樓那、摩陀比丘は、是くの如くに展轉して、値ふ所の諸佛に値ひ已るや經を問ひ、度する所の衆生をば阿耨多羅三藐三菩提に住せしめたるを、我れ若し劫を以て、若しくば劫に過ぎたるを以て、諸佛の名と

衆生の阿耨多羅三藐三菩提に住せる所の者とを說くとも、盡すことを得べからざるなり。富樓那、是の摩陀比丘の凡べて護持せる所の諸佛の正法は、恒沙をば數ふべくとも、是の諸佛は、若しは世に現在せる、若しは已に滅度せるものを、稱げて計ふべからざるなり。是の故に、富樓那當に知るべし、菩薩摩訶薩にして、未だ聞かざる法を聞いて義理を思惟せば、是くの如き等の大功德を得ることを。富樓那、汝、爾の時摩訶耐摩陀比丘として、那羅延法師の所に於て、未だ聞かざる法を聞いて其の義趣に隨へる者を、豈異人なりと謂はんか。卽、橋越兜菩薩是れなり。時に摩訶摩陀比丘は、正法を守護せんとて、未だ聞かざる所を聞き、其の義趣に隨つて言辭に著せず。是の因緣を以て無量の佛に値ひ、値ひ已るや諸の深妙の經を聞きたりしが、是の往昔の善根の因緣を以て、今我が所に於ても、亦攝一切法大海法門の經を問ひ、我れ說くを爲せる時に、無量の衆生は大饒益を得たるなり。と。

爾の時に、世尊は重ねて此の事を明にせんと欲して、偈を說いて言はく。

菩薩は未だ聞かざるを聞かば　應に其の義理を思ふべく　應に是の言を作すべからず　我れ昔
より未だ曾て聞かずと　未だ聞かざる所の法を聞きて　正念にて其の義を思はば　是の故に
て慧は增長すること　海の衆流を受くるが如くに　多聞は轉增上し　智慧も亦復爾るなり
能く諸佛の事を聞きて　廣く諸の衆生を利せんと　多聞を集むること海の如くならば　智慧は
盡くべからずして　善く能く章句の　差別中の第一を知らん　是の故に應當に　未だ曾て
聞かざる所の法を聞き　未だ聞かざる所の法を求めて　是くの如き果報を得べきなり　と。

復次に、富樓那、菩薩摩訶薩は、多聞を求むるに於て深く欲心を生じ、空閑の處に於て深く樂心を生じて、一心に阿耨多羅三藐三菩提を勤求し求め已るや、瞋恚を斷ぜん爲めに慈の觀を修集し、貪欲を斷ぜん爲めに不淨の觀を修し、愚癡を斷ぜん爲めに因緣の觀を修するなり。富樓那、何等か

是れ菩薩の精進にして、菩薩は云何に精進を修集するか。富樓那、若し菩薩あつて、若しは一劫に於て、若しは一劫を減じて、若しは行くにも、若しは坐するにも、常に精進を發さんに、富樓那、是くの如きをば眞實なる精進とは名けざるなり。菩薩あつて、若しは一劫に於て、若しは一劫を減じて、淨戒を修行し、苦行難行して頭陀を具足すとも、緣ずる所の事に隨つて欲心を生じて、諸法の實相を離れんに、是くの如きをば眞實の精進とは名けざるなり。富樓那、佛に白して言はく。何者か是れ菩薩の眞實なる精進にして、諸佛の讃ずる所・世俗の智者の譏り嫌はざる所なる。佛、富樓那に告ぐらく。菩薩は未だ聞かざる所に於て、應に深く法を空じて微の相もある無く、第一義に合したる是くの如き深經に、違はず逆はずに、其の義を明了にせんと、勤めて精進を發して、心退沒せずに聽受し讀誦し、人の爲めに解說すべし。是れを菩薩の眞實なる精進と名くるなり。謂ふところの、深經を聞きて其の義に通達せんと、違はず逆はざる、是くの如き精進は諸佛の讃する所にして、世間の智者の訶る能はざる所なり。是の故に、富樓那、菩薩は應に是くの如き莊嚴を發すべし。世間の衆生は底を得る能はざれど、我れは此の中に於て當に其の底を盡すべし。世間の衆生の沒すべき所の處に、我れは此の中に於て應に沈沒すべからず。世間の衆生の畏るべき所の處に、我れは此の中に於て應に怖畏すべからず。所以は何ぞ。我れの莊嚴を發して世と合せざるは、世の法を離れんが爲めの故にして莊嚴を發せばなり。以て世の[二六]法に行ぜざらんが故にて莊嚴を發せばなり。世の[二七]法を行ぜざらんが爲めの故にて莊嚴を發せばなり。世の法に隨ふことを爲さざらん故にて莊嚴を發せばなり。世の法を轉ずることを爲さん故にて莊嚴を發せばなり。と。富樓那、是れを菩薩摩訶薩の眞實なる精進と名け、菩薩は此の第二の法を成就せば、則ち阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せざるなり。と。

爾の時に、世尊は此の義を明了にせんと欲して、偈を說いて言はく。

【二六】法に行ぜざらん。此の「行」は進趣の義なり。
【二七】法を行ぜざらん。此の「行」は造作の義なり。以上は、次の節の「世の法に隨ふこと」「世の法を轉ずること」と對照して、理路、當に然るべし。

菩薩は深法を求めんと　常に勤めて精進を發し　其の義理を思量して　音聲に隨はざれ　菩薩は言に隨はず　皆是れ虛誑なりと知り　諸法の空なるを知らん故にて　但善語を求めよ　若し千萬億　無量の諸劫の數に於て　晝夜常に行き坐し　心を加へて苦行を行ずとも　未だ聞かざる所の經に於て　不信ならば精進に非ず　能く深義の底を得ば　名けて懈怠と爲さずして　是くの如くに精進する者をば　諸佛の稱歎する所なり　世間は底を得ざれども　菩薩は其の底を得んと　世間の畏れ沒する所にも　菩薩は畏れ沒せじと　勤心にて常に　空寂なる眞妙の法を欲求して　空法の中にて畏るる無く　亦退沒あること無かれ　我相法相に住する故に怖畏を生じて沒するにて　一切の法を散壞するを　名けて菩提の道と爲せば　勤めて心に精進を發して　疾く多聞の海を成ぜよ　と。

復次に、富樓那、菩薩は善く五陰を知り、善く十二入を知り、善く十八界を知り、善く十二因緣を知るなり。善く五陰・十二入・十八界・十二因緣を知る故に、則ち能く依止する無き智を成就し、無依止の智を得るが故に、則ち一切の法に於て、念ぜず分別せず。念ぜず分別せざるを以て、衆生の爲めに法を說きて、一切の見を破つて身見を拔かしむるなり。菩薩は此の第三の法を成就せば、則ち阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せざるなり。

爾の時に、世尊は偈を以て頌して曰はく。

菩薩は五陰　十二入の皆空なるを知り　十八界を分別し　十二緣に通達するなり　五陰に隨はず　身の是れ虛誑なるを知り　諸の[二八]內外の入に於て　悉く其の性の空なるを知るなり　是くの如く諸法を知り　知り已つて人の爲めに說く　是の故に此の菩薩の　智慧は轉高大なり　と。

復次に、富樓那、菩薩摩訶薩は、結ぶ所の戒の如き說く所の戒の如きを、善く隨ひ學び能ひて缺犯す

【二八】內外の入。眼耳鼻舌身意の五根を內入と云ひ、色聲香味觸法の五境を外入と云ふ。

る所無し。何等か是れ菩薩の學戒なる。一切の法を學ぶは、是れ菩薩の學戒なり。何を以ての故ぞ。富樓那、菩薩は一切の法を學んで一切法の[二九]智を得、是の法智を以て分別する無き[三〇]慧を得、是の無分別の慧を以て能く一切の事を知ればなり。云何に一切の事を知るか。菩薩は悉く一切の內の事・一切の外の事、一切の內たる外の事を知るなり。富樓那、何の故にて內と名くるか。內は、凡べて受くる有つて、貪著す可き所の處に名く。謂はく。是の內身の、十二因緣より生じて、是の中に但世俗の假名――謂はゆる、此れは眼、此れは耳、此れは鼻、此れは舌、此れは身、此れは意と、――を有つもの、富樓那、是れを名けて內と爲す。是の法は、凡夫の貪著する所なる故に、之れを名けて內と爲すことは、是の言を作せばなり。我れは當に是くの如き眼を得て、是くの如き眼を作らず、是くの如き耳・鼻・舌・身・意を得て、是くの如き耳・鼻・舌・身・意を作らざるべし。と。是の中にて但業緣を起す所にて果報の生ずるあるを以て、是の故にて內と名け、其の中の差別に、凡夫は貪著して、是れは眼、是れは耳・鼻・舌・身・意と謂ふものを、皆名けて內と爲すなり。復次に、富樓那、[三一]內をば名けて二つと爲すも、此の事は虛誑にして、諸の凡夫人の貪著・受取して諍訟を生ずるのみ。富樓那、如來は此れに於ては、本より已來實の如くに之れを知つて貪著せざるなり。云何に如來は、實の如くに之れを知つて貪著せざるか。如來は此の法の中に於て[三二]歸を作さざるなり。誰を歸を作さず[三三](とする)。謂はく。是れ此の眼を[三四]愛結することに歸を作さず、眼を離るることに歸を作さざるなり。耳・鼻・舌・身・意に歸を作さず、意を離るることに歸を作さざるなり。何を以ての故ぞ。富樓那、如來は法に於ては、內を得ず外を得ず。是の故に、如來は此の法の中に於て歸を作さざるなり。如來は是れ實語者にして、是の言を作すたり。比丘、眼は汝等のに非ず、亦他人のにも非ず。何を以ての故ぞ。本體は得可からざる故なり。何の法か是れ眼にして、是の眼は誰れに屬する。何の法か是れ耳・鼻・舌・身・意にして、是の意は誰れに屬する。何を以ての故ぞ。本體は

【二九】智(Jñāna)。若那と書す。決斷の義にして俗諦の差別の法、卽ち「有」を知る者を謂ふ。

【三〇】慧(Prajñā)。般若と書す。簡擇の義にして、眞諦の無差別平等卽ち「空」を照す者を謂ふ。

【三一】內をば名けて二つと爲す。內身卽ち自己と、內たる外身卽ち自己以外の他人を謂ふ。

【三二】歸。は「依り趣く」義なり。

【三三】(とする)。文意の當然に由つて加へたり。

【三四】愛結。謂はゆる九結の第一に擧ぐる所の「貪愛」と同じ。第一卷「貪欲」の解參照。

得可からざる故なり。と。富樓那、眼をば今當に推檢すべく、耳・鼻・舌・身・意を今當に推檢すべし。法に於て貪受する所無かれ。何を以ての故ぞ。若し法を受くるあらば則ち苦惱を生じ、苦惱生ずる故に則ち樂あること無ければなり。是の故に、富樓那、法に於て受を有つことは、皆苦惱を受くるにて、若し苦惱を受けば則ち苦を離れざるなり。富樓那、是れを眼を推檢し、耳・鼻・舌・身・意を推檢して、[三五]處に入ることある無しと名くるなり。何を以ての故ぞ。富樓那、若し[三六]處に入ることあらば、則ち處を出づることあればなり。是の故に如來は經中に於て說かく。眼は是れ空にして、我無く我所無きは、本性自ら爾るなり。耳・鼻・舌・身・意は是れ空にして、我無く我所無きは、本性自ら爾るなり。是れ性に性無ければなり。是くの如くに性無ければ、作ることも無く壞ることも無し。と。富樓那、是くの如くにして、法の性は、諸佛の生ずる若きにも、佛の生ぜざる若きにも、是の性は常住なれば、如來は諸法の生ずるに於て、是れ不生なるを知るなり。是の故に、如來は是に實語の者として、是の言を作すなり。佛の生ずることある若きにも、佛の生ぜざる若きにも、是の性は常住なり。と。富樓那、云何なるを無生と名け、云何なるを無生智と名くるか。富樓那、諸の法の平等なるを名けて無生と爲し、道を無生智と名く。苦の盡くるを無生と名け、道を無生智と名くるなり。是れを如來の說に二諦、謂はく、世諦と第一義諦とありと名く。富樓那、如來の說く所の苦相は、卽是れ無相を說けるなり。云何なるを苦相と名くるか。謂はく。是れ無爲の相なり。無爲は卽是れ無相なり。智者は無爲は是れ無相なることを知ればなり。富樓那、智者は、云何に無爲は是れ無相なることを知るか。謂はく。無爲の法の空なるを知り、是の寂滅なるを知り、是の歸處なるを知り、第一利なるを知り、無熱惱なるを知るなり。智者は、是くの如くに無爲を知りつつ、是の智の中に於ても亦相を生ぜざるなり。富樓那、智者は諸の相を離れ、第一の義利を得て、作る無く壞る無きなり。富樓那、若し人作るあらば卽是れ壞れども、若し作る無くば則ち壞る

【三五】處。此所の「處」は他人の六根卽ち身心を指す者と見るべし。

【三六】若し處に入ること、乃至、出づることあればなり。他人を認識して、例へば「愛」を起さんに、やがて「別離」の「苦」を受くるが如きを謂ふなるべし。

無し。壞る無き相は是れ空に、壞る無き相は是れ無相に、壞る無き相は是れ無願なり。富樓那、空の法は人の作るあること無く、人の壞るあること無し。無相・無願も、人の作るあること無く、人の壞るあること無し。富樓那、是れを諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の不壞の相と名くるなり。何等か是れ諸佛の阿耨多羅三藐三菩提なる。謂はく。諸の如來の得ざる所のものなり。富樓那、佛に白して言はく。世尊、何等の法は、是れ諸の如來の得ざる所なるか。佛言はく、富樓那、一切の法は是れ諸の如來の得ざる所なり。世尊、是の故を以て、一切の法は是れ諸佛の菩提なるか。佛言はく。是くの如し。富樓那、一切の法は是れ諸佛の菩提なり。而も、是の菩提をば一切の法とは名けず。一切の法は是れ諸佛の菩提なりと言ふは、但是れ世俗の假名の言にて說けるにて、不精進の者は、解し難く知り難し。所以は何ぞ。不精進の者は、諸法の平等なるを修習する能はずして、平等ならざる若きは、即ち佛と諍へばなり。富樓那何人は平等を修行する能はざるか。富樓那、一切の世間は、不平等を行ずるものなり。諸佛の菩提は、是の中に、等も無く亦不等も無きなり。富樓那、我れ是の道を以て阿耨多羅三藐三菩提を得たれば、是の因緣を以て、我れ經中に、一切の諸法は、正位の中に於ては皆必定に入る。是れを必定して菩提の門に入ると名くと說けるなり。是の故に、富樓那、一切の法は皆是れ菩提なり。と。

爾の時に、富樓那は佛に白して言はく。希有なり、世尊。是の諸佛の阿耨多羅三藐三菩提は、亦定亦不定に、亦文字に入り亦文字に入らず、亦語言に入り亦語言に入らざることや。何を以ての故ぞ。世尊、我れ今佛從り是の經を說きたまふを聞きて、諸法の中に於て、普く決定せる光明を得たればなり。世尊、我れ今是くの如くに、諸法の中に於て決定せる光明を得たれば、一事の中に於て一切の事を知り、一切事の中に於て一事を知ればなり。と。爾の時に、佛は富樓那を讃じて言はく。善い哉、善い哉。富樓那、汝能く是くの如くに、疾く諸佛の一切法の利に入ることや。當に知

るべし、汝已に曾て過去世に於て、諸佛を供養して諸の善根を種ゑ、親近し諮問せることを。富樓那、我れ過去を念ふに、[三七]此の土地の虚空分の中に於て、汝は已に曾て、六萬八千の諸佛の所に於て是の經を聞くことを得、是の善根功德の因緣を以て、汝は諸法に於て普く決定せる光明を得たるなり。と。世尊、若し我れ已に若干の佛の所に於て、是の經を聞くことを得ば、我れ何故に、乃ち一念を以て阿耨多羅三藐三菩提を發さざりしか。佛告ぐらく。富樓那、我れ過去世を念ふに、汝曾て一劫に阿耨多羅三藐三菩提の心を發ししが、餘の心を離れずして還退失せり、是の福德の因緣を以て、我れ今汝を、諸の法師に於て最も第一と爲すと說くなり。富樓那、佛に白して言はく。世尊、我れ本何の罪障を作つて、一劫の中に於て阿耨多羅三藐三菩提の心を發しながら、而も還退失せるか。佛言はく。富樓那、惡知識に隨逐し依止せるが故に、又廣く法を流布すること能はざりしが故に、汝は阿耨多羅三藐三菩提の心に於て還退失せるなり。富樓那、四法を有たば、阿耨多羅三藐三菩提を退失して聲聞乘と成るなり。何等か四なる。菩薩は、惡知識の故に能く善根に於て[三八]增惡・遠離せるに親近するや、是の言を作さく。何ぞ是くの如くに菩提の心を發することを用ひん。生死は長遠に苦惱は無量なるに、[三九]五道に往來しながら無難に値ふことは難し。諸佛に値ふことは難く、淨信することは復難く、佛に値ふことを得と雖も、出家することは復難し。汝今無難に値ふことを得たれば、復と還失する勿れ。汝諸佛に未だ阿耨多羅三藐三菩提の記を受けざるに於ては、善根未だ定らず、涅槃を得ずして、五道に輪轉するものなればなり。と。是の人是れを說くを聞き已るや、心は則ち退沒して、菩提の道に於て懈怠して樂まざるなり。富樓那、菩薩に是の初の法あらば、菩提を退失して聲聞乘と成る。復次に、富樓那、菩薩は菩薩に應ずる經、謂はく。菩薩藏經・發菩提心經・攝菩薩事經・應六波羅蜜經を聞かざらんか。聞かざる故を以て、說の如くに行ぜず、說の如くに學ばざるなり。是の人、菩薩は何の法に應に親近すべく、何の法に應に遠離すべく、何の

【三七】此の土地の虚空分。現在の閻浮提の成立する以前、即ち成劫以前に於ける空劫を指す。

【三八】增惡。增は「憎」の誤寫なるべし。

【三九】五道。五趣と同じ。第一卷、同名の解(一三〇頁)參照。

法を應に受くべく、何の法を應に受くべからざるか。何の法は是れ菩薩の法なるか。何の法は是れ聲聞の法なるか。是くの如きを知らず分別せざるが故に、應に親近すべき法に、而も親近せず。應に親近すべからざる法に、而も反つて親近す。是の人、應に親近すべき法に、而も親近せず。應に親近すべからざる法に、而も親近するが故に、則ち便ち諸佛の菩提を退失し、心弱く懈り厭うて、本願を[四〇]癈捨するなり。富樓那、菩薩に此の二の法あらば、菩提を退失して聲聞乘と成る。復次に、富樓那、菩薩は諸法を計得し、吾我に貪著し、邪見を行じ、邊見に墮在し、惡邪に沒在して拔け出づべき難きや、深經を聞くことを得とも、第一義に應ずることは微相だもある無く、違逆して信ぜざれば、通達する能はずして、破法の罪を起すなり。是の因緣を以て、難處に生在して佛に値ふことを得ず、法を聞くことを得ず、諸佛の教化する所の法に値はず、善知識を得ざるなり。是の人は、佛を見ざる故に法を聞かず。法を聞かざる故に諸佛の教導する所の法に値はず。諸佛の教導する所の法に値はざる故に善知識を得ず。善知識を得ざる故に、無難の處を失して難處に生在し、難處に在るが故に善知識を離れて惡知識に遇ひ、惡知識と共に事に從ふが故に本の念を忘失し、是の人、本の念を失するが故に菩薩の心を捨て、菩薩の乘を捨てて便ち退轉して、永く菩提の念を失ひ、但生死の法を行じて、大乘の行法を修習すること能はざるなり。富樓那、菩薩に此の第三の法あらば、菩提を退失して聲聞乘と成るなり。復次に、富樓那、菩薩は是等の如き經を聞くことを得とも、深心に他人を教化すること能はざるや、其の心退沒して但獨行を欲ひ、慳悋して法を惜んで心に說くことを欲せず、法を以て廣く人衆を攝むること能はず。是の不善根の因緣の故を以て智慧の念を失ひ、智慧の念を失ひ已るや、他の人と共に經法を讀誦せず。法を以て他と共に同ぜず。是の人、[四一]身を轉ずるや、菩薩の心を失ひ菩薩の念を忘るるなり。富樓那、菩薩に此の第四の法あらば、菩提を退失して聲聞乘と成るなり。と。

【四〇】癈捨。「癈」は「廢」の誤寫なるべし。「癈」を「廢」に通用することあれど、「癈」を「廢」に用ひざるを例とす。

【四一】身を轉ず。轉生、卽ち此所に死して彼所に生るるを謂ふ。

爾の時に、世尊は此の事を明了にせんと欲して、偈を說いて言はく。

惡知識に親近して　菩提を懈怠す　是の因緣の故を以て　上菩提の心を失ふなり　深く惡の我見を生じ　邊邪の見に墮在して　破法の罪を起して　難處に生在す　難處に生じ已れば　則ち菩提の心を斷じて　本の憶念を忘失する　是の故にて菩提を失ひ　是の人　菩提心を生ずる法を聞くことを得ざるなり　是の心若し增長せば　能く菩提を成ずるものなれども　廣大なる妙法を得ながら　慳悋して說くことを欲せざれば　是の因緣の故を以て　菩提を退失するなり　大乘を求むる菩薩は　應に是の四法を知るべく　若し此の四法を知らば　菩提は以て生ずることを得ん　是の故に應に　此くの如き四惡法を遠離し　勤めて空の法を修行して　善知識に近くことを得べし　是くの如き經を得已らば　應に慳悋し惜むべからずして勤心にて人の爲めに說かば　是れに從つて菩提を生ぜん　と。

佛は富樓那に告ぐらく。菩薩は四法を成就し、隨つて菩提に迴向して心退失せず、隨つて諸の善根に迴向して亦退失せざるなり。何等か四なる。菩薩は戒を持つこと淸淨に、憶念をば成就して念の[四二]安慧を有ち、勤心に精進して懈退せず、多聞を成就して慧を生ずるなり。富樓那、菩薩に此の四法あらば、隨つて菩提に迴向して心退失せず、隨つて諸の善根に迴向して亦退失せざるなり。と。

爾の時に、世尊は此の義を明了にせんと欲して、偈を說いて言はく。

菩薩は持戒を具し　憶念する所は深遠に　勤心に當に精進すべく　多聞して慧を莊嚴するなり　菩薩は常に　是くの如き四法に親近せば　隨つて心に起す所の事をば　皆能く成就することを得るなり　是の故に應に常に　淨戒を持ち勤めて精進し　憶念の法を斷ぜず　常に勤めて多聞を求むべし　持戒は生ずる處を淨め　憶念は能く智を淨め　精進は佛法を淨め　多聞は大慧を生ずるなり　是の故に諸の菩薩は　當に是の上法を學ぶべく　是の上法を學び已つ

【四二】安慧。意を智と慧とに安住せしむるを謂ふ。

て　當に無上の〔四三〕輪を轉ずべきなり　と。

復次に　菩薩は四法を有つて、則ち能く菩提を利益するなり。持戒は則ち是れ菩提の法を利し、忍辱は則ち是れ菩提の法を利し、精進は則ち是れ菩提の法を利し、多聞は則ち是れ菩提の法を利するなり。富樓那、是れを四法にて菩提を利益すと名く。

爾の時に、世尊は此の義を明了にせんと欲して、偈を説いて言はく。

菩薩は淨く戒を持ちて　菩提を利益し　精進及び忍辱　多聞にても亦是くの如し　清淨に戒を持つ者は　願ずる所をば皆成ずることを得　戒淨くば利益多ければ　菩提は難しと爲さず

菩薩は忍辱を行ぜば　身相と智慧と成ず　是の故に當に忍を行じて　佛の相と智慧とを求むべし　精進も亦復能く　多く菩提を利益すれば　常に精進を行ずる者は　菩提は則ち難からず　多聞も亦能く利すれば　聞き已らば法に近くを得て　非の法を遠離せば　菩提は則ち難からず　四つの法は是れ種子にして　是れに從つて菩提を生ずれば　是の故に諸の菩薩は

應に是の利の法に近くべし　と。

復次に、富樓那、菩薩摩訶薩は、四法を成就して、則ち身色は具足し、財物は具足し、眷屬は具足することを得、終まで常に諸の惡難の處に生ぜず、常に諸佛に値ひ諸佛に讃ぜらるるなり。何等か四なる。菩薩は慈を行じて瞋らず、一切の衆生を惱さざるなり。富樓那、何を菩薩は慈を行じて瞋らず、一切の衆生を惱まさずと謂ふか。菩薩は慈を行ずるに、諸の衆生に於て「我れ救はん」の慈を起し、諸の衆生の身の苦・心の苦を見るや、當に是の念を作すべし。我れ當に勤行・精進して、是の衆生を生死の苦より度すべし。是の諸の衆生に、我れ應に樂を與ふべし。我れ應に拔濟して生死の苦を離れしむべし。と。諸の衆生に於て、應に是の心を發すべく、是の心を發し已るや、勤行精進して、六波羅蜜たる布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧を修習するなり。

〔四三〕輪（Cakra）。輪は法輪にして、佛の説法の威力を、轉輪王の輪寶の、山岳巖石を輾摧して自由なるに譬へたるなり。

富樓那、菩薩は般若波羅蜜に因つて六波羅蜜を具足することを得るなり。何等を菩薩の般若波羅蜜と爲すか。菩薩は、云何に般若波羅蜜に因つて勤めて精進を發すか。富樓那、菩薩は是の思量を作すなり。何の法を我と名け、何の法を我所と名くるか。と。是くの如くに思量する時に、法の是れ我なるものを見ず、法の是れ我所なるものを見ずと、是の念を作すなり。是の念を作し已るや、此の法中に於て、我の法無く、我所の法無きなり。菩薩は、我・我所を離れたる故に身は空に、身は空なるが故に衆生は空なるを知るなり。何を以ての故ぞ。諸の法中には我・我所すら尙空なり。何に況んや衆生をや。菩薩は是くの如くに、我・我所を離れたる故に衆生の空なるを知り、衆生の空なる故にて色陰は空に色陰の空なる故に受・想・行・識の陰も空なるを知るなり。菩薩は是くの如くに、我・我所を離るる故にて身の空なるを知り、身の空なる故にて衆生の空なるを知り、衆生の空なる故にて諸陰は空なるを知り、諸陰の空なる故にて種も亦空なるを知るなり。謂はく。地・水・火・風・虛空・識の種なり。地の種と地の種の相とは空にして、水・火・風・虛空・識の種と識の種の相と空なるは、是の種をば、作る者無く作ら使むる者無くして、若く作る者無くば、是の法は卽空なればなり。富樓那、菩薩は、此れに於て我・我所を離れたる故に身の空なるを知り、身の空なる故にて衆生の空なるを知り、衆生の空なる故にて諸陰の空なるを知り、諸陰の空なるを知る故にて諸種の空なるを知り、諸種の空なる故にて諸入の空なるを知り、諸入は空なる故に諸入の相も空なるは、諸入をば作る者無く作ら使むる者も無きにて、若く法をば作る者無く作ら使むる者も無くば、是の法は卽空なればなり。富樓那、菩薩は是れを以て一切の法の空なるを觀じ、一切の法の空なるを觀ずる時に、諸法の本體に瞋を生ずべき處を見ざるなり。富樓那、是れを菩薩摩訶薩の大慈は、身空の慈・衆生空の慈・陰入種空の慈なるを知ると名け、菩薩若し能く是くの如き慈を行ぜば、是れを一切法空の慈を行ずと名くるなり。富樓那、是れを菩薩は大慈を行ずと名け、是くの如くにして

菩薩は我・我所を離れて、心に深く欲心を阿耨多羅三藐三菩提に於て生じ、大悲の心を生じて、諸の衆生に於て、若し衆生の是くの如き諸法の實相を知らざるあらば、知らしめん爲めの故に大莊嚴を發すを、是れを菩薩は大悲を行ずと名くるなり。我れ救ふ故に慈と名け、我れ作す故に悲と名く。菩薩は是くの如き大慈を成就して、能く衆生の爲めに、救と作り、歸と作り、舍と作り、洲と作り、能く究竟と作るなり。是の故に、菩薩は、應に是くの如くに大慈を修行して、衆生に貪著せず、亦瞋恨を生ぜざるべし。是れを菩薩は、衆生空の慈にて、瞋恚を有つこと無しと名くるなり。富樓那、若し菩薩にして、慈に因り離に因り空に因つて、能く一切諸法の不生不滅なるに入らば、是れを菩薩は常に大慈を行ずと名け、菩薩は是くの如くに諸法に通達せば、諸の魔と魔民及び魔の使ふ所のものと、皆壞ること能はざるなり。菩薩は是の初の法を成就せば、能く一切の功德中の縛を斷じ、功德の縛を斷ずる故に、【四四】平等の波羅蜜を得るなり。

爾の時に、世尊は此の事を明了にせんと欲して、偈を說いて言はく。

菩薩は常に是くの如くに　慈を修するに而も空を觀じて　陰入界の離れたるを知れば　是の中に我あること無し　我我所の二法は　決定して得可からざれば　諸法を得ざることに爲つて　慈心を修行するなり　諸法に依止せず　亦依止せざるに非ざる　是れを諸佛の道の　諸べて依止せざる法と名く　能く無上の忍を得て　諸法の實相を忍せば　諸法の生滅無きことに　能く其の理に善く通ぜん　諸べて大智ある者は　是の法に親近して　常に妙なる身色を得　【四五】亦樂說の辯を得　常に諸佛に値ふことを得て　諸法の義利を知れば　是の故に此の菩薩は　無爲の上道を得るなり　と。

復次に、富樓那、菩薩摩訶薩は、精勤して諸佛塔寺を供養し、敬心にて好き華香・瓔珞・塗香・末香・幡蓋・妓樂・種種の供具を以ひて以て供養するなり。菩薩は此の第二の法を成就せば、能く一切

【四四】平等の波羅蜜。諸法、空平等の無智、即ち般若波羅蜜を謂ふ。

【四五】樂說の辯。四辯即ち四無礙辯の一なり。

の功德を具足することを得。

爾の時に、世尊は此の義を明了にせんと欲して、偈を說いて言はく。

菩薩は上妙を以て　上智の塔を供養し　華香及び幡蓋にて　以つて上智慧を求むるなり　此の功德の緣を以て　身を受くること常に端正に　饒財と多くの寶珍と、眷屬とを具に成就し　菩提を必定して　常に法に安住し　在在の生るる處にて　功德轉高く增し　諸の王に恭敬せられ　天龍神は常に念じ　一切の諸の衆生も　亦皆共に恭敬するなり　若し人佛を供養せば　現在若しは滅後に　生るる所にて供養を得て　常に無難の處に在らん　と。

復次に、富樓那、菩薩摩訶薩は、常に當に勤心にて法を供養すべきなり。云何なるを名けて法と爲し、云何なるを法を供養すと名くるか。四念處・四正勤・四如意足・四禪・五根・五力・〔四六〕七覺意・八聖道・止觀・〔四七〕明解脫・三解脫門・盡智・無生智と名くるもの、是れを名けて法と爲す。云何に供養するか。是の法の中に於て、說く所の如き行に隨順して逆はず、欲精進を生じ具足して修習する、是れを法を供養すと名く。復次に、富樓那、法を供養するの法をば、是等の如き經に名け、信解し思惟し分別し隨順して心違逆せざる、是れを法を供養すと名くるなり。菩薩は、此の第三の法を成就せば、能く一切の功德を具足することを得るなり。

爾の時に、世尊は此の義を明了にせんと欲して、偈を說いて言はく。

常に勤めて法を供養するに　說く所の如くに中に住し　深空の妙法を聞きて　其の心違逆せず　故に身は常に端正にして　亦樂說の辯を得　我が讚ずる所の法の如きも　此れを以て轉高增するなり。

復次に、富樓那、菩薩摩訶薩は、勤心にて如來の聖衆を供養するに、若しは香若しは瓔珞若しは末香を以て、若しは塗香を以て、若しは幡蓋・衣服・飲食・臥具・醫藥・資生の物を以て、若しは僧坊

【四六】七覺意。七助道法と同じ。第一卷「覺」の解、參照。

【四七】明解脫。智解（慧）の上にて無明を離れたる義にして「慧解脫」を指す。第二卷、同名の解、參照。

を起し、若しは園林若しくは經行の處を立て、若しは浴池を以て、若しは井泉を以て、若しは人使を以て、是等の如き餘の供養の具にて、是くの如き聖衆を供養するなり。菩薩は此の第四の法を成就せば、能く一切の功德を具足することを得るなり。

爾の時に、世尊は此の義を明了にせんと欲して、偈を說いて言はく。

『無上なる供養の具にて　如來の衆に供養するに　此の功德の緣を以て　生ずる所に財寶多く
身色は常に端正にして　亦樂說の辯を得　諸の功德を具足して　智慧は轉高增するなり　正直の心の　我我所無き者を供養するに　此の智の因緣を以て　生るる處にて供養を得　諸佛に稱讚せられ　四法に常に親近し　生ずる所は常に尊貴にして　功德は轉高增するなりと。』

卷の第七十八

富樓那會　第十七の二

具善根品　第四

爾の時に、佛は富樓那に告ぐらく。菩薩摩訶薩は大乘を發すに、常に當に修習して四法に親近すべくば、則ち能く一切の善法を具攝し、亦能く一切の善根を具足するなり。何等か四なる。富樓那、善男子・善女人は大乘心を發すや、修習し親近して忍辱の法を行ずるなり。是くの如くに忍辱の法を修行する時に、心平等の故に則ち平等波羅蜜を得る如くに、亦一切衆生平等の波羅蜜を得るなり。是の菩薩は、【一】心平等の波羅蜜・【二】智平等の波羅蜜を成就するに、若しは行き、若しは立ち、若しは坐し、若しは臥し、若しは覺め、若しは睡る時に、人の來つて、若しは屎の瓶を持ち、若しは毒の瓶を持ち、若しは沸湯の瓶を持ち、若しは諸の【三】糞掃を、若しは火炭を持ち、若しは屎尿を持ち、若しは熱灰を持ちて其の頭上に擲ち、若しは其の身に擲つあらんに、菩薩は、此れに於て應に瞋恨して、心をして散亂せしめて、忿恚を生ずべからず。應に自ら、我れに何の罪ありやと言ふべからず。又應に惡心を以て彼れを視るべからず。但應に一心に自利の法を求め、修むる所の事に於て、專心に捨てざるべし。應當に是くの如くに其の心を調伏すべし。是の人は何の因緣の故を以て、此の屎の瓶・毒の瓶・灰・火を持ち來つて、我身に加ふるを爲すとも、我が身は、此の物の因緣を以て痛惱を得ざるなり。と。菩薩は是の時に、應に是くの如くに觀ずべし。衆因緣の法は、誰れか此の物を與へ、此の物を誰れに與へ、何物を以て與ふるか。と。是の人是くの如くに、實の如くに思惟するに、法――誰れか是れ與ふ者、誰れか是れ受くる者、何者か是の法なる――有るを見ず。是くの如き正念にて思惟して觀ずる時に、此れ彼れは得可からざる故に、一切の諸法は皆得可からず、皆見

【一】心平等の波羅蜜。「心解脫」を指す。
【二】智平等の波羅蜜。「慧解脫」を指す。
【三】糞掃。凡べて汚穢の物を稱す。

る可からざるなり。是くして菩薩は、一切の法を得ず見ざる故に、瞋恨を生ぜざるなり。富樓那、若し菩薩は是くの如くに思惟すとも、猶瞋恨の心の起ることあらば、復應に是くの如き正念にて思惟すべし。何の觸の因縁は、我が身をして痛ましむるか。是の諸べて觸る者は、何處に觸ると爲す。身に在りと爲んか。心に在りと爲んか。若し身に在らば、身は草木・瓦石・影像の如くにして、覺無く知無ければ、我れに非ず彼れに非ず。若し心に在らば、心は形色無く、念念に生じ滅して須臾も住せざれば、我れに非ず彼れに非ず。但虛妄なる憶想分別を以つて、說いて是れ苦・是れ樂・不苦不樂と言ふのみ。我れは今此の虛妄なる憶想分別を生ずべからず。我れは今應に平等なる實の相を觀ずべし。我れは當に賢聖の作す所を修習すべく、應に凡夫の作す所に隨逐すべからず。何等を是の賢聖の作す所と爲すか。謂はく。諸の法に於て遠離し解脫するなり。我れは遠離を爲さん故に學び、和合を爲さざらん故に學ぶなり。是くの如き虛妄なる憶想分別は、是れ皆和合なり。誰と和合するを爲すか。是の貪欲と和合するを爲すなり。是の瞋恚・愚癡と和合するを爲すなり。云何なるを名けて貪欲・瞋恚・愚癡と和合すと爲すか。身の癡の故・身見の癡なる故・貪身の見の故を以て、身に苦を受くる時に他の人を瞋恚する、是れを瞋恚と和合すと名く。身見の癡なる故・貪身の見の故を以て、意に隨はざる故にて他の人を瞋恚する、是れを愚癡と和合すと名く。若し人、是くの如くに、三毒に縛られ、或は是くの如き罪業の因縁を起さば、諸佛すら救はず。何に況んや餘の人をや。我れは應に、善く諸の因縁の法を觀じて、空法を觀ずべし。と。菩薩は是くの如く隨順して、諸の因縁の法を正しく觀ずるに、法――誰れか與へ、誰れか受け、何物を以つて與ふるかの――有ることを見ざるなり。と。爾の時に、菩薩は當に是の念を作すべし。一切の諸法は衆緣より生じて、自性は本空なれば、定つて不可得なり。我れ當に云何ぞ、得る所無き虛妄なる法の中に於て、法を得業を作つて瞋恚を生じ、行の因縁を起すべけん。我れ今應に瞋恨無き心を生じて、作無

【四】行。此の行は、遷流の義として、生死流轉を指す者と見るべし。

く起無く生無き法を修行すべし。當に空法を觀じて、我心に隨はざるべし。我れ今應に不作・不起・無生の法を觀ずべく、應に起作の法に依止すべからず。我れは應に、實の如くに諸法を思惟すべし。我れは今應に、此の虛妄なる有る所無き中に於て、强ゐて法、——虛妄の强作——を作り、是れを謂うて瞋恨すべからず。所以は何ぞ。法體に依止すれば則ち瞋恨あれども、諸法の實の相は畢竟じて空にして、中に法の本體として依止すべき者無ければなり。と。菩薩は是くの如くに諸法を思惟せば、其の心は寂然として瞋恨は起らざるなり。又是の菩薩の、若しは行き、若しは立ち、若しは坐し、若しは臥し、若しは覺め、若しは睡る時に、人の來つて、好美の香・末香・塗香を以て、好名の華を以て、其の身上に散じ、若しくは上妙なる香華の瓔珞・薝蔔華の鬘・[五]婆梨師華の鬘・衆華の瓔珞を以ひて、以て其の身を覆ひ、若しくは上妙なる細軟の衣服を以て、謂はく、[六]加尸衣、若しは[七]拘攝衣、若しは[八]拘珍婆衣、若しは[九]憍施耶衣、若しは[一〇]芻摩衣、若しは[一一]劫貝衣、若しは細[一二]欽婆羅、若しは細繒衣と、是等の如き柔軟なる細なる衣を以ひて、以て其の身を覆ひ、若しくは上妙なる繒蓋・幢幡を以て其の上に張り施き、若しくは諸天の名華香・妙衣・珍寶・瓔珞を以ひて、以て其の身を覆ひ、若しくは天上の甘美なる飲食を以ひて、以て進上するあらんに、菩薩は此の種種の供養に於て、應に愛を生じ、心をして貪著せしむべからず。此の緣を以って、其の人に親附し、其の意に隨順して、往來・問訊せず。應に偏りたる心にて、愛著を起すべからず。菩薩は此れに於て、應に等心を以て、一切諸法の平等なるに通達すべく、應に是の念を作すべし。我れは衆生に於て、應に瞋恨すべからず、應に愛念すべからず。所以は何ぞ。憎・愛の二事は俱に是れ煩惱なればなり。我れ今此れに於て、應に愛を生ずべからずして、應に諸法の如實に通了すべし。所以は何ぞ。諸の煩惱の中にて、愛緣の合する所のものは、此に最も重しと爲せばなり。是くの如き煩惱は深く骨髓に徹す。謂はく。能く結使を生ずる法の中に於て、愛心は染著すればなり。所以

【五】婆梨師華。婆利師迦華の略稱なり。

【六】加尸(Kaśa)衣。加尸は「光」の義にして、花綿衣と譯すべきか。

【七】拘攝(Kośava)衣　細なる白布の衣を謂ふ。

【八】拘珍婆(Kotambaka)衣。上毛の綵衣なり。

【九】憍施耶(Kauśeyaka)衣。絹衣なり。

【一〇】芻摩(Kṣaumaka)衣。亞麻製の衣を謂ふ。

【一一】劫貝(Kārpāsaka)衣。劫貝樹の花絮にて織りし者と云はれ白氎衣と譯す。

【一二】欽婆羅(Kambala)。細き羊毛又は犀牛の毛にて織らるとせらる。外に粗なる欽婆羅衣あるに由り「細」の字を冠す。

は何ぞ。貪著する所の事、若し意に隨はずんば則ち瞋恨を生じ、人皆其の身を貪愛することを欲するに、使惱する者あらば卽ち瞋恨を生ずればなり。是の故に當に知るべし。瞋恚は則ち是れ染愛の果報にして、貪著は則ち是れ愚癡の果報なることを。我れ今當に染愛の惡心を離れて、諸法の中に於て貪著する所無かるべし。我等は、貪欲を爲さざらん故に學び、瞋恚を爲さざらん故に學び、愚癡を爲さざらん故に學べばなり。我れは當に廣く諸法の眞實を學び、諸法の相に於て實の如くに之れを觀ずべく、所說の中に隨ひ當に實の如くに行ずべし。但應に業報の因緣に依止すべく、諸の供養と苦惱との事中に於て當に皆是れ[一三]宿業の行緣なりと知るべし。是の故に、諸の[一四]隨順の法中に於て喜愛を生ぜず、[一五]違逆の法中に瞋恨を生ぜず。但應に其の心を清淨にして忿恚する所無く、愛に隨ひ瞋に隨ひ癡に隨ふ惡法を、心に生ずることを得しめざるべし。と。富樓那、此の初の法を成就せば、能く一切の功德を具足することを得るなり。

爾の時に、世尊は此の義を明了にせんと欲して、偈を說いて曰はく。

我れ常に智慧を讃じ　亦持戒の者を讃じ　忍辱を行ずるを稱揚し　亦常に多聞を讃ず　我れ善法を行じ　慈心にて愛語する者を讃ずるは　衆生を饒益するに爲り　宜に隨ひ衆德を讃ずるなり　我れ常に五欲と　瞋恨と愚癡との人　嫉妬と慢と諂曲とを訶するは　濁亂して衆生を嬈せばなり　懈怠と嬾惰の心と　儱戾して與に語り難きと　恩に背きて反し復すること無きと　小事に大恚を發すと　利養を貪求すると　我れ利養を得るに當り　人をして得しむるを欲せざると　是等をば我れは讃ぜざるなり　小智にて利養に於て　自ら欲し彼れの得るを嫉み　他家に於て苦を生ずる　是等をば我れは讃ぜざるなり　利養を得ることを求むるに爲り　轉威儀の行を易り　此の[一六]命の清淨に非ざるは　我が法を離るること甚だ遠し　道を修行せざる者には　此の諸の過咎あつて　是等は惡道の緣なれば　一事として讃ずべき無し

【一三】宿業。宿世卽ち過世の作業を謂ふ。
【一四】隨順の法。自己の情意に適合する事物を謂ふ。
【一五】違逆の法。自己の情意に背反する事物を謂ふ。
【一六】命(Ājiva)。此の命は、活命卽ち生活の義なり。

惡の我見を斷たざれば　貪愛の心は則ち多く　貪愛の心多き故に　利養を勤求するなり　菩薩は是の念を作し　忍を行じて衆生を益し　剛强の心を摧伏して　疾く佛道を成ずることを得るなり　我れは慈心を行じ　忍辱して衆生を愍むに當つて　諸法は空にして　緣に從つて屬する所無きことを知る　何の緣にて諸法あるか　是れ法は心より興るを　妄想して瞋恚を生ずるにて　念はずんば則ち皆空なり　妄想にて三界に生じ　相續の身をば絕たざれども　分別妄想せずんば　則ち是くの如き過無し　常に諸法を思量して　皆緣從り生ずるを知り　常に諸法の空なるを觀じて　能く一切を度せん　戒を離れたる苦の衆生は　憍慢に傷害せらるれば　爲めに滅苦の法を說きて　多く饒益する所あらん　若し人東より來り　南西北の四維よりも　屎毒の瓶を執持し　以て其の頭上に擲たんに　我れは瞋心を生ぜずして　誰れか與へ誰れか受くる者にして　何の法を名けて我と爲すかと　觀ずるに勤精進を以てせん　惡色にて彼れを視て　何の罪にて加へらるかとせず　但堅强の思を發し　慈心にて彼れを覆はん

是れ宿業の緣にて　今此の果報を受くることを知り　償ひ已つて更に作らずして　佛道の中に安住せん　餘の人に此の　輕毀と苦惱との事ある無きは　此れは必ず是れ業緣の　久しと雖も失はざりしなり　衆生の世間に在つて　常に起す善惡の業にて　我が今受くる此の苦をも　當に是れ業緣なることを知るべきなり　若し還すに惡の報を以てせば　後に復苦の果を受くれば　寧ぞ惡事を以て　彼の人に加ふ可けん　當に無上の法を求め　求め已つて人の爲めに說き　衆生の類の　一切の諸苦惱を度脫せしむべし　若し人香華　瓔珞を以て我れを供養すとも　應に愛心を生ずべからずして　當に平等の觀を習ふべし　憎も愛も則ち道に非ざれば　常に應に捨の心を行ずべく　當に諸法を正しく觀ずべし　誰れか與へ誰れか受くる者ぞ　空は與へ空は受くるや　內は空にして外も亦空なれば　空は與ふる無く受くる無く　一切

皆無我なり　空には貪あること無くして離れ　空には煩惱あること無く　亦清淨あること無くして　垢と淨とを離れたるは是れ空なり　空の中には分別無く　空の中には諸性無く　空は常に空無相なれば　是れを〔一七〕清淨の道に比するなりと　若し人の來つて　段段に我が身を解かしむとも　中に於て恚を生ぜずして　業緣に從つて有ることを知る　衆生は善惡を起し業に隨つて自ら果を受くれば　我れは必ず先世の惡にて　今此の苦報を受くるたり　今此の惡報を受けて　身を觀ずるに影像と　水沫と幻化と炎との無空なるが如くに　畢竟じて空なり　若し人身を支解せるに　人あつて我れを將け養はんに　當に報恩の者を念ずるも　以て歡喜を爲さざるべし　利養に以て喜ばず　惡罵に瞋恨せざるは　二つ皆是れ障礙にして　佛の正眞の道に非ざればなり　當に諸の一切の　貪愛瞋恚の心を離るべく　常に當に空寂を修して　諸の障礙を斷ずべし　忍辱は十力の本　諸佛の神通の原にして　無礙智と大悲とも皆忍を以て本と爲す　四諦と〔一八〕念と正勤と　根と力と覺と道分と　皆忍を以て本と爲せば何の智か忍を修せざらん　我れ波羅奈に於て　無上の法輪を轉ぜるにも　亦忍を以て本と爲せしは　諸佛も常に忍を讃ずればなり　汝等も亦應に〔一九〕空忍を修して生滅の　諸法の相を無くすること常に爾るべくば　乃ち佛の功德を得ん　と。

復次に、富樓那、菩薩摩訶薩は、能く五欲を離れて常に出家を願ひ、心出家に順じ出家に趣向して、五欲を願はず、出家することを得已るや、諸の憒鬧を離れ、遠く山林に處つて善法を失はざるなり。菩薩は此の第二の法を成就せば、則ち能く一切の功德を具足せん。

爾の時に、世尊は偈を以て頌して曰はく。

心に常に出家を願ひ　而して能く常に出家し　常に樂んで山林　功德を增益する處に在り
親近して空閑に在らば　卽五欲の著を離れ　此の中に憒鬧の　諸の善法の緣を失ふこと無し

〔一七〕清淨の道。無差別平等の空の極所を謂ふ者にして、謂はゆる「清淨眞如」に當る者なるべし。

〔一八〕念と乃至道分と。四念處・四正勤・五根・五力・七覺支・八聖道分を謂ふ。

〔一九〕空忍。無差別平等空の解知より起る忍辱の意なるべし。

諸の語言　往來問訊の事ある無くして　空閑は寂然として快く　諸佛の稱讃する所なり
是の故に諸の菩薩の　應に常に親近すべき所として　聚落を貪樂し　近いて利養の心を生ずること勿れ　若し利養を得て喜び　失へば則ち憂惱を生ずる　此の人の佛を供養するは　名けて供養とは爲さず　是くの如き過を除かんと欲せば　當に諸の利養を離るべく　遠離して空閑に在つて　空法を修習せよ　と。

復次に、富樓那、菩薩は常に法を求むることを學び、求め已つて讀誦するなり。謂はく。淨戒頭陀の細なる法を求め、多欲にして厭足無き法を求めず。貪欲を滅することを求めて、貪欲を益さず。瞋恚を破ることを求めて、瞋恚を增さず。愚癡を斷ずることを求めて、愚癡を益さず。憍慢を破ることを求めて、慢を起すことを求めず。我慢を破ることを求めて、慢を長ずることを求めず。我・我所を斷つ法を求めて、我我所を增す法を求めず。無我の法を求めて、我・人・衆生・壽命に依止する法を求めず。常に能く大智慧を得る法を求めて、大智慧を退失する法を求めず。常に無等の慧を得る法を〔二〇〕求むることを爲して、小慧を得る法を求むることを爲さず。一切の諸法を具足することを得るものを求めて、諸の功德を具足せざる法を求めず。是くの如き法を求め、求め已るや、讀誦し思惟し正觀して、說く所の如くに行じ、人の爲めに演說すれども世利を求めず。乃至、善い哉と稱讃せらるることをも求めずして、多くの衆生に敎へて是の法に住せしむるなり。富樓那、菩薩は此の第三法を成就せば、能く一切の功德を具足することを得るなり。

爾の時に、世尊は偈を以て頌して曰はく。

菩薩は出家を樂ひ　戒を持ち頭陀を行ずれば　是れを以て智慧を增して　智の雨は　衆の流を益すなり　是の深淨なる法を得て　正念に其の義を思ひ　說く所の如き中に於て　能く聞く所の如くに行ずるなり　常に淸淨の心を以て　人の爲めに廣く解說して　諸の衆生を饒益す

〔二〇〕求むることを爲して。原文には「求爲」とあれども、次の句には「爲求」とあり。又、措辭法に於ても然るべし。乃ち「爲求」を誤つて轉寫したる者と認めて、之れを改めたり、

れども　心に希望する所無きなり　諸の功德味を得て　自ら是の法の中に住し　亦餘の人を
して住せしむる　是の故に佛の法を增すなり　若し無量劫に於て　集むる所の諸の功德をば
皆現に前に在いて　菩薩の道に攝入せしめん故に　應に深法　佛の稱讃する所の者を求め
常に衆生の爲めに說くべくば　功德は是れ從り生ぜん　と。

富樓那、菩薩摩訶薩は、持戒頭陀の法中に安住して、能く一切の善根福德を具するなり。富樓那、過去に久しく遠きこと、無量無邊不可思議の阿僧祇劫なるに、爾の時に佛あつて、彌樓揵駄如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と號せしが、佛の壽は六十歲にして、一會の說法に、八十億の比丘は阿羅漢の道を得たりき。富樓那、彌樓揵駄佛の滅後に、法の住ること五百歲にして、般涅槃の後、七日の中に、諸の大弟子も皆亦佛に隨つて涅槃に入れり。富樓那、是の佛の五濁の惡世に出でたまへることは、我れの今の如くなりしが、諸の大弟子の滅度の後に、多く衆生あつて、皆是の念を作せり。沙門の法中は安隱快樂なり。我等何ぞ各共に出家せざらんや。と。是の念を作し已つて、咸く鬚髮を剃り、法服にて出家せしが、出家の後は唯三事を行じたり。一には、常に白衣の舍に周旋し往來するなり。二には、唯利養に貪著して自活するなり。三には、肌をば肥すことに長じて、福慧を有つこと無きなり。是の三事を行つて餘の業を修めざれば、百歲の後、諸の大弟子の皆悉く滅盡するや、是等の比丘は、多く白衣と和合して、佛の諸の深經・持戒頭陀の細行・妙法をば、多くは皆廢捨して、復と讀誦せざりき。富樓那、爾の時に當つて、諸の比丘衆は、樂んで五欲を行ひ、飲食を貪嗜するのみ。

爾の時、國王に唯一子あつて、陀摩尸利と名けしが、王は甚だ愛重せり。時に、靜處に於て是の念を作さく。彌樓揵駄佛は何の法を得と爲すや。今諸の弟子は皆共に放逸にして、諸の白衣の行ふ所と異ること無し。と。是の思惟を作して疑ふ時に、天神の來つて其の所に至るあり、身を隱し

現れずして、是の言を作さく。王子、彌樓揵駄佛の得る所の深法は、清淨なること決定せり。と。爾の時に、王子は天の說く所を聞き、卽是の言を作さく。彌樓揵駄佛の得る所の深法は、清淨なること決定せりとは、共の事云何。と。答へて言はく、王子、是の法には色無く受・想・行・識無く、陰・界・入無く、五欲あること無く、亦欲心も無し。彌樓揵駄佛は是の深法の淸淨なるを得ることをば決定して、衆生の爲めに說きたまへり。と。爾の時に、王子は復天に問うて言はく。我等、是の法を聞くことを得べきや、不や。と。天言はく。王子、汝能く一心に勤めて精進を行はば、之れを得ること難からざるなり。と、富樓那、爾の時に王子は卽是の念を作さく。今是の天神は我が意を開悟せり。我れ當に出家して是の深法を求むべし。とて、卽父母に詣り、頭面にて禮を作し、父母に白して言はく。我れ今彌樓揵駄佛の法中に於て、出家して道を爲めんと欲す。と。父母は報じて言はく。汝今何の用にて、我れを捨てて出家するか。今の諸の道人の、佛法中に於けるものは、白衣と異る無し。と。

爾の時に、父母は偈を以て答へて言はく。

今の諸の比丘衆は　放逸にして五欲を受け　耕種し販賣を行ふこと　白衣と異るある無し
貧窮にして苦惱多く　自活する能はざる者　是くの如き諸人等の　活を求めん故に出家するなり
汝今王家に生れ　富樂にして五欲を受け　諸の珍寶の物多きに　何の用にて出家することをば爲すか　と。

陀摩尸利王子は、偈を以て父母に答へて言はく。

我れは榮位を求めず　若し得とも當に捨離すべし　我れ今は唯　佛法の深淨なる戒を欲求するなり
天あつて我れを開悟して　我れの出家を勸進すれば　佛の說く所の深法をば　我れ冀くば當に知ることを得べし
我が天の說く所を聞きて　心中大に歡喜す　佛法は今滅せ

んと欲すれば　我れは當に助け護持すべし　と。

父母は、偈を以て陀摩尸利に答へて言はく。

深經は已に滅盡して　持ち誦する者ある無ければ　汝今當に何に從つてか　佛の深法を聞くことを得べけん　若し四衆の中に於いて　深義を誦する者あらば　汝先づ彼れに從つて受け　然る後に出家すべきなり　と。

陀摩尸利は、偈を以て父母に答へて言はく。

我れ今勤めて精進して　戒を淨め頭陀を行じ　遠く山林の中に處つて　佛の深淨なる法を求めん　と。

富樓那、陀摩尸利は此の偈を說き已るや、頭面にて禮を作し、出家を行ぜんと辭するに、父母は默然として制止すること能はず。卽、比丘に詣つて鬚髮を剃除し、袈裟を著けて戒を受け、恭敬の心を以て諸の比丘に問はく。彌樓犍駄佛は、云何に法を說いて諸の弟子に敎へたまへるか。我れ聞くことを得已らば、當に說の如くに修行すべし。と。富樓那、諸の比丘は陀摩尸利比丘に語つて言はく。我等は佛の說かれし法を聞かず。但和尙諸師の行ずる所に隨ふなり。汝も今亦應に、是くの如き法を行ずべし。と。爾の時に、陀摩尸利比丘は諸比丘に答へて言はく。汝等は必ず貧賤從り出家せるならん。是の故に、今は但衣食を貴むのみなれば、行ふ所は是くの如くに白衣と異ること無し。汝等、今應に我れと共に佛の深淨なる法を求むべし　と。

時に諸比丘は、偈を以て陀摩尸利に答へて言はく。

我等の爲す所の者は　是の事皆已に得て　衣食は極めて豐足にして　王の使役を免離せり
安隱にして甚だ快樂に　敢て輕んじ慢る者無く　白衣の時の苦惱は　今は皆復と有ること無し
是れを卽涅槃と名け　第一の快安樂なれば　是の事に過ぎたる以外は　我れ皆復と用ひず

我等には衣鉢多く　湯藥の物は甚だ多く　白衣は常に給施し　[二]檀越の家も亦多きなり
と。

富樓那、爾の時に陀摩尸利比丘は、諸比丘の此の偈を說くを聞き已るや、心則ち悲惱し、涕零ち啼泣して、餘の精舍に詣つて、復是の事を以て諸比丘に問はく。彌樓揵駄佛は云何に法を說きて、諸の弟子に敎へたまへるか。我れ聞くことを得已らば、當に說の如くに行ずべし。と。諸比丘の衆も、亦是くの如くに答へたり。爾の時陀摩尸利比丘は、卽便に此の諸比丘を捨離して、獨り山林幽遠の處に入り、精誠に一心に深法を求めんと欲したり。

先の時に、彌樓揵駄佛の諸弟子の中に、大弟子の名けて堅牢と爲せるあり。空閑の行を修めて、獨り深山に住し、少欲知足にして心に遠離を樂ひ、作す所已に辦じて、六通・三明の大阿羅漢なることも、亦今の摩訶迦葉の如くなりしが、是の堅牢比丘は、住する所の深山の石窟の壁上に、此の偈を書して言はく。

生死の斷絕せざるは　貪欲をば嗜味する故にして　怨を養うて丘塚に入り　唐しく諸の辛苦を受く　身の臭きことは死屍の如く　九孔より不淨を流すに　厠蟲の糞を樂むが如くに　愚は身を貪ること異る無し　憶想して妄に分別するは　則ち是れ五欲の本なれば　智者は分別せずして　五欲は則ち斷滅す　邪念は貪著を生じ　貪著は煩惱を生ずれば　正念にして貪著無くんば　餘の煩惱も亦盡く　と。

富樓那、堅牢比丘の、石窟の壁上に此の四偈を書せるを、陀摩尸利比丘は、深山を經歷して此の石窟の壁上の四偈を見、見已つて讀誦して其の義を思惟せるに、未だ久しからざる間に五神通を得たれば、彌樓揵駄佛の本燒かれし處に至れり。到り已るや、禮を作して圍遶すること三匝し、結跏趺坐して、誓願を發して言はく。我れ佛を見ず餘の法を聞かずんば、此より起たじ。と。富樓那、彌

【二】檀越(Dānapati)。陀那鉢底とも譯す、施主の義なり。

樓揵駄佛の説かれし經をば、八百千門と名け、釋提桓因は是の經を誦持せしが、釋提桓因は、陀摩尸利比丘の深心にて法を愛することを知り、忉利天上より來り下つて其の所に至り、爲めに八百千門の經と、又四つの多聞の本句・七種の重句・十四門の句とを説きたり。陀摩尸利比丘は、聞き已つて誦持するや、諸法の中に於て智慧の明を得、彌樓揵駄佛の説かれし所の清淨なる應空應離の諸の深妙なる經は、自然に心に在り。又、彌樓揵駄佛は、爲めに其の身及び比丘の衆、并に住せる所の處の精舍・牀榻・大會の四衆・天・龍・夜叉・揵闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等の一切の衆會を現して、悉く見るを得しめたれば、陀摩尸利比丘は、諸法の中に於て智慧の眼を得、坐せる處より起ち、漸漸に遊行し、還つて本國に至り、父母の所に到つて、爲めに清淨なる應空應離の諸の深妙なる經を說きて、佛法の衆の功德を稱揚し讚じたり。

富樓那、爾の時に、陀摩尸利比丘の父母・宮人・大臣・官屬は是の法を聞き已るや、信心し恭敬し、陀摩尸利比丘に語つて言はく。唯願はくば、大德、我等を濟度して、彌樓揵駄佛の法中に於て出家することを得しめたまへ。と。富樓那、爾の時に、八萬四千人は、俱に國王及び王の夫人に隨逐して、一時に出家せしが、出家の後は、皆陀摩尸利の語を號ぶ諸比丘衆なりき。富樓那、是く陀摩尸利比丘の、還彌樓揵駄佛の法をして續いて復熾盛ならしめ、多くの衆生をして其の中に住することを得しめたるは、是れ其の宿命たる「大慈悲の心にて法を護らん」と願へる故なり。是に於て陀摩尸利比丘は、一つの聚落より一つの聚落に至り、城より城に至り、國より國に至り、遊行して彌樓揵駄佛及び弟子の功德を稱讚し、又清淨なる應空應離の諸の深經の法を以て、諸の衆生の爲めに廣く演べて解說したれば、爾の時陀摩尸利比丘は、多く衆人に爲つて、供養し恭敬し尊重し讚歎せられて、名聞は流布したり。富樓那、陀摩尸利比丘は、是くの如くに廣く諸の衆生を益し已つて後、則ち命終せしが、其の諸の弟子たる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は、皆共に和合して、一切の香木を

以て、積んで供養することを爲して身を燒き、共に塔廟の縱廣十里なるを起し、衆の華香・末香・塗香・瓔珞・幡蓋を以て　供養し恭敬し尊重し讃歎せり。

富樓那、陀摩尸利比丘は、命終の時に臨んで、還此の閻浮提の內に生れんと願ぜしが、卽願に隨ひ生じて王家に在ることを得、名けて得念と爲し、彌樓揵馱佛の後、第三百歲の法中に於て出家せり。其の本願の〔三一〕宿命智の故を以て、諸の門句・陀羅尼句を自然に還得、陀羅尼の力を得たる故を以て、先に未だ聞かざる經をば、能く衆生の爲めに敷演して廣く說き、前身に曾て說く所の者を說かざりき。富樓那、時に諸の陀摩尸利比丘の衆中の、深智明利にして善根に厚き者は、得念の說く所の諸經を聞き、心に皆隨喜して信受し、得念比丘を恭敬し供養し守護したれども、其の中の比丘の、威德ある無き鈍根の者、頑鈍闇塞にして薄き善根の者は、得念比丘の說く所の新法を聞くや、信ぜず受けず、違逆して、過を說きて、是の言を作さく。是くの如き等の經は、我等、和上の諸師從り聞く所あらず。本より亦、陀摩尸利大師從りも聞く所あらず。と。富樓那、其の中の深智にして義に依止せる者は、語言に隨はず義に依るを以ての故に、心違逆せず。違逆せざるが故に、則ち彌樓揵馱佛の法を護り、得念比丘を恭敬して守護せり。富樓那、爾の時に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に八十那由他の人ありしが、得念比丘の說く所の經の法に隨順せり。富樓那、時に陀摩尸利の諸の弟子の衆は、別れて二部と爲り、一を陀摩尸利の諸比丘衆と名け、二を得念の諸比丘衆と名けしが、得念比丘は、我れは是れ陀摩尸利なりと說かざりき。所以は何ぞ。陀摩尸利比丘をば、人は皆、〔三二〕阿羅漢道を得て是れ菩薩に非ずと謂ひたれば、若し自ら說かば、人の則ち疑惑することは、得念比丘をば、人は皆、是れ菩薩にして阿羅漢に非ずと知りたればなり。富樓那、得念比丘は、是くの如くに廣く諸の衆生を利し已つて復命終せるに、諸の弟子の衆は、一切の香木を以て積んで供養することを爲して身を燒き、四衆は普く集つて、大師菩薩を供養せんことを欲する爲めに、共に塔廟の

〔三一〕宿命智。宿命智證通にして、又宿命通とも云ふ。第一卷「五神通の解」參照。

〔三二〕阿羅漢道を得て、云云。「阿羅漢は、謂はゆる灰身滅智して、再生する者にあらず」との思想に由る。

縦廣五里なるを起し、衆の香華・末香・塗香・瓔珞・幡蓋を以て、供養し恭敬し尊重し讃歎せり。

富樓那、得念比丘は、命終の時に臨んで、還復此の閻浮提に生れんと願ぜしが、願に隨ひ大長者の家に生るるを得て、名けて耶舍と爲せり。本願の故を以て宿命を識ることを得、彌樓揵駄佛の第四百歳の始に於て、年七歳にて出家し、道を爲めて諸の陀羅尼を得たり。陀羅尼の力の故にて、能く人の爲めに未だ聞かざる所の經を説きたり。是に於て、得念の諸の比丘衆と陀摩尸利の諸の比丘衆との、其の中の厚き善根の者は、耶舍の説く所の諸法を聞くを得るや、心大に歡喜して皆法の樂を得たり。富樓那、是の諸の比丘は、義に依止して語言に隨はざる是の故にて、耶舍比丘より聞くに、未だ聞かざる所の應空の深經の第一義に合せるを聞き、信受して逆はず、能く受けて持誦し、説く所の如くに行ぜるなり。富樓那、中には、比丘の頑鈍闇塞にして薄き善根の者あつて、耶舍比丘從り未だ聞かざる所を聞くや、未だ第一義に合せざる所にて、應空の深經をば信ぜず受けず、違逆し毀壞して、是の言を作さく。是くの如き法は、我等は和尚の諸師從り聞く所あらず。亦復、得念菩薩大師從りも聞く所あらず。と。富樓那、諸べて耶舍比丘從り法を聞きて歡喜して心に信受せる者をば、皆陀摩尸利の比丘・得念の比丘等は、憎嫉輕慢に爲つて住し止ることを聽さず、共に經法を讀誦し講説せず、反つて更に謗つて、此れは佛の法に非ず大師の教に非ずと言ひたり。富樓那、爾の時に耶舍比丘は、彌樓揵駄佛の法を廣く宣べて流布しつつ、一の聚落より一の聚落に至り、衆生の爲めに說いて饒益する所多く、八十億那由他の人を教化して、阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしめたり。耶舍比丘は、饒益する所是くの如くにして後、復命終せるに、其の諸べて耶舍比丘に隨逐せるもの七萬人ありしが、耶舍比丘の爲めに七萬の塔を起し、衆の香華・塗香・末香・瓔珞・幡蓋を以て、供養し恭敬し尊重し讃歎せり。

富樓那、耶舍比丘は、命終の時に臨んで、還復此の閻浮提に生れんと願ぜしが、命終の後に、即、

願に隨ひ復王家に生るることを得たり。生るる時に、諸天は大聲を發して言はく。今、王の生む所のものは、多く衆生を益す。と。卽、此の聲に隨ひ、字を導師と爲せしが、年十四に至るや、彌樓揵駄佛の法の第五百歲に於て、出家して道を學びたり。是の導師比丘は、廣く經書を誦して多聞に深く入り、文辭を淸く辯じて善巧に法を說きたり。富樓那、是の導師比丘は、一の聚落より一の聚落に至り、城より城に至り、國より國に至り、彌樓揵駄佛の法を流布して饒益する所多かりしが、爾の時に、陀摩尸利・得念・耶舍の諸比丘の衆は、皆來り合集して導師に造詣つて、共に毀破せんと欲したり。爾の時に導師比丘は、諸比丘の來ることを知つて、是の言を作さく。汝、諸比丘は、何事を問難するか。何事を以て問ひ、云何にして問ふか。と。諸比丘等は、是の語を聞き已るや、憂愁して樂まず、默して答ふること能はずして、導師比丘を障礙すること能はざりき。富樓那、此の菩薩の壽命の世に在るに隨ひ、佛法は熾盛なりしが、其の終後に隨ひ、佛法は則ち滅したり。是の導師比丘は、末後の惡世に法の滅せんと欲する時に、一の聚落より一の聚落に至り、城より城に至り、國より國に至り、多くの衆生の爲めに淸淨なる應空の深經を敷き說き、八百萬人を化して阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめたるが、是の人命終するや、皆天上に生れたり。富樓那、是の導師比丘の益する所是くの如くにして、今夜命終するや明日の夜に法は滅したり。富樓那、彌樓揵駄佛の法は滅せる故に、諸の深き淸淨なる應空の經法も、皆悉く滅盡せり。富樓那、是くの如くに菩薩摩訶薩は、是の深經を以て佛法を守護して、自ら善根福德を具足し能ふなり。

富樓那、是の導師菩薩は、命終の後に、卽彼の土の上方なる第十の世界に生じたり。時に、彼の佛を善眼 二四 多陀阿伽陀・阿羅訶・三藐三佛陀と號せしが、卽復出家せり。宿世の善根たる福德の因緣にて、深慧明利に、辯才盡くる無く、揵利礙無かりき。是に導師比丘は、善眼佛の法中に於て、八萬四千歲、諸の善法を修せしが、命終して更に生じて、第二佛の日增肩と號せるに値ひ、是の佛の所

【註】二四 多陀阿伽陀(Tathāgata)・阿羅訶(Arhan)・三藐三佛陀(Samyak-sambuddha)。如來(如實の道に乘じ來たつて正覺を成ぜる者)應供(天と人との供養に應ずべき者)正遍知(正しく遍く一切の法を知れる者)の原語にして、謂はゆる佛の十號の初めの三號なり。

に於て出家し、善根を修集して阿耨多羅三藐三菩提を求め、命終の後に、還此の土に生れ、復後の佛の不空行多陀阿伽陀・阿羅訶・三藐三佛陀に値ひ、佛の法中に於て復出家を行ひ、七萬歳の中善根を勤修して、阿耨多羅三藐三菩提を求めたり。時に、首羅と名けしが、不空行佛は、其れに記を授けて言はく。我れ滅せん後に、是の首羅比丘は當に佛と作ることを得て、無礙眼多陀阿伽陀・阿羅訶・三藐三佛陀と號すべし。となり。富樓那、菩薩は是の第三の法を成就せば、能く一切の功德を具足することを得るなり。

爾の時に、世尊は此の義を明了にせんと欲して、偈を說いて言はく。

菩薩は甚深　清淨なる決定の法を聞き、身をば自ら能く安住し　亦復餘人にも敎ふるなり
世間は底を得ざるも　菩薩は而ち沒せずして　淨戒の中に住して　廣く諸の衆生を利するなり
本事及び譬喩にて　衆に示すに佛道を以てするは　諸佛の說く所は　此れは是れ決定の法なればなり　菩薩は能く利を行ひ　亦能く衆生を利せんとて　諸佛の法を守護して　衆に敎ふるに菩提を以てするなり　衆生の如法の事をば　菩薩は皆爲作して　衆に敎ふるに佛道を以てして　是に則ち菩提に近くるなり　諸佛の道を護持し　亦廣く衆生を利すれば　諸天龍鬼神　天人に敬養せらるるなり　是の故に清淨なる　諸の空深妙の法を聞かば　一心に應に思求して　是に則ち智をば增長すべきなり　と。

復次に、富樓那、菩薩摩訶薩は諸行を具足し、諸行の具する故にて、則ち能く善根の福德を具足するなり。何等を行と爲すか。富樓那、菩薩は善知識に親近して、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の方便を行ずるなり。何等を菩薩の善知識と爲すか。菩薩の從つて是くの如き經及び敎化の方便を聞く所の、諸佛・阿羅漢及び深心あつて佛道を求むる菩薩をば、皆菩薩の善知識と名くるなり。菩薩は此の第四の法を成就せば、則ち能く一切の功德を具足するなり。

爾の時に、世尊は偈を以て頌して曰はく。

我れ諸の菩薩の　當應に行ずべき所の法を說かん　施し已つて心歡喜して　諸の悔恨ある無きなり　云何なるを歡喜と爲す　謂はく樂悉く身に遍くして　常に此の喜心を以て　菩薩の道を行ずるなり　菩薩は布施する所をば　菩提に迴向して　諸の衆生を饒益し　自利も量ある無し　若し乞ふ者あるを見ば　心に佛の想を生じて　念ずらく是の人今來つて　我れに佛道を施し遺る　我れ是の人に因つて　淨き佛國土を得ん　是の人我れに佛を示し　我れに佛道を敎化す　我れ今此の人に値うて　快く大吉利を得　歡樂身に遍滿して　更に餘の事を樂まずと　若し人の來り詣るあらば　遙に見て問ひ訊ぬるなり　仁者何物をか須つ　我れ當に盡く相ひ與ふべしと　若し須つ所無しと言はば　菩薩も亦歡喜すらく　我れを敎化せんと欲する爲めの　故に須つ所無しと言ふ、此の賢は樂む所の　少欲知足の法を以て　今來つて我れを開悟して　菩提の緣を得しむるなり　我れ今此の人に因つて　復敎ふるに法を以てするものを得たれば　汝の須つ所無しと言へるに　是に語つて善哉と爲すなり　若し此の物を須つ是れを以て我れに與ふべしと言はば　菩薩は若し有たば　歡喜して汝取れと言ふなり　若く布施を行じ已つて　後に於て悔ゆる所無く　佛道を念ずる故を以て　心に常に歡喜を得るなり

布施し已つて迴向することは　衆生は皆分つあつて　普く乏しき所無からしめ　盡く知足を得しめんことを　若し菩薩の道を行ずる　衆生にして我が名を聞かば　自然に止足することを知つて　慳貪の心を生ぜざらんことを　今我が國の衆生の　道に順じて皆足ることを知り　諸の五欲の著を捨てて　皆出家を行ずることを樂はんことを　是くの如き無量の行は施を以て迴向するなれば　願はくば常に布施を行ずることを　衆生も亦我れに效はんことをとたり　菩薩の布施を行じて　慈を以て衆生を覆ふことは　一切の諸世間に　是くの如き樂

ある無きなり　大富の長者の　財多く珍寶に饒なるに　唯正に一子あつて　年を積んて久しく遠く行けるが　長者は子の還るを聞き　歡樂身に遍滿すること　久しく別れて今歸れるなれば　便ち若く更生せる如くなるが如きと　菩薩の乞人を見て　其の心の大に歡喜するとは長者の歡喜は　十六を分つて一にも及ばざるなり　若く施行を得已つて　心則ち大に歡喜するは　慈心の生ずる所の　樂にして　此の樂には比あること無きなり　王の罪人を治せんと勅使もて支節を解くに　殺す者將に殺さんとする處にて　刀を擧げて當に下さんとするに　垂たるに　王は恕して榮位を賜ふが如くんば　是の人は大に歡喜せんも　猶菩薩の　貧に施して得る歡喜には及ばざるなり　菩薩は道を行ずる時には　[二五]福田を求めずして　乞ふものあれば則便に與ふる　故にて大歡樂を得るなり　菩薩は若し佛　羅漢辟支佛に値はば　敬心にて遇ひ難きを知る　故に往いて施を供養するなり　菩薩は威德の　明利なるを有てども心は　功德を樂み道を求むることに調順して　佛及び衆を供養するなれば　深き恭敬を以ては　諸天神に奉事せず　唯諸佛及び諸佛の弟子を除く　若し辟支佛の　自然に涅槃を得る有るにも　亦行じて供養せば是の諸の功德あるなり　菩薩は亦能く　福田の善不善と　世間の諸の智者とを知れば　惡の外道を敬はざるなり　戒品を持つことに安住し　慈心もて衆生を覆ひ　精進比ある無く　忍と智と多聞と廣く　是の諸の功德を行ぜば　世に於て高尊と爲り　能く佛の菩提を證して　無上の法輪を轉ずるなり　菩薩にして能く　是くの如き上の四法を修行せば一切の諸善根は　悉く皆前に現在し　無量億數の劫に　修むる所の諸功德は　悉く皆此の　行ずる所の菩薩道に攝入するなり　是の故に諸の菩薩は　應に常に慈心を修め　出家して山林に處り　樂んで空閑處に在つて　常に諸の清淨　甚深なる決定の法を求め　菩薩の行を具足して　此れを以て自ら增長すべきなり　と。

【二五】福田（Punyakṣetra）。總ての福德を生ずる根源なればかく謂ふ。尙、第一卷「福田」の解、參照。

神通力品　第五

爾の時に、世尊は神通力を以て、身の一一の毛孔より俱に百千萬億の光明を放ち、又一一の毛孔より須彌山の等の如き大猛なる火焰を出し、又一一の毛孔より恒河沙の等の諸佛の說法を出せるに、時の會の大衆は、普く是くの如き大神通力を見たり。爾の時、世尊は神通を現じ已るや、還復することと故の如くにして、富樓那に語つて言はく。汝は如來の諸の毛孔より出せる是の神力を見たりや、不や。と。已に見たてまつる、世尊。と。富樓那、如來には常に是くの如き神力あつて、休廢あること無し。今諸の弟子は、但如來の此に在つて說法することを知れども、而も我れは實に十方の恒河沙の等の世界に於て、常に佛事を作して休息ある無く、亦十方の世界に於て、是くの如くに說法するなり。富樓那、若し人に實に語らば、何者は是れ無等等・無比人・[二六]兩足の福田なるかは、極深にして測り難く、無邊の行者の、足一步を擧ぐることをも、一切の衆生は知るを得る能はず。何の心・何の行にて、足を擧げ足を下すかを思量すること能はざるなり。當に說くべし、我れは是に・富樓那、一切衆生の、如來は何の思・何の心・何の行を以て、足を擧げ足を下すことを爲すかを思量し能はざることを。と。

爾の時に、世尊は此の義を明了にせんと欲して、偈を說いて言はく。

世尊は何の思　何の行を以て足を擧げ下して　動不動なるか衆生は　常に此の事を知らざるは
神通力は無量に　行ずる處も亦無量に　功德も無量なるが故なり　第一極高の尊の　大智慧は無量にして　能く盡知する者無きこと　假に一切の人の　智慧神通力をして　皆舍利弗及與び目揵連の如くならしむとも　亦我が　擧足下足の事を知る能はざるなり　正に一切の人をして　皆辟支佛と作らしむとも　我が一步をも知らざれば　況んや餘の深き佛法をや
假に無量の日月をば　合して一の日輪と爲すとも　如來の　一毛孔の光明にも及ぶこと能はず

【二六】兩足。普通は、人・天の二つを指す者なれど、此所は、福と慧との兩足と見るべきか。

假に七萬億　那由他の世界の　日輪をして縦廣等しく　遍く無量の土を照さしめ　是くの如き諸の大日の　十方の恒沙の如きを　合して以て一の日と爲し　一の光は須彌の如くなるを　是くの如き諸の大日にて　常に十方の界を照すとも　佛の光明に比するに　現れざること焦げたる樹の如きなり　是の諸の大日の光は　樹葉をも徹す能はずして　諸の山河石壁は皆悉く能く障礙すれど　如來の光の照す所は　一切の須彌山　鐵圍金剛山をも　徹過して障ある無し　光明の神通力　威德量ある無きをば　誰れか見て發心せざらん　唯不信のものを除くのみ。

〔二七〕衆生は是くの如き　光明の大神力を見るや　多くは無上心を發すらく　我等も亦當に得べきことをと　時に佛は卽ち微笑せるに　阿難は卽問訊すらく　世尊何の故にて笑みたまふか　無礙智願はくば答へたまへと　時に佛は阿難に答ふらく　衆生は今我が　現す所の大神力を見て　發心して佛と作らんことを願じたり　衆中の三萬人は　是の法を護持して　我等佛後に於て　是くの如き經を讀誦せんと願じたり　是の人は我が滅後に　是の經法を　中時及び後時に聞くことを得　聞き已つて說の如くに行ぜん　道心を發す者は難く　深く佛法を樂ふは難く　後世に能く是等の經を持誦することは復難きに　千萬億數の劫にも　諸佛の出づることは甚だ難く　後の末世の中に於て　是の經を說くことは復難きに　と。

爾の時に、佛は阿難に告ぐらく。我れ是等の如き經を以て、倍汝に囑累す。所以は何ぞ。閻浮提の內に、是くの如き菩薩藏の經あるに隨つて、則ち佛法あれど、阿難、是等の如き深經の滅する故にて、說の如き行法も亦滅し、說の如き行法の滅する故にて、佛法は則ち滅すればなり。阿難、汝今當に第一の供養を以て、具に我れを供養すべし。云何なるを、弟子は第一の供養を以て、具に我れを供養すと爲すか。汝、心に謂ふ勿かれ。名華・好香・末香・塗香・幡蓋・瓔珞・衣服・妓樂にて、如

【二七】衆生は等。以下は、散文體たる本文に屬すべき意義なるに、如何にして偈頌として譯せられたるか、不明なり。

來を讃歎するを上供養と爲すと。阿難、是くの如きをば第一の供養と名けず。若し人、是等の如き深經を聞くことを得て、受持し讀誦して說の如くに行せば、是れを第一の供養を以て、具に佛を供養し恭敬し尊重し讃歎すと名くるなり。何を以ての故ぞ。諸佛は皆共に法を供養し恭敬し尊重して、世間の諸の供養の具を貴ばざればなり。是の故に、阿難、今此の經を以て、鄭重殷勤に汝に囑累す。何を以ての故ぞ。阿難、我れ是くの如き等の經を學んで、今阿耨多羅三藐三菩提を得て無上の法輪を轉じ、過去の諸佛も、本菩薩の道を行ぜる時に、亦是くの如き等の經を學び、阿耨多羅三藐三菩提を得て無上の法輪を轉じ、未來の諸佛も、亦是くの如き等の經を學び、當に阿耨多羅三藐三菩提を得て無上の法輪を轉ずべく、現在の十方の世界の諸佛も、本菩薩の道を行ぜる時に、亦是くの如き等の經を學んで、阿耨多羅三藐三菩提を得て、今法輪を轉ずればなり。是の故に、阿難、是の菩薩藏の經を、名けて轉法輪經と爲し、當に之れを奉持すべきなり。

我れ波羅奈國の[二八]梨師山の鹿園の中に於て、聲聞の弟子の與めに法輪を轉ぜしが、阿難、我れ今此の[二九]竹園の中に於て、此の菩薩藏の經の不退轉の輪を轉じて、一切衆生の疑を斷ずるなり。阿難、過去の諸佛も、亦皆此の[三〇]虛空の地分に於て是の菩薩藏の經を說き、未來の諸佛も、亦皆此の虛空の地分に於て此の菩薩藏の經を說き、我れも今阿耨多羅三藐三菩提を得て、亦此の虛空の地分に於て此の菩薩藏の經を說くなり。是の故に當に知るべし。此の地は是れ佛の大塔にして、天・人の世間に供養せらるる處なることを。阿難、此の地には獨り不共の功德、謂はゆる過去の諸佛の此に於て諸の深經を說きたるを有てり。阿難、有らゆる貪欲・瞋恚・愚癡の衆生の、此の竹園に入るや、貪欲・瞋恚・愚癡を發さざるなり。阿難、如來は諸の餘の精舍に住せりと雖も、而も皆是くの如き功德ある無きなり。何を以ての故ぞ。阿難、今此の迦蘭陀竹林に、畜生も入らば婬欲を發さず、衆鳥も入らば非時に鳴かざるなり。[三一]摩竭[三二]洴沙、[三三]澆頂大王の、昔初めて位に登るや、諸の婇女と此の園中に

【二八】梨師山(Ṛṣipatana)。即ち仙人墮處と譯せらるるものなるが、原本に Ṛṣiparvata とありたるが故に梨師(仙人)山となしたるものか。

【二九】竹園(Veṇuvana)。迦蘭陀竹林なり。第一卷、同名の解、參照。

【三〇】虛空の地分。此の土地と言ふが如し。

【三一】摩竭。摩揭陀國の略なり。第二卷、同名の解、參照。

【三二】洴沙(Bimbisāra)。音通、頻婆娑羅と書す。佛在世の時の摩伽陀國王にして、深く佛に歸依し、後、逆子阿闍世に幽閉せられしも、阿那含果を得たり。

【三三】澆頂。灌頂と同じ。第一卷、同名の解、參照。

入り、共に相ひ娯樂せしが、入るを以に、自ら心に婬欲娯樂の戲事無きを覺え、諸の婇女の樂も、亦皆自ら、心に欲ある無く戲樂を樂まざるを覺えたり。時に王は、歡喜して每に是の念を作さく。願はくば世に佛の我が國に出づるあつて、我れ當に見ゆることを得べく、見え已つて心に信じ、信じ已つて供養するに、當に是の園を以て佛に奉上すべく、佛中に於て住したまはば、我れ當に法を聞くべからんことを。何を以ての故ぞ。供養せらる可き者、應に此の園に住すべくして、五欲の人の應に住するを得べき所に非ざればなり。と。阿難、洴沙王い、此の竹園に入つて是の善心を生ぜることは、皆過去の諸佛の、此の園中に住して、此の菩薩藏の經を說けるを以てなり。是の故に、此の園に有つ所の功德は、餘と共ならずして、一切の世間の天・人・阿修羅は、皆應に禮敬すべきなり。阿難、是の園には蚖・蛇・蜈蚣・蚊・虻の毒螫ある無く、若し其の中に住すとも復の毒心無きは、亦是の竹園の不共の功德なり。我れ若し、百歲此の園の有つ所の功德を稱說すとも、猶盡すこと能はざるなり。何を以ての故ぞ。阿難、今此の竹園精舍には、無量なる功德を成就せるにて、餘の處は爾らざればなり。と。阿難、佛に白して言はく。我れ本、竹園に乃ち是くの如き功德を有つことを知らざりき。世尊、我れ本、佛の侍者爲ることを欲せざりしを、我れ今是くの如き過罪を懺謝したてまつる。と。佛、阿難に告ぐらく。汝、初法に於て法眼淨を得たる爾の時に、已に是の罪を除滅することを爲したるなり。」と。』

卷の第七十九

富樓那會　第十七の三

大悲品　第六

爾の時に、大目揵連は是の念を作さく。希有なり、世尊。世尊は是くの如き大悲を成就して、善く諸菩薩の事を能く解說したまふことや。所以は何ぞ。菩薩の具足して佛法の無生滅たるを修集することを衆生に示悟したまへばなりと。爾の時に、佛は目連の念ずる所を知つて、之れに告げて曰はく。是くの如し、是くの如し。目連、諸佛は大悲の心を成就せり。若し我が弟子にして、此の悲の具足の義を說くを聞かば、心則ち迷悶して、復た樂む所無からん。目連、且く如來の大悲を置け。若し我れ具に、菩薩たりし時の有らゆる大悲を說かば、汝も亦迷悶して、復た樂む所無ければなり。と。爾の時に、目連は佛に白して言はく。善い哉、世尊。願はくば、本菩薩道を行じたまひし時の大悲の少分を說きたまはんことを。と。佛、目連に告ぐらく。汝、今諦に聽き、善く之れを念持せよ。當に汝が爲めに、本菩薩の道を行ぜし時の大悲の少分を說くべく、當に譬喩を以て其の義を解說すべし。本菩薩の道を行ぜし時に、行ぜる所の大悲は說くとも盡すべからず。而して是の大悲は四事に依れり。何等を四と爲すか。是の菩薩の大悲は、菩薩は住する所に隨ひ、悲にて能く佛の法を修むるを、名けて大悲と爲すなり。

目連、我れ本衆生に於て、是くの如き大悲を有ち、是くの如き大願を有ちたり。有らゆる衆生の、阿鼻大地獄に於て諸の苦惱を受くるもの、[一]黑繩大地獄・[二]僧伽陀地獄・[三]活地獄・[四]叫喚地獄・[五]大叫喚地獄・[六]炙地獄・[七]大炙地獄なるものを、我れ常に此の衆生に代つて、諸の大地獄の中の苦を受けん。乃至、罪せられ畢つて諸の苦を受くる時にも、心に憂悔すること無からん。と。目連、若し是の因

【一】黑繩(Kālasūtra)大地獄。先づ黑繩を以て身體を劃縛して、後に斬鋸する義なりと云ふ。

【二】僧伽陀(Saṅghāta)地獄、衆合地獄と譯す。衆多の苦具相ひ合して、來たり責むる義なりと云ふ。

【三】活(Saṃjīva)地獄。委しくば等活と云ふ。獄責のために肢體、碎裂失神するも、涼風に由つて忽ち元と等しく蘇活し、復、獄苦を受くる義なりと云ふ。

【四】叫喚(Raurava)地獄。又、號叫地獄と云ふ。衆苦に迫られて、叫哭の聲、悲慘なる義なりと云ふ。

【五】大叫喚(Mahāraurava)地獄。又、大號叫地獄と云ふ。劇苦に責められて、大號叫する義なりと云ふ。

【六】炙(Tāpana)地獄。又、炎熱地獄と云ふ。火炎、全身を焦炙して、苦熱堪へ難き義なりと云ふ。

【七】大炙(Mahātāpana)地獄。又、大炎熱地獄と云ふ。熱中の最極を受くる義なりと云ふ。

以上に前の阿鼻大地獄を加へて、八大地獄(又、八寒地獄に對して八熱地獄)と云ふ。阿鼻地獄は第二卷、同名の解、參照。

緣を有つて、衆生を度することを得べくんば、我れ能く盡く代つて、諸の衆生をして大地獄を出でしめて、我れ代つて苦を受け、一たび地獄に入るや諸の衆生の作る所の罪業を盡し、我れ爾の時に於て心に憂悔無からん。と。目連、我れ是くの如き大願の精進を發して、有智謂はゆる佛及び弟子に諮問すらく。是くの如き道理の因緣を有つて、代つて苦惱を受け、諸の衆生をして地獄を出でしむべきや、不や。と。目連、智者は聞き已るや、但我が爲めに、多聞して深く道心を發し、布施・持戒・忍辱・精進することを讃説し、善知識に親近することを讃説せり。目連、我れ是れを聞き已つて、大に精進を發して、法を求めん爲めの故に深く欲心を生じ、諸佛の大法を成就するを得んことを求めて、勤行精進して諸の波羅蜜を具し、深く忍辱を行じたり。目連、我れ本、云何に深く忍辱を行ぜるか。本菩薩たりし時に、是くの如き心を發したり。十方の有らゆる衆生の。若しは有色、若しは無色、若しは有想、若しは無想、若しは非有想、若しは非無想のもの、假に是の諸の衆生をして、盡く人身を得て、我が所に來り詣つて、是の言――仁者は阿耨多羅三藐三菩提の心を發せども、我等の多く乏短とする所の五欲の樂具・資生の物をば、汝若し悉く我れに與ふること能はずば、阿耨多羅三藐三菩提を得じ――を作し、若しくば是の衆生の、時に皆惡口し、苦切に罵詈し、妄に過惡を説き、意に稱はざる故にて、刀杖・瓦石を以て害を我が身に加へしむとも、我れ爾の時に於て、應に恚を生ずべからず、應に悔い退くべからずして、我れ應に是くの如くに其の心を調伏すべし。是の諸の衆生は、愚癡にして知らずして愚癡の業を起せり。若し我れ此の愚癡の衆生に於て瞋恨を起さば、此れと何ぞ異らん。此れは道に入らざれど、我れは善道に入りたれば、我れは今此の衆生に於て、諸の苦を忍受して、瞋業の心を起さざること、當に地の等しく好醜を受くるが如くなるべし。と。目連、我れは本深く是くの如き忍辱を行じたり。

復次に、目連、我れ常に長夜に、一切の衆生に於ては、一子を視るが如くにして、大長者の、饒財

巨富にて諸の珍寶・奴婢多きが、人に百種の戒を行はしめて一子を求め得、深心に愛念して、情に厭足無きが如くなりき。目連、是の長者は、子に於て常に好事を求め、常に好事を與へ、常に利益を與へて、衰惱を與へざる、是くの如くに、目連、我れは常に長夜に、諸の衆生に於て、視ること一子の如くにして、我れは常に長夜に、諸の衆生の爲めに、諸の好事を求めて以て饒益し、衰惱を與へざりき。目連、我れ長夜に於て、道を失へる衆生、邪道の衆生に、示すに正道を以てして、正道に住せしめたり。目連、是の因緣を以て當に知るべし、如來は長夜に、諸の衆生に於ては、深く心に愛念して、視ること一子の如くなることを。目連、過去の世に於て、賈客の衆あつて、夜行きて道を失ひ邪徑に入りしが、夜黑暗なる故に、趣く所を知らずして、皆是の言を作さく。我等道を失して、救無く歸する無く依止する所無し。誰れか諸の衆生の、若しは天若しは龍若しは夜叉神若しは人非人の、我等を示導して、正道を得しむるものぞ。誰れか能く、我等を憐愍し饒益して、此の夜闇の邪隘の道中に於て、我れに光明を與ふるものぞ。と。目連、爾の時に空なる林澤の中に、外道の仙人あつて、草庵の中に住せしが、夜闇の中に於て、諸の賈客の悲喚せる音聲を聞きて、是の言を作さく。今諸の賈客は、夜闇に此の空林の中に於て道を失せり。若し我れ救はずば、則ち非理と爲らん。是れ諸の賈客は、或は虎・狼・師子・大象・野牛の諸惡獸等の惱害に爲つて、命を奪はるればなり。と。目連、仙人は卽時に大音聲を以て、諸の賈客に告ぐらく。汝等畏るる勿れ。我れ今相ひ救ふに、當に光明を作つて汝に正道を示すべし。と。爾の時に、仙人は安慰もて諸の賈客に告げ已り、卽、疊衣を以て兩臂を纏裹し、油を以て遍く灌ぎ、火を以て之れを然し、諸の賈客に光明を與へて道を示せり。目連、時に諸の賈客は、皆是の念を作さく。今此の仙人は甚だ希有たり。我等の爲めの故に身命を惜まず。と。目連、時に是の仙人は、臂の光明を以て賈客の道を照し示し已り、諸の衆生に於て悲心轉增して、是の念を作さく。我れ阿耨多羅三藐三菩提を得ん時に、邪道の衆生

に、爲めに法明と作り、示すに正道を以てせん。と。目連、我れ爾の時に於て然せりと雖も、兩臂は身・心異らざりき。何を以ての故ぞ。目連、深心の菩薩の、他の利を求むるに於て身命を貪らず、淨心を以て布施せる因緣にて、臂は還平復して、瘡瘢あること無かりしなり。諸の賈客等は、卽正しき道を得たるが、天の明旦に至り、仙人の兩臂に瘡瘢ある無きを見て、希有の心を生ずらく。今是の仙人は、大神力を有つて、能く竟夜に於て其の兩臂を然し、我等を照して正しき道を得しむることを爲せしに、然せる其の手臂の都べて燒然せざるは、必ず大行を成じて、必ず大德を有てるなり。と。目連、時に諸の賈客は、仙人に語つて言はく。善い哉仙人、能く第一の難行・苦行を爲せり。今是の行を以て、何事を願ぜんと欲するか。と。仙人答へて言はく。諸の賈客、我れ此の事を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得已つて當に汝等を度し、生死の苦の邪道の衆生に於て、正道を說くことを爲すべきことを願ず。と。時に諸の賈客は、心大に歡喜して皆是の言を作さく。我等、當に何事を以て此の仙人に報ゆべきか。と。仙人の言はく。汝等、當に共に專ら善法を行ひ、愼んで放逸する勿るべし。と。諸の賈客は言はく。敬んで誨ふる所に從はん。と。諸の賈客等は、恭敬し歡喜し、是に於て別れ去れり。目連、汝爾の時の外道の仙人の、諸の賈客の爲めに臂を然して道を照せるものを、豈異人ならんかと、是の念を作す勿れ。卽我が身是れにして、諸の賈客は、今の千二百五十の比丘是れなり。目連、如來は長夜に、怖畏せる衆生には、施すに無畏を以てし、邪道の衆生には示すに正道を以てし、無眼の衆生には淨眼を得しめ、病重き衆生には能く治して差えしむれば、是の因緣を以て當に知るべし、如來は、長夜に諸の衆生に於て、深く大悲を有つことを。

復次に、目連、過去の久遠に、此の閻浮提の中に於て　大病劫の至れるに、衆生は普く大病に爲つて惱されたり。爾の時に、閻浮提の王を摩醯斯那と名け、八萬四千の大城を有ち、王は此の中に於て威勢自在なりき。時に、王の最大の夫人は懷姙せしが、若し身手を以て諸の衆生に觸れば、病

【八】　竟夜。終夜と同じ。

【九】　大病劫（Rogāntara-kalpa)。世界の破壞する謂はゆる壞劫の中の、大病の流行する時期を謂ふ。

は皆除き差えたり。月滿ちて男を產せるに、生じ已るや卽言はく。我れ能く諸の病人を治せんと。又亦生れし時に、閻浮提の內の諸天鬼神は、皆共に唱へて言はく。今王の生めるものは、便ち是れ人藥なりと。是の音聲の普く流れ聞えたる故を以て、字して人藥と爲せるに、時の人は、皆病人を將ゐて此の王子に示したり。諸の病人の至るや、王子は手もて觸れ、若しくは身を以て觸るれば、卽皆差ゆることを得て安隱快樂なり。是くの如くに閻浮提の內に展轉して、皆病人を將ゐ、以て王子に示すに、王子の手觸るるや、病は皆除差して安隱快樂なりき。目連、人藥王子は、千歲の中に於て、是くの如くに病を治せる後に、則ち命終せしが、命終の後に、諸の病人は、來つて其の已に死せるを聞き、憂愁涕泣して、誰れか復我が病痛の苦惱を度せんとて、諸の病人は言はく。人藥王子は何に於て身を燒きたるか。と在る所を問ひ知り、其の燒ける處に趣き、骨を出して末に擣き以て其の身に塗りしに、卽皆差ゆることを得たれば、是の唱言を作さく。人藥王子は、今に於て猶能く諸の病人を治す。と。目連、是くの如き因緣にて諸の病人を治して、骨漸く消盡したれば、骨盡きたる後には、身を然せる處に至り、地の灰炭を取つて各其の身に塗るに、病は皆差ゆるを得たり。目連、是くの如くに人藥王子は、大病劫に於て、是の方便を以て諸の病人を治したり。目連、汝爾の時の人藥王子をば、豈異人なりと謂はんか。是の念を作す勿れ。卽我が身是れなり。我れ多病苦惱の衆生の、救無く依る無きに於て、其の病を療治せしが、我れ今阿耨多羅三藐三菩提を得たるも、亦大智慧の藥を以て諸の衆生を治して、畢竟じて苦を盡すなり。目連、我れ衆生の爲めに身を受けて、饒益すべきに隨ひ卽便に饒益することは、目連、是の因緣を以て、當に故に衆生の爲めに身を受けて、饒益を作すことを知るべきなり。

復次に、目連、過去の久遠に、我れ曾て獨り行ぜる時に、惡獸あり、來つて我が命を奪つて、我が肉を噉はんと欲したり。我れ死に臨む時に、心に是の願を發したり。我れ今死せる後には、當に

此の空林澤の中に生じて大なる畜身と作り、若し諸の惡獸の我が命を奪はん者に、悉く皆充足飽滿することを得しむべし。所以は何ぞ。是の諸の惡獸は常に小蟲を害し、以て其の肉を噉ひ、多く殺罪を起して飽足せざればなり。と。我れ時に發願して、當に此に生じて大畜の身と作つて、諸の肉を噉ひ血を飲む衆生をして、皆飽足を得しむべしとて、即時に死し已るや、中に於て化生して、大なる畜身と作り、諸の惡獸をして、血を飲み肉を噉ひて皆充足を得しめ、是くの如くに百千萬億那由他の世に展轉して、故に身を受けて衆生を饒益することを爲せること乃ち一劫に至れり。目連、若し我れ自ら、本、道を行ぜる時に、饑渴の衆生に身の血肉を以て施して、飽滿せしめたることを說かんに、若しは一劫を以て、若しは一劫を減じて說くとも盡すべからず。目連、我れ本是くの如くに、諸の苦惱の衆生に於て、深く悲心を生じたるなり。

復次に、目連、過去の久遠に、我れ本の身を念ずるに、諸の苦惱の衆生を見るや、即是の念を作さく。我れ今應に捨てて救はざるべからず。と。即其の所に至つて、之れに問うて言はく。汝、何の苦ある。何を須ち欲する所ぞ。と。答へて言はく。仁者、我等今は甚だ大に饑渴す。と。我れ是れを聞き已るや、即之れに語つて言はく。汝等、今何等の飲食を須つか。と。答へて言はく。我等は唯血を飲み肉を噉はんことを欲す。若し能く身の血肉を以て我れに與へば、我れは則ち快樂して復の病痛無けん。と。我れ即之れを許して、便ち自ら肉を割き血を出して、諸の衆生に與へたり。目連、我れ爾の時に於て、心に悔惜無く、愁へず沒まずして、但是の念を作せり。我れ今肉を割き、亦爾所の生死の苦の分をも滅したり。我れ常に長夜に、樂んで是くの如くに施さん。是くの如くに施し已つて、深く歡樂を得ん。と。是の因緣を以て、當に如來は諸の衆生に於て、深く大悲を有つことを知るべきなり。

目連、我れ過去の時を念ずるに、世に王の名けて大力と爲せるあつて、大德力を有ち、厚く善根

を種ゑたりき。時に大力王は、而ち是の念を作さく。我れ今何ぞ大なる施會を設けて、衆生を充滿せざらんや。と。是の念を作し已つて、大施會を設けて、求め欲する所を恣にして、食を須つには食を與へ、飲を須つには飲を與へ、衣服・臥具・金銀・寶物・車乘・錢財を須つあり、硨磲・玻瓈・瑠璃・珊瑚・琥珀等の寶を須つあるには、悉く能く之れを與へ、華香・瓔珞・塗香・末香・繒綵・幢蓋・男女・大小の奴婢・人使・象馬・牛羊・田地・產業にも、皆悉く之れを與へたり。目連、是の大力王は、是くの如くに大に施すや、爾の時に帝釋は、而ち是の念を作さく。我れ今、何ぞ此の國王の與めに障礙の事を作し、其れをして果さざらしめざらんや。と、時に卽自ら化して婆羅門と作つて、王の所に往き詣つて、王に問うて言はく。今大會の中に、何を布施せらるるか。と。答へて言はく。婆羅門、我が有つ所の物をば、悉く以て布施して愛惜する所無きなり。と。婆羅門の言はく。汝の志願する所にて、我れ今乞ふ所をば能く與へらるるや、不や。と。大力王は言はく。我れ旣に、有つ所をば盡く與へんと發言せり。と。婆羅門の言はく。王是くの如くんば、我れ今、王の身分を須つ。と。王は便ち念じて言はく。是の婆羅門の、財物を須たずして今來れるは、直に我が大施を破らんと欲するなれど、我れ若し身分を以て與へずんば、我れ則ち自ら大會施の事を破るたり。と。是の念を作し已つて、婆羅門に語つて言はく。汝に身分を與へん。截り取つて持ち去れ。と。婆羅門の言はく。大王、今は是くの如き語を作せるを、將に悔ゆること無きか。大力王は言はく。我れ心に悔いず。但今は多く乞人の四方に來集せるあるを以て、我れ皆應に悉く滿足することを得しむべきなり。と。婆羅門の言はく。我れを今一人すら尙充足せざるに、何ぞ餘人を論ぜん。と。目連、時に大力王は卽利刀を以て自ら其の臂を割き、婆羅門に與へて、汝是の一つの臂を取るべし。と。目連、其の大力王の自ら臂を割ける時に、心に變異無く、悔恨ある無く、是くの如くに一心にて布施せる故に、能く一切を捨てたる故にて、臂は還平復せり。時に大力王は、刀を以て身分を割きて

婆羅門に與ふるに、與へ已るや還生じたるが、目連、爾の時に、帝釋は是の因緣を以て、天の福則ち盡きて、心熱し苦惱して大に喚び、現身にて卽阿鼻大地獄の中に墮せり。目連、汝爾の時の大力國王の、身を以て施せる者は、豈異人なりと謂はんか。是の念を作す勿れ。卽我が身是れなり。爾の時の帝釋の、我が大施會を障礙せんと欲せる者は、豈異人ならんか。と。是の念を作す勿れ。卽、〔一〇〕調達是れなり。目連、是の時調達癡人は、嫉恚の心を生じて、我が施を障へんと欲して、壞ること能はずして大地獄に墮せるに、我れの今阿耨多羅三藐三菩提を得たるは、大法施を設けたればなり。調達癡人は、猶恚嫉を生じて利養を貪る故に、人衆と謀り合して、共に我れを殺さんと欲し、我れ時に經行して耆闍崛山の下に在りしに、自ら山上に上り、機關にて石を發して自ら善根を破り、我れに於て惡を生じて自ら利養を失ひ、豪尊の勢力の身にて阿鼻大地獄の中に墮したるなり。目連、我れ調達癡人に於て、身・口・意の惡を有つ無きに、而も長夜に於て我れを以て怨と爲し、世世に我が善法を修集するを障へ、而も亦我が善を行ずるを障ふること能はず。我れ常に長夜に慈悲もて覆潤すれども、而も我れと親を爲さしむる能はざりき。目連、調達の、世世我が恩を識らざることを、我れ今〔一一〕擧げ了りたれど、調達の等の如きは、亦復天人の世間・阿修羅の恩をも識らざるなり。是の等の如き人は、邪定の位に入れるものなり。目連、調達は後に於て阿鼻大地獄に臨入する時に、我れに於て乃ち深實なる好心を生じたるが、是れ亦是れ如來の威神の力なり。調達は第一に恩義を知らずして、阿鼻大地獄に臨入する時に、大なる聲を聞きたり。言はく。癡人調達は佛、不可殺の人に於て瞋恚して、橫に殺害の因緣を起さんと欲したり。是の罪の故を以て、今阿鼻大地獄の中に墮するなり。と。是れを聞くや大に怖れ、心、卽、摧伏して、是の言——我れ今唯骨肉を以て一心に佛に歸命す。——を作すや、心に卽樂を得、佛に於て信を生じ、大音聲を作して卽阿鼻大地獄の中に入りたるが、是の因緣を以て、後に地獄より出でて人中に生ずることを得、出家して道を學

〔一〇〕調達。調婆達多の略稱なり。提婆達多と同じ。第二卷同名の解參照。

〔一一〕擧げ了り。原文には「擧手」とあれど、「手」にては意を成さず。恐くは「了」の誤寫なるべし。由つて、今「了」と假定して譯出したり。

び、辟支佛を得て、號して骨髓と曰はん。目連、我れ今調達に記して辟支佛と作らんと授くるは、則ち已に生死の苦より度せるに爲るなり。目連、我れ調達を度せるは、我が本願の如きなり。所以は何ぞ。我れ先の世に於て、調達を度せんと要し、我れ當に汝を度すべし。餘には度する者無し。とせり。目連、調達は但我が所に於て涅槃の因緣を種ゑたるのみにて、餘に於て種うることをせず。調達は是れより已後にも亦復餘に於ても善根を種ゑずして、但我が所に於て、信心淸淨に歸命佛と言ひたるが、是の善根の因緣を以て、後に辟支佛の道を得るなり。目連、我れ常に長夜に、諸の衆生に於て、父母の想の如くに、其の孤窮にして、財物ある無く、生死の險難なる惡道に往來するを愍むは、愚癡無智の常盲にして目無きものを、誰れか能く示導し、誰れか能く救護せん。唯我れ一人、應に示すべく、應に救ふべければなり。目連、我れ是れを念じ已るや、若し衆生あつて、惡口して我れを罵るとも、我れは報を還さず。若しは切に我れを責むとも、我れ亦報いず。若しは瞋り若しは打つとも、我れは終まで報いざるなり。所以は何ぞ。我れは應に常に、一切の衆生に、畢定せる安樂を與ふべく、應に一切の苦惱衰患を除くべければ、今我れ應に、諸の苦惱を與ふべからざればなり。是の諸の衆生をば、誰れか能く忍ぶ者ぞ。惟我れ忍び能ふのみなれば、我れは今當に【二】衆生忍の法・善寂滅の法・柔和順の法を學ぶべく、當に調伏せる大象の如くにして、調伏せざる象の如くならざるべし。目連、譬へば、調伏せる大象の戰陣に入る時の如きは、心退縮せずして、能く鼓の聲・螺の聲・【三】角の聲・大叫喚の聲、是等の如き畏るべき音聲を聞くとも、驚かず畏れず、能く寒・熱・蚊・虻・毒蟲・風・雨・飢・渴を忍び、能く種種の鋒劍にて傷けらるるを忍び、弓・弩・箭・矟・刀・鉾・戟・劍・錢輪の鞭打をも、皆能く忍受して、驚かず畏れずに、直に戰陣を衝きて、退かず縮まざるなり。目連、調伏せる大象は是の念を作さず。我れ賊陣に於て衝き入る能はず。と。但是の念を作すなり。我れ當に此の賊陣に勝たん。と。目連、我れ本菩薩の道を行ぜし時に、大心願を發せることも亦復是く

【二】衆生忍の法。衆生に對して、忍辱卽ち忍耐するを謂ふ。

【三】角。軍中の樂器なり。

の如くにして、諸の衆生に於て其の心を調伏して、若し諸の衆生にして、惡口して我れを罵るとも、我れは報を加へず。我れに於て諍ふありとも、我れ亦報いず。若しくば刀杖・瓦石を以て我れに加へ及び我が命を奪ふとも、我れ爾の時に於て、心は阿耨多羅三藐三菩提より退轉せず。亦是れは則ち受くべく是れは受くべからず、是れは應に親近すべく是れは應に親近すべからずと、分別をもせずして、是の事の中に於て、憂ふる無く悔ゆる無く恚恨ある無く、菩薩道に於て心に厭離する無く、是の念——我れ今大賊陣に入る能はず。——を作さずして、但是の念——我れ能く是の大惡賊の陣を破り、當に阿耨多羅三藐三菩提を得て、三界の無量の衆生を度脱すべし。——を作したるなり。目連、我れ本菩薩の道を行ぜる時に、行ずる所の忍辱と、諸の衆生に於て有つ所の慈悲とは、若く言說を以ては盡すことを得べからざるなり。

復次に、目連、過去の久遠に、外道の仙人あつて、名けて忍力と爲ししが、是くの如き法を受けたり。我れ衆生に於て瞋恨を生ぜじ。と、爾の時に、魔の名けて惡意と爲せるあつて、是の念を作さく。我れ今、何ぞ仙人に往き詣り、其の忍法を壞つて、瞋恨を發起し忍心を退捨せしめざらんや。と。卽巧に罵る千の人を遣し、前後をば圍遶して、惡口罵詈して妄に其の過を說き、穢言・鄙辭の苦切なること備に至り、行く時にも亦罵り、聚落に到るにも亦罵り、聚落に入るにも亦罵り、食する時にも亦罵り、食し已るにも亦罵り、座より起つにも亦罵り、聚落より出づるにも亦罵り、還つて住處たる林樹に至るにも亦罵り、立つにも亦罵り、坐するにも亦罵り、臥すにも亦罵り、經行する時にも亦罵り、乃至、息の入るにも息の出づるにも亦罵り、常に隨逐して罵る種種なる不淨・醜惡の罵詈は、休息あること無かりき。目連、爾の時、千人は魔に爲つて使はれて、八萬四千歲に於て、忍力仙人を惡口罵詈したるなり。爾の時に、惡意の魔は、忍力仙人の聚落に入る時に於て、自ら屎を以て其の頭上に灌ぎ、鉢中に著き、衣鉢に塗り、身に塗り、糞を以て其の頭上に掃灑したり。時

に忍力仙人は、八萬四千歳の、健罵千人の悪口・罵詈・輕賤にも、心終まで瞋恨せず、乃至、退沒の心を生ぜず。亦自ら、我れに何の罪ありやとも言はず。終まで怨恨を生ぜざること八萬四千歳にして、亦悪眼を以ても悪意の魔を視ず。亦自ら、我れに何の罪ありやとも言はざりき。目連、是に健罵の千人は、忍力の仙人を罵ること八萬四千歳を過し已つて、壞るべからざるを知るや、淨信心を生じ、懺悔して罪を除きて、是の言を作さく。汝は是の事を以て、何の法を欲求するか。我れも亦願はくば是の法を得ん。と。目連、是に健罵の千人は、仙人の所に於て淸淨の心を得て、仙人を供養し恭敬し尊重し讃歎せるに、既に供養を受くるにも、而ち亦貪愛の心を生ぜざりき。目連、汝、爾の時の忍力の仙人は、豈異人ならんかと謂はば、是の念を作す勿れ。我が身是れなり。我れ時に是の忍辱の法を受けたれば、悪意の魔の遣す所の千人は、悪口・罵詈して休まず息まず、常に我れを輕じたれども、亦我が心をして異らしめ能はざりしなり。目連、健罵の千人は、忍力の仙人に於て、淸淨の心を生じ已つて罵罪を懺悔し、忍力仙人に隨ひ學んで、阿耨多羅三藐三菩提の心を發したるを、我れ時に敎化して佛法に住せしめたれば、是の千人は是の六波羅蜜を具足し、次第に成佛して、皆已に無餘涅槃に入りたり。目連、汝、爾の時の悪意の魔の、常に千人を遣して我れを罵詈せる者は、豈異人ならんかと、是の念を作す勿れ。卽、調達是れなりき。

復次に、目連、我れ過ぎし世を念ずるに、自ら其の身を以て衆生に施與し、世間の人の爲めにとて奴僕と作れり。爾の時に、衆の人の種種に我れを使ひたることは、人の、我れをして屎尿を分除せしむるなり。人の、我れをして除糞の人と作さしむるあり。人の、我れをして土を除かしむるあり。人の、我れをして草を取らしむるあり。人の、我れをして穀・米・乳・酪・酥・油・蜜を取らしむるあり。人の、我れをして薪・炭・火・水を取らしむるあり。是等の如き種種の事務をば、皆我れをして取らしめたり。目連、我れ爾の時に、是くの如き心――人の、我れをして屎尿を分除せしむるあるに

は、隨はずして去る者なれども、人の我れをして華香・瓔珞・塗香・末香・飲食・果蓏を取らしむるあるには便ち去かん。——を生ぜることを憶せず。目連、我れ爾の時に、好む所の作務には隨ひ去き、好まざる作務には而ち隨はずして去りしことを憶せず。目連、我れ爾の時に、刹利に隨へども婆羅門に隨はず、婆羅門に隨へども刹利に隨はず、[一四]毘舍に隨逐すれども[一五]首陀羅に隨はず、首陀羅に隨逐すれども毘舍に隨はず、刹利・婆羅門に隨逐すれども毘舍・首陀羅に隨はず、毘舍・首陀羅に隨逐すれども刹利・婆羅門に隨はざりしことを念ぜず。亦是くの如き差別——是の人は大にして是の人は小なれば、是の人に隨逐して是の人に隨はじ。——を有ちしことを念ぜず。目連、但先に我れを喚べる者に隨ひ、歡喜して隨ひ去きたりき。目連、我れ本菩薩の道を行ぜし時を念ずるに、人の如法の事を以て我れを使ひて作さしむるあらんに、終まで、力ある無きにも而も爲作せざりしことを念ぜず。目連、我れ本菩薩の道を行ぜし時を念ずるに、事を爲して究竟せざりしことある無く、善を作して善は終に訖らざりしことある無かりき。要を舉げて之れを言はば、我れ本菩薩の道を行ぜし時を念ふに、未だ曾て身を貪らざりき。何に況んや、財物をや。我れ菩薩の道を行ぜし時には、財物の中に於て、我が物の想を生ぜず。我れは但、先業の果報を以て財有るなれば、是の財物に於て是くの如き念を生ぜり。此の物をば當に衆生と共に用ふべし。此の物の中に於て、我れに分有らば衆生にも亦有り。と。目連、我れ菩薩の道を行じて佛法に近くを得るに隨ひ、是の念——我が物の中に於ては、我れに分有り衆生にも分有りと言ふ——を作さずして、但有らゆる物は是れ衆生の物にして、我れには分有ること無しと念じたり。目連、我れ佛法に近くを得るに隨ひ、則ち其の中に於て、貪著せず攝めず取らざることを樂み、諸法を遠離することを樂んで、諸法を受くることを樂まず。一切の空法を樂んで、一切の法の有を樂まず。一切の法の寂を樂んで、諸法の事相を樂まず。本性の所有無きを樂んで、本性の所有有るを樂まざりき。目連、我れ本菩薩の道を行ぜし時の

【一四】 毘舍(Vaiśya)。吠舍とも書す。印度の社會階級の第三位にして、商賈の族なり。
【一五】 首陀羅(Śūdra)。戍陀羅とも書す。同上階級の第四位にして、農民・奴隷の族なり。

無量百千萬の世を念ふに、夜闇の中に於て自ら其の身を然して、道を失へる衆生に道の處を照示したり。目連、我れ本菩薩の道を行ぜし時の無量百千萬の世を念ふに、肉を噉ふ衆生には、肉を割きて施與したり。目連、我れ本菩薩の道を行ぜし時の無量百千萬の世を念ふに、血を飲む衆生には血を刺して施與し、飽滿・快樂を得しめたり。目連、要を擧げて之れを言はば、世間の中に於て、諸の財物・資生の用ふる所の若きを、諸の衆生に於て終まで貪惜せざりしは、皆衆生を惱さず、害せざらん爲めにして、智者の許す所、賢聖の讃ずる所なり。我れ常に是くの如くに、長夜に諸の衆生に於て、深く悲心を行じたりき。

復次に、目連、我れ過去を念ふに、賈客の主と作り、名けて吉利と爲ししが、大海に入つて大珍寶を取り、安隱にして出て還つて本國に達せり。是の人、城に入つて家の門前に到るや、是の時、城中に多く乞兒ありしが、圍遶して前に在つて、是くの如き言を作さく。善く來れり安隱に、吉利大檀越。我等乞ふ所あらんと欲す。若し許されば我等當に乞ふべし。と。目連、爾の時に、吉利は諸の乞人に語らく。汝等乞ふべし。我が有つ所の物をば、能く以て相ひ與へて貪惜する所無し。と。時に諸の乞人は、吉利に語つて言はく。汝、大海より得る所の寶物をば、盡く以て我れに與へよ。我等、爾る若くんば皆吉利を得ん。と。是くの如くにして目連、吉利は即時に諸の珍寶を以て、盡く乞兒に與へたるもの、凡べて八十億の摩尼珠あつて、一一皆百億兩の金に直せり。目連、是に吉利は、是の多くの物を以て施し已つて、心に異るある無く、疑悔を生ぜざりき。爾の時に吉利は、多くの寶物を以て乞人に與へ已るや、其の家に入らずして、復還つて海に至り珍寶を採取せしが、海に入れる後に倍寶物を得、八十歲を過して本國に還り到れり。城に入らんと欲せる時に、罪を犯して人をば殺せる者を、執へ縛して惡聲の鼓を打ち、街巷に令を唱へ、將ゐて殺す處に至つて、加ふるに刑戮を以てせんとするを見たり。時に、應に死すべき者は、遙に吉利を見て、是の言を作

さく。賈客の主、我れに無畏を施せ。我が死罪を救へ。我れに壽命を與へよ。汝は是れ大檀越・賢なる善好人なり。と。吉利は聞き已るや、應に死すべき者に語らく。喘けたる人、我れ今汝に無畏を施さん。汝の死罪を救はん。と。卽、殺す者の所に至り、人人に皆一摩尼珠の、價一億兩の金に直れるを與へ、汝今少しく住れ。我が今者王の邊に至つて還るを待て。と。爾の時に吉利は、疾く王の所に至り、白して言はく。大王、我れ好き珍寶を以て此の人の命を買はんことを欲す。と。王は吉利に答ふらく。是の人の罪は恕すべからず。買ふことを得べからず。若し必ず買はんと欲せば、汝の有つ所の物を盡く以て我れに與へ、幷に自ら死に伏さば、乃ち脫るることを得べし。と。目連、爾の時に吉利は聞き已るや、歡喜して「我れ大利を得たり。願ふ所を滿すを得たり。能く此の人を救うて我が意に稱ふを得たり。」とて、卽時に吉利は、此の人を救ひ死罪を免るることを得しめんと、卽居家の有らゆる財物、及び大海に於て得たる所の珍寶たる無量千億の金銀寶物を以て、皆送つて王に與へ、大王に白して言はく。此の人を放つべし。我が有つ所の物は盡く此に現在せり。と。王は物を受け已り、殺す者に語つて言はく。吉利を將ゐて殺せ。と。答へて言はく。爾り、諾。と王命を受け已るや、卽、吉利を縛し、將ゐて殺す處に至り、右手にて刀を擧げて吉利を斫らんと欲するや、手直くして下らず。驚き怪み恐怖して、卽、吉利を將ゐて王に此の事を白せり。目連、王は此の語を聞くや、卽自ら刀を執つて吉利を殺さんと欲し、刀を擧げて斫らんと欲するや、其の王は、卽時に兩臂地に落ち、大衰惱を得、聲を發して死せり。目連、汝、爾の時の吉利賈客主は豈異人ならんかと謂はば、是の念を作すこと勿れ。卽我が身是れなり。爾の時の王は、卽、調達癡人是れなり。目連、爾の時に調達は、我が命を奪はんと欲して奪ふことを得る能はず。今世に於て、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得るに至り、我が命を奪はんと欲して亦能はざるなり。何を以ての故ぞ。如來をば、一切の世間の天・人・阿修羅の中にて、害し能ふ者無ければなり。何に況んや、調達癡人をや。

調達は今に於て、謀つて惡人を集め來り、我れを殺さんと欲し、亦自らも方便して我れを殺すことを得んと欲して、利養・名聞・勢力を失ひ、生身にて直に阿鼻地獄に入りたり。目連、我れ本菩薩の道を行ぜし時に、衆生を利益せること、調達の如き者を見ず。而も調達は恩義を知らざりき。我れ本菩薩の道を修めし時に、衆生の中に於ては、猶父母の如くにせり。是の因緣を以て、當に如來の、諸の衆生に於ける悲心の深厚なるを知るべきなり。

復次に、目連、過去の久遠に、雪山王の邊に五百の群象ありしが、中に於て一つの大象王あつて主と爲つて、體貌愛すべく、大力にして智ありき。時に是の群象は、宿をば出でて、山の嶮隘にして難き處に在りしが、唯一つの道あるのみ。爾の時に、獵師は此の象群を見、卽夜に嶮道の中に於て、大に坑塪を作つて、是の念を作さく。此の諸の群象は、當に此の中に墮ちて、我れに屬するを得、我が取る所に隨ふべし。と。夜坑を作り已つて、群象を驅逐して嶮道の坑に向はせたり。群象は出でんと欲して、大坑あるを見て過ぐることを得る能はず。目連、時に象群の主は、身を以て横に坑上に在きて橋と爲し、五百の群象をして脊の上より過ぎしめたり。群象は過ぎ已るや、勢を作して踊跳せり。

爾の時に、山神は是の偈を說いて言はく。

惡人は深坑を作りしに　中に智ある象王は　彼れを度し亦自をも度したれば　唐しく勞して
深坑を作りたり　と。

目連、汝爾の時の象王の利根なる大力者は、豈異人ならんかと謂はば、是の念を作す勿れ。卽我が身是れなり。時の五百の群象は、今の五百の比丘にして、調達に爲つて壞られたる者是れなり。爾の時の獵者は、調達等の五百の比丘是れにして、謂はゆる　[一六]騫陀達多・[一七]迦樓羅提舍・[一八]三聞陀達多・[一九]拘迦梨・提婆達多なり。目連、我れ常に長夜に、怖畏せる衆生を見れば、施すに怖畏無きを以

【一六】騫陀達多（Skandadatta）。
【一七】迦樓羅提舍（Kalamorakatisya）。
【一八】三聞陀達多（Sammadatta）。
【一九】拘迦梨（Kokālika）。

てし、苦惱の衆生を見れば、施すに安樂を以てし、貧窮の衆生には、施すに財物を以てし、邪道に墮せる衆生には、示すに正道を以てし、病痛の衆生には、其の病苦を除き、飢餓せる衆生には、施すに飲食を以てし、肉を食ひ血を飲む衆生には、身の肉血を以て施與せり。目連、我れ願ずる所に隨ひ、皆作して虛しからず。我れ衆生に許して、懈怠を生ぜざりき。目連、我れ阿耨多羅三藐三菩提を發すや、其の中間に於ける有らゆる誠言は、終まで異るあらずして、作す所の精進なりしは、懈廢し休息せば、我れ阿耨多羅三藐三菩提を得ざらんかと、目連我れ語に隨つて行じ、行に隨つて語りたればなり。と。

答難品　第七

爾の時に、會中に一の比丘あつて、名けて象手と曰ひしが、座よりして起ち、偏に右肩を袒ぎ、右膝をば地に著け、合掌して佛に白して言はく。世尊、我れ如來より此の難事を聞き、身毛爲めに竪ち、涕涙流れ下れり。我れ今一事を問はんと欲す。世尊は自ら言はく。我れ菩薩たりし時、語に隨つて行じ行に隨つて語れり。と。世尊は初より一切の衆生を度せんと願じたまへるに、是の願を作しながら、今度する所の衆生に於て未だ盡きざるに、當に涅槃に入りたまふべき若くんば、如來の滅後に、或は人の來つて、諸の比丘に、汝等の大師の本願は、當に一切の衆生を度すべきに、衆生の未だ盡きざるに、而も自ら滅度せり。と難ずるあらんに、若し是の難あらば、當に云何に答ふべきか。と。佛は象手比丘に告ぐらく。若し是くの如くに難ずる者あらば、應に還つて彼れに問ふべし。汝は何の法を以て衆生と爲すか。と。彼の人若し、陰・入・界は是れ衆生なりと言はば、應に還つて彼れに問ふべし。陰・入・界の和合は是れ衆生なりと爲すか。離散は是れ衆生なりと爲すか。と。彼の人若し、陰・入・界の和合は是れ衆生なりと言はば、應に還つて彼れに語るべし。汝は自にて答へ已れり。所以は何ぞ。和合は是れ衆生ならば、陰・入・界は衆生に非ざればなり。佛は法を

說いて離散と爲す所の故は、和合を爲さざればなり。世尊は離散の行を樂ひて和合を樂はざるは、和合の中に衆生無ければなり。と。彼の人、若し但の陰・入・界は是れ衆生なりと言はば、應に還つて問うて言ふべし。若し爾らば、一切の草木・瓦石は皆是れ衆生ならん。所以は何ぞ。汝、陰・入・界は是れ衆生なりと說けば、是れの中にも亦陰・入・界あればなり。と。彼の人、若し、是れの中には心無く［二〇］心數の法無き故に衆生には非ずと言はば、應に還つて彼れに問ふべし。若し爾らば、一切の衆生は應に是れ一衆生なるべし。何を以ての故ぞ。如來は、陰・入・界に異有るを說かざればなり。と。彼の人、若し、如來は經の中に衆生有りと說けり。是の故に衆生有り。と言はば、應に還つて彼れに語るべし。汝自ら答へ已れり。何を以ての故ぞ。如來は經に、有を離れ無を離ると說けばなり。と。彼れ若し、若し爾らば道果有ること無からんと言はば、應に還つて彼れに問ふべし。汝は何を以て果と爲すか。と。彼れ若し、我れ決定せる第一義を說いて果と爲すと言はば、應に還つて彼れに問ふべし。決定せる第一義の中には音聲・語言無し。音聲・語言無き中には、決定せる有無を言ふことを得ず。汝、決定せる第一義を果と爲すと說かば、是の決定せる第一義の中には、衆生無く衆生の名字も無し。是の故に、汝、衆生有りと說くは、此の語にて自ら破るなり。と。

復次に、象手、如來の經說は、諸法の中に於て滅する者ある無く、但苦惱を滅するのみ。我れ是くの如くに諸法の實相に通達し、得る所の法に隨ひ、衆生の爲めに、無貪取を爲し遠離を爲し無戲論を爲し無作起を爲せと說くなり。象手、若し人、是くの如くに我が法義を知らば、是の人は卽能く、有無を爲して行業を起すことをせざるなり。若し人、有無を爲して行業を起さずんば、是の人は、云何ぞ衆生有るを見衆生無きを見んや。象手、是れを常に諸法の實相に住すと名く。是の中には、憶想分別あること無く、垢無く、淨無く、來無く去無く、道無く道果無く、長無く短無く、方無く圓無く、形無く色無し。是の故に、諸法は一門、謂はく、是れ定門なりと說くなり。象手、

【二〇】心數。「心所」と同じ、第一卷、同名の解、參照。

是れを法門を見ると名け、是の法門を見るに入れるを、名けて能く佛を見ると爲すなり。象手、是に於て云何。隨つて何の法を以て佛と見たる。是の法の已に滅し今滅し當に滅すべき滅相なるか。不なり、世尊。意に於て云何。隨つて何の法を以て佛と見たる。是の法の已に生じ今生じ當に生ずべき生相なるか。不なり、世尊。象手、若し爾らば、如來をば名けて滅と爲さざるなり。是くの如し、世尊。象手、彼の人若し、有つ所の身相にて我れ是の故と爲すと言ひ、如來は滅して涅槃に入り已るや、復と轉還せざれば、但身相の轉還せざるを見る故にて、如來滅すと名くと言はば、應に還彼れに問ふべし。汝は身相の成就せるを說いて如來と爲すか。と。彼の人若し、我れ身相の成就せるを說いて名けて如來と爲すと言はば、應に還彼れに答ふべし。佛の經中に於ては、身相を說いて名けて如來と爲さず。若し身相は是れ如來なりと說かば、一切の瓦石・山河草木は、皆是れ如來ならん。と。彼の人若し、一切の瓦石・山河・草木には、三十二の大人の相ある無ければ、如來と〔三〕名け(ず)と言はば、應に彼れに答へて言ふべし。汝三十二相有れば如來と名くと說かば、轉輪聖王は則ち是れ如來ならん。何を以つての故ぞ。轉輪聖王の身には三十二相有ればなり。と。彼の人若し、相をば相法に入れて、相を知れる婆羅門の、當に佛と作るべしと說かば、是の事は實と爲すと言はば、應に彼れに答へて言ふべし。若し三十二相あらば卽應に是れ佛なるべしとし、而も汝自ら、相師の三十二相あるを見て記せば、當に佛と作るを得べしと說くは、汝今、佛の相を說くなり。と。彼の人若し、我れ佛の十力・四無所畏・十八不共の法・無漏の根・力・覺・道・禪定・解脫・三昧等、是れを佛の相と爲すと說かば、應に彼れに答へて言ふべし。汝、十力等は是れ佛の相なりと說かば、今應に佛の體性を說くべし。と。彼の人若し、佛と是の相と異りやと言はば、應に彼れに答へて言ふべし。汝自ら言ふ。是れ佛の相なりと。佛の相ならば佛に非ざるなり。彼の人若し、更に無形・無色の法の、是れ佛なるあつて、十力等を相と爲すと言はば、應に彼れに答へて言ふべし。無形・

【三】名けず。原文には「不」の字無けれど、斯くては意義成立せず、恐くは、書寫の誤脫なるべし。

無色の法は、云何ぞ有形・有色を以て相と爲さん。又、汝若し無・形無色の法を、名けて佛と爲すと說かば、餘の無形・無色の法も皆是れ佛なるべし。若し是等の法も亦是れ佛ならば、是の十力・四無所畏・十八不共の法・根・力・覺・道・禪定・解脫・三昧等も、亦應に是れと相應を爲すべし。と。象手、我が諸の弟子は、應當に是くの如くに癡人を降伏すべきなり。

復次に、象手、我れ本、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切の衆生を度脫せんと願ぜしが、我れ道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得已るや、衆生を得ず、衆生の名字をも得ず。我れ道場に坐するや、但十二因緣の法の、是の事有るが故に是の事有り、是の事無きが故に是の事無きに通達したり。何事有るが故に何事有り、何事無きが故に何事無きか。謂はゆる〔三〕無明の因緣の故にて、諸行有り。諸行の因緣の故にて、識有り。識の因緣の故にて、名色有り。名色の因緣の故にて、六入有り。六入の因緣の故にて、觸有り。觸の因緣の故にて、受有り。受の因緣の故にて、愛有り。愛の因緣の故にて、取有り。取の因緣の故にて、有有り。有の因緣の故にて、生有り。生の因緣の故にて、老・死有り。老死の因緣の故にて、憂悲・苦惱有り。是くの如くに展轉して、但是れ大苦の聚は集るなり。無明の滅する故にて、諸行は滅す。諸行の滅する故にて、識は滅す。識の滅する故にて、名色は滅す。名色の滅する故にて、六入は滅す。六入の滅する故にて、觸は滅す。觸の滅する故にて、受は滅す。受の滅する故にて、愛は滅す。愛の滅する故にて、取は滅す。取の滅する故にて、有は滅す。有の滅する故にて、生は滅す。生の滅する故にて、老・死は滅す。老死の滅する故にて、憂悲・苦惱は滅す。是の中、但是れ大苦の聚は滅するなり。我れ是の中に於て眼の智明を生じて覺し、是くの如き中無き後無き壞無き解脫に通達せり。如來は是の解脫に通達せる故にて、餘の法を得ずして、但、衆因緣生の法を得たり。象手、如來は是く諸法に通達し、隨つて是くの如きを以て、衆生の爲めに說くなり。象手、若しは諸佛の生ずるにも、若しは諸佛の生ぜざるにも、諸法の性相

【三】無明の、乃至、老死有り。謂はゆる十二因緣の成立を明せり。第一卷、同名の解參照。

は常住にして異らず。謂はく、名色は、失せず相ひ違背せず生ぜず起らず。と。象手、我れ常に是くの如くに法を說けば、汝等も亦應に我が意に隨つて知るべし。我れ汝等の爲めに是くの如き法を說けば、汝等、但當に勤めて之れを修行すべし。象手、大師は、應に弟子の爲めにすべき所の事を、我れ盡く作し已れり。汝等は說く所の如くに行はば、諸法の中に於て當に智明を得べし。と。

爾の時に、象手は佛に白して言はく。世尊、若し人あつて、如來の說く所の正法は滅する故に、誰れか當に示導すべき。示導無き故に正法滅すと名け、正法の滅する故にて如來は滅すと名けん。是くの如くにして、亦一切の衆生を度せずと名けんと言はば。と。佛、象手に告ぐらく。若し人、是くの如くに難問せば、應に是くの如くに答ふべし。佛は是れ一切の智の人にして、皆知り皆見れば、常に衆生の度すべき時節を待つて、涅槃に入ると雖も猶能く益するあり。又佛は今、未來世の佛の與めに記を授けて佛と作せば、是に則ち佛種は相續して絕えざるなり。一切佛の法は、是れ一佛の法なり。是の故に、說いて如來の法と名け、如來の法は卽是れ佛法なり。是の故にて、當に如來の本菩薩の道を行ぜし時に、語に隨つて行じ行に隨つて語りしことを知るべきなり。と。

象手は、佛に白して言はく。希有なり、世尊。如來は善く能く通達して一切の諸法を推求したまひ、善く能く一切の法に通達せる故に、身・口・意の業は智慧を首と爲し、皆智慧に隨ひたまへば、世尊の本菩薩の道を行じたまへる時も、語に隨つて行じ、行に隨つて語りたまへることや。と。佛、象手に告ぐらく。是くの如し、是くの如し。汝の說く所の如くなれば、我れ本菩薩の道を行ぜし時に、語に隨つて行じ、行に隨つて語りしなり。象手人の實說するものの若きは誰れぞ。錯謬せずに世間に出でて、衆生を饒益し、天人を安樂にする一切の大師の、正道を說く者。正智にて解脫し、戲論ある無く、彼岸に到り、未度を度する者。たる如來世尊にして、當に說くべし。我れは是を是として實語を爲す者。と。象手、人の實語するものの若きは誰れぞ。是れ誑さざる者、恩を知り

恩を報ゆる者にして、當に說くべし。我れは是を是とし我れは實語を爲す。と。若し衆生あつて、小しく我れに事ふとも是の事は失せざるなり。象手、我れ初阿耨多羅三藐三菩提の心を發ししより已來、其の中間に於て心に退轉無く、亦聲聞・辟支佛を貪樂することを憶念せざりしが、我れ是の法を得るに當つて、但、一心を發して、弟子をして辟支佛を求めしめんと欲したり。象手、過去の久遠に、我れ時に外道の仙人と作りしが、智慧明利に多聞・辯才にして、深法忍を得たりき。時に、五百の年少なる婆羅門ありしが、居家に在る五欲の過患を見、出家の利を見、出家して道を學ばんとて、皆來つて我れに詣れり。卽ち爲めに法を說きたるに、辟支佛の道を得て、六神通を具し、心に自在を得、【三】如意足を具して、常に神力を以て城邑聚落に飛び入り、乞食して我れを供養したり。我れ是の念を作さく。是くの如くに大淨智を成就せる人より、我れは則ち應に其の供養を受くべからず。是の諸の仙人は、我れ敎化したる故に是くの如き法を得たり。而して我れは得ざれば、是の法を得ることを爲さん。未だ證せざれば當に證すべし。と。故に勤行精進せり。象手、我れ勤精進して是の法を證せんと爲せる時に、淨居天は來つて其の身を現して、我れに告げて言はく。是の智を貪る莫かれ。汝は應當に阿耨多羅三藐三菩提を得べく、應に無量無邊の衆生を度すべし。と。象手、我れ時に聞き已るや、復た道を修めずして、心に第一の歡喜快樂を得て、半月靜坐せしが、樂悉く身に遍したるは、象手、菩薩は四法を成就して、諸天は開悟して歡喜心を得、自は當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきを知りたればなり。何等か四なる。一には、菩薩は自ら深く阿耨多羅三藐三菩提の心を發したれば、亦他人をも敎へて深く發心せしめんとなり。二には、大乘を發す人を見て、心に嫉を生ぜず。是の念を作さざるなり。阿耨多羅三藐三菩提は、唯我れのみ當に得べく、餘は應に得べからず。と。三には、衆生の行ずる所をば、時に隨つて誨へ、好意にて共に語つて、其の善を將け護らんとなり。四には、常に自ら勤心に廣く諸法を求め、他人の爲めに說いて慳悋す

【三】如意足　第二卷「四如意足」の解、參照。

る所無からんとなり。象手、菩薩摩訶薩は此の四法を成就せば、諸天は開悟して當に佛と作るべきを知るなり。と。

爾の時に、世尊は此の事を明了にせんと欲して、偈を說いて言はく。

菩薩は堅き心を以つて　無上の乘に住し　亦能く衆生を化して　此の乘に住せしむるなり　本行ぜる[二四]菩薩の時に　常に嫉恚の心無く　勤行に精進を發し　喜心轉增益するなり　諸の衆生の惡を見ば　時を知つて化し喩し　常に慈悲の心を以て　瞋恚ある無きなり　常に勤行して法を求め　流布して衆生に與へ　法を以つて一切に充すこと　雨の普く流潤するが如くなるなり　是の四法を行ぜば　諸天に開悟せられて　汝當に佛と作るを得べく　疑惑の心を生ずる勿れとなり　菩薩は是れを聞き已るや　勇猛に精進を發し　是の事必ず應に實なるべく　我れは定つて當に佛と作るべしと　是くの如き諸菩薩は　精進及び願を以て　知と慧とを憶念して　自ら轉高大なり　若し諸の如來の　世間に出現するあらば　是の菩薩は則ち是くの如き諸の功德を有つなり　天人に恭敬せられて　諸王及び臣民も　皆歡喜心を生じて是れ有道の者なりと知るなり　經書の章句の義　文頌と算數との事に　皆悉く善く通達して　衆生中の最上なるなり　聰達にして智慧あり　事を造すに力を以ひず　但其の策謀を以てして　能く成す所あるなり　諸の戰陣を摧伏するに身手の力を以ひず　但智慧力を以て自然にして降伏するなり　諸王及び臣民は　皆未曾有なり　衆生を憐愍する故に　生じて世間に在りと歎ずるなり　諸人の僉く皆知ることは　謂はく天と共に語る　何故に此くの如きを知るか　我が心を知る故を以てなりと　是の菩薩は常に　値遇して諸佛に見え　往き詣つて諸ひ請問するを得て　能く大に衆生を益するなり　諸佛に荅問し已つて　疑惑せる所を斷了して　能く諸の衆生を利して　皆歡喜を得しむるなり　佛は神通力を示して　當に佛と

【二四】菩薩。「薩」にても意義通ぜざるにあらざれど、他の本文と對照して「菩提」とあるべきを可とす。或は誤寫なるべきか。

作るべしと受記する　是の故に此の菩薩は　心に大歡喜を得るなり　愛する所の貴重の物を内外に貪惜する無き　是の故に大歡喜して　自ら當に佛と作るべきを知るなり　普く慈もて一切を覆ひ　常に瞋恨の心無き　是の故に大歡喜して　自ら當に佛と作るべきを知るなり　諸佛に稱讃せられ　已に深妙の忍を得たる　是の故に大歡喜して　自ら當に佛と作るべきを知るなり　諸法に依止せず　法の依る可からざるを知り　是くの如き智慧を得て　身は能く虛空に飛ぶなり　其の心內に在らず　亦復外にも在らずして　一切の想を出過せる　故は無上の忍を得たればなり　長夜に慈悲を以て　普く諸の衆生を念じ　是の福德の故を以て　無量の佛に見ゆるを得るなり　一切の身は皆是れ　佛身と差別無しと　能く是くの如き忍を得て　法を以て自ら增長するなり　心を菩提に發せる者は　誰れか隨つて學び　堅く正法に住して　是くの如き功德を得ざらんや　是の故に道を求むる者は　常に應に勤めて法を求め　法を以て自利を求めて　菩提を增益すべきなり　と。

富樓那品　第八

爾の時に、富樓那彌多羅尼子は、佛に白して言はく。希有なり、世尊。世尊の過去世に、菩薩の道を行じたまひし時に、善く能く堅く種種の善法に住したまひしことや。と。佛言はく。是くの如し、是くの如し。富樓那、我れ長夜に菩薩の道を行ぜし時に、堅く善法に住したり。と。

爾の時に、世尊は此の事を明了にせんと欲して、偈を說いて言はく。

法を求めて能く法を得ることは　是れを佛道の本と爲せば　常に勤めて法を修習して　非法を遠離し　常に正道を行じて　諸の邪道を遠離し　常に諸佛に　親近すべき所の道を修習し　是くして則ち諸難を離れて　能く無難の處を得たり　無難の處を得已るや　精進は必ず虛しからずして　[二五]二つに在つて最も尊貴に　諸の形色の中にて上に　眷屬は具に成就して　諸の

【二五】「二つに在つて」等。人と天との兩足に於ける尊の意なり。

一切に於て勝れたり　堅心にて常に　戒品忍辱品に安住し　亦精進品に住し　禪智を增長したること　諸の衆生の中に於て　常に能く上首爲れば　功德の中も亦勝れて　義を了して畏るる所無かりき　と。

爾の時に、富樓那は佛に白して言はく。世尊、是くの如き妙法を、誰れか當に學ばざるべき。但念ふに、我等、本昔懈怠して佛智を望まず、自ら是くの如き佛慧を得ることを信ぜず、聲聞乘を以てして自ら出度したりき。世尊、我れ今日より、諸の菩薩衆を示敎利喜して、佛の法に住せしめん。何を以つての故ぞ。諸佛世尊は、行じ難き者を行じたまひ、世尊は本菩薩の道を行じたまへる時に、衆生の爲めの故に、常に是くの如き甚難なる大事を行じたまへばなり。是くの如き事は、一切の阿羅漢・辟支佛にてすら尙無し。況んや餘の衆生をや。世尊、是くの如き甚難なる大事は、唯諸の菩薩摩訶薩等の、憐愍して一切衆生を饒益せん故に、菩薩の道を行ずる時に、是等の如き無量無邊阿僧祇の甚難なる大事を有つのみ。世尊、諸の菩薩は、是くの如き甚難なる大事を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得已つて、能く法輪を轉じて、苦惱の衆生を度脫するなり。と。佛言はく。是くの如し、是くの如し。富樓那、汝の說く所の如し。諸の菩薩摩訶薩は、深く阿耨多羅三藐三菩提の心を發して、一切衆生の爲めに利安の樂を求め、一切衆生に於て大慈悲を有ち、一切衆生の爲めの故に菩薩の道を行ずる時に、是等の如き無量無邊阿僧祇い甚深なる極難の大願・大事を有つなり。と。佛は經を說き已りたまふや、慧命富樓那と、時に會せる四衆・天・人・龍神・乾闥婆・阿修羅等と、皆大に歡喜して、佛語を信受せり。」

卷の第八十

隋　闍那崛多　漢譯

護國菩薩會　第十八の一

是くの如くに我れ聞けり。一時、婆伽婆は、王舍城の耆闍崛山の中に在つて、大比丘の衆千二百五十人と倶なりき。菩薩摩訶薩は五千人にして、一切皆、無礙の辯才を得、[一]大忍をば成就して、魔怨を降伏し、佛智に近くこと一生補處にして、皆[二]陀羅尼の無邊の辯才を得、[三]力・[四]無所畏・自在の神通、乃至、一切の功德をば、皆悉く具足せり。其の名を普賢菩薩・普眼菩薩・普明菩薩・普光菩薩・圓光菩薩・上意菩薩・無邊意菩薩・廣意菩薩・無盡意菩薩・持地菩薩・持世菩薩・益意菩薩・呪手菩薩・文殊師利等と曰ふ六十の不思議の菩薩と、賢護等の[五]十六の菩薩と、是等の如き菩薩摩訶薩五千人と倶なりき。復、娑婆世界の主梵天王及び釋提桓因・護世の四王・[六]功德天子・正意天子・一切の天王・一切の龍王・一切の緊那羅王・一切の乾闥婆王・一切の夜叉王・一切の阿修羅王・一切の迦樓羅王、是等の如き王は、各各皆百千の眷屬と倶に悉く來つて集會せり。

爾の時に、世尊は功德藏たる師子の寶座に坐して、大衆の中に於て、色像の顯現せること須彌山の如く、普く世間を照すこと[七]日天子の如く、世界に顯現せること月天子の如く、其の德の寂靜なること梵天王の如く、威德の瞻難きこと天帝釋の如く、七菩提分の皆悉く具足せること轉輪王の如く、無相・空・無願の法を宣說するに、心に畏るる所無きこと師子王の如く、身光の照耀せること大火聚の如く、又光明を放てること、猶諸天の最勝無上なる摩尼寶珠の普く三千大千世界を照すが如くにして、大梵音を以て、諸の衆生をして、悉く歡喜して一切の法に於て其の深義を解するを得

【一】　大忍。異譯本（佛說護國尊者所問大乘經「施護譯」）には「大忍辱」とあり。

【二】　陀羅尼の無邊の辯才を得。異譯本には「總持自在にして四無礙智を具し、」とあり。

【三】　力(Bala)。菩薩の十力を謂ふ。即ち一、深心力(Āśaya-bala)、二、增上深心力(Adhyāśaya-〃)、三、修習力(Prayoga-〃)、四、智慧力(Prajñā-〃)、五、願力(Praṇidhāna-〃)、六、乘力(Yāna-〃)、七、行力(Caryā-〃)、八、神通力(Vikurvaṇa-〃)、九、菩提力(Bodhi-〃)、十、轉法輪力(Dharma-cakra-pravartana-)是れなり。

【四】　無所畏(Vaiśāradya)。菩薩の四無所畏を謂ふ。即ち一、法を聞き忘れずして、其の意義を說くに當つて畏るる所無し。二、無我の理を證得して他を害する事無く、自然に三業清淨にして畏るる所無し。三、善權方便を以て、衆生の問難に能く應對して畏るる所無し、四、一切衆生の疑を能く一切智に準じて決斷して、衆生の願望を成就せしむる事に畏るる所無し。とする者是れなり。

【五】　十六の菩薩。此れを十

しめんとて、大衆の中に於て、法の初・中・後に善く、其の義微妙にして、無雜淸淨の梵行を具足せるを說かんと爲せり。

爾の時に、衆の中に、一の菩薩摩訶薩の名けて[九]喜王と曰へるありしが、衆の中に在つて坐し、如來の、師子座に坐して大光明を放つこと、百千の日の普く一切の照すが如くに、天人の光をし隱蔽して現れざらしむるを觀見し、是の事を見已るや、踊躍歡喜身心に遍滿して、自ら勝ふること能はず。卽、座より起ち、合掌して佛に向ひ、偈を以て讃じて曰はく。

世尊は此の大衆　天龍修羅乾闥婆を覆蔽し　菩薩聲聞も威德無く　普く一切を照したまふこと[一〇]金山の如くなり　[一一]猶須彌の諸天の俱に　大海に處るが如くに佛も亦然く　世尊は慈悲の海に住して　大光明の百千種を放ちたまふ　梵行に住すること猶梵王の如くにして　光明の威德諸天に過ぎ　禪定解脫の中に安住して　世間の勝衆生を照曜したまふ　猶帝釋の天衆に在つて　色像光明最も勝れたるが如くに　佛の世間に過ぎたまふことも亦復然く　諸相の莊嚴は功德具れり　猶輪王の四域を典るが如くに　世間を照曜して法を說きたまふ時　諸の衆生をして聖道に入らしめたまふは　世尊の顯現したまふ慈悲の意なり　光明は[一二]火と摩尼とを障蔽すること　猶秋の日の虛空を行くが如く　佛を千の日に比するに最も勝と爲して　佛日は普く世間を照したまふ　夜闇の時の秋の滿月の如くに　佛光の淸淨なることも亦復然く　面部の圓滿なることは猶月の　一切の天人の光を覆翳するが如くなり　猶山頂の夜の火聚の[一三]淸淨に無邊界に顯現するが如くに　能く一切　無明の闇を滅する　世尊の智慧の光は普く照したまふ　佛音は山谷の中に遍滿して　能く外道を伏したまふこと猶師子のごとくに　無我空無願を宣說して　諸の外道をして皆恐怖せしめたまふ　威光は猶摩尼王の　一切の摩尼の光を映奪するが如くに　如來の軀躰の眞金色は　普く世間を照すこと諸光に勝れたまふ　如

六丈夫と云ふ。第一卷、同名の解、參照。

【六】功德天子・正意天子。異譯本には蘇尸彌天子・安意天子とあり。

【七】日天子(Sūrya)。又、寶光天子・寶意天子とも云ひ、觀世音菩薩の變化身にして、太陽は其の住する宮殿なりと云はる。

【八】月天子(Soma)。名を寶吉祥と云ひ、大勢至菩薩の化現なりと云はる。

【九】喜王(Pramodyarāja)。

【一〇】金山。須彌の周廻に、黃金にて成れる七重の山あり、此れを七金山と云ふ。

【一一】猶須彌の乃至處るが如くに。異譯本に「譬へば、須彌の諸天居の、大海より出でて高く顯るるが如くに、」とあり。

【一二】火と摩尼と。異譯本に「火光と摩尼の光」とあり。

【一三】「淸淨に」等の一句。異譯本に「能く夜暗を破つて、諸方に顯るるが如くに、」とあり。

來は世間に與に等しきもの無し　況んや復世尊に勝れたる者あらんや　福智と精進と方便等の
一切の功德に能く過ぐるもの無し　世間を救護したまふ大丈夫　我れ今顯見せる功德の海
は　我れをして歡喜して尊重を生ぜしむ　是の故に世尊の足に頂禮したてまつる　我れ已に
勝調御　功德圓滿なる世間燈を讚歎したてまつりて　我れ今有つ所の諸の功德にて　諸の衆生
をして菩提を證せしめんことを　と。

爾の時に、喜王菩薩摩訶薩は、偈にて佛を讚じ已り、十指の掌を合して、諦に佛の身を觀じて、目暫くも捨てずして觀察すらく。法界は甚深にして、解し難く、行じ難く、入り難く、思惟すべからず、知り難き寂靜微細の法にして思量すべからざるを、[一四]諸佛の境界は、內心に觀察して法界に周遍したまへば、如來の智を觀ずるに、世尊の境界には等しき等ひある無し。と。是の觀を作し已つて、如來の智の不思議の境に入らば、方便行中の諸佛世尊も、同一の法性にして異るある無く、思惟觀察したまふ諸佛世尊の、染著する所無きこと猶虛空の如し。と。是の觀を作す時に、[一五]眞如の體性を實證することに入らば、一切の諸法の性も皆是くの如し。と。是くの如き信を生じて、諸佛如來の無礙解脫の門を愛樂し、常・樂・我・淨を知り、佛の身を知つて、是の思惟を作さく。如來の身は、一切の刹に遍うして衆生の前に現じたまへば、諸佛の功德は無量劫に於て說くとも盡すべからず。と。喜王菩薩は是の念を作し已つて、默然として住して法界を觀じたり。

爾の時に、一の慧命の菩薩比丘あつて、名けて[一六]護國と曰ひしが、[一七]舍婆提城に在つて[一八]夏安居を受くること三月、過ぎ已つて衣鉢を執持し、諸の年少なる初學の比丘と共に、諸國に遊行して王舍城の耆闍崛山に至れり。爾の時に、慧命護國菩薩は世尊の前に到り、佛足を頂禮し、右に遶ること三匝し、却いて一面に住り、合掌して佛に向ひ、偈を以て讚じて曰はく。

最勝なる放光の者に敬禮したてまつる　意の虛空の如くなる者に敬禮したてまつる　能く他の

【一四】諸佛の境界は、乃至、周遍したまへば。異譯本には「是くの如くにして、一切の法界觀想することは、唯、佛如來のみ、觀智にて攝受し、現量にて證知したまふ。」とあり。

【一五】眞如の體性も、乃至、是くの如し。と。異譯本に「即、衆生界も亦、如の自性にして、一切の諸法も亦復是くの如し。」とあり。

【一六】護國(Rāṣṭrapāla)。

【一七】舍婆提城。舍衞城に同じ。第一卷、同名の解、參照。

【一八】夏安居。安居に同じ。第二卷、同名の解、參照。

疑網を決したまへるに敬禮したてまつる　三界を超過したまへる尊に敬禮したてまつる　十方の無數の刹土の中にて　如來の功德の事を讃ずるを聞き　彼の國の有らゆる諸菩薩は　歡喜して皆來つて佛を供養せん　菩薩は法の如くに供養し已り　一心に佛の說きたまふ所の法を聽き　法を聞いて歡喜して本土に還り　如來の諸の功德を讃歎せん　如來は行を積んで衆生の爲めにしたまふに　無量無邊の劫を經たまひ　他の爲めに菩提を求めたまふ時に　其の心に初より疲倦ある無かりき　世尊は檀を行じ戒を持したまふこと堅く　羼提と精進と諸禪に遊ぶと　智慧方便とを皆具足したまへり　是の故に大聖尊に稽首したてまつる　如來は四如意と　(一九)諸根諸力諸解脫とを具足したまひ　又衆生の心意識を知りたまへり　是の故に大智海に頂禮したてまつる　諸の衆生の心の念ずる所　身口の作る所の善惡の業を知り　又解脫の方便の等を知りたまひ　世尊は知り已つて爲めに法を說きたまふ　貪欲恚癡は衆生を迷して　能く　(二〇)三惡道に入らしむるを　如來は知り已つて斷除することを教へ　彼の衆生をして善趣に生ぜしめたまふ　過去の一切の諸世尊と　天人魔梵に恭敬せられて　未來に功德の具足せん者とを　世尊は皆悉く了了として知りたまふ　諸佛の淨土の生ずる所の處　菩薩聲聞及び緣覺　天人の眷屬と種姓　壽命の長短とを皆悉く知りたまふ　滅度已後の正法の住すると舍利を供養して廟塔を起すと　法藏を受くる人の若干種とを　調御丈夫は皆悉く知りたまふ

　十力の智慧に障礙無く　悉く能く三世の事に了達して　一切法智の中に入りたまふ　故に我れ大智海に稽首したてまつる　佛には等しき等無く況んや過ぐるあるをや　諸相の莊嚴なる如來の身は　譬へば星宿の虛空に在るが如く　是の故に我れ勝丈夫に禮したてまつる　如來の妙色には與に等しきもの無く　大會の天人の光を映蔽し　釋梵の威德も佛の邊に在つては一切隱沒して皆現れず　身は金山の如くにして垢穢無く　紺髮柔軟にして右に旋り　佛頂

【一九】諸根・諸力・諸解脫。五根・五力・諸禪定を謂ふ。

【二〇】三惡道。三惡趣に同じ。

の顯現せること須彌の如く　無量の功德光明の聚なり　眉間の毫相の放つ大光は　無量無邊にして數ある無く　佛眼は脩く廣くして青蓮の如く　大慈悲を以て衆生を視たまふ　秋の滿月の虛空に行くが如く　如來の面部も亦復爾く　衆生の觀る者は厭足無し　是の故に我れ[三一]面中王に禮したてまつる　猶師子鵞孔雀の安行するが如く　徐歩すること象王の如くにして遊止に大地を震動したまへば[三二]十力大苦行に敬禮したてまつる　手指脩く纖くして愛でざる無く[三三]網縵は珊瑚赤銅の色　臂肘脩長にして立てば膝を過ぎたり　如來の金色身に敬禮したてまつる　足下の輪相は羅網具り　行く時に足跡は猶彩畫の如く　若し頂にて世尊を禮する者あらば　佛光の照曜にて天に生ずるを得　法王は[三四]七つの財寶を具足して　常に法を以て施して[三五]心を調伏し　衆生に教へ詔ぐるに法行を以てしたまへば　我れ今法王を頂禮したてまつる　慈悲を鎧と爲し念を刀と爲し　持戒を弓と爲し智慧を箭とし　此れを以て能く煩惱の怨[三六]生死有愛の增長の種を破りたまふ　自ら度し他の億の衆生を度するに　一切の諸の繫縛を解脫して　能く無畏安隱の路を示し　其れをして常樂の道に至るを得しめたまふ　此の乘を行ずる者は生死を斷ち　恩愛別離の苦ある無く　微妙なる無爲の處に至るを得と　慈心もて法を衆生の爲めに說きたまふ　最勝の世尊を讚歎し已りぬ　一切法中の自在者　此の讚歎の勝善根を以て　諸の衆生をして菩提を證せしめたまはんことを　と。

爾の時に、護國菩薩は偈にて佛を讚じ已り、十の指掌を合して、佛に白して言はく。世尊、我れ心に疑あつて、如來に問ひたてまつらんと欲す。唯願はくば、聽許したまはんことを。と。爾の時に、佛は護國菩薩に告ぐらく。比丘、汝の問ふ所を恣にせよ。我れ當に汝が爲めに分別解說して、汝の疑ふ所を斷じ、汝をして歡喜せしむべし。と。爾の時に、護國は、既に聽許を蒙るや、卽、佛に白して言はく。菩薩摩訶薩は、何等を修行せば、一切の法に於て功德を增長し、究竟の處に到

【三一】面中王。異譯本に「如來圓滿の相」とあり。

【三二】十力大苦行。異譯本には「如來堅固力」とあり。

【三三】「網縵は」の一句。異譯本には「指甲は清淨なること赤銅の如く」とあり。

【三四】七つの財寶。七聖財を謂ふ。第二卷、同名の解、參照。

【三五】心を調伏し。異譯本に「心平等に」とあり。

【三六】「生死有愛」の一句。異譯本に「生滅輪迴に增ある無し。」とあり。

つて自在を得、捷疾の智を證し、決定の智を得て、法に於て明了に一切智に入り、衆生を教化するに、能く疑網を決して一切智を解せしめ、巧方便を以て衆生を濟度するに、言の如くにして行じて常に眞實を宣べ、念佛三昧を得て、善く能く一切の深義を諮問し、聞き已つて能く持して、速疾に一切種智を證得するか。と。

爾の時に、護國菩薩は、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

菩薩の行ずる行は常に決定す　眞實の決定は何從り生ずるか　智慧の大海の分別の處を　願はくば勝丈夫我が爲めに說きたまはんことを　佛身の微妙なるは猶眞金のごとくにして　人天中の勝たる大福聚なり　我等を慈愍して大歸依　清淨の行を我が爲めに說きたまはんことを　云何にして無盡の利たる覺道を得て　總持の甘露は生ずる　云何にして清淨なる智慧海にて衆生の諸の疑惑を斷ずる　無量億劫に生死に在つて　疲倦悔厭の心無く　諸の衆生の逼切の苦を觀て　常に衆生の爲めに利益を爲すか　清淨なる刹土の佛の眷屬　最勝の國土及び壽命　一切の衆事の微妙なる處の　願はくば清淨なる菩提の行を說きたまはんことを　衆魔を降伏し邪見を破り　愛海を枯渴して解脫を得　法行相續して斷絕する無きことを　無上最勝我が爲めに說きたまはんことを　色力財寶及び四辯もて　哀愍歎言して衆をして喜ばしめ　慈悲の雲雨にて一切を潤すこと　願はくば我が爲めに佛の境界を說きたまはんことを　願はくば迦陵頻伽の聲を出して　大梵の雷音にて邪見を破したまはんことを　衆會は渴仰して法の爲めに來りたれば　願はくば解脫の甘露の藥を施したまはんことを　我れ今微妙の道を成ぜんことを欲す　若し法を樂はずんば則ち請はざるなり　法を聞く時至つて恭敬して待てり　唯願はくば爲めに大法寶を說きたまはんことを　世尊我れ願はくば菩提を成ぜんことを　如來は深く我が志樂を知りたまへり　惱亂に爲る故に非ずして佛に問ひたてまつる　善い哉願はくば

【三七】云何にして、乃至、生ずる。異譯本に「何に無盡の大慧智を得て、總持の甘露にて菩提を生ずる。」とあり。

[二八]最勝の行を説きたまはんことを　と。

爾の時に、世尊は護國菩薩に告げて言はく。善い哉、護國、汝今乃ち能く是くの如き義を問ひたれば、多人を利益し天人を安樂にし、亦未來世に諸の菩薩を攝するに於て、大に饒益せん。諦に聽き、諦に受けよ。當に汝が爲めに說くべし。と。護國白して言はく。善い哉、世尊。願はくば、我が爲めに說きたまはんことを。と。佛言はく。護國、菩薩は四法を有たば、能く上の如き清淨の事を成ぜん。何等を四と爲すか。一には、眞實心にして諂曲無きなり。二には、[二九]諸の衆生に於て平等を行ずるなり。三には、[三〇]心念は空を行ずるなり。四には、言の如くにして行ずるなり。護國、當に知るべし、此くの如き四種にて、能く菩薩の清淨の法を得ることを。と。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

若し菩薩あつて心に諂無くして　常に菩提の道を退かず　亦佷戾貢高の意無くば　彼れをば則ち名けて無邊智と爲す　諸の衆生の救護無く　生老病死に逼切せらるるを見　發心して有海より度さんと欲して　能く一切の爲めに法船と作るなり　調伏すること衆生に於て平等に諸の衆生を觀ること一子の如くにし　皆當に救度して解脫せしむべしと　最勝の丈夫は此の心を發すなり　行住坐臥に空門を念じて　壽者と我想とを皆悉く無くするなり　一切の世間は都べて幻の如くなるに　[三一]衆生は愚癡にて迷惑する所を　[三二]大智を菩薩は言說する所にて　之れに依つて行じて行に違失無く　調伏して寂靜に諸過を離れて　能く菩提を求むるを佛子と名くるなり　と。

佛は偈を說き已つて、護國菩薩に告げて言はく。善男子、菩薩摩訶薩に復四種の無畏の法あり。何等を四と爲すか。一には、謂はゆる陀羅尼を得るなり。二には、善知識に値ふなり。三には、[三三]深法忍を得るなり。四には、戒行清淨なるなり。是れを菩薩の四無畏の法と名く。と。

【二八】最勝の行。異譯本に「如來の第一法」とあり。

【二九】「諸の衆生に」の一句。異譯本に「諸の衆生を見て其の心平等に、」とあり。

【三〇】「心念は」の一句。異譯本に「猶虛空の如くに、分別する所無し。」とあり。

【三一】「衆生は」の一句。異譯本に「彼の愚迷をして智慧を生ぜしむ。」とあり。

【三二】大智を乃至諸過を離れて。異譯本には「宣說する所の大覺智の如く、智に依つて所作の事を行じ、過失を調伏して心寂靜に、」とあり。

【三三】深法忍。異譯本に「甚深なる無生法忍」とあり。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

菩薩大名稱は　總持を得る故に由り　最妙の法　如來の宣說する所を受持し　恒常に忘失する無くして　智慧を增長せば　彼等の智は礙無く　一切の法を超過せん　常に善知識に遇うて　助道の法を增し　常に菩提　諸佛の行ずる所の處を說かば　惡知識は火の如くに　燒くを畏るる故にて遠離せん　若し空相の法を聞かば　勇猛に其の心を堅うせん　菩薩我人を離れば　[三四]一切の諸見等しく　戒を持ちて缺漏無くは　其の心調ひ寂靜にして　諸の衆生を教化して佛戒に安住せしめん　と。

佛は偈を說き已つて、復護國に告ぐらく。諸の菩薩は、衆行をば圓滿して究竟の處に到るに、四つの功德あつて、心をして歡喜せしむなり。何等を四と爲すか。一には、菩薩は佛に見えて歡喜を生ずるなり。二には、正法を聞きて歡喜を生ずるなり。三には、一切を捨てて歡喜を生ずるなり。四には、[三五]法忍に順じて歡喜を生ずるなり。是れを四法もて歡喜を生ずと爲す。と。

爾の時に、世尊は重ねて偈を說いて言はく。

菩薩は生ずる所の處にて　常に最勝の人の　威光一切に遍うして　世間を照曜せるに見え　見え已るや心に恭敬すること　天の帝釋に奉ずるが如くなり　衆生を度せん故の爲めに　菩提を求むる時に　佛より正法を聞き　怖れずして歡喜し　一心に信敬し已つて　佛敎に隨順するなり　隨順の法を聞き　忍を得て心に疑無く　諸法には衆生無く　我想も亦復爾りと　常に觀ずること是くの如くにし已り　相を捨てて歡喜を生ずるなり　既に我の相を取らざれば乞ふを見て心踊躍し　城邑と大地と　妻子及び壽命の　一切を布施する時に　其の心初より悔無きなり　と。

佛は、偈を說き已つて、復護國菩薩に告げて、是くの如き言を作さく。四種の法の應當に棄捨す

【三四】一切の諸見等しく。異譯本に「一切の見を離れ」等とあり。

【三五】「法忍に」の一句。異譯本に「無相の深法を愛樂・忍印せしめ、」とあり。

べきあり。何等を四と爲すか。一には、菩薩は居家を棄捨するなり。二には、既に出家し已らば利養を貪らざるなり。三には、諸の檀越に離るるなり。四には、身命を惜まざるなり。是れを四法の應當に棄捨すべきものと爲す。と。

爾の時に、世尊は重ねて偈を說いて言はく。

菩薩は家の過を見て　之れを捨てて出家するや　山林の　人無き寂靜の處に遊止して　男と女と　眷屬及び大衆を遠離し　單に己れのみにて等侶無きこと　譬へば犀の一角の如きなり
意を專にして淨道を求め　得失に心憂ふる無く　欲を少うし及び足ることを知り　諂を離れ憍慢を除くなり　精進に衆生の爲めに　布施して心を調伏し　苦行して禪定を修め　一心に佛智を求むるなり　身と命とを惜まず　愛の眷屬を遠離し　堅心にて菩提を求むる　其の志は猶金剛のごとくにして　若し人來つて割截すとも　恚恨の想ある無く　勇猛心をば增長して
一切智を求むるなり　と。

佛は偈を說き已つて、復護國に告ぐらく。菩薩に四種の悔無き法あり。何等を四と爲すか。一には、禁戒を破らざるは悔無き法なり。二には、阿蘭若の處に住するは悔無き法なり。三には、四聖[三六]種を行ずるは悔無き法なり。四には、多く聞くは悔無き法なり。是れを四種の無悔の法と爲す。と。

爾の時に、世尊は重ねて偈を說いて言はく。

戒を持つこと淨くして垢無きこと　猶摩尼珠のごとくなれども　貢高の心にて　我れ能く戒を持つと言ふことを生ぜず　復此の戒を以て善く　多くの人に轉教して　常に是くの如き望を懷くなり　佛の戒を成就せしめんと　彼等は空閑　清淨なる蘭若の處に住し　亦我の想　及以び壽者の想をも生せず　男女の色を觀察すること　猶草木に於けるが如くにして　男女の想　及以び吾我の想を生ぜざるなり　彼れは四聖の種に住して　懈怠諂曲無く　至心に恒に修行し

【三六】四聖種。聖者たる種性の義なり。衣食住の三に於て、得る所に隨つて滿足し、及び斷惡・修善を樂むを謂ふ。別に又、比丘・比丘尼・沙彌・沙彌尼の出家の四衆を謂ふ事なり。但し、異譯本には「四乘の數」とあれど、誤譯なるべし。

て　放逸より遠離するなり　多聞の功德を求めて　精勤に常に修習し　願はくば一切智　最上なる功德の處を成じて　衆生の牢獄に處つて　救護する者ある無く　生死に輪轉して　財を求めて以て自ら給せるに　我れ當に法船を求めて　彼の生死の　煩惱海の衆生を濟度し　其れをして彼岸に至らしむべく　衆生の歸依無く　亦救護する者も無く　衆生は有爲に在つて　能く其の出づることを令くする無きに　我れ當に導師と作つて　之れを救ひて解脫せしむべからんことを　是の故に我れ心を發して　菩提の道を求むるなりと　と。

佛は偈を說き已つて、復護國に告ぐらく。菩薩に〔三七〕四種の調伏の行の應當に之れを行ずべきあり。何等を四と爲すか。一には、善處に生じて常に諸佛に値はんことを願ふなり。二には、師長に供養して報を求めざるなり。三には、常に空閑を樂んで利養を棄捨するなり。四には、〔三八〕無礙辯・頭陀忍の法を得るなり。是れを四種の調伏の法と爲す。と。

爾の時に、世尊は重ねて偈を說いて言はく。

菩薩は勇猛に山林を樂み　常に人に從つて利養を求むることをせざるなり　恒に深智の無礙辯を得て　善く諸の法相に通達し能ふなり　常に諸の師長に供養するに當り　師教に隨順して違背する無きなり　生ずる所の處に隨ひ諸佛に値ひ　供養し恭敬して菩提を求むるなり　常に勝處の高遠と名くるに生じ　若し天上に生れば天中の尊として　又菩提の道を成就するを得て　諸の衆生をして十善を行ぜしめんと　佛の功德を念じて常に歡喜して　我れも亦久しからずして佛道を成じ　既に正覺を成じて　功德滿たば　衆生の　生死の　苦を度脫せんと
と。

佛は偈を說き已つて、復護國に告ぐらく。菩薩に四種の法の淨菩提の行あり。何等を四と爲すか。一には、菩提を行ずる時に心に瞋恨無きなり。二には、眷屬・宮殿・財寶を棄捨して樂んで山林に處

〔三七〕四種の調伏の行。異譯本には單に「四種の法」とあり。
〔三八〕「無礙辯」の一句。異譯本には「甚深の法忍に於て、具足し成就するなり。」とあり。

り、亦己れの功徳をも稱説せざるなり。三には、布施を行ずと雖も果報を求めざるなり。四には、精勤して法を樂ひ師の過を見ざるなり。是れを四法の淨菩提の行と爲す。と。

爾の時に、世尊は重ねて偈を說いて言はく。

其の心清淨にして怨恨無く　亦人の過罪を求めず　自ら諂曲ならず染著無くして　大道を行じて菩提を求むるなり　深く居家は是れ苦の本にして　惡友に親近して正念無きを觀じ　是の故に棄捨して出家を行ひ　山林に處つて解脫を求め　空閑に遊行して寂靜をば樂み　永く眷屬の恩愛の念を斷ち　身及び壽命を惜まず　獨歩して畏るる無きこと猶師子のごとく　乞食して身を支へて常に足ることを知ること　猪飛禽の儲積無きが如く　天及び人中に生ずることを樂はず　唯無上の菩提の道を求め　獨行して侶無く唯一のみなれど　恒に恐怖せざること師子の如く　諸の煩惱を畏るること野獸の如く　若し利養を得とも心に喜ばざるなり　諸の衆生の恒に放逸なるを觀じて　慈悲もて爲めに之れを破らんと誓願し　我れ諸の衆生を救護せん爲めに　常に當に熾然として勤精進すべく　凡そ出す所の言は恒に哀愍にして　憎愛の人に於て常に笑を含み　一切に著せざることも亦風の如くにして　唯當に丈夫の行を求むべしとなり

常に樂んで空無相を行じ　有爲の法の幻化の如くなるを觀じ　諸根を調伏して意は廣大に行住に常に甘露の法を樂み　常に佛教に依つて大道を行じて　恒常に內心を清淨にし　陀羅尼及び辯才を求め　諸苦を荷負して菩提を求むるなり　菩薩は常に觀ずること是くの如くにして行ぜば　利益を現行して歡喜を生ずれども　若し菩提を愛樂せずば　是の人は惡として造らざる無きなり　と。

佛は偈を說き已つて、復護國に告ぐらく。菩薩に四種の墮落の法あり。何等を四と爲すか。一には、他を恭敬せざるなり。二には、恩に背きて諂曲なるなり。三には、多く利養・名聞を求むるな

り。四には、善を詐つて德を揚ぐるなり。是れを四種の墮落の法と爲す。と。

爾の時に、世尊は重ねて偈を說いて言はく。

彼れは父母及び師長に於て　常に憍慢を懷いて恭敬せず　恩養に違背して心諂曲に　諸根は散亂して愚癡多きなり　常に利養を念じて休息せず　諂曲し詐つて精進の相を現し　自ら持戒及び苦行は　一切己れに如く者ある無しと謂ふなり　惡口麁言して鬪諍を喜び　常に人の過を求めて休息せず　彼れ恒に沙門の　行に違離して　田作及び販賣を營理するなり　未來世の中の諸の比丘は　功德及び戒行を棄捨して　嫉妬鬪諍を懷く故を以て　我が正法を覆滅損壞せん　彼れは菩提を去ること甚だ懸遠にして　亦復七聖財を遠離し　解脫の八正の路にも違背すれば　五道の生死の中に流轉するなり　と。

爾の時に、世尊は此の偈を說き已つて、復護國に告ぐらく。菩薩に四種の障道の法あり。何等を四と爲すか。一には懈怠なり。二には不信なり。三には我慢なり。四には瞋恚なり。是れを四種の障道の法と爲す。と。

爾の時に、世尊は重ねて偈を說いて言はく。

懈怠不信闇鈍の心もて　常に我慢及び瞋恚を爲し　忍辱の諸比丘あるを見るや　驅逐して塔寺より擯出するなり　若し利養を得ば心歡喜して　各我れは是れ常住の者なりと言ひ　恒に方便を作して人の短を求め　何人にても過あらば我れ治罰せんと　是くの如き人は法を去ること遠ければ　憎嫉の功德にて三塗に墜ち　諸佛の微妙なる法を厭惡すれば　是の人當に猛火の中に入るべし　彼の人惡を造つて休息せざれば　必ず當に具に苦中の苦を受くべければ　是の故に汝等菩提を求めて　惡道に墮せることを後悔せしむる無かれ　無量億の劫に佛乃ち出でて　諸の衆生の爲めに利益を爲すのみなれば　汝等既に善趣の身を得たれば　應に放逸を

捨てて解脱を求むべし　と。

爾の時に、世尊は此の偈を說き已つて、復護國に告ぐらく。菩薩は須く[三九]四種の福伽羅を捨てて、親近するを得ざるべし。何等を四と爲すか。一には、惡知識に親近することを得ざれ。二には、[四〇]見を執する人に親近することを得ざれ。三には、法を謗る人に親近することを得ざれ。四には、利養を貪る人に親近することを得ざれ。是れを四種の人に親近することを得ざれと謂ふなり。と。

爾の時に、世尊は重ねて偈を說いて言はく。

能く惡知識を捨てて　善知識に親近せば　菩提の道の增長すること　猶月の漸く圓滿なるがごとけん　見を執る人に遠離し　及び我壽等を捨て　佛道を求むる故の爲めに　之れを棄つること毒器の如くにせよ　佛法　寂靜の甘露の味を誹謗するものには　若し菩提を求めんと欲せば應に避くること糞穢の如くにすべし　利養を貪るものを遠離し　亦惡行の人をも捨てて是等に應に近くべからざること　猶火坑を避くるが如くにせよ　若し衆魔を降し　無上の法輪を轉ぜんと欲せば　第一の利を欲求して　速に惡知識に遠ざかれ　愛及び憎惡　利譽亦嫉妬をも捨てて　若し無上道を求めば　常に佛智を修めよ　と。

爾の時に、世尊は此の偈を說き已つて、復護國に告ぐらく。菩薩は四種の法を有たば、未來の苦を受けん。何等を四と爲すか。一には、智有る人を輕じ慢るなり。二には、常に嫉妬の心を懷くなり。三には、一切の法に於て信心ある無きなり。四には、淨智の法に於て常に疑うて、[四一]忍無くして利養を求むるなり。是れを四法にて未來の苦を受くと謂ふ。と。

爾の時に、世尊は重ねて偈を說いて言はく。

佛に侍する人智有る者にして　一切の天人の應に供養すべきに　而も反つて貢高にして憍慢を懷く　是の故にて彼れは無邊の苦を受くるなり　[四二]淨法の中に於て心に忍無く　利養の皆法に

[三九] 四種の福伽羅等。福伽羅は卽ち新譯の補特伽羅(Pudgala)にして、此所にては單に「人」を指す。
[四〇] 見、異譯本には「有見」とあり。
[四一] 忍。認許の義にして、卽ち信解を指す。
[四二] 淨法の中に於て心に忍無く。異譯本に「三寶最上の福田に、而ち信解して歸敬を行ずる無く、」とあり。

非ざるを求むる所にて　常に憍慢を懷きて貢高し　智有る者を見て恭敬せざるなり　佛法の中に於て信解する無く　賢聖の衆に於ても亦復然れば　此の人常に三惡道に遊び　若し人中に在りとも愚癡多きなり　彼れ人間の壽命を捨て已るや　大地獄に在つて劇苦を受け　若し此の劫盡きば餘方の　畜生餓鬼に生れて亦復然るなり　若し世間の燈　能く諸苦を盡せる勝丈夫と作らんと欲求せば　常に當に三途の業を遠離し　諸の功德を修めて菩提を成ずべきなり

と。

爾の時に、世尊は此の偈を說き已つて、復護國に告ぐらく。菩薩に四つの繫縛あり。何等を四と爲すか。一には、他を輕んじ慢るは、是れ菩薩の繫縛なり。二には、[四三]世俗の定に於て其の心樂著して、究竟なるを求めざるは、是れ菩薩の繫縛なり。三には、自心を守らず智慧未だ成らずして、放逸を行ふは、是れ菩薩の繫縛なり。四には、利養を求めんが爲めにて他の家に入るは、是れ菩薩の繫縛なり。護國、當に知るべし、是れを菩薩の四種の繫縛と謂ふことを。と。

爾の時に、世尊は重ねて偈を說いて言はく。

恒常に他を輕んじ慢り　樂んで世間の善に住し　諸見の縛に貪著すること　象の深き泥に沒せるが如きなり　樂うて白衣の家に入り　常に放逸を懷き　闇鈍にして智慧無き　此の行を繫縛と名く　諸有の苦を斷じ　老病死を遠離せんと欲せば　當に憍慢を捨てて　常に菩薩の道を行ずべし　[四四]無邊の苦を受け　諸の樂事を棄捨し　亦憎愛を離れれば　佛の染著無きを成ぜん　と。

汝等常に應に六度　[四五]諸地の諸智諸力等を行ずべく　一切の功德にして若し成就せば　常に死の羅網を解脱すること得ん　我れ往昔の無量劫に於て　諸の衆生の爲めに菩提を求め　常に布施を行じて以て調伏し　恩愛を捨離して正道に住したり　恒に阿蘭若を捨離せず　苦行羸瘦

【四三】世俗の定。異譯本には「世間の事に於て、方便して趣求す。」とあり。而して次の偈文と對照せば、「定」は當に「善」の如き語と爲すべきが如し。

【四四】無邊の苦を受け。異譯本には「無邊の諸苦を滅盡し已り、」とあり。

【四五】諸地の諸智・諸力等。異譯本には「三身・五智・十力・等、」とあり。

して菩提を求め　熾然たる精進にて懈怠無く　最勝なる丈夫の智を求めたり　諸の衆生の獄
を有ち　輪轉して生死の五道の中に在るを見　一切を慈念して大悲を起し　是の故にて菩提の
道を求めたり　愛子及び妻妾を捨て　亦資財の七寶等　壽命國土及び大地をも捨てたるは
菩提の佛智を求めん爲めの故なり　我れ昔勝山林に處れる　時に仙人と作つて　(四六)忍辱と名け
たるが　王　(四七)歌利の爲めに鼻耳を截られ　血は變じて乳を爲ししも恚恨する無かりき　往昔
亦曾て　(四八)睒子と作り　慈孝もて二親を供養せる　時に迦夷の箭を被つて中てられしが　爾の時
も亦瞋恚の想無かりき　身命を惜まずして高巖より投じたるは　諸佛の善言を求めん爲めの
故なりしも　爾の時も亦身命の想無かりしは　菩提の大事を成ぜん爲めの故なりき　往昔
飢獸を慈愍し　身肉もて八虎に充て濟ひしが　爾の時空中にて諸天衆は　讃じて言はく善い哉
大丈夫と　往昔樂うて大布施を行じ　曾て　(四九)淨行婆羅門と作り　衆生の貧苦を憐愍せる故
に　海に入つて如意珠を求めたり　還つて海神に爲つて盜竊せられざれど　我れ時に勇猛に
大海を抒み　時に尋いで珠を得て閻浮に還り　貧苦の諸衆生を濟ふに用ひたり　亦曾て王と
も作つて　(五〇)蘇摩と名け　乃至命を失へども妄語せずして　諸王は我れに因つて皆解脱したれば
名聞廣く十方に流れたり　我れ昔曾て貧窮の人を見　時に我れ王爲りしが身を以て施し
彼れをして巨富に財寶を多からしめたる　是の故に我れを一切施と號したり　我れ昔曾て
(五一)尸毘王爲りしに　鴿あつて恐怖し來つて我れに投じたれば　我れ身肉を以て彼れの命に代へ
彼れをして恐怖を離るるを得しめたり　我れ昔王と作つて師子と名け　身重病に遇ひて醫
は藥を授けしに　時に病人あつて此の藥を乞ひたれば　我れ命を愛せずして先づ施與せり
我れ昔修行して衆生の爲めにせるは　曾て王子　(五二)蘇達拏と作りし　時に人あつて來つて妻子
を乞ひたれば　我れ愛惜せずして盡く施與したり　曾て菩薩と作つて　(五三)嚴熾と名けしが　才

【四六】　忍辱と名け。異譯本には「忍辱を行じ」とあり。
【四七】　歌利(Kali)。古昔、波羅奈國の王として、强惡無道なりしと稱せらる。
【四八】　睒子(Sāma)。異譯本に婆囉多(Bharata)とあり。睒子卽ち睒菩薩の盲目の兩親に孝養を盡したる說話は佛說菩薩睒子經、佛說睒子經等に見ゆ。第一卷一八三頁四行に「孝子の睒ふが如きを現し」とあるは「孝子睒の如きを現し」と訂正し、註〔五〕は除くべきことを玆に附言す。
【四九】　淨行婆羅門。淨行は梵志と云ひ、婆羅門行を修する者の通稱なり。而して異譯本には摩納縛(Mānava)とあり。
【五〇】　蘇摩(Sutasoma)。
【五一】　尸毘(Sibi)。異譯本には「能捨士」とあり。
【五二】　蘇達拏(Sudāna)。
【五三】　嚴熾。異譯本には「妙牙王」とあり。而して次の「淨威」の說話と同一人の者として說きあり。

徳の國王を化せん爲めの故に（五四）八萬四千年を經るまで　勤行精進して始めて化を受けたり　亦王子と作つて淨威と名けしが　佛の塔前に於て自ら身を然して　恭敬して十力　無上最勝の兩足尊を供養せり　曾て國王と作りて（五五）月光と名けしが　時に（五六）梵志の可畏と名くるあつて我れに從つて身首を求索せしかば　我れ愛惜する無く　頭を以て施せり　又國王と作つて（五七）福德と名けしが　諸の聚落街巷の中に於て　醫藥及び飲食を積み滿して　一切の諸の衆生に擬ひ施せり　曾て大王と作つて（五八）日淨と名けしが　端正なる妓女は千人あつて　七寶の瓔珞に體を莊嚴せるを　心に愛惜せずして布施に用ひたり　又國王と作つて（五九）寶髻と名け　七寶の天冠の首を莊嚴したると　最妙なる華香にて嚴飾したるとをも　亦一切の人に布施するに用ひたり　又國王と作つて知足と名けしが　手脚柔軟なること兜羅の如く　色の妙にして清淨なること蓮華の如くなりしをも　亦以て衆生等に布施したり　（六〇）又商主と作つて師子と名けしが　羅刹の女の人を害せんと欲するありしを　能く方便を以て彼れを驅使して　商人を洲渚に安置したり　又商主と作つて善眼と名け　衆五百を將ゐて七寶を採りしが　諸の羅刹の美女に像せたるありしを　亦商人をして彼の難を脱せしめたり　曾て王子と作つて（六一）福焰と名けしが　妻妾妓女は數億あつて　端正殊妙なること猶天女のごとくなりしを　之れを捨てて出家して愛戀する無かりき　又商主と作つて（六二）金色と名けしが　時に如來の無垢と號せるありしに　彼の佛前に於て十指を然して　最勝の兩足尊に供養したりき　又國王と作つて（六三）華眼と號せしが　一切が瞻仰して心に厭くこと無き　是くの如き妙眼を布施に用ひたるは　一切の衆生を憐愍せるが故なり　又菩薩と作つて（六四）多髪と名けしが　婦人の其の夫を喪ひ　晝夜思念して纏綿を捨つる能はず　裸形にて心に狂を發するを見　菩薩は爾の時に慈悲を生じ　化して死夫と作つて喪妻に言ひ　漸漸彼の狂婦を教化し　還醒悟して本心を得ることをせしめたり

【五四】八萬四千年。異譯本には「當時壽千歲を獲しが、八十四年苦行を修し、」とあり。
【五五】月光。異譯本には無垢王(Vimala)とあり。
【五六】梵志の可畏。異譯本には「惡眼婆羅門」とあり。
【五七】福德。【五八】日淨。異譯本には二者を合同して、月光王(Candraprabha)の事蹟と爲しあり。
【五九】寶髻。異譯本には輸婆王(Śuba)とあり。而して、次の「國王」の說話を寶髻王(Batnacūda)の事として說きあり。
【六〇】又、商主と作つて師子と名けしが、乃至、(次節)又、商主と作つて善眼と名け。異譯本には「安意王(Dhṛtimat)と爲りし時に、商主の星賀と名くるあり等、」とあつて、次節と一括して王が商主を助けたる事と爲せり。
【六一】福焰。異譯本には妙眼王(Sunetra)とあり。
【六二】金色。異譯本には此れに當るべき者缺けて無し。
【六三】華眼。異譯本には法財王(Kāñcana-

又菩薩と作つて[六五]普瞻と名けしが　一人の病んで羸困せるあるを見　我れ爾の時に於て慈悲を生じ　己が血肉を以て彼れに施すに用ひたり　又國王と作つて[六六]華敷と名けしが　一人の病困篤なるあるを見　我れ彼の人に於て慈心を起し　骨髓を破つて彼れの病を療せり　又國王と作つて[六七]成利と名けしが　一人の甚だ貧窮なるあるを見て　施すに一切の諸財寶を以てし　及び愛する命をも捨てて心に戀ふる無かりき　又國王と作つて[六八]信幢と名けしが　兩手は柔軟にして輪相を具したるを　時に人の來つて我が手を乞ふありたれば　菩提を求めん爲めに彼れに施すに用ひたり　又國王と作つて[六九]普現と名けしが　四天下を有つて財寶多く　豐樂安隱にして男女盛なりしを　菩提を求めん爲めに布施に用ひたり　又王女と作つて[七〇]智意と名けしが　其の身は白淨にして甚だ柔軟なりしを　慈悲もて歡喜して股肉を割き　及び血を以て施して心に悔ゆる無かりき又[七一]女人と作つて銀色と名けしが　金色城中に婦女の　新に產んで飢渴して子を食はんと欲するありしを　我れ兩乳を割いて之れを施すに用ひたり　又國王と作つて聞德と名けしが　多饒の最勝なる諸の瓔珞　金銀七寶の諸の車乘の　世間の捨て難きをば　皆能く施したり　[七二]又王子と作つて知恩と名けしが　人の海に墮ちて無恩と名けしものあり　無恩は寶の爲めに我が眼を壞りしも　我れ爾の時に於て心に恨まざりき　又過去を念ふに戰夫と作つて　大陣の中に在りしが心に殺すこと無く　寧ろ自ら身を喪ふとも人を害せじと　乃至蟻子にも殺の想無かりき　又過去を念ふに曾て雉と作つて　恭敬して尊者を供養し　同類の老少をも皆給恤せしが　爾の時にも亦憍慢の心無かりき　又過去を念ふに獼猴と作り　山に在つて獵師に逢値せしが　諸の獼猴の衆は皆我れに歸したれば　我れ慈心を懷きて彼れの命を救ひたり　又過去を念ふに象王と作りし　時に國王の執縛する所を被りしが　我れ父母の盲ひて目無きに　分け捨てられたる身命を念うて飢うれども湌せざりき　又過

---

varna)とあり。

【六四】多髮。異譯本には蓮目王(Utpalanetra)とあり。

【六五】普瞻。【六六】華敷。異譯本には兩者の說話を合同して「大醫王」(Vaidyarājan)とあり。

【六七】成利(Arthasiddhi)。

【六八】信幢。異譯本中、此れに當るべき者には、福光王(Puṇyaraśmi)とあり。

【六九】普現(Sarvadarśin)。

【七〇】智意。異譯本には大智(Jñānavatī)とあり。

【七一】又女人と作つて、銀色と名けしが。異譯本には「時に一女の色相と名くるあり。」とあつて、前節と合して、前の王女に救はるる者と爲したり。

【七二】又王子と作つて乃至無恩と名けしものあり。異譯本には「復商人の海浪に漂はさるるを見我れ海の內に於て救うて彼れを得しに—」とあつて同じく前節の國王の所爲と爲しあり。

去を念ふに羆い身を受けしが　人あつて道を失へるを我れ救養せしに　彼れは獵師を將ゐて反つて我れを害せしも　我れ爾の時に於ても亦恨むこと無かりき　又過去を念ふに象王と作りし　時に獵者の箭の著くる所を被りしが　我れ菩提の功德を求むる故に　牙を以て彼の人に奉施したり　又過去を念ふに雉の身と作つて　曠野の缺林の裏に在りしが　彼の林の火に爲つて焚燎せられし　時に我れ林を救はんとて　[七三]天より華を雨せり　我れ昔曾て九色の鹿と作り　水を飲み草を食ひて恒に河邊(にありしが)　其の水深廣にして漂流急なるに　人あつて河に墮ちたれば我れ之れを救ひたるを　其の人財を貪つて王の募を受け　多く兵衆を將ゐ來つて我れを害したれど　我れ菩提を求め慈悲を行じて　彼の人の所に於ても亦恨むこと無かりき　又過去を念ふに曾て龜と作り　商人を濟度して海を過らしめしに　五百の商人は我が肉を食ひたれど　我れ時にも亦瞋恨の想無かりき　我れ過去を念ふに菩提を行ぜんとて　曾て魚身と作つて水裏に遊ぎ　一切を憐愍して身命を捨てたるに　百千の衆生は來つて我れを食ひたり　我れ百千の衆生の病めるを見　身を化して藥と爲ること猶山の如くにし　衆生をして病苦を除かしめんと欲して　變じて蟲身と作り名けて　[七四]月と爲せり　又念ふに曾て師子王と作り　巨身大力ながら仍慈を有ちたれば　時に毒箭を被つて中射せられしも　彼の人の所に於て慈愍を起したり　又過去を念ふに馬王と作つて　身色白淨なること猶珂雪のごとく　常に大海高山の頂に在つて　諸の商人の羅刹の難を度せり　又過去を念ふに菩提を求めんとて　[七五]曾て國王と作つて居耶と名け　五欲の諸患多きを見て　婬女の諂誑の言に隨はざりき　又過去を念ふに曾て兎と作り　常に諸兎を化するに善事を以てせしが　時に仙人と居處を同うせしに　身を捨てて火に投じて仙の飢を救ひたりき　又過去を念ふに鸚鵡と作つて　常に多饒なる華果の林に處りしが　枯樹の恩を報いんとて捨て離れず　枯樹を釋し變じて華果を生ぜしめたり

【七三】天より華を雨せり。異譯本に「天より香花を雨したれば、火は自ら滅したり。」とあり。

【七四】月。異譯本に俱蘇摩(Kucaumya)とあり。

【七五】「曾て國王と作つて」の一節。異譯本には「昔飛鳥の軍拏羅(Kunāla)と作つて」とあつて、鳥類の事と爲しあり。

又念ふに曾て獼猴の王と作りしが　諸の獼猴の龍の害を被るを見　遂に獼猴に教へて竹筒にて飮ましめたれば　獼猴は悉く諸龍の難を免れたり　又復重ねて念ふに鸚鵡と作つて　人の稻穀を取つて二親を養ひしに　稻主我れを執へて瞋恚を生じ　云何ぞ我が熟せる苗稼を盜むかと　我れ即報じて言はく汝種うる時に　一切の衆生等に施すと云ひたれば　我れ今取つて以て父母を養ふにて　是の故に名けて偸盜と爲さずと　稻主即時に歡喜を生じて　我れは是れ禽獸にして汝を人と爲す　善い哉鸚鵡智慧を有ち　能く孝養を懷きて父母に供することや　我れ今從り去ぎては稻を以て施し　汝の二親に供養するに任さんと　是くの如くに過去の無量の事は　苦行として作さざるある無かりしも　未だ曾て疲倦の意を懷くことあらずして　以て無上の清淨なる道を求めたり　若しは內若しは外の有らゆる物にて　一種として　持戒忍辱精進禪　無量の方便及び智慧を起さざることある無く　皮肉骨髓及以び血をば　以て一切の諸の衆生に施したり　往昔山林の中に住し　勇猛に精進して身は枯竭せしも　佛說の大小乘を求め衆生に教示して道に入らしめんと爲せり　常に樂んで頭陀の所に在つて　曾て修行せる所をば棄捨する無く　是くの如き一切の難苦行を　我れ往昔に於て行ぜざる無かりき　我れは說かん未來の衆生の等は　我れの此等を聞かば輕笑を生じ　[七六]行の一句の偈をも信受せず　反つて更に是くの如き法を毀謗せんことを　斯れ衣食等に貪著するに由つて　[七七]心に常に覺觀して睡眠多く　諂曲にして法を毀つて慚愧無く　正教を破壞して功德無ければ　此の微妙なる寂靜の法を聞くや　各共に相ひ諍うて佛語は非ずとし　我が師は多聞なること猶海の如くにして能く講じ能く說くこと最も第一なれども　彼れも亦此くの如き法を行ぜざれば　決定して是れ佛の所說に非ず　次前にも亦耆老の等あつて　昔より已來の諸名德なりしも　亦未だ是くの如き法を行ぜしことを受けず　汝等虛妄の事　中に於て我無く壽命無しとし　亦富伽羅有りと說

【七六】行の一句の、乃至、毀謗せんことを。異譯本には「此の大行勝妙の因を聞き、返つて誹謗を生じて信受せず。」とあり。
【七七】「心に常に」の一句。異譯本には「常に我慢懈怠の心を生じ。」とあり。

かざるを求むる勿れ　唐しく自ら疲勞して福祐無く　徒に精勤苦行の等を修するのみ　既に法有つて大乘と名くと言はば　云何ぞ復空無我にして　衆生無く作者無きを以て　是の故に中に於て須く求むべからずと言はん　此等の文句は假設の作にして　亦外道邪意の說の如くにして　如來は是くの如き事を說きたまはずと　諸の比丘を呵罵毀辱するものにして　此等は不善にして羞恥無ければ　姦僞欺誑をば作さざる無きなり　來世に我が教法の中に於て　形相のみを作せる諸の比丘は　內に嫉妬を懷き慢は心を覆ひ　手足擾れ動いて威儀を失ひ　袈裟は恒常に兩の角を垂し　身に法衣を被ながら常に村に在り　俗間に遊んで恒に酒に醉ひ　身に法衣を著けながら俗人に親み　正教たる功德の聚を棄捨して　樂うて俗人に信使を通ずるを爲し　牛馬諸畜等を畜養し　奴婢作人にて不淨の物もて　種を田園に蒔きて恒に心を亂し　心に諸惡を樂んで善行無く　亦善知識に親近せず　口に恒に語言を擇ばず　身中に惡行を作さざる無く　佛塔衆僧の物を貪り取れば　何に況んや已れの物にして肯て施さんや　他の持戒の諸比丘を見れば　誹謗して眞の梵行に非ずと言ひ　禁戒を護らずして威德無く　樂うて俗家に處つて他妻を侵し　白衣すら婦を畜へて猶愧を懷くに　彼の惡比丘は貪ること轉甚だしく　妻子を畜養して求むること厭かず　諸の俗人と別あること無し　若し檀越の請じて供養して　衣食湯藥等を施與するあらば　他の信施を受けながら善念無く　唯貪欲を增して彼の妻を犯し　心常に女色の邊に繫念し　煩惱に隨順して聖行無く　方便して諸の婦女を誘誑し　俗人を教化して欲を斷たしむるに　貪欲は惡道たる　地獄及以び畜生等に墮つと謂ふなるに　然も自身に於ては教に依らざれば　云何ぞ傳へて他を教化することを欲せんや　此の人三業は法の如くならざれば　有つ所の眷屬にも亦復爾く　晝夜に聚り話して休息無く　唯五欲の諸の世中を論じ　門徒を受け畜ふも唯驅使するのみにて　終まで教悔するに善道を以てすること無く　多く弟子

【七八】「樂うて俗人に」の一句。異譯本に「書信を馳騁して四方に往き」とあり。

を受けて　自をば圍遶し　己れの徳を顯して大に名利を招き[七九]外に異相を現して慈悲を詐り諸の徒衆を攝むれども利を求めずとすれど　門徒たる眷屬には病患のもの多く[八〇]乾枯の病癩癬瘡等　唯是れ雜類下人の輩なれば[八一]終まで聖種を教示する等ならず　戒聞定慧をば悉く棄捨し　比丘の作す所の事を行はざれば　道に非ず俗に非ずして名くる所無きこと　猶爛壞腐朽の木の如く　諸の律儀に於て輕賤を生じ[八二]布薩[八三]毘尼にも亦復然く　自在に遊行して師教に背き搪突すること象の醉ひて鈎無きが如く　或る時には詐つて山林に現在すれども　心には常に聚落の事を念じ　三毒の煩惱は恒に熾然として　暫時も寂靜にて住する能はず　諸佛の教誡の事　及以び頭陀の功德等を忘失し　我慢貢高身中に滿ち　畏るべき阿鼻獄に墮するなり　晝夜に恒に國土の事を論じ　亦復賊盜をも論說し　身心專ら親緣の事を營みて　禪定及び智慧を捨離し　設ひ作す所ありとも麁事を樂み　心自安に存する故に營造をし　假使ひ僧伽藍を營理すとも　房舍に貪著して眉を恒に顰め　自の身口意は調柔せざれば　徒衆も相ひ學びて亦復爾り　彼れ惡比丘は設ひ寺を造るとも　專ら己身及び眷屬の爲めなれば　若し比丘あつて彼れに順從せば　即便に安置攝受して住せしむれど　若し持戒の諸大德の　方便して善く能く法利を說き　自ら能く調伏し亦他をも調ずるものあらば　是くの如き比丘をば終まで受けずして此の房は現に今我れ受用し　餘の房は是れ我が弟子の住にして　自も外も已に諸の同學に屬すれば　汝は去つて此の中に處り停る無かれ　現今有る所の牀鋪は　各他に付して屬する所あるを以て　更に剩長の相ひ容るべきもの無く　亦衣食も無ければ汝　須く去るべしとて　暫時すら須つ所をば倘與へず　況んや房舍及び諸物を借すことをや　是くの如くにして[八四]僧次の法を行はざるなり　彼れ惡比丘は俗人の如くに　多く錢財眷屬等を畜へ　我が諸の弟子の如法の者をば　處處に驅り遣つて住することを聽さざれば　彼れ時に我が說く所を憶念し　各悲傷

【七九】外に異相を、乃至、利を求めずとすれど。異譯本に「人前にて談ずるに、己れは慈悲の爲めにして、學徒を要して承事を行ふに非ずとし、」とあり。

【八〇】乾枯の病。異譯本には「風癩」とあり。

【八一】「終まで」の一句。異譯本に「是くの如きを攝受して出家せしむれば、亦、沙門佛弟子に非ず。」とあり。

【八二】布薩（Uparasatha 轉じて Poṣadha）、長養又は善住と譯す。此れに二種あり。出家の法に在つては、半月ごとに（十五日と二十九日又は三十日と）僧を集めて戒經を說き、淨く戒中に安住せしめて、能く善法を長養する者にして、在家の法は、六齋日に八戒を持せしめて、善法を長養する者なり。

【八三】毘尼。毗奈耶と同じ。第一卷、同名の解、參照。

【八四】僧次。僧位の席順なり。法臘即ち安居の年數に由つてこれを定む。

を懐いて山林に入り　嗚呼我が師の微妙の法も　久しからずして悉く滅して復と現れざらんと現に比丘あれども多利を求め　身に法行無くして有德を嫉み　設ひ具戒の功德を行つ者も　彼れが爲めに惡み賤まれて利養無ければ　皆自ら傷歎して城邑を去り　常に空靜なる山林の中に住するなり　癡慢と貢高と諸の惡行と　常に鬪諍と兩舌とを行ふ者にして　世人を欺誑して利養を得て　自ら聖と等しうして異る無しと謂ふ　我が此の法教は功德の藏にして　一切の妙なる功德を具足すれども　來世に破壞して復と現れざるは　持戒無きと我慢との故を以てなり　又寶藏の他に爲つて壞らるるが如く　又華池の枯乾して竭るが如く　猶寶輿の自ら摧折するが如くに　我が法の未來も亦復然り　彼の惡比丘は調伏し難く　我が法行を滅すること餘ある無く　未來の是くの如き惡世の中にて　我が法を破壞することを甚だ畏るべし　是くの如き樂うて諸惡を喜ぶ者は　天人及び善行を遠離すれば　此の身に於て命を捨て已つて從り地獄畜生の中に墮するなり　彼に於て無量の億千歳　具に一切の諸苦惱を受け　後に於て假使ひ人身を得とも　多苦穢惡にして恒に不淨なり　若しは盲若しは聾若しは眼瞎に　恒常に身體に疾病を懷き　顏色醜惡にして見るもの喜ばざれば　常に畏懼を懷いて他に承事するなり　心意を得難く親愛無く　說く所の語言をば信受するもの無く　若しくば是くの如き惡行者あらば　在所に呵責して衆より驅出するなり　彼の人は多饒なる諸病にて苦み　常に杖石にて打ち驅逐せられ　常に飢渴に爲つて其の身を惱され　他人の見る者は常に輕賤するなり

若し是くの如き衆多の苦を聞かば　應に諸惡を捨てて心をば調伏すべく　諸の衆生に於て善行を行ひ　後に於て悔心を生ぜしむる勿れ　若しくは愛を以て佛世尊と　聖衆と持戒と頭陀の法とを敬ふこと　汝應に是くの如き行を勤求すべく　應に眷屬及び名利　此れ皆顚倒して幻化の如くなるを捨つべく　應に有爲は泡と夢との如くにして　恩愛の合會は必ず別離し　一切

の有爲は久しく住せざるを觀ずべく八五正勤諸力等を捨つる莫く八六諸地の波羅蜜を勤求し乃至未だ妙菩提を覺らずんば常に應に一切の行を修集すべきなりと。

爾の時に、佛は復護國菩薩に告げて言はく。善男子、未來世に於て大乘を行ずる菩薩は、富伽羅の等に是等の如き過患あるをば、應に自ら遠離すべし。自ら勤求せして、此の人と共に相ひ習近して正行を勸めざること。自ら諂曲を行ひ、諂曲を行ふ者に親近すること。自ら智慧無くして、智慧無き者に隨順すること。世利を貪求して、恒に厭足無きこと。他家に慳惜し、已れに勝れるを嫉妬し、諂曲詐僞して羞無く慚無く、詐つて聖相を現して自ら尊び自ら重んずること。徒衆眷屬も各相ひ譽讚し、以て名利を求むること。利養を求むる故に常に聚落に入れば既に一切衆生を憐愍せず、亦諸の衆生を教化することを爲さずして、故に常に自ら說いて言はく。我れは平等を有つ。と。恒に是の念を作すこと。云何ぞ他は、我れの是れ衆生の眞の善知識なるを知らん、我れの多聞を知らん。と。實に佛法に於て恭敬の心無く、求法の心無きこと、猶破れたる器の復と用ふる所無きが如きなり。懈怠の人の如きも、成辦するある無く過失を相ひ求むることに方便を行ひ、無智・懈怠にして唯惡をば覺觀し、各各法を破る等の事を論說し、固く惡心を執し、死に至るまで悔いずして、多く慳貪にて畜ふ所の眷屬の亦是の師を學べるを集め、以て自ら圍遶して我が法中に在ること。是くの如くに行ふ者は、凡べて作す所の事をば、明哲に問はず、佛法を求めず、精進の行無かりし故を以て貧窮の家に生れ、八七貧窮の家從りして出家を得たるなれば、我が教中に於て少しの利養を得るや、心歡喜を生じて慚愧無きなり。彼等は倘懺悔の心すら無し。何ぞ能く自ら勝智を覺らんや。彼等は諸佛の功德を棄捨して現在の名利を取り、現在の利を得る故を以て、自ら我れは是れ沙門なりと言ふのみ。

護國、我れ是くの如き富伽羅・是くの如き人等に於ては、我れ其れは八八俗忍に隨順することありと

【八五】正勤諸力等。四正勤・五根・五力等を謂ふ。
「八六」諸地の波羅蜜、異譯本には「妙地の十力波羅蜜」とあり。
【八七】貧窮の家、乃至、勝智を覺らんや。異譯本に「下賤貧窮の家に生れて、少利を見て、來つて佛法に投じ、出家を希ッしたる爲めに、僧行を爲すを得るに及ぶとも、梵行に非ずして、佛の法教に於ては全く成ずる所無し。何に況んや、大智をや。」とあり。
【八八】俗忍。世俗一般の知識の認知を謂ふ。

も說かず。何に況んや、諸佛の大智を有ち能ふことをや。彼等は人天の道にも返し。況んや、佛を成ずる道をや。護國、是等の如き人をば、我れは八種の法を有つて菩提を障礙すと說くなり。何等を八と爲すか。一には、當に三惡道に生ずべきなり。二には、當に〔八九〕邊地・下賤に生ずべきなり。三には、當に貧家に生ずべきたり。四には、顏色正しからざるなり。五には、愚癡にして智無きなり。六には、常に惡知識と相ひ會するなり。七には、諸の病患多きなり。八には、大惡病を得て以て命終を取るなり。護國、此等の八法は、是れ菩提を障礙するなり。所以は何ぞ。護國、我れ亦、但言說あるを以てして菩提を得。とは說かざればなり。我れ亦、詐つて聖者を現ぜば清淨の行あり。とは說かざればなり。我れ亦、諂曲ある者は菩提の行を有つ。とは說かざればなり。我れ亦、多く利養を貪る者は佛を供養する行を有つ。とは說かざればなり。我れ亦、我慢ある者は清淨なる般若の行を有つ。とは說かざればなり。我れ亦、智慧無き者は他の疑を決する行を能くす。とは說かざればなり。我れ亦、嫉妬ある者は淨心の行を有つ。とは說かざればなり。我れ亦、精進せざる者は能く諸の陀羅尼の行を得。とは說かざればなり。我れ亦、功德を樂まざる者にして善道の行を得。とは說かざればなり。我れ亦、他家に慳惜する者は身心清淨の行を有つ。とは說かざればなり。我れ亦、詐つて威儀を現ず者は佛會に值遇し能ふ。とは說かざればなり。我れ亦、樂うで俗家に在る者は清淨なる口業の行を有つ。とは說かざればなり。我れ亦、恭敬せざる者は心清淨なる行を有つ。とは說かざればなり。我れ亦、足ることを知らざる者は法を樂む行を有つ。とは說かざればなり。我れ亦、身命を惜む者は法を求むる行を有つ。とは說かざればなり。護國、我れ六師を呵罵毀呰すと雖も、然も彼の諸の外道は我が法の外に在り。我が法中に入りながら、諸の惡業を作すをば、我れ若く過患を毀辱すること、彼の六師に倍せり。何を以ての故ぞ。彼等は、但自ら口に、我れは是れ比丘なりと言ひながら、而も行無きを以てに爲り、一切の天人の世間を欺誑する故なり。と。

【八九】邊地。都市に遠き僻陬の地を謂ふ。

爾の時に、世尊は重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を說いて言はく。

「威儀は濁亂して恭敬無く　唯我慢を增して名譽を貪り　煩惱覆蔽して心迷醉する　此等は妙菩提を遠離せるなり　名利及び懈怠に耽著し　懈怠增長して正念を失ひ　若く正念無ければ持戒を失ひ　若く持戒無ければ善道を失ふなり　彼の人生れて貧窮の家に在れば　出家を得たれども已に利養に著すること　人の眞金を棄捨して　草穢を擔ひ負ひ以て寶と爲すが如し　名利を求むるに爲り山林に住すれども　彼に至るや諸の等侶を求め　神通辯才の智を棄捨して　名利及び眷屬を現さんことを求むるなり　若し彼れ命終せば惡道に墮し　或は貧窮下賤の中に生じ　懈怠惡色にして威德無きは　斯等は皆我慢に由つて受くるなり　彼れ既に諸の善行を遠離し　亦放逸に由つて正念を失ひたれば　長遠なる大惡道に在つて　億千の劫中未だ脫することを能はざるなり　若し名利を求むとも菩提を得ば　提婆達多は應に是れ佛なるべきも　九〇毘嵐の猛風の物を吹き壞る九一（ごとく）　懈怠無戒も亦復然り　自ら善行を無にして女色を貪り　戒行不淨にして功德を失するは　我が法中に於て用ふる所無き　無智なること猶朽ち爛れたる木の如きなり　若し菩提の爲めに佛法を求めば　何ぞ解脫の行に依らざるを得んや　猶黐と膠との獼猴を縛るが如くに　我慢もて道を求むることも亦復然るなり　我れ昔一句の法を求めん爲めに　身命を棄捨して菩提を爲めたるに　彼の人は懈怠して我が教を捨つること　是くの如くにして我が法を利する無きなり　我れ昔善教を求めん爲めの故に　身を高崖及び火聚に投じ　我れ聞くを得已るや如法に行じて　一切の愛憎等を棄捨せるに　彼の人は我が功德の法を聞きながら　曾て一句をも愛樂せず　法を無にせば云何してか菩提を得しめん　猶盲の前にて道路を說くが如ければなり」と。

【九〇】毘嵐。吠嵐婆に同じ。
【九一】（ごとく）。文意の當然に由つて加へたり。

卷の第八十一

護國菩薩會　第十八の二

爾の時に、佛は復護國に告げて言はく。護國、我れ念ふに、往昔無量阿僧祇劫を過ぎ、復阿僧祇の、稱量すべからざる、思惟すべからざる、譬喩ある無き、計算すべからざる、說くを得べからざるを過ぎて、是の時に、佛の世に出づるあつて、名けて[一]成利慧多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と曰へり。爾の時に、王の名けて[二]焰意と曰へるありき。護國、彼の焰意王の治化の時に、此の閻浮提の縱廣一萬六千由旬なりしが、護國、彼の時に、此の閻浮提の內に二萬の諸城あつて、彼の一一の城に千俱致の家ありき。護國、時に彼の焰意王の自ら住む所の城を、名けて寶光明と曰ひ、東西十二由旬・南北七由旬にして、七寶にて成ぜられ、寶の牆七重にて以て圍遶を爲し、一一の牆間は相ひ去ること八步にして、牢固として壞り難かりき。護國、彼の國の衆生の壽命は、十俱致那由他歲なり。護國、爾の時に、彼の焰意王は初めて一子を生み、名けて[三]福焰と曰ひしが、端正殊特にして身色具足し、世間に雙無く、瞻る者厭くこと無かりき。護國、時に彼の王子の初めて生るる日に、其の生れし處に於て、七寶の藏の自然に出現するあり、其の王の宮內にも、亦七寶の藏の自然に出現するあつて、上の高さ[四]七人なりき。護國、彼の王子の生れし時に、閻浮提の內の一切の衆生は、皆大に歡喜して、踊躍すること無量に、衆生あつて、牢獄に繫ぎ閉ぢられ、枷鎖の身に著きたる者の若きは、自然に解脫したり。護國、彼の福焰王子は、世間の有らゆる工巧・術藝をば、七日の內に於て皆悉く學び成したり。

護國、彼の福焰王子は、[五]日の初分に於れる時に、淨居の諸天あつて、來つて彼の王子に告げて言はく。童子、汝放逸する莫く、應に善く無常を觀ずべし。童子、命は久しく停らずして、後の世に

【一】成利慧。意譯本には成義意（Siddhārtha）とあり。
【二】焰意。異譯本には發光（Arcigman）とあり。
【三】福焰。異譯本には福光（Puṇyaraśmi）とあり。
【四】七人。異譯本に「七人の量」とあり。
【五】日の初分。異譯本には「夜分の中」とあり。

至ることは、是くの如くに速疾なれば、恒に須く觀察して大怖畏を生ずべし。業を造らば必ず受くること、影の形に隨ふが如くなればなり。と。

時に、淨居の諸天は、復童子の爲めに此の偈を說いて言はく。

童子謹愼して放逸する莫く、亦放逸の者に隨順すること莫かれ　放逸を棄捨せば佛に讃ぜられ　若し放逸を受けば諸佛は訶したまふ　常に自ら調順して放逸せず　一切をば能く施して妬嫉する無く　慈悲もて諸の衆生を念ぜば　彼の人は久しからずして當に佛と作るべし　過去の無量の佛　現在及び未來のも　一切善從り起つて　不放逸の道に住し　飲食及び衣服金銀瓔珞等をば　俱致劫に布施して　無上道を求めたまへるに爲れり　手足耳鼻等をも　求むる者に歡喜して施し　眞心に功德を求めば　久しからずして佛を成ずることを得ん　王位威勢の力　妻子及び眷屬の　有爲は幻化の如くなれば　速に捨てて戀著すること莫かれ　壽命は久しく停らざること　坏器の壞れ易きが如く　假借の世も久しからずして　此れ亦常なる定無し　父母及び眷屬は　惡道をば救ひ能ふ無くして　衆生善惡を造らば　影の恒に形を逐ふが如し　[六]多く欲海を求めて　相ひ害して利を爲さざるを　而も濟拔する者無ければ　虛しく疲勞の苦を受くるなり　今他の利を作さんと欲せば、寂なる無上の道を求め　皮肉髓を乾枯すとも　汝以て苦と爲すこと莫かれ　諸佛の世に出でたまふことは難く　寂滅の法は聞き難ければ　勤めて善知識に事へて　能く諸の魔の衆を破れ　惡知識を捨離して　能く正道に住し　惡邪の逕を遮蔽して　善い哉精進に住せよ　汝身命を惜むこと莫く　心を持つこと金剛の如くにし　[七]正しく諸師に道を問ひ　正信の意を捨つること莫かれ　一切の過去の佛は　常に阿蘭若を樂めば　汝も應に彼れに順じて學ぶべく　應に樂んで空閑に在るべし　恩愛　妻子眷屬等　己身及び壽命をも棄捨して　以て廣大なる智を求めよ　と。

【六】多く欲海を求めて。異譯本に「常に生死の海に沈み、」とあり。

【七】正しく諸師に道を問ひ。異譯本に「恒に八正道を修め」とあり。

爾の時に、世尊は復、護國菩薩に告げて言はく。善男子、其に福焰王子は、彼の諸天より此の偈を聞き已るや、十年の内に於て、未だ曾て睡眠せず、未だ曾て戲笑せず、未だ曾て歌舞せず、未だ曾て喜樂せず、未だ曾て踊躍せず、未だ曾て放逸せず。園苑に入らず、眷屬を樂まず、王位を貪らず、資財・城郭に於て樂む心を生ぜず。是くの如くに、一切の内外の諸物をば皆悉く棄捨して、唯禪定に入り靜室に住して、自ら思惟すらく。一切の法は無常にして、强き無く、力無く、堅牢あること無く、暫く現じて滅するなり。王位は、味無く自在ある無く、恩愛は別離し、怨憎は相ひ會す。貪著すべき無きに妄に愛樂を生ずるは、皆愚癡に出る虚妄の誑惑にして、一の實無きなり。唯解脱の寂滅のみあつて樂と爲すに、而も諸の凡夫は、愚癡に醉され、常に樂んで之れに處り、横に優劣の相を生ずるなり。我れ今、此の凡愚の衆中に在つては、應に默然に住して不放逸を思ふべし。と。

護國、爾の時に、彼の焰意大王は、此の童子の爲めに更に別に城を立てて、勝喜樂と名けしが、七重の寶牆の以て圍遶を爲すあり。其の城の南北に七百の街巷あつて、其の街、牆壁は七寶にて成ぜられて、金鈴の羅網にて以て其の上を覆ひ、更に眞珠・衆寶の羅網を以て、重ねて其の上を覆ひたり。一一の巷の首には、皆八萬四千の寶柱あつて、諸の寶柱の上に於て、六萬の寶繩を繫いで共に相ひ鉤連し、諸の寶繩を〔八〕十四俱致の寶の多羅樹に間へ懸けたるを、微風吹き動して妙音聲を出すこと、猶百千の音樂の如くにして、鼓たざるに自ら鳴れり。一一の諸街巷の首に、五百の童女と盛壯なる少年の善く歌舞を解せるとを安置して、一切の衆生の愛樂する故と爲せり。其に焰意王は、復更に一切に告令すらく。汝等諸人、今より已去、晝夜餘の事を作す莫く、唯歌舞を作し嬉戲して、諸の衆生をして歡喜して樂を受けしめ、四方より來る者にも悉く歡喜せしめ、乃至、一つの麁言をも出すことを聽さず。とて、王子をして心に愛樂を生ぜしめんと欲したり。復、巷首に

【八】十四俱致の、乃至、吹き動して。異譯本には「十四俱胝の樂器あり。是くの如き樂器を微風吹き動して、」とあり。

於て、種種の布施の具、謂はゆる衣服・飲食・瓔珞・床敷・氈褥・車乘・輦輿・象馬・牛羊・五行の具【九】、金銀・瑠璃・硨磲・碼碯・珊瑚・琥珀・眞珠等の寶・塗香・末香・燒香・熏香・種種の花鬘等を安置して、若し衣を須つ者には衣を與へ、食を須つには食を與へ、飲を須つには飲を與へ、乘を須つには乘を與へ、其の須つ所に隨つて之れを施與し、更に處處に於て、諸の珍寶等の衆を安じて、諸の衆人の受用する所に擬ひたり。又、城中に於て宮殿を造作し擬して王子の遊戲の處と爲ししが、其の地は皆衆寶を以て間錯し、其の城上に於て、大なる高樓の衆寶にて莊嚴せるを起し、城の中央に於て一の大殿を造り、殿內に千萬の床敷を安置し、殿の四邊に於て諸の園苑を造り、其の園苑の內に諸の樹木あつて、一切の花果・諸の喜樂の樹は具足し充滿せり。護國、彼の園苑の中には七寶の池を造りしが、其の池の四面には四寶の階道あり。何等を四と爲すか。謂はゆる金・銀・瑠璃・玻瓈なり。一つの方面に於て二つの師子あつて、百寶にて成ぜられたるが、彼の二師子は、各香水を吐いて彼の池の內に入れ、其の池の四邊に復各二つの寶の師子あつて、各各水を引いて其の池より出せり。常に優鉢羅華・波頭摩華・俱物頭華・奔陀利華あつて、其の池の四岸に寶樹は圍遶せり。復、樹木あつて、諸の花果の等は周匝し遍滿せり。復、八百の寶樹あつて、是の諸の寶樹をば、諸の寶繩を以て共に相ひ連繫し、一一の寶樹に各繒幡を懸けたり。其の池の四面に、復億の數の寶の多羅樹あつて、其の樹間に於て、繫くるに寶繩を以ひて諸の金鈴を懸けたれば、微風吹き動して微妙の音を出し、百千の樂の鼓たざるに自ら鳴るが如くなり。諸の埃塵を恐れて、大寶網を以て池上を彌く覆へり。彼の殿內に於ては、千萬の七寶の床敷を安置し、諸の寶床の上には各五百種の褥を敷き、殿の中間に於ては一つの高座を敷きたるが、其の座は七寶にて成ぜられて、七人より高し。復、座上に於て八萬俱致の微妙なる衣服を敷き、其の高座の前には、寶の香爐を置きて沈水香を燒き、夜三晝三諸の名華を散じたり。金の羅網を以て彌く殿上を覆ひたるが、其の羅網の邊に金の蓮華を

【九】五行の具。「五欲の具」の誤なるべし。

懸け、彼眞珠の羅網を以て金の網の上を覆ひたり。復、八萬の明淨なる珍寶あつて以て光明を爲し、其の園內に於ても、又九百萬の寶の聚を置き、一一の寶聚の高さは一由旬にして、大光明を出して彼の世界を照したり。護國、彼の園內に於ては、復諸の鳥、謂はゆる鸚鵡・鵠鴿・鴻・鶴・[一〇]俱鷄羅鳥・孔雀・鵝・雁及以び鴛鴦・[一一]俱那羅鳥・迦陵頻迦鳥・命命鳥あつて、彼等諸鳥は、若し鳴せんと欲する時は、皆人の聲の微妙和雅なるを作し、猶諸天の歡喜園の內の諸鳥の音の如くにして、凡べて出す所の聲は、皆王子をして歡喜を生ぜしめんと欲する故なり。又復、別に王子の爲めに厨饍を建立して、日別に五百種の味を辦具し、以て王子に供じたり。

爾の時に、大王は、又國內の諸の城邑の一切の童子に勅し、普く告げて集らしめたる童子の數は、凡そ八十俱致ありしが、其の諸の童子の、或は年始めて二十のもの、或は過ぐる者あつて、悉く能く一切の工巧・技藝を善く解して、嚴飾の鮮潔なるを、皆勝喜樂城に入らしめたり。而して彼の童子等に各父母ありしが、復千萬俱致の婇女を將ゐて、諸の童子の驅馳使役に擬ひ、童子の眷屬も亦皆千萬の童女を獻じ奉り、以て給使と爲し、乃至、國內の大富の長者及以び人民も、亦各千萬俱致の婇女を送りしが、是の諸の婇女は年始めて十六にして、長からず短からず、白からず黑からず、麁ならず細ならず、皆悉く端正なること世間に比無く、善く音樂及以び歌舞を解し、戲笑を善くし、言語は調柔にして、顏色は和悅して、若しは老若しは少をも皆能く慰喩し、一切の技能に悉く善く通達し、身相は具足して、其の口の香氣は優鉢羅華の如く、身の諸の毛孔より栴檀香を出し、微妙淸潔なること猶天女の如くにして、福焰王子の此の宮內に處れるに、婇女の衆等は、常に音樂を作して種種に供養せり。

爾の時に、王子は此の音樂を聞き已るや、是くの如き念を作さく。今は此等は、我が爲めに大怨讎を作して、我が善法を奪ふ。我れ應に棄捨すべし。と。王子は爾の時に、諸の樂事を見て喜ば

【一〇】俱鷄羅鳥。又「拘枳羅鳥」と書す。第二卷、同名の解、參照。

【一一】俱那羅(Kunāla)鳥。又「鳩夷羅」と書す。好眼鳥と譯す。

ず樂まざること、譬へば丈夫の刑戮を被るに臨んで、色欲を見ると雖も歡喜を生ぜざるが如くに是くの如し。是くの如くにして、福焰王子は、彼の女衆に在る時に心歡喜する無く、彼の城内に在つて諸の眷屬と同會聚集するにも、亦歡喜せず。是れより以來十年を經るまで、色相を取らず、聲・香・味・觸等の相を取らずして、唯是の念を作さく。我れ今、何の時に此の怨讎を脫せんか。我れ何の時に於て、不放逸を行じて當に解脫を得べきか。と。爾の時に、諸女は焰意王に白して言はく。大王、當に知りたまふべし、今此の王子は、我等と共に聚つて相ひ喜樂せず、亦樂を受けたまはざることを。と。

佛は護國に言はく。爾の時に、焰意王は、八萬の小王の前後に圍遶せると福焰王子の所に詣り向ひ、知り已るや、流涙面に滿ち遍身戰き掉いて、自ら勝ふること能はず。憂愁・苦惱・迷悶して地に躄れしが、須臾にして復起き、福焰王子に趣き向ひて、偈を說いて言はく。

汝は最妙の大果報を有ちたれば　誰れあつてか汝の爲めに不善を作さん　而も最勝なる樂を受けざれば　汝の樂を受けざるにて我れは憂苦す　願はくば汝　樂を受けて我れに喜を施せ
若し觸れ擾すものあらば我れに向つて說け　我れ能く彼れに極重の罪を與へん　汝觀よ此の城の妙蓮華を　是れ我れ思惟して汝が爲めに作りしものなり　世間に少く所のものは速に當に說くべし　我れ能く示現すること帝釋の如くならん　汝今面目靑蓮の如くたるに　云何ぞ眉を蹙めて暢適せざる　今此の婇女は甚だ殊特にして　微妙淸淨なること諸天に等しく　各各善く諸の技術を解し　歌舞音樂に悉く能く通じたれば　汝應に此れと相ひ娛樂すべきに　云何ぞ憂愁すること毒箭の如くにする　汝今應當に快く樂を受くべし　是れ憂愁苦惱の時に非ざるなり　園林池苑は甚だ茂盛に　花果枝葉は欝として扶疎し　寬博なることは天の妙果林の如し　汝今正に是れ少年の時なるに　顏色顦顇して枯れたる花の如くなり　但應に樂を

受くべく憂苦することを莫かれ　流泉浴池は猶天の如くに　微妙なる香水は身を洗浴し　諸花は開け敷きて群蜂遶るに　汝今云何ぞ愛樂せざる　鵝雁鸚鵡及び鴻鶴　命命　倶那の微妙なる聲は　香山雪山のと異るある無ければ　誰れか見聞して愛樂せざるあらん　衆寶の勝殿眞珠の網　瑠璃の嚴は淨きこと天宮の如く　寶座の莊嚴と妙衣の覆と　金鈴の羅網は妙音を出し　種種の音聲は甚だ殊特に　街衢道路及び巷首に　千數の婇女は音樂を作し　猶喜園の天の玉女の如きに　何故に迷亂して　樂を受けざる　童子婇女の天身の如くなるもの　汝の受くる樂の爲めの故に聚集し　父母は汝が爲めに泣いて涙を墮し　我れは愛する所の子を喪失するが如くにして　愁憂悵怏何ぞ任ふべけん　と。

爾の時に、福焰王子は、偈を以て父王に報じて言はく。

彼の功德を具足せる者の如きに　諸の有爲生死の苦を觀て　煩惱を厭離し脫を欲求し　一切の世間の欲を棄捨す　諸の衆生の死網に沒せるを見て　常に解脫を求めて欲樂に遠り　菩提を思惟するを最も勝れたりと爲せば　唯願はくば父王我が說を聽きたまへ　人の我が爲めに惡事を作す無けれども　我れ自ら諸の欲樂を樂まざるは　一切の恩愛は怨讎の如くにして　煩惱を增長して惡趣に向はしむればなり　此の諸の婇女をば愚人は樂んで　魔業を增長し繫縛に纏はれ　功德を遠離して不善を增し　又未來をして惡趣に墮せしむれば　諸聖は此の五欲を呵責したまふを　我れ今云何して苦の本を樂まんや　此くの如き婇女は假の外色にして　唯皮囊に筋骨　肉血屎尿たる内の不淨を盛るあるのみにて　此れ眞の死屍なれば云何して樂まんや　歌舞音樂技術等は　幻の如く夢の如くにして愚癡を誑するのみなるを　愚癡は分別して正道を失すれども　我れ豈隨順して愛業を作さんや　園林花果は冬の時に至れば　枯顇萎黄して皆墮落し　無常散壞して久しく留らず　壽命も定無きに癡は放逸にして　心は大海の如くに足

【二】倶那。倶那羅鳥の略なり。

【三】喜園。歡喜園 Nandavana)の略なり。又、喜林苑とも書す。忉利天帝釋の四園の一にして、喜見城の外面の北方に在つて、此所に入る者は、總べて歡喜の情を起すと云はる。

ることを知らず　恩愛をば增長して求めて厭く無く　常に諸欲に爲つて相ひ殘害すれども　我れは須彌の風に動かざる如し　父母兄弟姉妹等　妻子朋友諸の眷屬　王位百官及び勢力も若し惡道に墮せば能く救ふこと無し　我等今は草露の如く　亦電光の如くにして暫くも停らず　心意も散亂して定る所無きを　思惟して是れを見て放逸せざるなり　咄なる哉少年は久しく住らざるに　咄なる哉壽命は瀑流の如くなるに　咄なる哉有爲は浮雲の如くなるに　咄なる哉三界に王位を求むることや　智者の來つて放逸なる莫かれと教ふるは　菩薩にして世間を貪るものある無ければなり　若し佛と作つて他を救拔せんと欲せんに　父王放逸にては佛とは作らじ　若し諸欲に隨ひ愛の奴と爲らば　彼れは功德を失して善路無く　若し今身に於て貪にして生を殺さば　鳥の網に在つて活を欲求するか如し　境界は猶惡毒の蛇の如く　諸陰は猶怨害の賊の如くなるに　其の心有に著せば利益無きこと　猶空村の依怙無きが如く　父王園林は赤樹は如くにして　無常の暴水に悉く漂沒すれば　我れ今云何してか樂むべけん　我れ世間を見るに正行無きこと　猶劫盡きて盛火の燃ゆるに　衆生は中に於て大苦を受くるが如し我れ是等の解脫の爲めの故に　當に速に如法の船を成辦すべきなり　衆生久しく睡つて自ら覺むる無く　病み來つて長久なるを我れ治せんと欲し　毒箭を拔き安樂ならしめん爲めに彼の邪徑を除きて正道に住せしめ　三界に繫縛せられて能く出づること無きに　我れ法を說いて脫し免れしむるを爲し　衆生の貧窮にして法財無きに　我れ善教を施して共れをして富ましめ　惡趣の道中に迷沒せる者に　我れ當に教示するに善道を以てして　我れ諸愛の樹を摧拔せんと欲す　諸の慈悲を行じ智燈を燃して　三界の大火聚を見しめ　又慈悲を興して大雲の波羅蜜の如くなるを起して普く遍覆し　衆生を利益すること電光の如くに　道品[一四]總持をば以て雨と爲し　清涼に能く熱惱の焰を滅せん　我れ是の爲めの故に王家に生れたれども　有爲に

【一四】道品。「三十七道品」なり。第一卷、同名の條（八十九頁）參照。

在るをば樂欲せず　我れ衆生を利益せん爲めの故に　世に隨つて生を受けたれども菩提を求めて一向に諸有の樂を樂まざるなり　父王我れ怨讎の中に在るを　智者は云何ぞ此の路を樂まん　眼有るものは高岸より墮せざれば　若く菩提を求めて放逸を捨つるなり　一切の世間は諸趣に順ずれども　唯我れは當に彼の行に逆はんと欲すべく　大王我が言は終に虛しからざれば　唯願はくば父王本宮に還りたまはんことを　願はくば世間の王位等を捨てて　彼の須ふる者の受用する所に隨はん　若く放逸を受けて王位を貪ることは　億數の王位たりとも我れは欲せず　若く宮內に處りては道を得る無ければ　唯當に寂靜無畏の處なるべく　若く五欲を樂まば能く辨ずること無ければ　我れは山林に向ひ寂靜に處り　彼の所に至つて菩提を求めん　三世の如來は蘭若に在つて　正覺の菩提は欲に在らざればなり　と。

爾の時に、世尊は此の偈を說き已つて、護國菩薩に告げて言はく。善男子、爾の時に彼の福焰王子は、父王の爲めに偈を說き已つて、宮殿に在つて諸の婇女と相ひ隨つて經行することは、而ち心安からざれば、唯三種の威儀に住して住せり。何を謂うて三と爲すか。謂はゆる、若しは行き、若しは住り、若しは坐して眠臥せざるなり。處は高樓の第八重の上に在りしに、夜半の時間に、上空の中に於て、淨居の諸天の、空に在つて行きつつ、佛の功德、乃至、法・僧の功德を讚ずを見たり。

護國、時に彼の福焰王子は、彼の諸天の佛を讚歎するを聞き已るや、身毛皆竪ち、遍體戰慄し、十指の掌を合して、偈を以て彼の諸天に告げて言はく。

善い哉諸天の輩　我等が苦を憐愍して　疲倦の心を生ずること莫かれ　我れ問ふ所あらんと欲す　汝虛空に行きつつ　誰れの功德を讚歎するか　我れ此の讚聲を聞きて　心に大歡喜を生ず　と。

佛は護國に告ぐらく。爾の時に、彼の天は、偈を以て福焰王子に報じて言はく。

童子汝聞かずや　如來の世に出興したまへることを　佛名は[一五]吉利意にして　歸する無きにも歸を作すことを爲させんと　能く人の心行を知つて　福と智と具足して滿ちたまひ　聖衆の禪定を具せるものも　百千那由他なり　と。

爾の時に、福焰王子は、復偈を以て彼の諸天に告げて言はく。

我れ未だ彼れの色を視ざれば　汝我が爲めに相を說け　我れ若し見聞することを得ば　彼れに菩提の道　云何にせば衆生を化し　云何にせば當來の世に　衆生の中に於て尊きかを問ふ（べければ）　我が爲めに之れを解說せよ　と。

爾の時に、淨居の諸天は、偈を以て福焰王子に報じて言はく。

世尊の髮は潤澤にして　右に旋つて靑色に　頂の高きこと雪山の如くにして　白毫は淨日に等しく　清淨なること瑠璃の如き　妙色にして右に旋れり　耳目は甚だ修く廣くして　[一六]色は靑蓮華の如くに　方頰は師子の如くにして　脣は頻婆果の如く　口齒は甚だ齊密にして　淸淨なること珂雪の如く　具足して四十を滿し　四牙は甚だ鋒利なり　舌長くして能く面を覆ひ　威德大自在に　諸の衆生等の爲めに　億數の光明を放ちて　三千界に遍滿して　諸の惡道を乾し竭すなり　無上最勝尊の　[一七]妙聲は眞實を覆ひ　能く聞く者をして喜ばしめて　諸の衆生の願を滿すこと　彼の如意珠に勝り　功德を缺減せず　道分に隨順し　法要を莊嚴するなり　音聲は百千種に　演暢して虛說無く　一切の天に勝り　諸の梵天の音に過ぎ　他は聞いて歡喜を發すこと　諸の緊那羅　[一八]迦陵　[一九]倶翅羅　鴛鴦及び鴻鶴　倶那羅梵の聲に勝れり　種種の聲を和合すれども　音詞雜亂せずして　能く義をして顯現せしめ　妙淨なること瑠璃の如くに　能く智者をして樂ましめ　敎へて道心を發して　心淨く踊躍を生ぜしむるは　他心に隨順

【一五】吉利意。異譯本には「成義意」とあり。前の「成利慧佛」なり。

【一六】色は靑蓮華の如くに。異譯本には「目は紺淨にして分明に」とあり。

【一七】妙聲は眞實を覆ひ。異譯本には「美妙なること世間を出で」とあり。

【一八】迦陵。「迦陵頻伽」の略なり。

【一九】倶翅羅。「倶枳羅」に同じ。

する智にて　能く疑者の問を決すればにて　彼の尊法王者　自在なる大世尊には　是の勝れたる法音あり　項直く肩圓滿に　肘臂膅しく膝を過ぎ　指掌の縵網長く　[一〇]七處は皆平滿に　慈悲もて勝手を擧げて　諸の衆生を安慰するなり　身色は眞金の如く　一一の毛は右に旋り　臍輪深くして且密に　陰藏は馬王の如く　髀は象王の鼻の如く　鹿王の纖長なる膊　足下の蓮華の文　千の輻網具足し　廻顧すること象王の如く　遊步すること師子の如く　身を擧げて皆相ひ稱へること　猶釋天の杖の如くにして　空中より天華を雨し　上に於て變じて蓋を成し　去住に恒に隨逐するなり　法王の希有の事は　若しは利を得るも利無きも　若しは樂及び苦を得るも　若しは名を得るも名あらざるも　若しは讚も若しは毀訾も　一切染著無きこと　猶華の水に在るが如く　亦師子王の　衆生の中に比無きが如きなり　と。

爾の時に、世尊は護國菩薩に告げて言はく。護國、爾の時に福焰王子は、彼の諸天に從つて、佛の功德、乃至、法・僧の功德を說き歎ずるを聞き已り、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はざりき。護國、爾の時に福焰王子は、復是の念を作さく。是くの如くに、諸佛世尊には、是くの如くに大衆をば成就し、是くの如くに最勝の妙法を覺證し、是くの如くに聖衆の弟子をば成就したまふあれど、我れ見ることを得ずして、我れ今生死の諸惡苦惱に値遇す。是くの如き生死には義利ある無きに、諸の凡夫の輩は我見に執著し、在家は諸の過患多くして、貪欲厭くこと無し。智者は放逸を呵毀すれども、[一一]無明の黑暗に覆蔽せられて、是くの如き諸行は穿徹すべき難く、是くの如き識心は甚だ降伏し難く、是くの如き名色は甚深にして覺り難く、是くの如き六入にして自在ならず、是くの如き惡觸の果報をば受持し、是くの如き渴愛の堅縛は捨てられず、是くの如き諸取は甚だ捨離し難く、是くの如き諸有には聖道ある無く、是くの如き生は甚だ解脫し難く、是くの如き老は能く少年を壞り、是くの如き病は壯色を損滅し、是くの如き死は潤澤ある無し。是くの如くに生には諸の衰

【一〇】七處。兩足下・兩掌・兩肩及び項中なり。是れ皆平正圓滿なるを三十二相の一つと爲す。

【一一】無明の黑暗、乃至、死は潤澤ある無し。十二因緣の法に就いて謂ふ。但し、異譯本は、其の說明法を異にし、且、最初の無明・行・識の三に對しては「愚癡迷暗にして、三種の思を起して身・語に動發し、善惡の業を造り、識に薰じて種を成じ」とあり。

惱多く、是くの如くに、往來には利益ある無ければ、是くの如くに微妙なる如來の正教をば甚だ愛樂すべきに、何ぞや、愛を奴を以ての故なるべし。諸の煩惱の爲めに其の心を迷惑し、諸の惡覺の爲めに濁亂不淨に、心常に放逸にして、常に愚癡の等輩に與して朋友と爲り、善思惟せずして心常に煩惱生死に染著し、惡知識の常に是くの如き諸惡と倶なる者と樂んで、尚世間の淨善をすら辦ずること能はず。何に況んや阿耨多羅三藐三菩提を得ることを能くせんや。我れ今は、卽此の樓の東面より身を投じて去らんに如かんや。若し門より出でば、恐くば諸の眷屬は障礙を爲り作さん。と。

佛は護國に告ぐらく。爾の時に、福焰王子は、吉利意如來の邊に向はんと欲し、卽彼の如來の方面に向つて身を絕ち、復是の言を作さく。彼の如來の若きは是れ一切の知見者なれば、亦應に我れを念じたまふべし。と。護國、爾の時に吉利意如來・阿羅訶・三藐三佛陀は、卽右手を伸べ、大光明を放つて福焰王子を照せるに、卽光の中に於て、一の蓮華の大さ車輪の如くにして百千の葉あるを出し、然も彼の蓮華は百千の光明を放てるに、其の光明は盛に福焰王子の身を照したり。爾の時に、福焰王子は、卽自ら、身の彼の蓮華に處るを見たり。既に華中に住するや、十指の掌を合し、躬を曲げて吉利意如來・多陀阿伽度・阿羅呵・三藐三佛陀に向ひ、口に三唱へて[三]南無佛陀耶・南無佛陀耶と言ひたり。護國、爾の時に、吉利意如來は光明を還し攝めたるに、福焰王子は、卽佛光に乘じて如來の前に至り、身を擧げて地に投ずること大樹の倒るるが如くにして、彼の如來を禮すること一千拜し已れり。

護國、爾の時に、福焰王子は、偈を以て世尊に白して言はく。

我れ久しく重病を得たるに　今大醫王に　苦厄の難中に値ひ　世尊我れを濟拔したまふ　願はくば尊我が爲めに說きたまはんことを　云何にせば法中に住して　當に大福利を得べきかを

【三】南無佛陀耶。Namaḥ Buddhāya「佛に敬禮す」「佛に歸命す」の義なり。

唯願はくば尊顯說したまはんことを　世尊我れ先に於て　夜半に諸天來つて　我れに放逸なる莫かれと敎へたれば　此の天の敎を聞き已るや　恐怖して此の處に來り　今大世尊に　云何なるは不放逸なるかを問ひたてまつる　我れ今正道を失すれば　願はくば爲めに商主と作りたまはんことを　我れ今生盲の如くなれば　願はくば我が爲めに眼と作りたまはんことを　我れ今險岸に臨みたれば　願はくば尊救濟して度したまはんことを　唯願はくば大慈悲もて我れをして正信を生ぜしめたまはんことを　病の困篤なる者の如くなれば　願はくば尊速に療治したまはんことを　我れ今貧人の如くなれば　願はくば尊攝受せられんことを　我れ今繫縛せらるれば　願はくば尊能く解くことを爲したまはんことを　我れ心大に疑惑すれば　願はくば我が癡網を決し　我れに修行の處と　云何にせば菩提を得ることを示したまはんことを

我れ今大水に沒したれば　願はくば度を示して我れを濟ひたまはんことを　我れ大闇の中に處れば　願はくば大法炬を燃したまはんことを　我が身に大瘡あれば　願はくば治して速に差えしめたまはんことを　我が身に毒箭あれば　願はくば尊能く拔くことを爲したまはんことを

常に諸の惡道に墮したれば　願はくば慈もて我れ諸べて執著を有つ者を救濟し　邪を廻して正道に住せしめたまはんことを　我れ憂感の河に沒したれば　願はくば度して彼岸に至つて八聖の道に住するを得しめたまはんことを　我が壽命は短促にして　善を求むるに障礙多ければ　願はくば今より去ぎたる後は[三]眞如の命に住するを得しめたまはんことを　我れ今身は閑靜にして　已に諸難を離れたれば　福を作して必ず報を獲んとすれば　願はくば我が爲めに疑を決したまはんことを　世尊我が爲めに　菩薩の不放逸にして　無上道に向ひ　未來に菩提を證して　能く諸有の縛を解くことを說きたまはんことを　と。

爾の時に佛は護國菩薩に告げて言ばく。護國、爾の時に吉利意如來は、福焰王子の心を知り已つ

【三】眞如の命。異譯本には「法壽」とあり。

て、其れが爲めに廣く諸の菩薩の行を說けるに、其に福焰王子は、此の法を聞き已るや、即陀羅尼[二四]の名けて解脫と曰へるを得、亦五神通を得て、即時に虛空に上昇し、衆華を化作して以て佛の上に散じ、是くの如くに重ねて散じたり。

護國、爾の時に福焰王子は空より下り已つて、即偈を以て、彼の吉利意如來を讃じて言はく。

金色の尊の　面淨くして滿月の如くなるに敬禮したてまつる　智は無比にして　垢の三界を離れたまへる尊に敬禮したてまつる　髮は淨くして光潤澤に　頂は高く須彌の如くにして　觀る者厭足無く　眉間の白毫相は　清淨なる妙光明にして　目は青蓮華の如くに　微妙にして甚だ殊特に　慈悲の心もて哀愍して　諸の世間を[二五]觀示したまふ　如來の廣長なる舌は　軟薄にして赤銅の如く　出でて能く遍く面を覆ひ　說法して衆を敎導したまふを　微妙の聲に敬禮したてまつる　齒は白くして珂雪の如く　堅實なること金剛の如く　齊密にして四十を具し熙怡して微笑したまふ時に　無量の衆を敎化したまふを　美實の言に敬禮したてまつる尊の色は世に比無く　光を放つて諸刹を照したまふに　梵天及び護世の　彼の光は悉く現れざるなり　鹿王の纖く膸しき臑　行歩は象王の如く　亦復師子の如くにして　安祥として遊步したまふ時に　地は動きて諸山震ふ　世尊の具したまふ身相は　皮膚軟にして妙澤に　身は紫金色の如くにして　威光與に比する無く　觀る者厭足する無し　苦行する無數劫に　施を樂んで疲倦無く　慈心もて衆生に向ひたまふ　故に大悲の父を禮したてまつる　尊は常に施戒を樂み　堅く忍精進　禪定及び般若に住したまひて、總持の智の比無き　是の故に我れは敬禮したてまつる　世尊の法を說きたまへる時には　諸の外道を降伏して　衆に處りたまふこと師子の如く　醫王として三垢を除き　聞く者皆歡喜する　是の故に我れ今禮したてまつる身口意は清淨にして　三界に染著したまふ無きこと　蓮華の水に處るが如くに　尊の聲は

【二四】陀羅尼の、名けて解脫と曰へるを得。異譯本には「總持門を得て妙解脫を證し、」とあり。

【二五】觀示。の「示」は「視」に通ず。

梵天の如く　迦陵伽の音の如くにして　三界の岸を度り過ぎたまふ　是の故に我れ敬禮したてまつる　尊は諸の世間を觀じたまふこと　幻の如く亦夢の如く　復伎兒の戯の如しと諸法の我　衆生及び命者無きを說き　亦水中の月の　空寂にして生處無きが如しと　是くの如くに世を知り已りたまひて　彼れが爲めに方便を爲し　百千の諸法門にて　慈悲もて衆を攝め敎へたまふ　衆生に諸患多く　諸毒の常に熾然たるを　熱惱を觀察し已りたまひて　猶大醫王の如くに　常に世間に行いて　無數の衆の　生老病死の苦　愛の離怨憎の會の　憂悲苦惱等を拔濟せんと　世の苦惱を觀じ已りたまひて　慈悲もて能く度脫したまふ　常に世間に行いて　世界に車輪の如くに　天人或は畜生　地獄餓鬼の中と　迷惑して導師無きを　世尊は彼等の爲めに　最勝なる導を示現したまふ　過去に諸佛あつて　法王として世間を離れたまへるもいも　亦此の聖道を說きたまへることは　今の世尊の說の如くならん　清淨にして穢濁無きこと　大梵天に勝り　亦乾闥婆　及與び諸の天女　是等の如き諸音に勝つて　如來の聲は最勝にして　世間の爲めに　眞實に忍[二六]を潤益する　種種の方便の說を解說したまふに　諸の功德の　百千那由の數を具足したれば　諸の衆生は聞き已つて　三乘の寂滅を證するなり　若し彼れを供養するあらば　勝上の妙樂を得　無量の天人は等しく　當に正眞の道を得べし或は人王　大富長者の等を得　或は一天下　二三四の天下を領する　轉輪の聖帝王として十善もて衆生を化し　七寶をば具足して樂むは　皆佛を供養せるに由る　或は釋梵王　四天王處　兜率化樂天　他化須夜摩と作るも　斯れ佛を供養せるに由り　來世に正覺を作すものなり　是くの如くに佛を供養し　或は見或は聲を聞きたてまつらば　空しく過ぐる者ある無く多くの衆生の苦を除きて　[二七]甘露の處　最妙にして老病無きを證するを得しめたまふ　世尊は正道を知りたまひ　善く正道の處を說きて　能く諸の惡道を斷ち　無畏の路　無垢の大聖道に

【二六】忍。此の「忍」は法の實相を認證する義なり。

【二七】甘露の處、乃至、得しめたまふ。異譯本に「彼れをして、惡道の中に墮せずして、安樂寂靜にして、塵染無からしめたまふ。」とあり。

住せしめて　能く衆生の依と爲りたまふ　若し人福德を求めば　須く佛邊に於て種うべく
是の因緣の故を以て　當に無盡の藏を得べく　多數の倶致劫にも　彼の福は盡くべからず
乃至未だ佛を成ぜずとも　當に淸淨の刹の　微妙なること他化の如きを得　得已つて大に歡
喜し　彼の妙刹土の中の　有らゆる衆生の輩の　身口意淸淨なる　是等の如き功德は　斯れ佛
を供養せるに由る　若し彼の衆生の輩　天及び涅槃　及以び人中の樂の　福報の等無量にし
て　斯に皆盡すべからざるを求めば　大名勝をば供養し　復百刹の中に於て　無量なる百千
の衆に　當に大名稱を說いて　斯に佛德　如來は熱惱を除きて　能く衆をして解脫せしめたま
ひ　慈悲もて歡喜せらるれども　諸根は寂淸淨にして　人中の最勝王　無量の功德聚なるこ
とを歎ずるに由るべし　是の故に我れ頂禮したてまつる　我れ已に五通を得て　虚空に能く
飛上し　尊の妙なる音聲を聽きたれば　未來に若し佛と作らば　衆の爲めに微妙を宣して　無
量の衆を度脫せん　我が功德聚を讃ずる　無垢淸淨なる福にて　天人諸龍の等　夜叉乾闥婆
　雜類の衆生の輩の　來世に願はくば佛を成ぜんことを　と。

爾の時に、世尊は此の偈を說き已つて、復護國菩薩に告げて言はく。護國、爾の時に焰意大王は、彼の夜を過し已るや、彼の童子の宮內の哭する聲を聞きたり。聞き已るや、馳せて勝喜樂城に向ひ、到り已るや、諸の婇女の輩に問うて言はく。汝等、今は何の爲めに哭するか。と。時に、彼の諸女は大王に白して言はく。大王、當に知りたまふべし。福焰王子は、今の夜中に於て忽然として見えたまはず。と。護國、爾の時に焰意王は、此の語を聞き已るや、迷悶して地に躄ること大樹の倒るるが如くなりしが、須臾にして乃ち起き、大聲に悲泣し、啼哭し懊惱しつつ、彼の城を巡り遶ること百千匝を經たり。護國、爾の時に、彼の處の護城の天神は、焰意王に告げて言はく。大王、當に知るべし、東方に此を去つて、佛世尊の名けて成利慧と曰へるあり。大王、王子は今彼の

【三〇】能く衆をして、乃至、歡喜せらるれども。異譯本には「一切の徒衆は悉く歸依して、慈悲の相を愛樂せざるは無し。」とあり。

處に在つて、彼の佛世尊に頂禮し承事し供養せり。と。
爾の時に、焰意王は天の告を聞き已るや、卽時に童子の宮内の諸の婇女等、及び王の部從八萬四千俱致百千那由他の衆と、東方に向つて、成利慧如來・阿羅呵・三藐三佛陀の所に往き詣り、到り已るや佛足を頂禮し、却いて一面に住り、偈を以つて佛を歎ずらく。
功德の智慧海　人中の丈夫無等等　三界に最勝にして比ある無く　天王修羅の皆供養するに敬禮したてまつる　衆中の殊特最極の尊　佛の色相を觀たてまつるに厭足無く　三十二相莊嚴の身は　猶須彌寶の淸淨なるが如く　佛身の微妙なる紫金色は　見る者厭くこと無く我れ頂禮す　無量百千億數の劫に　如來の苦行は厭倦無く　無量の劫數に供養したまへる佛は　百千俱致にして數ふべからず　往昔の布施は思議し離く　是の故に身光は甚だ嚴淨に　布施持戒禪定慧　忍辱精進善方便にて　世尊の身色は甚だ淸淨なること　日月摩尼の光より勝り　釋梵の光明も隱れて現れず　佛は妙色を現じて世間の爲めにせんとて　或は現じて兜率天に在り　或は復欲の下生を示現せんとて　或は淸淨なる白象の身を現じて　夢中に右脇より母胎に入りたまへど　佛身の現ずる處は虛空の如く　影と水月と夢と幻化との如くに　佛身の應現も亦是くの如し　又復初生を示現したまへる時に　或は行くこと七步して丈夫を示し　唱へて言はく天人にて我れは最上なり　我れ能く諸苦の衆を救脫するに　諸法の中に於て疑惑無しと衆の爲めに始めて書を學ぶことを示現して　禪定寂靜の處を成就し　示現して婇女の中に在つて　父母及び妻子　眷屬宗親の戀慕の啼を捨て　家を捨てて林に處つて恒に獨步したまへるに　俱致數の天は恒に圍遶し　恒常に讚歎して厭を生ぜず　久しく已に二九四種の魔を降伏せるに　此の刹にて始ての降伏を示現し　久しく已に無垢輪を轉ぜるに　今慈悲を以つて初轉を示したまひ　世間の常想に著せるを觀て　衆に在つて唱へて我れ涅槃すと言ひ　諸の世間の生死

【二九】四種の魔。第一卷「魔」の解、參照。

を樂むを見て　世尊は爲めに寂滅の處を說きたまふなり　福智の方便は比喩無く　身の放つ
光明にて多刹を照したまふに　諸方の菩薩の光を尋ねて來り　世尊の不思議を頂禮するを　法
王は爲めに微妙の法を說きたまへば　心に歡喜を生じて清淨を證するなり　衆の爲めに身を
現じて世間に同じたまへども　佛身には來無く亦去も無く　如來は法に住したまへることは幻
化の如くなる　是の故に大丈夫に頂禮したてまつる　善い哉世尊妙道を說きて　衆の爲めに
菩提の路を顯したまふことや　我が爲めにも勝法門を顯示したまはば　是の故にて我れも今此
の法を證し　如來の我が爲めに示現したまへる所をば　我れ證せば皆衆生の爲めに說かん
佛智無惱の三界の尊　我れ今佛の諸の功德を歎じたてまつる　願はくば世間の諸の衆生と共に
速に寂滅なる無上の道を證せんことを　と。

爾の時に、世尊は此の偈を說き已つて、復護國菩薩に告げて言はく。護國、爾の時に彼の成利慧如來は、焰意王の深き信心を知り已るや、應ずる如くに法を說きて、阿耨多羅三藐三菩提の中に於て退轉せざる地に住せしめたり。護國、爾の時に彼の福焰王子は、成利慧如來に白して言はく。世尊、我れ今如來及び比丘僧を請じて、我が城內に入れたてまつらんことを欲す。唯願はくば、世尊、慈愍もて聽許したまはんことを。と。爾の時に、成利慧如來は王子を憐愍する故にて、默然として請を受けたり。護國、爾の時に福焰王子は、佛の許を知り已つて、其の父母に白し、諸の眷屬幷に婇女等に告げて言はく。尊等當に知るべし。我れ今勝喜樂城幷に莊嚴の具を以て、悉く以て彼の如來及び比丘僧に施し奉るとも、終まで悔無きなり。唯願はくば、父母及び諸の眷屬の、隨喜心を生ぜんことを。と。爾の時に父母眷屬は、一時に同聲にて唱へて言はく。善い哉、善い哉、我れ皆隨喜す。と。護國、爾の時に福焰王子は、卽時に更めて好く莊嚴したる勝喜樂城をば如來に施し奉れり。爾の時、王子は、佛及び僧の爲めに、日別に五百種の味の上妙なる飲食を辦具して、佛及び僧

に供へ、復比丘の爲めに僧伽藍を造り、皆七寶を以て其の房を莊嚴し、舍內には、雜色の種種なる繒の褥の數百千重なるを敷設し、又比丘僧の爲めに、日別に新淨の衣を造つて、衆僧に布施して意の樂ふ所に隨ひ、復更に爲めに經行の處を造り、皆衆寶を以て其の地を莊嚴して、上に寶網を覆ひ、經行する兩邊には、諸の樹木の花果と種種なる諸華、謂はく、優鉢華・波頭摩華・分陀利華等の一切の衆華を種ゑて、具足せざる無かりき。時に彼の王子は、是くの如くに佛及び衆僧を供養すること、三億倶致歲を經たるに、其の中間に於て、未だ曾て睡眠せず、身命を愛せずして、唯佛及び衆僧を供養することを念じ、其の間、貪欲心無く、瞋害心無く、王位の處に於て樂心を生ぜず、一切の處に於て身命を棄捨したれば、況んや復餘の物をや。復如來の說法せらるるあるに於ては、皆悉く受持して終まで忘失無く、乃至、一句をも、未だ曾て如來に重ねて問はず。其の時間に於て、亦洗浴もせず、亦酥油を以て其の身に塗摩もせず、亦足をも洗はず、亦坐臥もせず。唯食時及び大小の便利を除き、乃至、終まで疲倦の想無かりき。而して彼の如來の涅槃せる時に、自ら赤栴檀を取つて積集することを爲して、如來の身を闍毘し、如來の身を[三〇]闍毘せる處に於て、種種の上妙なる供具を以て舍利を供養し、又閻浮提の內の處處に於て、諸の華鬘・名香・種種なる音樂、乃至、幡蓋・寶幢を以て舍利を供養せり。是くの如くに供養し已つて、其の舍利の爲めに、復更に別に九十九倶致の寶塔を造りしが、彼の諸塔の等は七寶にて成ぜられ、復雜寶・眞珠の羅網を以て塔上を覆ふに以ひ、又諸塔の爲めに七寶の蓋を造りて、彼の一一の塔に五百の寶蓋を施し奉り、又一一の塔の所に於て音樂を施し奉ること數百千種にして、閻浮提の內の處處に於て、悉く諸の妙華樹を種ゑしめたり。一一の塔所の前に於て百千の燈を然し、一一の燈器に千斛の油を盛り、又復更に一切の諸香・塗香・末香・燒香及び諸の華鬘等を以て、彼の塔を供養したり。爾の時に福焰王は、是くの如くに供養すること倶致歲を經已つて、後に於て出家せしが、旣に出家し已るや、唯三衣のみを畜

【三〇】闍毘。「闍維」「荼毘」と同じ、「燒く」の義なり。

へて、常に乞食を行じ、頭陀を樂み、恒に坐して臥さず、餘の時間に於ても未だ曾て睡眠せず。亦人に從つて求索する所もあらず、一切を施與して心に報を望まず。常に他人の爲めに正法を解說したり。是くの如くにすること四倶致歲なりしが、乃至、若し一善言を以て讃歎する者ありとも、心に尙受けず。何に況んや、人の利養の物を受くることをや。若しくば、[三]法を聽かしむる時には疲倦の想無かりしかば、常に諸天あつて承事し供養したりき。爾の時に、彼の國土内の王と大臣・天人・婇女、一切の人民幷に諸の眷屬とは、悉く皆隨從して彼の王子に學び、出家して道を修めたり。護國、爾の時に、淨居の諸天子等は是の事を見已つて、是くの如き念を作さく。今此の國内の一切の人民は、並んで王子に學び出家して、今此の國内は盡く是れ三寶なれば、我等今は應に檀越と作つて、彼等を供養すべして、卽時に三寶を供養して、世間を利益したり。彼の如來の涅槃の後に、正法の世に住れること六萬四千倶致歲を經たるは、皆是れ福焰比丘の任持する所なりき。其の福焰比丘は、此れより已來、常に是くの如くに供養し、是くの如くに次第して、九十四倶致の諸佛を供養せしが、彼の一一の佛をば、悉く皆上の供養の行の如くにせり。護國、汝が意に於て云何。其の焰意王とは、豈異人ならんかと、異見を作す莫かれ。則ち今の無量壽如來是れなり。護國、汝が意に於て云何。彼の福焰王子は豈異人ならんかと、異見を作す莫かれ。則ち我が身是れなり。爾の時に、其の城を守護せる天神は、豈異人ならんや。則ち阿閦佛是れなり。と。

爾の時に、世尊は復護國菩薩に告げて言はく、護國、是の故に、若し諸の菩薩摩訶薩にして、若し阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲せば、應當に彼の福焰王子の深心至誠に修めし所の諸行を學び、能く一切の憎愛の心を捨つべきなり。是の故は、我れ常に是くの如き苦行を勤修せる故にて、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得たればなり。然れども、未來の世に諸の比丘あつて、名利を愛重し、眷屬に貪著して、諸の善法に於て自然に損減し、常に我慢の怨賊の損害する所と爲るは、甚だ憐愍

【三】法を聽かしむる時には、乃至、無かりしかば。異譯本に「常に法施を行じ、乃至、佛の行ずる所の如く、疲倦ある無かりき。」とあり。

すべきなり。利を貪る故を以て、正法を遠離せる虚然たる出家なれば、沙門の行を汚しつつ、但口に、我れは是れ菩薩なりと言ふあるのみ。然り、其の內心には專ら諂曲を行ひ、身心昏濁して煩惱の泥に沒し、纔に形相あるのみにて、本道に違ひ誓願を捨て已つて、衣服・飮食・房舍・臥具・湯藥等の事に貪著し、心に慚愧無く、恥辱を避けず、威儀ある無く、佛の境界を離れて、心恒に貪著するのみ。護國、若し是くの如き法を聞くことを得るあらば、應當に彼の惡知識を覺知すべく、惡知識は名を求め利を貪るものなれば、應に親近すべからざるなり。と。

爾の時に、世尊は此の義を重ねて宣べんと欲し、偈を以て頌して曰はく。

多く放逸を行つて　十力の處に遠離し　心に常に利養　及び諸の眷屬等を貪つて　佛菩提の　千種の諸功德を棄捨し　聖を詐つて名利を求め　惡性にして慚恥無く　姦諂にして羞愧無く

彼れ專ら利の事の爲めに　佛法の中に入りたれば　諸の煩惱に隨順して　速疾に惡趣に墮するなり　口には我れ大德にして　阿蘭若に在るに勝ふと言へども　心は恒に聚落を念じ　彼等は貪の爲めの故に　心に諸の覺觀多く　彼の人解脫を遠れること　猶天と地との如くなれば

行者は應に遠離すること　惡毒の蛇を畏るるが如くにすべきなり　彼れは佛法　幷に諸の功德の僧を樂まず　棄捨して善道を離れて　常に邪徑を行けば　無量の善を失つて　有らゆる覆蔽を爲るなり　我が往昔の行を聞きて　眞實に心の信を成ぜば　應當に我が行を學ぶべく

多くの[三二]俱致劫の數にも是くの如き法は得難ければ　應に大なる忍心を發すべく　我が說く所ある處をば　勤劬して當に奉行すべし　[三三]若し當に佛を　妙勝なる大乘の中に成ぜんと欲せば　應に彼の王行の　諸の功德の無量なるを念ずべく　眞實を思惟し已つて　應に彼の敎の中に住すべし　是くの如き菩提の道は　當に見に佛の說くが如くなるべければ　深く諸の功德

聖人の種性の處を思うて　當應に敎の如くに行ずべし　若し是くの如き敎を捨てば　則ち

【三二】俱致(Koḍi, Koṭi)「俱胝」に同じ、一千万をいふ。
【三三】若し當に、乃至、念ずべく。異譯本の此れに當るべき句には「佛乘妙行の德は思ひ難し。」とあり。

功德の味を失ひ　當に惡趣の中に生ずること　愚癡のものと別ある無かるべく　彼に生じ已らば當に悔ゆべきなり　山林に住する者に勸む　愼んで自ら讃譽する莫かれ　亦他の行を毀つこと勿く　寧ろ常に自をば訶責せよ　昔より億數の佛に背けるものは　斯れ我慢の心に由ればなり　己が身命を惜む莫く　恩愛の處をば悉く捨て　我が此の經に說けるが如くに　法中に敬心を行ぜよ　若し能く說の如くに行ぜば　菩提は難しと爲さざるなり　此の乘は大仙の說なれば　聞き已つて疑を生ずること莫かれ　是の故に佛法の中にて　應に住すること聖教の如くにすべく　精勤して身命を捨つとも　我が教の如くにして違ふこと莫かれ　若し此の教を信ぜずば　後に於て悔ゆとも益無きなり　と。

爾の時に、世尊は此の偈を說き已つて、復護國菩薩に告げて言はく。護國、若し菩薩あつて、常に五波羅蜜を行じて休息ある無く、若しくは、菩薩あつて、此の經中に於て、能く法の如くに行じ、能く教の如くに住し、復自ら唱へて、我れ教の如くに住し、我れ教の如くに行ずと言はんに、前に五波羅蜜を行ぜる者に於て、此の功德に比せんと欲すとも、百分して一にも及ばず、百千分して一にも及ばず、百千倶致分して一にも及ばず、算數・過算數分しても一にも及ばず、哥羅分しても一にも及ばず、譬喩分しても一にも及ばず、鄔波尼沙陀分しても一にも及ばざるなり。と。佛の此の經を說ける時に、三十那由他の天及び人阿修羅等の、未だ曾て阿耨多羅三藐三菩提心を發さざりし者は、皆悉く發心して、阿耨多羅三藐三菩提より退轉せざるを得、復七十の比丘あつて、諸の有漏を盡して心に解脫を得たり。

爾の時に、長老、護國菩薩は、佛に白して言はく。世尊、此の法には、本より何の名あつて、我等は云何に奉持せんか。と。是の請を作し已るや。爾の時に、佛は護國菩薩に告ぐらく。善男子、此の法を言うて、本より、不空誓淸淨行と名く。是くの如くに受持せよ。亦、善丈夫遊戯菩薩行

決定毘尼とも名く。是くの如くに受持せよ。亦、眞實義具足とも名く。是くの如くに受持せよ。亦、福㷔菩薩大士往昔本行とも名く。是くの如く受持せよ。と。佛の是の法を説き已りたまふや、長老、護國菩薩及び諸の天・人・阿修羅・乾闥婆等は、佛の説かれし所を聞きて、歡喜して奉行せり。』

—セ—

世主 158
睒子 322

—ソ—

僧伽陀地獄 284
僧次 328
蘇達拏 322
蘇拏 322

—タ—

大叫喚地獄 284
大炙地獄 284
大病劫 287
道品 340
多陀阿伽陀・阿羅訶・三藐三佛陀 276
多摩羅葉 217
陀毙師迦華 206
段食 213
檀度 79
檀越 272

—チ—

智 130, 251
智平等の波羅蜜 262
竹園 282

—ナ—

內外の入 250

—ニ—

尼陀那 237
尼民達山 164
日天子 309
入 49, 63, 117
如意足 304
人 21
人師子 12

—ネ—

然燈 144

—ハ—

方廣經 237
方便智 140
方便慧 130
婆拘羅華 206
婆利師迦華 206
波棃師華 264
八聖路 59

—ヒ—

非因外道(自然外道)(非因の生ずる所) 158
非有想・非無想 245
非處 106, 134
毗舍 295
毗尼 328
毗嵐 165
鞞是河 224
鞞達略山 164
平等の波羅蜜 259

—フ—

福田 279, 332
不二 71
富樓那彌多羅尼子 237
糞掃 262

—ヘ—

洴沙 282
遍知 137
邊地 331
邊無邊(世には邊有り等) 158

—ホ—

布薩 328
弗婆提 207
本生經 237
本事經 237

—マ—

摩竭 282
摩多棃華 224
摩樓多華 206
末利迦華 206

—ミ—

未曾有經 237
命 265, 237
命者 237
明解脫 260

—ム—

無想 245
無色 245
無所畏(菩薩の四無所畏) 208
無畏 132

—ユ—

育乾達山 164
遊戲 95

—ヨ—

欲 121

—リ—

力(菩薩の十力) 308
兩足 280
龍象 207

—レ—

了本 132

—ロ—

論議經 237

—寶積部四索引終—

索　　　引

（頁は通頁を表はす）

—ア—

愛結　251
阿葉波竭那山　164
阿波陀那　237
安般　137
安慧　256
菴羅果　84

—イ—

違逆の法　265
闍紐　158
伊羅龍象　20

—ウ—

有色　245
有想　245
有智　92
優鉢伽羅　164
優波羅劫　61
憂陀那　237
鬱單越　207

—エ—

依報　218
慧　251

—カ—

界法　18
香山　11, 164
憍施耶衣　264
覺　84, 119, 137
學人　21
加尸衣　264
伽陀　237
迦膩迦羅華　206
迦樓羅提舍　298
訶羅伽闍天　39
歌利（王）　322

—キ—

喜見　339
佉提羅迦山　164
祇夜　237
欽波羅（衣）　264

—ク—

共業　205
俱鞶羅島　337
俱那羅島　337
拘迦棃　298
拘奢得子　189
拘羅婆華　206
瞿陀尼　207
活地獄　284
月天子　309

—ケ—

夏安居　310
叫喚地獄　284
澆頂　282
解脫煩惱　115
見取　159
蹇陀達多　298
乾闥婆　150
簡擇　24
現報の業　120

—コ—

拘攞衣　264
拘珍婆衣　264
劫貝衣　264
虚空行天　14
黑繩大地獄　284
黑山　164
牛頭栴檀　217
後報の業　120
窟宅　84
欣喜劫　16
金山　309

—サ—

齋　211
三惡道　311
三際　79
三受　101
三聞陀達多　293

—シ—

使　155
事　107
自在天外道（自在天の化する所）　153
四聖種　316
支提　210
七覺意　260
七處　343
尸毗王　322
炙地獄　284
淨行婆羅門　322
正受　115
正定　83
星宿劫　27
聖住　155
生報の業　120
常無常（世間を常となし等）　158
取　43
受　100
受記經　237
修伽陀　6
修多羅　237
宿業　265
宿命智　274
首陀羅　295
種智　19
芻摩衣　264
諸根　66, 311
諸入　18
神我　158
心數　300
心平等の波羅蜜　262
紙婆子　189

—ス—

隨順の法　265

昭和六年六月二十五日印刷
昭和六年七月一日發行

不許複製

國譯一切經 寶積部 四

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者　渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園七號地十番
大東出版社
振替東京一一九四七一番
電話芝（二）一一六番
（三）〇四〇番

製本所　兩角製本所

24

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03148 6038